

---

# 嘯く羊～ウソブクヒツジ～

リネ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

嘯く羊々ウソブクヒツジ

### 【Nコード】

N9390G

### 【作者名】

リネ

### 【あらすじ】

現代に人知れず存在し、人間を超越した力を宿す者、**狗鬼**。**狗鬼**の傷を癒やす役目を持つ者、**籠女**。二者は契約をもって共存する。狗鬼は十八歳の誕生日までに籠女との契約を結ばなければ、命を落としてしまう。籠女との契約を体が拒絶してしまう十七歳の**狗鬼**、**哭士**が、幼少の記憶が無い**籠女**、色把と出会う。狗鬼とは何者なのか、人外の力を持つ者達が繰り広げる一つの物語。

## 1 1 真夜中の侵入者

時刻は既に深夜の二時を過ぎているものの、街の喧騒けんそうは静まることを知らない。

眠らない街。中でも一つ、群を抜いて高いビルの上に一人の人物が立っている。

暗闇に紛れる黒いウェア、胸には防弾ベスト。身体は細いがしっかりとした筋肉。男性にしては少し長い髪。不機嫌そうな目つきは鋭く、長く切れ、近づこうとするものを受け入れない、そんな雰囲気醸し出していた。

夜風が彼の頬を撫でる。

彼の足元、二百メートル先には、さまざまな色の小さな光の粒が、点滅し、移動している。

もはや一つ一つの光が何によるものなのか、判別は難しい。

黒づくめの服を身に纏い、彼はその時を待っていた。

「哭士しくし、準備が出来た。来い」

肩に付いた通信機から雑音の混じった声。  
哭士と呼ばれた彼は僅かに眉を顰めた。

通信機の雑音が途切れると同時に、気だるげな様子で哭士は何も無い空中へ踏み切る。

二百メートル下はコンクリートの地面。命綱など無い。

重力に引き寄せられ、身体はビルの壁と平行に落下していく。

長めの髪が激しく靡なびき、風が身体を強く撫で付けてゆく。

如何なる時でも体が反応できるように、緊張をみなぎらせている。

見つけた

動体視力が人間の範疇はんちゆうを越えている彼は、垂直な壁から、鋭角に押し開かれている窓を見つけた。哭土の仲間　先ほどの無線の男  
が開いておいた窓である。

落下をしながら、壁を軽く蹴り、体勢を整える。

窓の縁に手をかける。重さを感じさせない軽やかな動作。窓の縁は手をかけた重みでかたり、と鳴ったのみである。そのまま身体を隙間へと滑り込ませ、ビルの内側へと侵入した。

落下から僅か数秒の出来事。

「毎度ながら……恐れ入るよ」

侵入した窓の近くに立っていた男。彼の名前は菊塵きくじん。スーツに、眼鏡を身につけ、清潔そうに整えた黒色の短髪、胸元にはこのビルの会社の社員証をつけている。哭土より先に諜報員ちやうほういんとして侵入していた男だ。

「まさか、超高層ビルに命綱無しで窓から侵入する人間が居るとは誰も思わないだろうね。まったく……お前の身体はどうなってるんだか」

「余計な話は無必要。エレベーターは何処だ」

哭土は菊塵の顔を見ずに言い放つ。菊塵はそんな哭土の態度も気

にしていない様子だ。

「この後は、昨日話をした通りだ。この先の専用エレベーターで一気に階上へ。非常用の電力が動いている。護衛は目に付くものだけ始末してくれればいい。上層部の監視システムは停止中。九分三十四秒後の停電復帰までに最上階、一番奥の部屋の男を捕捉。男を捕捉後、例の『目標』を探す」

要点のみの指令。菊塵が言い終わるか終わらないかのうちに、哭士の姿は消えていた。

既に室内灯が消されている暗がりの中で、菊塵は一人残された。

「……流石」

暗い直線が続く。今、このビル丸ごとが停電している。だが、哭士にとっては昼間の視界と変わらない。

哭士がいる区間は、ビル内では上層部。ビジネス業務を主に行う中層部とは大きく内装が変わり、重厚なインテリアが視界に入っては消えていく。足元も、タイルではなく、分厚い絨毯じゅうたんが廊下一面に広がっている。

視界の奥で、人影がちらつく。護衛だ。

彼の目は良く見える、人影は二人。まだこちらには気づいていない。

身を屈め、壁に沿って素早く近づくと、壁を蹴り、中空へ跳ね上がる。軽い。

壁の蹴った音で、護衛の二人が異変に気づく。

跳ね上がった哭士は回転をかけたまま、両手を護衛の一人の首にかけ、そのまま床へ引き倒す。

一瞬首を後ろに引かれた護衛は「ぐえっ」と醜く唸ると気を失った。自分に何が起きたのか分からなかっただろう。

着地し、しゃがんだ状態で目の前には、もう一人の護衛。正に異変に気づき、腰に装着している無線機と武器に手をかけていた……が遅かった。

立ち上がりと同時にまだ哭士を定める事ができずにいる相手の顎を殴りつけた。

分厚い絨毯は、屈強な男が二人倒れる音をも吸収してくれる。

振り返ることなく、先へと歩を進める。呼吸は乱れていない。

何人もの護衛が彼の途上に点在していたが、目に付く者から哭士は次々と伸<sup>の</sup>びていく。

音も無く接近し、気が付いた時には床に倒れている。その為、哭士が侵入したことはビル内に伝わる事が無い。護衛の仲間を呼ばれる事も無く、着実に目的地へと歩みを進めて行った。侵入してまだ五分と経っていない。

突き当たり、直角の廊下の先に、目的の扉が眼前に構えている、入り口の脇にも護衛。

相手は壁と扉を背にしており、扉は細長い廊下の一番奥にある為、正面から突破するより道は無い。

手には照明。突然の停電にもその場を動くことなく、背後の扉を守っている。照明が一瞬、哭士の影を捉え、護衛は拳銃を構えた。

躊躇<sup>ちゆうちゆう</sup>することなく、哭士は突き当たりの角から一步を踏み出す。銃の照準は迷いも無く哭士の胸に合わさる。

フン。

口元だけに笑みを浮かべると、護衛との距離を一直線上に縮めていく。

哭士は腰に装着している小型のナイフを手にとると、慣れた手つきで、護衛の手元に向けて投じた。

キーン という小気味良い金属音が鳴り渡り、拳銃は絨毯に沈んだ。

あつけに取られる護衛を尻目に、充分に距離を縮めた哭士は、相手の鳩尾みぞおちに拳を突き入れる。

突然の衝撃に相手は激しく吐瀉とつぎしながら、膝から崩れ落ちた。

後ろ首を掴み、男を引き上げる、細い体からは想像もつかない腕力。

腕を振り下ろし、床に叩き付けた。護衛はそのまま動かなくなつた。

実際のところ、重厚な扉には何重ものロックが掛かっていたのだろうが、哭士にはまったく意味を成さなかった。ドアノブは握り潰せば良いし、開かなければ蹴り破れば良いのだ。それだけの力が、哭士にはある。

力任せにドアを押しやると、後は滑らかに開いた。非常電源であろうオレンジの小さな明かりが天井から降り注いでいる、狭いスペースが眼前に広がり、またもや扉が立ちはだかっている。おそらく

この先に目標の私室があるのだろう。

今度の扉はドアを押したが動かない。ガチャガチャと取っ手を動かすうちにちぎれてしまい、哭士は扉を蹴破った。

広い。部屋は内装からして寢室のようだった。扉の内部は床が大  
理石、素人目で見ても、高額だと分かる家具が何点か置いてある。  
哭士は入り口から動かず、その双眸そくほうで広い室内を見渡した。

目標を見出したときには既に体が動いている。

扉を蹴破った音に驚き、部屋の真ん中で立ち尽くしていた男がうるたえる。指令にあった男に間違いない。

「な、なんだお前は……！ 何……！」

停電と、先ほどまでの騒ぎに目は覚めていたようだが、非常の事態に、頭が回らないらしい。寝巻き姿で男は慌てている。答える必要は無いとばかりに、つかつかと近寄ると、慣れた手つきで男の首根を掴み上げ、そのままベッドの上に押し付けた。

男はうつ伏せにはたばたともがいているが、哭士の右腕に押さえつけられている首根はびくともしない。

「捕捉した」

肩口に付いている通信機に一言、要件のみを伝える。数秒の後、  
またもや雑音の混じった声が届く。

「後続隊、すぐに向かう」

菊塵と、菊塵に引き連れられた数人の男達が到着する数分間、押さえつけられた男はなにやら騒いでいたが、哭士の耳にはまるで届いていないかのようだった。

「ごくらうさん、後はこちらがやる」



菊塵は、哭土にそう告げると、後方に待機していた者達が男を捕らえ始めた。

「さ、教えてもらおうか。どこに隠してあるんだ？」

菊塵の部下達は、男に尋問を始めた。

そういつたことに興味はないのか、哭土は身柄を引き渡すと、ベツドの横に備え付けてあつたソファに腰掛けた。

「残っていた護衛もすべて片付けた。だが、ずいぶんと地味な攻略だったな」

菊塵が続いてソファに掛ける。哭土の倒した護衛たちを見たのだろう。護衛たちは気を失つてはいるが、死んではいない。

「お前の力を出すまでも無かつたわけだ」

哭土は答えない。ただ黙りこんでいるだけだ。

「『目標』が無事見つければ、さぞや祖父様じゅうふさまも満足されるだろうね」  
祖父様、という言葉にだけ、哭土は少しの反応を見せた。傍目には分からないほどであるが。

菊塵がつれて来た部下の一人が彼の元にやってくる。

「部屋内には、『目標』は見当たりません」

「……そうか、このビル内というのは確かなんだがな……」  
部下からの報告に、菊塵が首をひねる。

一瞬、哭土の耳が小さな音を捉えた。人間の身体能力を遙かに凌しのぐ彼の聴力である。

この部屋の近くから聞こえた。

不機嫌そうに　実際に哭土は不機嫌だったのだが　ソファか

ら立ち上がり、広い室内を見渡した。

何か、この部屋の近くには別の気配がする。

「おい、どうした？」

菊塵は、哭士が答えないのを知りながらも話しかける。

つかつかと部屋の隅へ歩み寄る。

壁だ。一見すると、何も無い壁のようにみえる、だが、夜目の利く哭士の目は、僅かな異変をも捕らえる。

壁に触れると、一筋の線が縦に走っている。線は哭士の目線の上で直角に曲がり、今度は横に伸びている。壁を叩いてみると、中が空洞になっているような軽い音が返ってくる。壁の別の場所とは明らかに音が違う。隠し扉だ。

「そこはっ……!!」

尋問にも答えず、沈黙を続けていた男は、哭士が隠し扉に気づいた途端にあからさまな狼狽を見せる。

哭士には男の言葉は耳に入らない。扉の開け方など考えず、一拳に蹴り破る。

ガゴン!! 乱暴な音と共に、隠し扉は奥へと倒れ、細い廊下が現れた。

間違いない、感じた気配はこの先からだ。

拓かれた道をくぐり、先へ進む。

「はぁーん、なるほどね。こんな所に隠していたわけか。でかした、哭士」

後から菊塵が続く。

哭士は迷い無く一番奥の扉の前で立ち止まる。他にも扉は何枚かあるが、他の部屋には何も居ない事が、何故だかはつきりと分かる。気配の元はこの先に居るのだ。

哭士は自身の感受する感覚に戸惑っていた。この奥の何かに「呼ばれている」という感覚。

扉の前に立って鮮明になるこの知覚は、自分の感性をほぼ完全にコントロールしてきた哭士を狼狽<sup>うろた</sup>えさせるのに充分な材料であった。

「どつした？お前、さつきから妙だぞ」

『目標』が、何かは事前に哭土も知っている。だが、それが何であれ、彼には関係の無いことであった。

指令を受け、機械のように遂行する。意思や自己などは存在しない。そうやっていつもやってきた。

任務の遂行に邪魔になる者はすべてこの手で潰してきたし、それによって何かを感じることは無かった。だが、今、目の前の扉にある気配に、自分でも驚くほど狼狽ろうはいしている。

自分に訴えかける、このざわめく本能は……。

扉に手をかける。鍵が掛かっているものと、取っ手に力を込めたが、それはあっさりとの抵抗も無く動いた。

部屋の中には……。

白い肌の、少女とも呼ぶべきか。黒い肩までの髪を下ろし、白いワンピースを着ている、裸足であった。

目を引く大きな瞳をさらに見開き、突然の事態に立ち尽くしている部屋の隅に背中を押し付け、立ち尽くしていた。先ほどの荒々しい音に怯えていたのだろう。

「おい！ こつちだ！」

菊塵が部下達に向かって叫ぶ。

少女と目が合う。哭土は、部屋に踏み込むことが出来ず、数歩後ずさった。

菊塵の合図で駆けつけた男達が哭土の目の前を通り過ぎ、粗暴に少女の部屋に踏み込む。少女は驚きのあまり声も出せないのか、悲鳴を上げることは無かった。男達が少女を捕らえようとすると、細

腕を振り回し、抵抗を繰り返していたが、女の力で敵うはずもない。先ほどの目標の男と同じように、捕縛されていた。少女の目は、恐怖の色がはつきりと現れている。

と、少女の瞳が、哭士を捕らえた。哭士は目を逸らすことが出来なかった。

この女は……一体何なのだ……

少女が部屋から運び出されるまで、少女の目が脳裏に焼きついたまま、哭士はその場を動くことが出来なかった。

## 1 1 真夜中の侵入者（後書き）

さて、『嘯く羊』（うそぶくひつじ）の始まりです。嘯くとは、とぼける・豪語する・（猛獣などが）ほえる・鳴き声をあげる。といった意味があり、今回は、「ほえる」の意味で使用しています。長めの話になり、完結目指して頑張りたいと思います。どうか、長い目でみてお付き合い下さると嬉しいです！

## 1 2・侵入方法

哭士がビルに侵入する前に遡る。

哭士の目の前に座っている菊塵。数枚の何かが印刷された紙と、写真を持ってきた。

「祖父様おじさまから、指示があつた。今回もお前の力が必要になる。書類、及び写真は例によつて破棄するから、覚えてくれ」

ばさり、と目の前に置かれる。彼の説明はこのように一方的に始まる。哭士は提示された指令を着実に行う。幼い頃から体術、そして殺傷方法等、暗殺技術を叩き込まれてきた哭士と、頭の回転が速く、情報収集を得手えいてとする菊塵は、いつからかこうして指令を完遂かんすいするようになっていった。

「二日前の昼頃、比良野家から長女、色把いろはが誘拐された。すぐに色把の祖母から通達があり判明したものだ。保守派の奴らの仕業で間違いない」

滑らせるように写真が哭士の前に示される。写真の少女が哭士を見つめている。

「……お前の兄の許婚いいなすけだつた娘だ」

「……」

哭士は写真を一瞥いちへつする。何も反応を示さない哭士に、菊塵はため息交じりの言葉を投げかける。

「比良野家は、代々力のある神子の家系。早池峰家の長男、早池峰友禅ゆうぜんと比良野色把いろはは生まれながらにして婚約が決められていた。会つたことは無いだろうが、お前にも少なからず関わりのあることだろ」

「……俺は兄の顔を知らん、女が許婚だろうが何だろうが関係ない」  
哭士の表情は変わらない。

「本心とすれば、一度自分を捨てた本家とは関わりたくない？」  
ぴくりと哭士の眉根が反応する。

「……口が過ぎたな。すまなかつた。お前の今回の仕事は、この少女を捕らえている本部上層部への侵入、後続隊の侵入経路の確保。まずは最上部に居る頭取くわうとくを押さえる。これで、外部から応援を呼ばれることを防ぐ。侵入経路の確保については途中に居る固定の護衛を潰して行ってくれば、あとはこちらで残りを片付けながらの進入が可能だ。少女が囚われている場所は、保守派の拠点、アービュータスビル上層部で間違いない。だが、こいつが厄介でな」

少女の写真の下から、今度はビルの写真が出てくる。近代的な構造で、下半分はガラス張りが多く、上部分は殆ど窓が無い造りだ。

「ビルの高さは凡そ二百メートル。ビル内は下層部・中層部・上層部の三層から成っている。昨日、早速社員を装って中を探ってきたが、中・下層部内はオフィスになっていて、比較的進入が容易だった。だが、上層部は窓も無く、通じる道は専用エレベーター一本。エレベーターフロアに行くことが出来るのは、ある程度の権限を持った人間のみ」

ビルの断面図が書かれた図が示される。確かに、上層部と中層部の間には、一本のエレベーターしか繋がっている部分はない。中層部のエレベーターフロアに向かう道も、IDカードで何回ものチェックが入る、との記載もある。

「まず、エレベーターフロアに正攻法で進むのはまず無理だな。IDカードは何とか作れたが、十代のお前の容姿ではカードを使う以前にビル内に居ることが不自然だ。厄介なのは、上層部に窓が無い

事、そして周囲にこれくらいの高さのビルが無いって事。もしこの二点をクリアしていれば、お前の場合、隣の建物から窓に侵入が可能だろうが」

菊塵は、すでに上層部に向かうためのエレベーターホールまで潜入してきたらしい。エレベーターホールの階層の写真が何枚か撮られている。

菊塵の顔立ちを見て、彼の年齢を当てられるものは殆ど居ない。スーツを着れば社会人に見えるし、学生服を着れば充分十代で通すことが出来る。こうしてあらゆる場所に溶け込み、事前の情報を集めることが出来る。

パラパラと菊塵が集めてきた資料をめくる哭土の目に、何の変哲も無い窓の写真が映る。

「この窓は」  
「ああ。エレベーターフロアの階層に数箇所ある窓だ。すべて確認して来たが、どれも人間一人が何とか通れる位の小さいもので開き幅もあまり無い」

卓に無造作に置かれている窓の写真を、指で引き寄せせる。

「……これでいい」  
中指で哭土が窓の写真を指す。菊塵がにわか信じられない顔をする。

「ビル屋上にへりで俺を運べ。屋上からこの窓に侵入する」

「まさか……」

「お前は、この階層に先に入り、窓を開けておけ。一瞬で終わる」  
揺らがない哭土の言葉。菊塵は頷いた。

「わかった。侵入の件については、これで終了とする」

こうして、色把を救出する作戦は決行された。



### 1 3 ・囚われの少女

(……何か、あったんだろうか?)

暗がりの部屋の中を、少女がおぼつかない足取りでぐるりと一周する。部屋が停電してから数分。恐らく誰かが様子を見に部屋にやってくるだろうと思っていたが、人が近づいてくる気配はまだ無い。

(懐中電灯なんか、無いよね……)

この部屋に来てから二日経つ。今の今までこの部屋の中で懐中電灯などは目にしていない。

部屋の中心の光源が急に明かりを失い、今まで見えていたデジタル時計の電光も今は見ることは出来ない。恐らくこの部屋、もしくは部屋を収容している建物が停電してしまっているのだろう。

部屋には一つ、ドアとおぼしきものはあるが、ドアノブが無い。外側からしか開けられない仕掛けになっている。

彼女は、監禁されていた。

苦し紛れに、もう一度ドアを押してみたが、硬い壁と変わりは無かった。

この小さな部屋から出ることも出来ず、外の様子を伺うことも出来ない。自分の無力さがもどかしい。

(私、一体これからどうなるの?)

真っ暗な部屋の中で、不安に押しつぶされそうになり、彼女はその場につずくまいった。

(……お婆様に、会いたい。)

彼女の一番古い記憶。大きくて古い屋敷、赤い振袖を着ている。

「色把さん、こちらへ」

祖母だ。沢山の大人たちが集まっている部屋に、色把をやさしく呼ぶ。

料理と酒、そして大人が吸うタバコの煙に、空気がぼんやりと霞んでいる。

ずらりと並んだ膳の前に、大人たちは皆それぞれ酒を飲み、語り、楽しそうにしている。晴れ着を着た色把が部屋に入り、祖母が一声上げると、ザワザワとした空気が止んだ。大人たちが色把を見つめる。

「今日で十歳になりました。あのような恐ろしい出来事がありましたが、無事に、この歳を迎えられました。本家を離れ、この子はカゴメとして、そして友禅様の伴侶として、立派に役目を果たさせて頂きます」

祖母は、色把を大人たちにそう紹介する。当の色把はさっぱり意味が分からなかったが、自分と祖母に対して視線が向けられているのはなんとなく分かり、恥ずかしそうに祖母の後ろに隠れた。

「あんなことがあつたばかりなのに……」

「そのせいで……ねえ……」

大人たちの声が聞こえる。同情の色を帯びたあの言葉は、今でも何故か覚えている。

祝賀の会が終わり、祖母と二人きりになったときのこと。

縁側に腰掛けて、祖母が話し始めた。

「明日から、この家を離れ、別の家に住むことになります」

色把は首をかしげた。これからもずっとこの屋敷に居続けると思っていた。

「私は色把さんの身の回りのお世話をいたします、ただ、貴方は友禅様のお傍に仕える為、色々なことを学ばなければなりません」

お傍に仕える……。

「お嫁さんになることですよ。ずっと一緒に過ごすことです」

祖母は色把の表情から読み取ったのだらう。優しく語り掛ける。

だが色把は突然の事に、祖母を見上げる。祖母の目は少し驚いた表情を見せた。

「ああ、色把さん、あんな恐ろしいことがあって、記憶が混乱されているんですね」

そう言って、頬に触れる、老人のひんやりとした手が心地良い。

「貴女は友禅様の許婚として、これまで本家、黒古志家くろこしでお過ごしになられて来ました。十歳になってからは、貴女の生家である比良野家で婚礼の歳になるまで過ごされる事になります。友禅様はお優しい方です。色把さんにお似合いの方ですよ」

祖母の表情から、ユウゼンという人は、とても素晴らしい方なのだと思いを馳せた。

「本日はご事情があり、こちらにはいらしていないようですね、ですが、いずれ……」

ユウゼンという人に会ってみたい、そう思いながら、色把は祖母の言葉に再度頷いた。

「色把さんは良い子ね。困ったことがあったら、いつでもわたくしに仰って下さいませ」

そう言って、色把の頭を優しく撫でてくれた。

温かい、色把の一番古い記憶である。

色把は十歳から前の記憶が無い。なにか恐ろしい目に遭ったと聞

いている。だが、祖母も、誰も、色把の身に何が起こったのか、教えてはくれなかった。

あの祝賀の日から、あの大きな屋敷に行くことは無かったが、祖母はずっと色把のそばに居て、世話を焼いてくれた。

今、何をしているのだろう。優しい祖母の声と、着物の優しい香り。不安で押しつぶされそうな現実から、少しだけ離れることが出来た。

うずくまったまま、数分が過ぎただろうか。

ガタン、とドアの外から、なにやら乱暴な音が聞こえ、色把を現実に取り戻した。立ち上がり、ドアに耳を近づけていると、数人の足音が近づいてくる。

部屋の中に、身を守るものは何も無い。とにかくドアから離れ、息を潜め、気配を殺した。

気配が近づいてくるのが分かる。自分の心臓の音がやけに大きい。足音がドアの前で止まり、くぐもった会話の断片が耳に届く。…

…男性のようだ。

(助けて……お婆様！)

開いたドア、暗がりによく見えなかったが、一人は背の大きくがっしりとした若い男性。自分よりも年上だろうか。黒い装束を着て、自分を見た瞬間に動きが止まった。驚いているように見えた。

黒装束の男性が、後ずさった後から、眼鏡をかけた男性がこちらを捉えて叫ぶ。

「おい！ こっちだ！」

声を合図にどやどやと数人の男達が部屋に押し入る。

あっという間に、抱え込まれてしまった。必死に抵抗しても、びくともしない。

そのまま廊下に担ぎ出されてしまった。一番最初に部屋にはいつてきた男性と目が合う。

(昔、どこかで……?)

遠く淡い記憶。失った記憶の中に、何かを訴えかける胸騒ぎ。

だが、一瞬にして人影に遮られて彼の目は見えなくなり、色扱は部屋から連れ去されることになってしまった。

## 1 4・菊塵の説明

「比良野色把さん、ですね」

翌日。ビジネスホテルで一夜を明かし、今度は立派な日本家屋に通された。床の間、大きな掛け軸、絵に描いたような立派な客室だった。畳一枚分はあるかというくらいの大きな卓。色把の目の前に茶托。色把の向かいには、黒いフレームの眼鏡をかけた男性。そして少し離れた窓べりに、不機嫌な表情で居る見覚えのある男性。

「僕は、曾根越菊塵と申します。そこに行儀悪く座っているのは早池峰哭士」

昨晚、お会いしていると思いますが、と話を付けてから、眼鏡の男性、菊塵は話し始める。窓べりに座っている哭士は、やはり昨日、自分の部屋に一番最初に入ってきた男性だった。目の前の菊塵も記憶にある。

「今回、手荒な真似をしてしまったこと、お許し下さい。こちらとしても火急の事態だったもので」

静かな声、眼鏡を中指で押し上げる。まっすぐこちらを見つめる目が合って、色把は思わず下を向いた。

「僕達は、色把さんが連れ去られたと貴方のお婆様から連絡を受け、この数日、貴女を探していました。貴方はもう安全です。あのビルはアービュータスという会社の……、聞いたことはありませんか？ 製薬会社の一つです」

祖母の事が話に上がり、ようやく色把は体の力が抜けた。

「あの会社と、僕達が組する組織の間には浅からぬ縁があります。まあ、それは追々話しましょう。まず、僕達が聞きたいのは、貴女

がさらわれた時のことです。貴方をさらった人物は、どのような？」

口を開きかけて、色把はふと動きが止まる。手で、紙とペンをあらわす動作をする。

「ああ、失礼しました。こちらを」

色把の目の前に、紙とペンが用意される。色把は声を出すことが出来ない。十歳の時からだと祖母から聞いたが、色把は十歳より前の記憶が無く、自分に何が起きたのか覚えていない。

色把が、記憶を辿りながら文章を書こうとしたその時だった。

「まどろっこしい事はいいい、菊塵」

哭士が遮る。声を初めて聞いた。意外に若い声だった。

「そのまま話せ、唇を読む」

色把に向けられた言葉、そのまま、話す……？

色把が首を傾げる。

「慣れている対話方法の方が良いと思つたのですが、彼は時間が掛かる事は嫌いなようで。僕も、彼も、読唇術どくしんじゆつを心得ていますので、そのまま口を動かしてみてください」

哭士の言葉に悪戯っぽく笑う菊塵。紙以外で他人と会話をするなど、色把には無かつたことだ。調子が中々つかめないまま、少しずつ色把は話し始めた。

『私は……』

『私は、庭で洗濯物を干していたんです。そのとき、庭の勝手口から、誰かの気配がありました。普段誰も出入りしない場所です。妙だな、って思つただけ、家の中にはお婆様もいるし、何人か使用人の人達もいるから、きっと誰かだろつって』

一つ一つ、思い出しながら話を進める。色把の頭の中には、当時の風景がよみがえる。通じているのか不安になり、そつと二人の様子を窺う。

目の前の菊塵は、色把の唇から目を離さずに頷いているし、哭土の方は相変わらず不機嫌そうな顔で微動だにしない。色把の話は声を出さずとも通じているようだ。

色把は続けた。

『でも、その音がしてから暫くして、家の中から物が壊れる音がしました。家の中に入ろうとすると、お婆様の声がして、『逃げて』って。どうすればいいのかわからなくなって…それでも家の中に向かおうとしたんです。お婆様が心配で』  
「なるほど」

『そうしたら……金髪の男の人でした。背が高く結構若い感じの人。屋根の上から私の目の前に飛び降りて来ました。外国の人だと思えます。目の色も違っていたから。でも、日本語はとても流暢じゆうせうで、私の同行を求めてきました。私が大人しく従えば、家の中の者には危害は加えない、と』

「外国人……ねえ。いたかな、そんな奴」

菊塵は考え込む。会話が止まると、続けるように哭土が促した。

『それから、少し歩いてから、黒い車に乗せられて、貴方達に発見をされた部屋に。あの部屋からは、貴方達に会うまでの間、出ていません』

「部屋にはどれくらいの間？」

『二日です』

「誰かと話をしたか？ 例えば、お前を連れ去った外国人とは？」

「おまえ」という少々乱暴な哭土の言葉に引っかかりつつ色把は頷



いた。

『あの部屋に入ってからすぐ、四十代位の男性が入ってきました。その時に、外国人の方も引き連れられて一緒でした』

「ああ、きつと、その男はアービュータスの社長でしょう。貴方を確保する直前に、その方も押さえさせて貰いました」

あの夜、哭士が捕らえた男の事を言っているのだろう。あの後、男がどうなったのかは、哭士には興味の無いことだった。

「話の内容はどういった？」

『最初に、私が近く危険な目に遭うだろうから、保護をさせてもらった、と。危険が過ぎ去れば自宅に帰すから、それまでここで待つようにと言われました』

色把の言葉に眼鏡の奥の瞳が、細められた。

「貴方はそれに従った？」

色把は頷く。

『にわかに信じられませんでした。お婆様が私に逃げるように叫んでいたし……でも、私がかすれば、家の方々にも危害が加えられる、そう思っただんです。了承すると、男性はそのまま部屋を出て行きました。あとは、何も』

菊塵が納得したように目を閉じた。

「なるほど、大体の事はわかりました」

菊塵が頷く。

『お婆様は、無事なのですか？』

「……後ほど、会えるかと。ここ数日の事で、お疲れでしょう。離れの方に、部屋を用意しましたので、まずはこちらでお休み下さい。女中も居ますので、何なりとお申し付けください」

にこやかに色把に語りかけた。

屋敷の中を自由に歩き回っても構わないと話を締め、菊塵の一連の説明は終わった。色把は菊塵にぺこりと頭を下げ、案内された部屋へと向かう。

ここでようやく自分に降りかかった突然の出来事も、ひと段落しそうだった。

(でも、私には何一つ、確信を持てる物が無い)

自分の身が安全だということも、お婆様とも後で会えるということも、すべて菊塵が話をした事だ。あの一連の騒乱は何だったのか、本当にここは安全なのか。自分が知りたい事に何一つ触れることが出来ず、色把の心中は晴れなかった。

## 1 5・狗鬼と籠女

「哭士、前に座れ」

色把が用意された部屋に戻ってからの事、菊塵が哭士を自分の前に座るように促した。

哭士は訝しげな顔をしながらも、窓べりから菊塵の前へと移動する。

「色把をとりまく危険因子について、詳しく話をしていなかったと思つてな。彼女、『籠女』の能力が目覚めた可能性がある」

普段から話を聞いているのかいないのか分からないが、哭士だが、籠女という言葉が出、珍しくふと顔を上げ、菊塵の言葉に反応する。

「一応籠女について説明させてもらう。籠女は僕達『狗鬼』の対となる者。身体能力に優れる狗鬼と違い、籠女の能力は人間と殆ど変わらない。だが、通常の間人と異なるのは、まず『血』が傷を癒やす作用を持っていること。もう一つ、影鬼を呼ぶこと」

ここで菊塵は一旦言葉を切り、眼鏡を押し上げた。

「影鬼は、籠女の血を求め付け狙う。実体の無い、名の通りいわば影だ。血をすすった影鬼ほど、大きく、力も強くなる。人間と殆ど変わらない籠女は、影鬼に抗うすが無い。だから、籠女は狗鬼と契約を結び、その身を護らせる。狗鬼は影鬼を狩る。狗鬼、籠女、影鬼の三角形が出来上がるわけだ。ここまで、いいな？」

そこで、と菊塵は話を区切る。

「この、新たな『籠女』、比良野色把の護衛を、お前に任せる」  
哭士の眉根がぴくりと反応する。

「……何故俺が」

「理由は三つ。一つ、目覚めたばかりの籠女には勿論、身を護るための狗鬼が居ない為。二つ、自分を護る狗鬼という者は何たるものを彼女に実際に見てもらおう為。三つ、女性の扱いを、お前に学んでもらおう為」

三つ目の項目に対し、菊塵がにやりと笑う。

「……お前だつて狗鬼だろう、お前がやればいい」

あからさまに嫌そうな顔をする哭士。彼にとって必要以上の人間関係は邪魔なものでしかない。

「残念ながら、僕の能力は護衛には不向きだ。お前が一番知っているだろう」

肩をすくめ眼鏡の奥で笑う菊塵に、哭士が重いため息をつく。

「言つとくが、これも祖父様おじいさまからの指令だ。彼女を危険からしつかり遠ざける事」

「あのジジイ……」

舌打ちしながら哭士が悪態をつく。幼少の頃から、何故か哭士は祖父の言いつけには逆らえない。

今回の件についても納得のいかない様子だったが、祖父の指令、ということに渋々といった様子で色把の護衛を了承した。

「彼女を護衛する上で、気をつけて欲しいことがある。色把の祖母は、彼女が連れ去られた事をこちらに通達した直後。……保守派に殺害されている」

顔の前で手を組む菊塵。

「色把、彼女は十歳以前の記憶が無い。記憶喪失以降は、色把の祖母が、彼女の失った記憶を埋めるように全てを教え、再度、比良野家の息女として育てた。彼女の中で祖母は非常に大きな存在だ。よって、今彼女に祖母の死を伝えた場合、彼女が現実に耐えられなく

なる可能性がある。祖母の事については、お前からは何も言わないでいてくれ」

軽く目をつぶる哭士、分かりにくい彼の意思表示だが、長年相棒を務めてきた菊塵は、哭士の「分かった」という返事であることを知っている。

物心付いたところから、権力者である祖父の手足として使われてきた哭士、祖父の命令を唯々行<sup>ただただ</sup>うことに不満が無いわけでは無いらしい。だが、その不満に対し、命令に逆らえない自分との間の凝<sup>じこ</sup>りに、彼が表す意思表示は希薄なものとなっていった。

「お前がこういう類を不得手<sup>ふえて</sup>にしているのは分かる。だが……お前の残りの時間は少ないんだ哭士」

菊塵が語りかける。投げかけられた言葉に、うんざりといった表情の哭士。

「籠女と契約を結ばない狗鬼は、十八歳の誕生日を迎えた瞬間死を迎える。何故お前が狗鬼であるにもかかわらず籠女と契約が結べないのか……。今回の籠女が、もしかしたらお前の契約相手になるかもしれない」

「……俺は別に死のうが構わん」

席を立つ哭士。ガン！と乱暴に閉めた襖がズレた。

「……心情としては、『期待を持たせるな』ってとこかな」

慣れてはいるが、扱いは困る。菊塵は苦笑を浮かべた。

## 1 6 ・早池峰家の屋敷

色把に用意された部屋の中には、大方の生活用品が揃えられていた。女物の服さえも、タンス内に用意されていた事に驚いた。一通り部屋内を見終えた為、屋敷の中を歩き回ってみることにした。

広い。右手には、大きな庭。庭園というのだろうか、松の木の下には砂利が敷かれ、池もある。

(こんな大きな屋敷……一体誰のものなんだろう?)

「あらあ！ こんな所にいらしたんですか!!」

張りのある、大きな声が色把に届く。振り返ると、女性が一人立っていた。四十代位だろうか、格好からして菊塵が言っていた女中だろう。

「色把さんですね、私、こちらで家政婦をしています、筒井 マキと申します。お部屋のお洋服、大きさとか大丈夫だったかしら?」

にこにこ愛想の良い顔が、色把に挨拶する。なるほど、この人が自分の部屋の物を用意してくれたのだ。

「このの方々、色々難しい方多いでしょう? 急にいらした方は皆さん戸惑われるんですよ、何か困った事があつたらすぐ仰ってくださいね。特に旦那様のお孫さん、哭土さんなんかはちーっとも愛想が無いし、にこりともしないから、皆さん、最初は恐がられるんですよえ、出されたご飯を残さず食べてくれる辺りだけは、十七歳らしくて可愛いんですけどねえ……。あら、色把さんご飯は召し上がりました? すぐにでもお作り致しますけど?」

くるくると変わる表情に半ば驚きながら、色把は食事を首を振って断った。しかし、あの哭土が自分と同じ十七歳という方が色把に

とっては驚きだった。

(……絶対年上だと思ってた)

色把の思考はどこへやら、マキは喋ることが好きなのだろう。色把に構わず話し続ける。

「ご存知だったかしら？ こちらの部屋敷ね、ブリリアントっていう会社の会長、早池峰修造はやちねしゅうぞうさんのお宅なのよ。今は旦那様、お出かけしていらっしやらないんだけどもね。ほらCMでよくやっている薬の会社の……」

そう言って、テレビでよく聞くCMのフレーズまで口ずさみ始めるマキ。

ブリリアント、色把にも聞き覚えがある会社の名前だ。確か、薬品だけでなく、医療器具にも精通している会社だったはずである。

そう、菊塵が言っていたアービュータスと同じ規模で、お互い競り合っている印象がある。

「やっぱり、大きな会社の会長さんでしょう？ 色々物騒らしくてね、それで孫の哭土さんと、それから秘書の菊塵さんとで警護やってらっしやるんですよ。旦那様は哭土さんが小さい頃から武道を習わせて、それで今は哭土さん、立派に旦那様のボディガードのお仕事されてるんですよ。お若いのに、頼もしいですよねえ」

警護……。要人の護衛をする人間が、何故自分を救いにきたのだろうか。

「あらやだ！ 私また話し込んで……。ここね、大きい屋敷なのに、旦那様と哭土さんと、たまに来る菊塵さんしかいらっしやなくて、男性ばかりなんですよう。お話する相手もないし、こんな可愛らしいお嬢さんがいらっしやるとつい……ねえ。私、そこからへんで洗濯物を干してますから、御用がありましたら呼んでくださいませね」

そう言い残してバタバタと去っていくマキ。いい人だがそっか

しそうだ。

実家の使用人にも、マキに似た人物が居たのをふと思い出す。今頃どうしているだろう。あの日、色把が連れ去られた日、恐らく屋敷内に居たはずだ。

ガラスが割れる音、微かに悲鳴が聞こえてきたように思える。あの時を思い出すたび、色把の心がざわりと、どよめく。

見知らぬ家で、見知らぬ人物、色把は日常から遠くはなれた所に来てしまったように思う。

連れ去られて監禁されるなんて、数日前の自分には想像もしていなかった事だ。

和やかな使用人たちの会話、祖母の温かさ、今になってすべてが懐かしい。

（声だけでも、聞けないだろうか）

祖母の声だけでも聞ければ、説明のあった菊塵の言葉が信じられる。そう思い立って、電話を借りようと、先ほどマキが走り去っていった先を探したが、マキは見当たらない。

多分、先ほどの調子で、家中を走り回っているのだろう。屋敷の内部を把握していない色把は、マキを探すのを諦めた。

屋敷内は廊下がひたすら続いている。広いのだ。

用意された自分の部屋に戻ろうと廊下の角を曲がった時、トスンとなにか高いものにぶつかった。色把がよろめく。と同時に腕を掴まれた。

（あ……）

哭士だった。廊下の角で、出会い頭にぶつかってしまったようだ。哭士は色把が転ばないように、腕を掴んでくれたのだった。色把が体勢を立て直したところで、哭士はゆっくり色把を放す。そういえば、



哭士はそのまま口を動かせば、話を通じることを思い出した。自分が一番気になつてしていること、祖母のことを聞こうと思った。

『菊塵さんとお話されてたんですか？』

「……そうだ」

無口な印象を受けていたが、受け答えには応じてくれるようだった。

『あの、電話で、お婆様の声を聞くことは出来ませんか？』

哭士の右の脛が少し動いたような気がした。少しの間を空けてから、哭士が答える。

「菊塵から説明があつた筈だ。今は待て」

『落ち着かないんです。自分で、本当に大丈夫なのか、確かめたい。電話がダメなら、私、自分で……』

屋敷内の散策は許されているが、外出はまだ許可されていない。

了承を得られたらすぐにでも、自宅に戻りたかった。だが、色把の期待に反し、哭士は首を横に振る。

「奴らにも言われたらどう、危険だと」

哭士や、昨日の会社内で言われた『危険』という言葉は、いまいち色把には理解できなかった。

『一体何が危険なんですか？ 私は今まで普通に生活していただけなのに』

二日前のあのことが無ければ、色把は今もきつと祖母達と実家で平穩に過ごしていたはずである。それを突如として誘拐され、訳もわからぬまま危険だ、危険だと外に出してもらえない。それが色把には不思議でならなかった。まっすぐ色把は哭士を見つめる。言葉に詰まつた哭士。

哭士は何か話をしようとした様子だったが、言葉が見つからなかったのだらう、口を閉じ、色把から視線を逸らす。押し黙つた哭士に、色把は何かを感じ取る。

『何か、あつたんですか？』

色把の問いに、哭士は複雑な表情を浮かべる。

「……とにかく、指示があるまで此処に居ろ」

哭士の眉間に皺がよっている。早く会話を終わらせたい様子だった。その場を立ち去ろうと、哭士が足を踏み出す。

『待って下さい！』

すれ違っっていく哭士の袖口を思わず掴んだ。その瞬間だった。

『！！』

哭士の腕に触れた瞬間、電気のような衝撃が体を駆け巡る。

ビルの屋上、飛び降りる景色、暗いビルの廊下、写真を差し出す菊塵。

色把が体験した事が無い映像と声が一瞬のうちに頭の中を駆け巡った。

『うっ……』

今までにない事態と、突然の衝撃に、色把は自分の体を支えられず、哭士の腕を掴んだまま、その場に座り込んだ。

急にしゃがみこんでしまった色把、哭士は驚いた顔で、色把を見下ろした。

「おい」

しゃがみこんでからびくりとも動かなかった色把は、哭士に声を掛けられ、一瞬身を強張らせたが、ゆっくりと顔を上げた。その目には、うっすら涙が浮かんでいる。こういつ時に如何どうすればいいのか、哭士は心得ていない。窮した結果、哭士はその場を動けずにい

た。色把が口を開く。

『……何故、何も教えて頂けないんですか……？ 貴方達と私は、何も関係無いはずでしょう？ お婆様に会いたいのです……』

祖母が死んでいることは話してはならない、だがこの少女は祖母に会いたいときかない。板ばさみになってこの状態は、哭士の焦燥を掻き立てるのには充分な材料だった。既に、この少女の護衛を任せた菊塵に、この上ない怒りを感じ始めている。不必要な人間関係は、自分を苛立たせるだけだ。

「……なら、勝手にしろ」

色把が掴んだ袖口を乱暴に振り払う。そのまま色把の横をすり抜け、その場を立ち去った。

背後に感じる少女の気配は、歩みを進めるほどに遠ざかっていく。彼の鋭い聴覚は、少女のすすり泣く音を捉えていたが、寧ろ哭士はその音を振り切ろうと、屋敷の奥へと消えた。

## 1 7・うごめく影

用意されていた部屋に戻った色扱は、マキの夕飯の誘いも断り、屋敷内が落ち着くのをひたすら待ち続けた。

真夜中になると、あたりはしんと静まり返った。廊下をそつと抜け出す。日中、屋敷内を歩き回っていて、上手い具合に松の木が外壁に上りやすくなっているところを見つけていた。

何も得る事が出来ないのであれば、自分の目で、確かめるしかない。色扱を動かしているのは、この思いだけだった。部屋にあった外用の靴を履き、庭園へと向かう。

松の木に足をかける。案の定、力の無い色扱でも外壁に上ることができた。そろりと外壁の上でバランスを整える。外壁の高さは二メートルも無い。

カチャン。

ぶら下がるようにして外側に下りた際、割れた瓦で手を切ってしまった。物音を立ててしまったが、屋敷内からは、何も聞こえてこない。自分が出たことは、気づかれていないようだ。

まずは、ここがどこか調べなくてはいけない。辺りを見回すと、閑散とした住宅街のようだ。まずは屋敷の外壁に背を向け、反対方向に歩き出す。コンビニに入れば、地図が見れる。

深夜のせいか、道を歩いているのは色扱一人。まったく分からぬい道に不安になりながら、等間隔に街灯が寂しく照らす道をべたべたと歩く。

後ろで何かざわめく音。風は無い。  
振り返るが、何も見えない。きつと気のせい、そう言い聞かせて  
歩みをすすめる。

わね わねわねわね

気のせいではない。何か近づいてきている。  
色扱は振り返る。見えるのは街灯の光。その下に、小さな淀み。  
目を凝らす。黒いシミが、蠢うごめいている。真っ黒く、靄もやのようなそ  
の物体には、瞼まぶたのない目玉が二つ。  
猫くらいの大きさ。だが、ズルズルと電灯の明かりの元に出でた  
のは、実体の無い影だった。影はざわざわと動いている。  
背筋が凍る。

(……一体、あれは何!!)

一気に身体に恐怖が駆け巡る。得体の知れない生き物。  
数歩後ずさると、その生き物も、同じ距離を保ち近づいてくる。  
体中を、恐怖と嫌悪が入り混じったものが這っていく。

わね わねわねわね わねわね

不気味な音を立てて、縮まる距離。助けを求める声は、色扱には  
出すことが出来ない。

この世の者とは思えないその生物は、近づくスピードを更に上げ  
る。目玉は色扱をしかと捉えている。胸の奥で警鐘が鳴っている。  
竦すくんだ足を必死に奮ふるい立たせ、身を翻して駆ける。

(怖い 怖い……怖い!!)

突如、右足からぐんと崩れ落ち、強かに地面に身体を打ちつけた。

遅れてやってくる、右足の焼け付くような痛み。一本の切り傷が走っていた。鮮血が溢れ出る。

(あの影は……!?)

咄嗟にあの影を探した。

ぞぞぞ ぞぞぞぞぞぞ

不気味な音。いた。

民家の塀の上。足を負傷し動けなくなった色把との距離を、ジワジワと縮めていく。

手で後ろにずり下がりながら、色把は必死に影との距離を遠ざけようとする。

アスファルトに溜まった色把の血だまり。影はそこまで辿り着くと、まるで喜びを表すかのように体を大きくざわつかせる。

ぞぞぞぞ ぞぞぞ ぞぞぞぞぞ

テレビの砂嵐のような耳障りな音だった。影は色把の血を啜すすっている。

影の動きが止まったと同時に、色把は道の反対側まで辿り着けた。背中にカタン、と音がなる。細い木の廃材だ。

必死に手で掴む、何も無いよりはマシだった。

血を舐め終えた影は、また新たな潤いを求め、色把ににじり寄った。

色把の血を取り込んだからか、先ほどよりも影の色は濃く、進んでくる様も、先ほどより力強く見える。

大きさは猫位から二周りほど肥大し、中型犬くらいの大きさとなっている。

ぞぞぞ ぞぞぞぞ ぞぞぞ

角材を構えた。様子を窺うように、じわりじわりと進んでくる影。角材を思い切り振ってみた。少し影にかすった手ごたえはあったが、影はひらりと色把の攻撃をかわす。

色把が反撃をしてきたことで、影が更なる警戒心を抱いたようだ。一定の距離を保ち、色把の動向を窺う。

足を負傷し、逃げるすべの無い自分は、影から目を逸らした瞬間に餌食となってしまう。

色把は恐怖と戦いながら、にじり寄る影へ、角材の先を向けた。

突如、色把に衝撃が襲う。手元の角材が弾き飛ばされた。色把は突然のことに驚愕する。

あの影はまだ色把から数メートル離れた場所に居たはずだった。自分の血を吸い、力をつけたとしても、一瞬で手元の角材を掠め取るなど、出来ない筈だ。

ざざざ　　ざざざ　　ざざざ　　ざざ

(また、一体現れたんだ)

弾き飛ばされた角材の先。もう一体の影が蠢いていた。自分が背にしていた塀の上から襲われたらしい。新たに現れた小さな影は、角材に付いた色把の血を、またもや啜っている。

色把に絶望が襲い掛かる。標的の手から、抗う武器がなくなつたことを察した大きな影が、忽ちのうちに身を翻し、色把に躍りかかった。彼らが言っていた「危険」とはこの事だつたのだ。なるほど、これでは一言に説明など出来はしない。

影が近づいてくる様は、一瞬のことであつただろう。だが、色把にはまるでスローモーションのように見える。恐ろしく開いた影の口の中はなお、真っ黒い闇だつた。

(もう……私は……)

身体は恐怖で鉛のように動かない。右にも、左にも避けることはできない。色把はその場に竦み上がった。



## 1 8・籠女の危険

「哭士、彼女はどうした？ 何かあったのか？」

屋敷内で色把が見当たらない。菊塵が哭士に問いかける。

「……………」

哭士は答えない。日中の、色把の涙ぐんだ顔が蘇る。心中をかき乱す少女を目の前に、どうすれば良いか分からず、そのまま手を振り払ってきてしまった。

「まさか、祖母の事を聞いてきた彼女に、何かしたんじゃないだろうな？」

ぴたり、と哭士の動きが止まる。こういう時だけは分かりやすい。

「お前なあ……………」

「家に戻りたがっていた。勝手に行かせれば良いだろう」

祖母の死を伝えてはいけないのなら、自分自身で見届ければ良い。そうすれば、色把も歯痒い思いをしなくて済む。どうせ判明する嘘をつき続けなくて済む。一番手っ取り早いではないか。

そのような思いから、屋敷を抜け出す色把の気配を感じ取って居たにもかかわらず、見てみぬふりをしていたのだ。

「お前、まさか、行かせたのか？ この闇の中を？ そうか、お前

……………籠女の事は良く……………」

菊塵の表情がこわばり、しまった、というような表情を浮かべた。……………ちゃんとお前に言っておくべきだった。籠女は夜が危険なんだ。影鬼は夜の闇に紛れて活動するからな。狗鬼の近くに居るか、この屋敷のように影鬼が入れないようにしてある建物に居れば良いものの、単身で出歩かれてはひとたまりも無い」

お婆様に会いたいです……

袖口を掴んだ色把の手。感触が手に蘇る。ビルの中で色把を見たときに感じた妙な感情が、再び蘇ってくる。呼ばれている、胸がざわつく。

初めて色把を見た瞬間、色把の両の目が脳裏に焼きついた。

瞳に捉えられた哭士は、目を逸らす事ができず、その場に立ち尽くした。

いままで、こんな事はなかった。自分を急き立てるよく分からない不明瞭な感情と、その感情を掌握出来ない自分に苛苛としたのだ。つた。

(何故、あの女一人のために……！)

無意識に湧き上がってくる感情に、再び苛立ちを覚える。だが別の自分が色把を追いかけるように急かしている。

「チッ……」

本能がざわめくまま、哭士は屋敷を飛び出した。

おぞめ おぞめおぞめ おぞめ

近づいてくる影の気配。

(もう駄目だ……)

がちりと目を瞑っていた色把の目の前に、何か重いものを蹴ったような音、そしてさらりと風が起きた。痛みが来ると身構えていた色把は、ゆるゆると瞼を開く。

影と色把の間に、哭士が立ちはだかっていた。大きな影の方が、離れた所でもがいているところを見ると、哭士が弾き飛ばしたらしい。

目まぐるしい事態の変化に、色把は付いていけなくなっている。突如現れた邪魔者に、影は激昂する。後から現れた小さな影が、まっすぐに哭士に向かってくる。

怯むことなく哭士は、右腕を大きく横に振る。哭士の指に引つかかった影は引き千切られ、蒸発するように空气中に溶けていった。「……」

目を見開いて自分の右手の平を見つめる哭士。あっけなく消えてしまったことにやや驚いている様だ。影と対峙するのが初めてなのだろうか。

おぞめ おぞめおぞめ おぞめ

先ほど哭士に弾き飛ばされた影が、体勢を立て直し哭士に面する。哭士は振り返り、影と向かい合う。

先に動いたのは影だった。影は哭土の前で飛び上がると、牙をむき出し、哭土へ襲い掛かる。

腕を突き出すが、影は空中で身を転じる。哭土の突き出した腕を掠め、更にも上へと舞い上がる。

重さを感じない。人間や動物とは明らかに違う為、加減が分からない。

「チツ……」

苛立ちを覚えながらも、哭土は影を見据える。影はまたもや哭土に照準を合わせ、中空から哭土に向かってくる。先ほどの影と同じように、手で掻き取るうと構える。

突如、空中の影から数本、針のようなものが発射された。

「!?!」

唐突な攻撃に、思わず哭土は両腕で顔を防ぐ。左腕に数本針が刺さる。酸が溶けるような嫌な音と共に、刺さった針は消えていった。小さくうめき声を上げながらも、哭土は怯むことなく影に接近し、手刀で影を横に振り払った。二つに分かれた影はノイズのような耳障りな音を立てながら、先ほどの小さな影と同じように空中に掻き消えていった。

影が完全に消えたことを見届けると、哭土は息を小さく吐き出し、色把に向き直った。

「立てるか」

瞬く間の事に、色把はまだ驚いている。色把は哭土を見上げ、辛うじて首を縦に振る。未だに右足からは血が出ていたが、骨折はしていないようだった。壁伝いによろよると立ち上がる色把。

先ほどの一連の出来事も然る事ながら、昼間、あれほど拒絶した  
哭士が自分を助けに来たことが驚きだった。

(そつだ、腕！)

色把は哭士の左腕を取り、自分の前に引き寄せる。急な色把の反  
応に一瞬腕に力がこもった哭士だが、その後は特に逆らう様子も無  
く、腕を色把に任せている。

長袖の生地にも穴が開いている。いそいそと腕を捲くると、刺が  
刺さった数箇所たの部分は痛々しく爛たれていた。

「私、どうしよう……あんな物があるなんて、知らなくて……」

このような事になるとは……知らなかったとはいえ、自分を助け  
てくれた男性が怪我を負ってしまった。色把に、悔恨の情が湧き上  
がる。

「この程度ならすぐ治る」

色把の手から腕を外すと、捲くっていた袖を下げた。

「これで危険だということが分かったか。……祖母を待つんだろ。  
戻るぞ。」

まずは、安全な屋敷に戻そうと、哭士は、色把に声をかけ、先を  
行こうとする。だが、色把は動かない。

背後で動かない色把の気配に、哭士は思わずため息を付いた。

「お前、この期に及んでまだ……」

訝しげに振り返る哭士に、色把はゆるゆると首を振った。哭士の  
言葉が止まる。

色把の両の目から、ぼろぼろと涙が零れていた。

『ごめんなさい……ごめんなさい。私、本当は分かってました。お  
婆様が、もうこの世に居ないんだって事……』

「……」

色把の言葉に、哭士は目を細めた。否定も、肯定もしない。

『お昼、貴方の腕を掴んだ時です。良く分からないのだけど、沢山  
の映像が私の中になだれ込んできました。そして、一番私の知りた  
かった事、……お婆様はもう居ないんだって事が、貴方と、菊塵さ

んが話している場面が見えて分かりました。……本当の事だつていう事も、何故か分かりました。……信じたくなかった。だから……」  
自分の足で、目で、確かめようとしたのだろう。菊塵が言っていた、比良野家は神子の家系という事。色把にもその血が流れている。籠女として能力が目覚めた時に、僅かながら人の心を読み取る力も芽生えたのかもしれない。

「……勝手な事して、ごめんなさい。貴方に怪我まで負わせてしまった……」

色把の両の手が顔を覆う。小さな嗚咽が、哭土の耳に届く。肩を震わせている色把の前に、暫くの間、哭土は立ち尽くしていた。

緩やかに、哭土の口が開いた。

「俺は、お前の護衛を任された。先ほどの影からお前を護るように、とな。」

低く、静かな声が色把に降りかかる。色把は顔を上げ、頷く。

言葉の先の意味を汲み取ったのだろう、今度こそ大人しく屋敷の方へと足を進める色把。

「……ただ、護れと命令されただけだ。お前を連れ戻せとは言われてない」

今、選んだ選択肢は命令違反だ。だが、色把を目の前にして、また妙な感情が湧き上がって来ていた。今までの自分であれば絶対に言う言葉ではない。無理矢理にでも色把を連れ戻していたであろう。命令を遂行するはずだった。護衛をする必要が無い、安全な屋敷へ連れ戻すつもりで此処に来た。

だが、泣き笑いの表情を浮かべる色把に、これ以上哭土は何も言えなかった。

## 1 10・もう一人の少女

深夜の為、バスも電車ももう走っていない。

哭士が先になって歩き、色把が数歩後を追いかけるような形で大通りまで出た。

タクシーを拾い、哭士が住所を告げる。十代の男女が深夜に出歩いている事に、運転手は少し訝しげだったが、黙っていても滲み出す哭士の威圧感に、運転手は口を噤んだようだった。

重い空気の中、タクシーでしばらく走る。

窓から外を覗く色把の横顔に、夜の街の明かりが反射していた。

哭士の屋敷も、町の中心部から離れているが、色把の自宅は山道を越えた先にある。

色把の足の流血も治まっていた為、哭士の助けが無くても、一人で歩く事が出来た。色把が一生懸命哭士の歩幅に合わせていることに気が付き、少し歩くスピードを緩めた。

ほんの気まぐれに、哭士は色把に尋ねてみた。

「……お前、友禪ゆうぜんの許婚だったそうだな」

「はい、本家に居るときから、そう決められていました」

「お前の婚約者は、どんな男だったんだ」

一度も顔を見たことが無い自分の兄、本家での振舞いはどのようなものだったのか。

「実は、私も、お顔を拝見した事が無いんです」

色把の言葉に、哭士は僅かに怪訝な表情を浮かべる。

「顔を見たことも無い奴と、婚約を交わすのか」

「小さい頃から、友禪様と結婚をするのだ、といわれて育ちました。それが、当たり前だと思っていました。友禪様が、行方不明になるまでは……」

「……そうか」

かける言葉が見つからず、短い会話は終わってしまった。

しばらく歩くと、立派な門が見えてくる。色把が早足になり、哭士を追い抜く。

門から入り、建物へと近づく。明かりは灯っていない。

近づいていった色把の足が止まった。横に哭士が追いつく。

建物は哭士が見る限りでも荒らされているのが分かった。色把の肩が震えている。一度大きく息を吸い込み、家の中に踏み込む。慣れた手つきで、電気を灯す。人の気配は無い。

中を見渡せば、家財は倒れ、畳は泥だらけだった。二日前までは、確かに人が住み、整然とされていたのだろう。

色把の後を、哭士が続く。とん、と哭士の胸に立ち止まった色把が当たった。

その場にへたり込む。

床には、黒ずんでしまっているが、血痕があった。へたり込んだ色把が手に持っているのは手のひらにおさまってしまいうくらいの小さな巾着。匂い袋だった。

ゆるりと哭士を見上げ、色把が話す。

『これ、お婆様の……』

袋を持つ手が震えている。匂い袋にも、僅かながら血が付いていた。色把の目の前の黒ずみは大きく広がっている。大量の血が流された事を物語っていた。祖母の物、そして大量の血の跡、祖母の身に何かがあったことは誰でもわかる。

しばらくの間、色把は匂い袋を握り締め、床に広がる黒いシミを見つめていた。その様子を、哭士は黙って見守った。

色把は哭士に向き直る。

『もう少し、一人で家の中を見たいです……きっと、ここにはしば



らくの間、戻れないから』

哭士は家の中を見渡す。自分と色把以外に誰もいない。

山道を歩いていて周囲に感じた影鬼えいぎの気配も、色把の家の敷地内に入ったとたんにぴたりと止んだ。

恐らく、哭士の家に施されている影鬼除けが、この家にもあるのだろう。近くに居なくても大丈夫そうだ。

荒れ果てた家の中を歩き、祖母の死を受け入れるつもりなのだろう、哭士は色把の希望を了承し、哭士は一人、庭へと出た。

庭から、色把の家を見上げる。

哭士の屋敷ほど大きくは無いが、がっしりと立派な日本家屋だ。かなり前の物だろう。

色把がさらわれたのは庭だと言っていた。そうすれば、色把をさらった金髪の男、というのは、今、哭士が見上げている屋根の上から降りてきた事になる。

人間に出来るはずもない。その男も同族、狗鬼いぬおにである事に間違いは無い。

庭に丁度良く置いてあった岩に腰掛け、色把が出てくるのを待った。

屋敷内から物音がする。色把が屋敷内で歩き回っているようだ。

すぐ近くで、庭の砂利を踏む音がした。

「!？」

岩から立ち上がり、気配の方へと素早く向き直る。

「なんだ、家はもう見終えたのか」

立っていたのは色把だった。家内で一旦別れたときと少し様子が違っているように思えた。哭士はその場に立ち、自分に近づいてこ

ない色把を不思議に思いながらも歩み寄る。

「!?!」

そこに突然、哭士の耳に水が掛かった。何かかと思い、辺りを見渡すが、変わった事は何も無い。夜露が落ちてきたのだろうか。袖口で水を拭いた。

「…………ツ!?!」

突如、視界が大きく揺らいだ。激しい眩暈めまいが哭士を襲う。

地面が上に、暗闇が横に、世界が不安定に動いている。その場に立っていられずに、膝から崩れ落ちた。腕を付いて耐えたが、それも長くはもたず、肩から砂利へ倒れ伏す。

「何…………だ…………」

手の平で目を覆う。が、体全体が揺らぐ感覚は収まらない。体が言うことをきかない。

目の前の色把は何故、何の反応も示さないのだろうか。やっとの事で、正面の色把に顔を向ける。

少女は、微笑んでいた。

「貴方を、貰いに来たの」

言葉を話すことが出来ないはずの少女が口を開く。

「…………色把?」

「違う、私は色把じゃない」

色把と同じ姿をした少女は、哭士がやっとの事で顔を上げているのが分かると、詰め寄った。

「早池峰 哭士、貴方と契約を結びに来た」

身体の方が利かない。迫ってくる手を振り払う事すら出来なかった。額ひたいに寄せられる少女の手、哭士の前髪を寄せ、額めいを額おにさせる。

「や…………める」

最早言葉すら、発する事が難儀だ。これから少女が行おうとしている事に、必死に逆らう。だが、哭士の僅かな抵抗も効を成さなかった。

「私と、契約を」

哭士の額に、少女の額が重ねられる。

「止める……止める……！」

額と額が接触したその瞬間、哭士の身体は大きく仰け反り、咆哮ほろごうが周囲に響き渡った。

## 1 11 少女と色把

獣のような哮りたけりが、色把の耳に刺さった。

ハツと、声の方を向き直る。庭の方からだ。

哭士の声に違いない。

荒れ果てた家内の散乱物に足をとられながら、庭へと一目散に駆けた。

(一体、これは……!?)

信じられなかった。庭の中心に哭士が倒れ伏し、その脇に少女が立っている。

その少女は、鏡写しのような、自分と同じ姿。

「契約が結べない……身体が、拒絶している?」

哭士は苦しそうに唸り声を上げ、頭を抱えている。彼の泰然たいぜんとしている姿しか 知らない色把は、今の哭士の姿に衝撃を覚えた。

少女も色把に気が付いたようだ。はっとした表情を浮かべた後に少女は怒気に髪が逆立つ。

「私のすべてを奪って、それでも邪魔をしようっていうのか……!」

お前! 哭士に何をした!」

少女が敏捷びんしょうに色把へと向かってくる。振り上げた腕の先には、光る刃物。

状況が飲み込めない色把が身構える余裕も無かった。

色把の顔に、刃物の影が重なる。

と、目の前を大きな物が遮る。少女の姿は、遮った影で見えなくなった。

「何をする！！」

激昂げきこうした少女の声。ジャリ、ジャリ、と砂利を踏む音で、二つの力が拮抗きうかうしているのが分かる。

色把が見上げると、振り上げた少女の腕を、間に入った男性が掴んでいたところだった。

「貴方の目論見もくろみは失敗しました。この方を手にかけるのは過誤かじというものです」

物静かな声だった。少女に言い聞かせるように語る男。少女の刃物をもつ手が、男の手を振り払おうと震えている。

「一旦、退きましよう。それが、賢明です」

少女は、逡巡しゆんしゆんの様子を見せたが、男の言葉に少女の力が抜ける。

色把を睨みんで、少女は踵かかとを返し、姿を消した。

瞳目どうもくしている色把に、男性は向き直った。

「申し訳ありません。やむを得ず、彼の動きを一時封じさせてもらいました。今、一人では歩行すら困難な状態です。彼を………哭土を、助けてあげて下さい」

物静かな言葉遣い。逆光で顔を見ることは出来なかった。色把にそう言い残し、男性も少女の後を追って消えた。

二人が消え去った後、哭土に駆け寄る。

息が荒い。そして不規則だ。相当な体力を消耗しているようだった。助けを呼ぼうにも、山道を抜けてきたこの屋敷の周りに、都合よく人が通るとは思えない。屋敷から出れば、またあの影が襲ってきて助けを呼ぶ前に自分が斃たおれてしまいかもしれない。

おろおろと哭土の身体に手をかけると、燃えるように熱かった。と、その時、哭土の腕がゆるゆると伸び、色把の手を掴んだ。

「け……いたい、菊塵……に」

うつ伏せになっている哭土の身体の下から、黒い携帯電話が見えた。何とか電波が通じている。

アドレス帳に菊塵の名を見つけ、即座に通話ボタンを押した。菊塵が電話に出てから、必死に電話口を指で叩く。哭土の声がない通話の状態から、色把が電話口に居るのだとすぐに察知した菊塵。

何かあったのだと感じ取り、哭土の携帯の所在地から、菊塵がすぐその場に駆けつけた。

## 1 12・哭土の祖父

菊塵が手配した車で、色把は早池峰家はやちねに戻ってきた。

現在、色把の目の前には白髪の老人が座っている。早池峰修造はやちねしゅうぞう、哭土の祖父である。昨晚、色把が屋敷を抜け出してから、入れ違いに主が戻ってきていたようだ。マキが製薬会社の会長と言っていた、やはり哭土と似ている、七十歳とは思えないまっすぐな背筋、眼光は鋭く、迫力がある。修造は枯れ木のような手を組み、色把を見つめている。修造の隣には菊塵が着席し、色把の話す言葉を、唇を讀んで修造に伝えている。

「よく、いらして下さった」

そう言つて修造は色把に頭を下げた。とんでもない、と色把はかぶりを振る。

「私が勝手な事をしたばかりに、哭土さんが怪我を……」  
項垂うなだれる色把。

「儂わしが其方そなたを護るよう命じたのだ。命に替えても命令を遂行するのが哭土の役目、お氣になされるな」

修造は静かな口調で答えた。しかし、自分の我侷わがままであるような事態になったことには変わりはない、そう話そうとしたところで、さすが菊塵に昨日あった事を話すように促された。

タイミングを逃した色把は、昨晚の出来事を順に話していった。

「へえ、哭土がねえ」

色把の説明が終わると、哭土が自らの意思で色把を屋敷に連れて行ったという思いもよらない行動に、菊塵は僅かながら驚きの表情を見せた。黙つて色把の話に耳を傾けていた修造は、徐に口を開いた。

「お婆様の突然の落命、さぞかし無念であろう。しばらくの間は落

ち着かれるまで、拙宅せったくに居られればよい。其方は、かつてわが早池峰家の友禅ゆうぜんとの婚約者であったからの」

哭士たちが、何故閉じ込められていた自分を救いに来たかも、これではよく合点した。

修造は初めに見た印象とは違い、優しい話し方だった。祖母が居なくなってしまうたあの家に戻るのは気が引けた。図々しいとは分かってはいたが、色把は修造の申し出に、素直に甘える事にした。

と、そこへ、白衣を着た男性が静かに部屋に入ってきた。

「今、よろしいですか？」

哭士を診ていた医者だ。白い肌が印象的で、髪を後ろで一つに束ねている。人が良さそうだと、と人目見て色把はそう思った。

「ああ、この方は、桐生きりゅうさん。狗鬼に詳しいお医者さんです」

菊塵が桐生と色把をそれぞれ紹介する。修造に促されると、ニコニコしながら、入り口近くに桐生は腰掛けた。

「お孫さんの容態について、ご報告をと思ひまして」

「それで、哭士は？」

「昨日の困憊こんばい状態については、いつもの契約失敗によるものですね。過去に数回あった籠女との契約失敗時と同じ症状でしたから」

「契約の、失敗？」

「契約は、狗鬼と籠女の両者が額ひたいと額を接触させて成立となる。通常であれば、互いの身体に文様のような印が発生して完了するのだが、哭士の場合、何故か籠女と契約を結ぼうとすると、拒絶の反応が起きる。原因は今も不明のままだ」

なるほど、昨日の哭士のあの状態は、拒絶反応が起きた後だった、というわけだ。



「いつもなら、数時間後には何事も無かったかのように回復しているはずでは？」

「哭土君曰く、今回は契約前に、酷い眩暈が襲ってきたとの事です。直前に、耳に水が掛かったとか」

「水、ですか。特に関係のないように思えますが」

「いえいえ、人間の耳の奥に、三半規管という器官があつてですね、そこに水が溜まると、酷い眩暈が起きるのですよ。まさに、今の彼はその眩暈の状態が後遺している状態です。流石に身体の強い狗鬼でも、器官そのものをやられてしまつては、どうにもなりませんからね。」

「昨晚、自分を少女から庇つた男性が言っていた。「彼の動きを一時封じさせてもらった」と。その事を思い出し、菊塵に話した。」

「その男性が、哭土を人為に動けなくさせた、という事が。待て、水……？」

「特殊な力をもつ狗鬼なら、可能でしょうね」

「桐生は、のんびりとした口調で語る。菊塵は、またもや静かに考え事をしている。」

「兎に角、哭土君の回復力は並大抵の物ではないので、数日で通常通りになるでしょう。勿論、命に別状はありません。では、私はこれ」

「どうも、有難う御座いました」

菊塵と、修造が桐生に頭を下げる。色把も慌てて頭を下げた。

桐生が立ち上がり、部屋を出て行った。修造も桐生の後に続く。

「ご自宅と思つて、お過ごし下さい。儂は哭土を見て参る」

修造は色把に語りかけると、静かに襖が閉まつた。

未だに天井が定まらない。身体は横たえられているはずなのに、家全体が揺れているようだ。

(……来る)

身体は本調子でなくても、刷り込まれている習性はそうそう無くなるものではない。幼い頃から感じていた威圧感が近づいてくる。哭土は、無理矢理に身体を起こし、布団から移動する。近づいてくる気配の方向に身体を向け、黙座もくざした。

静かに襖の開く音、進んでくる足音。顔を上げなくても分かる。

あの男だ。

「……哭土」

老人の声が哭土の頭にふりかかる。祖父、早池峰修造の声に哭土の身体は萎縮いしゆくする。

体中の筋肉が収縮し、体が石のように動かなくなる。

「祖父様おぢさま……」

ようやく搾り出すように出た言葉。既に哭土の手の平からは、じわりと嫌な汗がにじんでいる。

「貴様、早池峰家の血を引いておりながらその有様、情けないと思わぬのか。あまつさえ、息女に怪我までも負わせおって」

色把にかけた声とは明らかに違う、厳格げんかくな声色だった。

「申し訳……ごさいません」

どんどん滲み出てくる嫌な汗を手のひらで握り締めた。大柄だとしても、所詮自分より身体の小さな老人である。

だが、哭土にとっては、この世の何よりもこの人物が恐ろしいのだ。傍から見れば、それは異常な様であっただろう。修造の前で正

座している哭士の顔は緊張で歪み、額から脂汗が流れ落ちている。

息を上手く吸えない。いつも、この人物の目の前から逃げ出した  
い衝動に駆られるのだ。

「比良野家の息女は、しばし自邸じついでで過ごす事になる。命に替えても、  
護まもれ。良いな」

「……畏かしこまりました」

駄目なのだ、何故かこの男には抗えない。声を振り絞り、祖父の  
命令を受け入れると、哭士は頭を下げた。

菊塵と色把は、部屋に二人きりになった。

「すいませんでした、お婆様のこと、嘘をつくような形になってしまつて」

菊塵が切り出す。色把は、その言葉に頭を振つた。祖母の死を隠してくれていた事について、彼らが自分を案じてくれていたのだという事が分かつたからである。

早池峰家に来た当初に抱いていた不信感は、色把の中から消えつつあつた。

色把は、自分の身の回りで起きた事を、少しでも理解できるようになりたかつた。

『あの』

「はい」

『教えてもらえませんか？ 昨日、私を襲つた、影のこと……。そして、哭土さんや、私自身の事を』

色把の目には、この屋敷に来た当初とは違い、強い意志が感じられた。

「そうですね、今の貴方にでしたら、お話しても大丈夫そうです。それから、哭土のことは呼び捨てで構いませんよ。同年代みたいですしね」

柔らかい笑みを浮かべた後に、ゆっくりと息を吐きながら、菊塵は語り出した。狗鬼・籠女・影鬼について、一つ一つ、かみ砕きながら。

「……よつて、昨日、貴方と同じ姿をした少女は、狗鬼である哭土と契約を結ぼうとした。ただ、哭土が狗鬼としては特異とくいであることを知らなかつた為、近くに居た貴方に原因があると勘違いをし、襲

い掛かつてきた、こんなところでしよう。兎にも角にも、今は情報を集めませんと、これ以上は何も言えません」

昨日の少女の事については、菊塵から詳しく語られる事はなかった。

「まずは、籠女としての立ち居を、この家で自分の物にして下さい。それが、貴方を護る哭士の為にもなります」

色把は頷く。

「貴方を付け狙う者は二種類。まず、昨日の影鬼。影鬼は、籠女の血の匂いをかぎつけると、暗闇から発生します。ですので、屋敷外を歩く時は、僅かな怪我也注意して下さい。狗鬼と共に行動するのであれば狗鬼は影鬼を遠ざけるので、まあ心配は要りません。そしてもう一つの脅威。貴方をさらった保守派の連中。恐らく、今は貴方を必死になつて探しているはずですよ。屋敷を出るな、とは言いませんが、あまり屋敷を離れるのは、こちらとしては好ましくありませんね。出来れば、哭士を連れて歩いてもらえれば助かります。とりあえず、普段気をつけて頂きたいのはこの位ですかね」

『保守派、というの？』

今まで何度か会話に上がっていた。色把は何のことだか分からなかったのだ。

「狗鬼と籠女一族の中には、大きく分けて二つの派閥があります。貴方をさらった保守派、そしてもう一つが革新派。そうですね、狗鬼の行方を巡つた思想が枝分かれして、今の二つの派閥があると考えていただければ良いかと。保守派は、古のしきたりを守ろうとする者達。革新派は、狗鬼の新たな可能性を追求しようとする者達。思想の対立が激しく、抗争もしばしばです」

『お互い、歩み寄る事は出来ないんでしょうか？』

争いごとを見るたび、色把はそう思う。彼女自身が、あまり争いごとを好まない為か、何故このような事になっているのか、飲み

込み辛い。

「所詮、人間の考えの違いで発生しているものですから。それぞれの派閥の大元が和解を申し立てている形だけは取っていますが、各々の全体の統制が取れていないのが現状です。時たま、一部の単独行動が発端で抗争を繰り返し、折り合いが付かない、と、こういうわけですね」

困ったように肩をすくめる菊塵。

『貴方達は、革新派なんですか？』

「そうですね、革新派に属する、と受け取ってもらって結構です」  
次から次へと発生する自分の知らない世界に圧倒される色把。もう戻れない、足を踏み入れてしまったのだ。だが、急激に訪れた日常の変化に、色把は徐々に変わり始めていた。

『狗鬼が契約を結べないと、不都合なことがあるんですか？』

先ほどの哭土の話から、ふと疑問に思ったことを聞いてみた。色把の質問に菊塵は、少し悲しげな表情を浮かべた気がした。

「狗鬼の役目というのは籠女を影鬼から護る事。よって、契約を結ぶ事が、まずはその存在意義を明らかにする証明になるわけですね。籠女を護ると誓い、額同士を合わせる。これによって、狗鬼の体内の「ある」制約が解除されるわけです」

メガネを押し上げる菊塵。

『ある制約というのは？』

「寿命です」

冷静な菊塵の声。

「十八年間、一度も籠女を護る、と証明しなかった狗鬼は、十八歳の生誕の日に命を落とします」

『……………』

やけに、大きく耳に響いた。息を呑む色把。

「昔は、籠女が少なく、制約があることを知らない狗鬼もいましたから、命を落とす狗鬼が多く居ました。ですが今は原因も分かっている為、幼少時に一族の計らいで、順当な年頃の籠女とで制約を外すだけの仮契約が行われるんです。契約は結び直しが可能ですからね。実際僕もそれで、七歳の時に制約を外しました。ところが哭士は、結ばないのではなく、結べない。あらゆる籠女を呼び試みましたが、すべて失敗しています」

空気が静まり返る。自分の命の終わり所を嫌でも知っている哭士は、どうやって自分を保っているのだろうか。

「狗鬼はかなり昔から存在していたと分かっています。長い狗鬼の歴史の中で、契約を結べない狗鬼は居なかった。だから、何故哭士だけが契約が結べないのか、原因は誰にも分かりません。哭士本人は、寿命を受け入れている素振りこそしていますが……あれでも十七歳だ、達観するにはまだ若すぎる」

首を軽く振る菊塵の言葉に、笑わない哭士の顔が頭をよぎる。色把は両の手を握った。

「哭士は幼い頃、契約が結べないことが本家に知れた事で、酷い迫害を受けたようです。それ以後、自身からあまり狗鬼について知ろうとはしなくなりました。他の狗鬼に比べ、自身の能力に対し、あまり知識が無いのです。貴女の護衛を任せたのも、籠女を知る事で何か契約ができる切欠になればと、そう考えたのです」

『……………』

色把が黙り込む。

「……私でも、駄目でしょうか？」

眼鏡の奥の菊塵の瞳が色把を捉えた。

「私も籠女なら、試す事が出来るはずですよ？ 私にも一度、彼と契約をさせて貰えませんか？」

真っ直ぐ菊塵を見つめる。自分を救ってくれたのだ。僅かでも可能性があるなら、賭けてみたかった。

「実は、僕からお願いをしようと思っていた所です。哭土の時折見せる貴方への態度から、もしかしたら、とそう感じたものでゆっくりと一つ頷く菊塵。

「ですが、正直驚きました。籠女として目覚めたばかりの貴方がここまで仰ってくれるとは。……僕からも是非、お願いします」

菊塵は、改まり色把に頭を下げた。



## 1 15 ・招かれざる客

「旦那様ア？ 旦那様ア！！」

ぴりぴりとした空間に水を差すように、遠くの方からマキの声が聞こえた。修造じゆうぞうを呼んでいる。

祖父が哭土きつちから視線を外す。僅かに緩まった空気に、哭土きつちの緊縮きんしゆくした姿勢から少し力が抜ける。何かと外に意識が向く。バタバタと騒がしい足音が近づき、廊下側の障子が開いた。マキが顔を覗かせる。

「ああ良かった！ こちらにいらっしやいましたか！」

だいぶ屋敷内を走り回っていたようだ。若干息が上がっている。

「そんなに慌てて、何事だ」

マキの勢いに、修造も呆気にと取られているようだ。修造の問いに、落ち着きを取り戻したマキは、急に渋い顔になり、唇を尖らせた。

「克彦かつひこさんが、まーたいいらっしやいましたア」

不服そうな表情のマキ。克彦かつひこといのは、哭土きつちの父親の弟、つまり哭土きつちの叔父にあたる。烏沼かひすぬま克彦かつひこ、哭土きつちの父は婿養子だった為、苗字が異なる。

「そんなに、嫌そうになさなくても良いんじゃないですか？」

無遠慮な男の声がする。マキは「げっ」とあからさまに嫌そうな顔を見ると、後はお任せしますとばかりに、その場を去った。こういう時だけ去り際が早い。

マキが開けっ放しで去った障子から、四十代前半の男が現れた。痩せぎすで顔色は悪い。目つきだけは妙に爛々としていて、口元には不敵な笑みを浮かべている。そして目を引くのは左頬、火傷のよくな痕が付いているので、一目見て、まず良い印象は抱かない。マキが嫌がるのは外見もさることながら、それに比例した粘着質な性格による。

「お情けを、戴きに参りました」

含んだ笑いを見せ、修造に向き直る。

「先週も渡したはずだがな」

無然とした態度で克彦に言い放つが、本人は平然としている。

「あれっきりの金額で足りるとお思いで？ こっちは十七年も苦しんでいるんですよ？ 大事な兄と、義姉を同時に失い、おまけに顔には、こんな大きな傷まで付けられてねえ。そこに座ってる野郎にね」

じろりと哭土に視線を投げかける克彦。哭土は克彦を見ようともしない。金をせびるいつもの手口だった。

「今でも鮮明に覚えていますよ、待望の甥が生まれると聞いて飛んで来てみれば、産声を上げている化け物の近くに、長年連れ添った兄貴と、大層優しかった兄貴の妻の、冷たくなっている様が。生みの親を殺すだけでは飽きたらず、そこにいる化け物は俺にまで牙を……！ この恐怖は、一生かけてでも消えるものではない、そうでしょう？」

薄笑いを浮かべ、自身の左頬を撫でる克彦。この男が本心で哭土の両親の死を悼んでいない事、金をせびる為だけにやってきている事くらい哭土にも分かる。だが、自分に記憶がなくとも、両親をこの手で殺してしまったという事実は、変えることは出来ない。じつと哭土はネチネチとした克彦の言葉に耐えるしかなかった。

「おお、怖ろしい。その両目に睨まれると、体中の血が……凍りつくようだ」

プツン、と頭の奥で何かが切れる音がした。全身の血が沸き立ち、目の前の克彦しか見えなくなる。意識が克彦の頸部に集中する。

「よさんか！ 哭土……！」

克彦に襲いかかるうとした気配を察したのだらう。峻厳な修造の

声が哭士を諫める。修造の声に、ハツと我に返り、体の力を抜く。気は治まらないが、修造の前では仕方がない。

「おいおい、こんな傷を付けておいて、まだ足りないってのか？」  
部屋の空気がピリピリとした緊張感に包まれる。

「やあ、克彦さん、いらしてたんですか」

その場の雰囲気似つかわしくない声が響く。部屋にいる全ての者が声に戻ると、うそ臭い笑顔を浮かべて、その場に菊塵が立っていた。その後ろには、目に涙をいっぱい溜めた色把が立ち尽くしていた。

「今月の分、足りませんでしたか？ いやあ、すいませんね……相談はあちらで致しましょう」

足早に克彦の隣に並ぶと、すぐさま部屋から克彦を連れ出そうとする菊塵。が、克彦は菊塵の背後に立っていた色把に目が行っている。

「その女は何だ？」

色把の頭の方からつま先まで、じろりと睨めつける。色把は肩を竦めた。

「一時、こちらで保護している女性です」

「……とか言って、哭士の女じゃないのか？ やる事だけはしっかりやるんだな」

ぶつぶつと因縁をつけている克彦をさらりと受け流しながら、菊塵は別室へと隔離した。

「彼奴には何を言われようと手を出してはならぬ」

克彦が部屋を去ったのを見届けると、厳しい口調で哭士を戒め、老人も部屋を後にした。同時に、色把は哭士に駆け寄った。

「……………」

緊張で押さえ込んでいた眩暈めまいが、再び襲い掛かってくる。色把は哭土の背中に手を回した。

「聞いていたのか」

色把は申し訳なさそうに唇を噛み、首を縦に振る。

「畜生が……」

むかむかと自分への叱責の念が、腹の底からこみ上げてくる。なんと情けない。

怒りに身を任せ、嘔りながら哭土は自らの拳を畳に叩き付けた。本調子でない身体から絞り出した力は、やはり負担が大きかった。哭土はその場に昏倒こんとうしてしまった。

左腕に、くすぐったい感じを覚えて、現実引き戻された。

うつすら目を開けると、傍らに色把が座り込んでいた。自分の近くで一生懸命何か作業を行っているようだった。

「何をしてる」

哭士の目が覚めた事に気づかなかつたらしい、声をかけた瞬間、びくりと一瞬身を震わせた。色把の手からは、細い鉄の棒のようなものが落ち、か細く軽い音を立てた。

落ちたものに視線を下げてみると、それはピンセットと脱脂綿<sup>だっしめん</sup>。

色把は自分が眠り込んでいる間に、左腕を手当てしようとしていたらしい。寝間着の袖で傷が隠れていたのだが、畳を殴りつけたときに見えてしまったのだらう。

自分が横になっている部屋は、先ほどの部屋とは異なっていた。

床に拳をたたきつけた瞬間、畳が跳ね上り、底板が抜けていたのを覚えている。恐らく昏倒した自分はそのまま別室に運ばれたのだらう。横になつている状態で色把を見上げた。

「すぐに治ると言っただらう」

色把の手を払おうと、力を込めたが、色把は哭士の腕を離さない。がっしりと掴んだまま、ふるふると頭を振った。実際、影鬼と戦つて負った腕の傷は未だに表面が引き攣<sup>つ</sup>れて痛々しいものであった。

自分の所為で怪我を負わせてしまったと責任を感じた色把は自分なりにどうにかしようと思っただらう。哭士の片腕の力に必死にしがみ付いてくる所を見ると手当てを中止する気が無いらしい。

このまま力づくで腕を振り払ってしまっても良かったが、後が面

倒そつだ。

哭士の腕を逃さんと両手で掴んでいる色把の顔が、もう一押しすれば泣きそうな表情だったからである。自由に動けない今の状態で、目の前でさめざめと泣かれてしまうと、非常に扱いに困る。

哭士は諦めた様子で腕の力を抜き、左腕を任せた。治療を続ける事を許可された色把は、安心した様子の表情を浮かべ、落としたピンセットを拾い、作業を続けた。仕方無しに、哭士は自分の左腕の様子を見守った。

「…………お前、不器用だな」

「……！」

普段から思ったことを殆ど喋らない哭士であったが、色把のあまりの様子に思わずぼろりと口に出してしまった。傷口を消毒するまでは良かった。だが、腕に布を当て、包帯を巻いていくと、同じところに何度も巻いたり、肝心なところに包帯が当たっていないかったりと、巻き終わってみると散々な状態なのである。おまけに包帯を結びつける時に、蝶結びを失敗し、幾重もの固結びになっている。

哭士のこの上ない直接的な言葉にショックを受けたのか、しょんぼりと肩を落とす色把。

申し訳なさそうに、ボコボコに巻かれた哭士の包帯を見る色把。やはり、これは酷すぎる。

色把は包帯だけでも取ろうと手を伸ばした。だが、固結びに手間取り、なかなか包帯が解けない。

「…………これいい」

哭士は左腕を色把の手から遠ざけた。意外な反応にきよんとした表情を浮かべる色把。

「お前、何故こんなことを」

色把の行動を不思議に思い、哭士は問う。良家の長女だ。怪我の手当てなど、したことが無かったはずだ。

『身勝手だとは思いますが……お礼が、したかったです』

「礼だと」

『あの時、影鬼にやられそうになったときに助けくれた事。お婆様が亡くなっていたのを隠してしてくれた事、家へ連れて行ってくれたこと』

「……お前、馬鹿正直にも程があるぞ。俺は命令されたからお前を助けたまでだ」

『いいんです。命令だって。でも、貴方は命令されていなくても、私を家まで連れて行ってくれました』

「……」

色把の言葉に、哭士は黙り込んだ。不貞腐れる、というよりは、何と返していいのか分からないといった様子であった。

二人の居る部屋が静まり返った。

『……一つ、いいですか』

「何だ」

『私に、『契約』をさせてもらえませんか』

色把が言い放った瞬間、哭士の表情が強張る。

「……菊塵か」

常日頃から、哭士の制約を解除しようとしている菊塵である。籠女である色把に隠しておく訳は無い。

「余計な事を……」

舌打ちをする哭士。

『昨日の、貴方の様子から、気になって聞いてしまいました……ごめんなさい』

困った顔をして肩を縮める色把。

「昨日も見ただろう。契約をしくじると、いつもあなる。どうせ同じだ。部屋に戻れ」

拒絶する哭士の言葉に色把は首を振る。

『少しでも、可能性があるのなら、やってみたいんです……お願いします』

色把の言葉に、乾いた笑いを浮かべる哭士。

「俺は、お前を守れと命令されただけのただの護衛だ。何故、そこまで固執する」

哭士の言葉に、色把は口を噤んだ。確かに哭士の言う通りなのだが、初めて哭士を見たときに感じた、あの妙な感覚。哭士に対し、ただ偶然に知り合った人間には持ちえない思いが、一言では言い表せない感情として渦巻いている。

この目の前の人物は、強さと脆さが拮抗きうかうしている。いつか崩れてしまうような、そんな危機感を色把はなんとなく感じていた。だが、



そんな漠然とした感情を明確に言葉で表すことなど出来るわけも無い。

『でも、まだ諦めるのは早いと思うんです。十八歳までにはまだ時間が……お願いします。貴方を助けたいんです』

色把はから出てきた言葉は、言いたい事を半分も表せない言葉だった。

「……………」

黙り込む哭士。数秒、考えをめぐらせたような素振りを見せ、口を開いた。

「……………理解できんな」

「私は……………」

色把の言葉を、哭士が遮る。表情は先程にも増し、苛立っている。「随分と分かったような口を利く。……………まあいい、昨夜のあの女も、俺と契約を結ぼうとして失敗している。多分、無理だとは思うがな」  
言い終わるか終わらないかのうち、哭士は布団から上半身を起さず。急な行動に驚いている色把の頭に哭士が手を添え、額と額を重ね合わせた。

額が触れ合った瞬間、苦しそうなうめき声を漏らす哭士。弾かれたようにすぐさま額を離すと、獣のような唸り声を発し、身体を屈め蹲る。

契約は、失敗だった。

哭士には相当の負荷が掛かったらしい。

色把の手前、痛みを表に出さぬよう堪えているのだろうが、頭を抱えている両手は力がこもり、震えていた。

色把は哭士の身体に手を回すも、その手は哭士の腕によって強く振り払われた。肩で息をし、必死に平静を保ちながら哭士は色把に言い放つ。

「……これで気が済んだか……俺には、契約を結べる籠女なんてのは居ない。余計な詮索なんかするな。分かったなら出て行け」

息も絶え絶え、苦しげに頭を抱えている哭士。

「……………」

哭士の様子を、黙って見つめていた色把だったが、立ち上がり、そのまま哭士の居る部屋を出た。

廊下には誰もいない。

少し進んでから、空いている和室に入り、襖を閉めると、そのまま襖を背に、しゃがみこむ。

（哭士の時折見せる貴方への態度から、もしかしたら、とそう感じただもので）

菊塵の言葉がぐるぐると色把の頭の中を巡る。その気になっていた。哭士の制約を自分がかどうかできるかもしれない、と。

（なんて……おこがましいの）

自分に対する嫌悪に涙が溢れる、色把は息を詰まらせてその場に蹲ひずくまった。

色把が出て行った先を見送った。気配が遠ざかるのと同時に、大きく息を吐き出した。

頭が締め付けられるように痛い。体の自由が失われ、全身を疲労にも似た倦怠感が包み込む。力が入らない。起こしていた上半身は支えきれずに、ばさりと布団へ倒れこんだ。

身体が契約を拒むといつもこうなる。

### 狗鬼の出来損ないめ

かつて本家に住まう狗鬼の一族がやってきた時に、哭土に放った言葉がこれだった。契約を仕損じる度、哭土の脳裏にこの言葉が浮かんでくる。

早池峰の家に生まれる狗鬼は、強大な力を持つ。それ故に、古来から続いてきた狗鬼達の中でも、早池峰の血を引く狗鬼は特別視されてきた。

哭土が一度として見える事まみの無かった実兄じっけい、早池峰友禅は、早池峰家の長男として、生まれてからすぐに狗鬼一族の本家へと引き移っていったそうだ。

力が高い狗鬼と籠女は、本家へ集められ、幼少時代を過ごす。その中で、能力の高い狗鬼と籠女を引き合わせ、より良い血を残す。実兄も、早池峰家の『血』を残す器として、古から続く狗鬼の『しきたり』に巻き取られていったのだ。

こうして、哭土と友禅との間には、形だけの『兄弟』という関係だけが残り、出会う機会も無く終わるはずであった。

だが、五年前、その兄が行方不明になった事で、哭士の周囲は大きく変わった。

早池峰家の血をどうしても欲しいと、次男の哭士に白羽が立ったのだ。

良い血を持つ籠女と哭士に契約を結ばせ、子を成す。狗鬼・籠女から生まれた子供もまた、狗鬼・籠女どちらかの特性を持ち生まれてくる。どちらが生まれても、良い素質を持って生まれてくる。これが狗鬼一族のやりかただった。

しかし、本家の者達は、哭士が籠女と契約を結ぶ事ができないと知るや否や、哭士に蔑んだまなざしを向け、口々に哭士を貶すのだ。歳が十二を過ぎた位の頃である。大人たちが放つ言葉。十七になつた今でも、数々の言葉達が哭士の脳裏を蝕み続けている。そして、脳内で、ぐるぐると大人たちの暴言が回り、忘れる事のできない記憶が強制的に蘇ってくる。

本当に狗鬼なのか

早池峰家の家に生まれながら……

出来損ないめが

自分より大きな大人達が自分を見下す。

「うるせえ……黙れ……」

大人たちの声は止まない。思わず口に出すも、意味を成さずに哭士の内部をじわじわと蝕む。

そして大人たちの言葉の中に、一際大きな言葉が響き渡る。

契約が出来ぬ狗などいらぬ

こちらを見つめている老婆。不要なものを見つめる目で、一言吐き捨てる。

狗鬼の恥じさらしじゃ、絞め殺してしまえ

上から伸びる様々な手、手、手……。

幼い頃から見続けている悪夢は、こつこつと哭土の内部を侵し、――  
先ずの終焉しゆんを迎える。

貴方を助けたいんです

一瞬にして、大人たちの言葉が消え、心が凪いでいく。声を失った少女が口にした言葉だ。

先ほどもそうであった。感じた事のなかつた心地。飲み込まれそうな自分が急に恐ろしくなって、咄嗟とつさに少女を拒んだ。

不恰好な包帯が目につく。今まで自分にこんな事をした人間などいなかった。

（自分に安堵など、平穩など必要ない。求めてはいけない……望まなければ、失う事はない）

いつしか、そう思うようになっていた。どうせあと僅かで消えてしまう命ならば、命が消える瞬間が分かっているのであれば、この世に未練を残したくは無かつた。何も望まず、何も感じないまま、このつまらない人生に樂に終止符を打てる。

そう、思ったまま、命が燃え尽きてしまえばよかつたのに。

それなのに

自分の前に、あの、少女が現れてしまった。

屋敷は、先ほどの招かれざる来客で妙にざわついているように思えた。何とか落ち着いた色把は自室に戻る為、廊下を進んでいると、珍しく静かに歩いているマキと出会った。

「あら、色把さん、哭士さんの手当てはもうよろしくて？」

先ほどの事を思い出し、胸がずきりと痛む。が、気持ちを押し隠し、色把はマキに頷いた。

マキは色把の唇が読めない為、必然的にマキの問いに、色把が可否どちらかを答える形になる。マキは良く喋る為、特にこの会話方法を不便に感じてはいないようだ。

「それにしても、哭士さんが床を壊すなんて久しぶりだったわねえ」  
床を殴り抜いたあとに失神してしまった哭士を、色把とマキ、そしてまだ屋敷に残っていた桐生きりゅうで別室に運んだ。壊れた床を見ても、「あらあら、お元氣ねえ」で、終わらせてしまうマキもかなりの大物だと色把は感心していた。哭士が人並み以上の力を発揮する事に關しては、マキは驚いていないようだ。

「克彦かつひこつて人、嫌いやアーな感じの人でしょお？ あの人、哭士さんのお父さん、早池峰宗一郎はやいけのむねむねいちろうさんの弟なのよ。でもね、あの方は宗一郎さんとは血が繋がってないんですって！ 早池峰家とは言ってしまうえば他人よ、他人。そんな人が、ウチに因縁つけてお金貰いに来るとんだから、腹立たしいったらありやしないわよ」

マキは一人で憤慨している。なんとも複雑な家庭内部に、少々色把は混乱していた。マキの文句は色把に構わず続く。

「それに哭土さんが、ご両親を殺したなんて、そんなの嘘っぱちですよ。生まれたばかりの赤ちゃんが、そんな事出来るわけありませんもの。私はその時はこちらの屋敷には勤めてなかったんですけどね、きつとお母様は出産後に体調を崩されて、とか、お父様だって別の理由で亡くなったに違いないんだわ。旦那様もなんだってあんな人にお金を払い続けるのかしら」

ぷりぷりと怒っているマキ。と、色把の背後に視線をやり、またもや心底嫌そうな表情を浮かべる。

「色把さん！　ここで立ち話も何なので、お茶でも飲みましょう！　さ、早く！」

突然色把の腕を掴み、いそいそとその場を離れようとするマキ。

「はは、大層嫌われたもんだなあ」

色把の背後には、菊塵を後ろに従えた克彦が立っていた。色把も先ほどの様子を目の当たりにし、あまり関わりたくはなかった。マキなどは、不快感を隠しめせず、口をへの字にして克彦を睨んでいる。

「色把ちゃん……か、いいね、哭土あいつの女にしておくのは勿体無い」  
そろそろと近寄り、色把の肩に手を回す。克彦の身体には煙草のヤニと、酒の臭いが染み付いていて、胸の奥に不快感が広がる。だが、自分がこの男に反抗でもして、また何か問題があれば困る。色把はじつと我慢し、身体を縮こまらせた。

「おっと」

ふいに逆の方向へとそっと肩を引かれる、色把は菊塵の近くに寄せられた。



「色把嬢は、わが一族としても大切な客人ですので、どうかご勘弁を」

「……なんだ、俺は大事な客じゃないってえのか？」

ふてぶてしい笑みで菊塵に食って掛かる克彦。

「いいえ、そう言ったわけではありませんよ。飽きもせず幾度も『石』を探しにいらっしやる克彦様も、大切なお客人です」

「……！」

菊塵が嫌味に言い放った言葉の『石』という単語に、僅かな動揺を見せた。

「……生意気な糞餓鬼が」

「お褒めに預かり光荣です」

「今日はもう帰る。また来るからな！」

急に不機嫌になったかと思うと、克彦はそのまま玄関に向かって消えた。

「すみませんね、びつくりしたでしょう？」

ポンポン、と克彦が触った場所をわざとらしく払う菊塵。

「あの男、何とかならないんですか？ 私はもう、あの人が来るのが嫌で嫌で……！」

克彦が去る最後の最後まで睨んでいたマキが菊塵に訴える。

「もう少し、我慢戴けませんか？ こちらとしても、長期間ただ黙って金銭を渡してきたわけではありませんから」

菊塵の考えは、色把には到底及ぶところではない。マキはまだ克彦に不満を抱いていたようだったが、取り敢えずは納得した様子を見せた。色把とお茶を飲む約束を取りつけ、家政の仕事に戻った。

「どうでした？契約は」

菊塵が色把に問う。その問いに、色把は言葉が詰まる。

「……そうですか。貴女でも、無理でしたか」

菊塵の目は何もかも見透かすような深い色をしている。色把は素直に頷いた。

「ありがとうございます。また、別の道を探してみますよ」

優しく微笑む菊塵。

「さて、邪魔者も帰りましたし、あとは哭士が回復するのを待ちましよう」

邪魔者、とはやはり先ほどの烏沼克彦の事を指している。

『あの人の目的は、お金だけではないのですか？』

先ほどの会話で、『石』という単語が聞こえた。

「ええ、この屋敷内にある、『哭士の一部』を探して、ああして執拗に屋敷にやって来ているのです」

『彼……の』

「まあ、これもまたいずれ」

口元に笑みを浮かべ、色把の先を歩き出した。その後、何度か菊塵に『哭士の一部』について聞いてみたが、はぐらかされ、結局菊塵の口から聞き出すことはできなかった。

## 1 20 ・ 哭土の変化

哭土との契約が失敗してから、二日が経った。色把は哭土が最後に自分に放った「出て行け」という言葉が残り、どうしても哭土が臥している部屋へと立ち入る事はできなかった。

二日間は、マキの家事の手伝いをしたり、屋敷内を歩き回って過ごした、屋敷内は大方の場所は見終えた。が、やはり広い。自分に用意された離れの部屋に戻れなくなり、マキや菊塵に助けてもらったのは一度や二度ではなかった。

「色把さん、三回左折すると元の道に戻るんですよ」

同じところを壁沿いにぐるぐる回っていた色把を菊塵が救済するのはこれで三回目。顔を赤くしながら、菊塵の後ろを歩く色把。

「マキさんもここに来たての頃は良く迷ってましたよ。……たまに今もやってますけど」

マキにもかれこれ二回助けられている。マキは、屋敷で遭難しかけている色把を見つけると、マキの私室になりつつある使用人の部屋に連れて行き、みかんやらお茶やらを出しては部屋で話をする。

「アタシは一度も迷った事ありませんよう」なんて話をしていたのが今になって可笑しい。

「ところで」

菊塵が歩くスピードを緩めた。色把が菊塵に並ぶ。

「ここ二日間、避けてますよね？ 哭土の部屋。まあ、契約が失敗した方も、どんな顔をすればいいのか分からないと思います」

メガネの奥の瞳が、緩やかに笑む。菊塵にはお見通しらしい。

「……もう、五年も前ですかね。貴女の許婚、友禅さんが行方不明になってからすぐ、本家では哭土と貴女を結ばせる計画が持ち上が

っていました」

菊塵の言葉に、色把の思考が停止する。そのような話があったなどと、当の色把は知らなかった。

「貴女と婚約を結ぶかもしれない事が本家に知られてからは、その計画は内々に棄却された。そして、その事を理由に彼を始末しようと考えた。只の狗鬼として生まれていれば、このような事は無かったですね。力が強かったばかりに、早池峰の血を継いで生まれてきたばかりに、理不尽な虐げを受けてしまったのです」

隙や弱みを他人に見せず雄々しいはずの哭士に、脆さを見出しってしまった理由がようやく分かった気がする。

「それからもずっと哭士は祖父の手足となり、文字通り機械のように奔命し続けてきました。哭士は狗鬼からしても桁外れに能力が高い。早池峰の血を持つ者は皆そうです。……今こそ落ち着いてきてはいるものの、僕が出会った十四、五歳頃は、特に暴虐でした。奴の体から血の臭いばかりしていました。本家を忘れようとしたのか、見返そうとしてそうなったのかは分かりません。だが、明らかに違っていたのは、人間らしい感情を一切顕にしていなかった事……ですね」

遠い目をして、菊塵が左手にある大きな庭に目を落とす。

「だけど、貴女が来てから哭士はなんだか違う。祖父の命令に背く事、自身で誰かのために行動するなんて事、奴には無かった。貴女に出会ったことで、何かが変わりつつあるのかもしれない」

色把は黙って聞いていた。

「色把さん、貴女は哭士を恐ろしいと思いますか？」

菊塵の思いもよらない質問に、驚きつつも、色把は頭を振った。

『どうして、そんな事を？』

「あの男、烏沼が言っていたから少しはご存知かと思いますが、哭士は、生まれた時から母親が居ない、勿論、世話をする家政婦はいたけれど、狗鬼の子はやはり人間の子供とは違う。気味悪がつてすぐに辞めてしまう。ああいう性格になったのも、そういった経緯いきみづが一つの要因になったのかもしれない」

色把は、静かに頷いた。

この家にやってきてから、沢山の出来事があった。その出来事の中には常に哭士が居る。

自分を守り屋敷まで伴ってくれた事、傷の手当を許し、僅かながら体を預けてくれた事、契約を仕損なつた哭士の苦しげな表情が、浮かんでは消えていった。

まだ、自身が傷を癒やす事のできる籠女だということ、そつくり受け入れてはいないものの、色把にしてみても、狗鬼である哭士、菊塵達に信頼を置けるようになった。『家』を失つた自分に居場所が出来たのだ。

もつと彼らのことを知りたい、そう思い始めている。

「哭士のこと、気になります？」

考えている事が菊塵に読まれてしまったのか、色把は耳まで真っ赤になり、勢い良く首を横に振る。

菊塵は、冗談ですよ、と悪戯っぽく笑った。

## 1 21・追手の襲来

「見つけた」

安穩あんのんとした声が庭に響いた。色把は声の方向を確かめようときよるきよると辺りを見回している。同じく声を捉とらえた菊塵は、身体に緊張を巡らせ、色把の前に立ちはだかる。

「色把さん、離れないで下さい」

鋭く周囲を見渡す。

「随分探したよー。ビルから居なくなっと思ったたら、こんな所に居たんだけ」

すとん、と音がする。広い庭園の砂地の真ん中に、背の高い一人の男が立っていた。

『あの人……』

色把を比良野家から連れ去った、金髪の男らしい。菊塵は緊張を高め、色把を更に自分に近づけた。

「こんにちは。初めまして」

瞳は蒼く、鼻筋が通っている。凜々しい顔つきに人懐こい表情を浮かべ、金髪の男は菊塵に向き直った。

「お前か、ビルに色把をさらった男というのは」

「ぴんぽーん。」名答

人差し指を立て、にやりと笑う金髪の男。

「俺はユーリ・ヴァルナー。一応、狗鬼ね」

「異邦人の狗鬼いほうじんが居るとは俺も知らなかった。要件は分かっているつもりだが、一応聞いておこうか」

後ろに立っている色把には、菊塵が後ろ手で拳銃を抜き出しているのが見えただろう。色把は、一瞬息を飲んだが黙って様子を見守

っていた。

「さっすが、話が早い。俺ね、その子をつれて帰らないといけなかった、こっちとしても色々大変なワケ。……って言っても、素直に渡しそうなタマじゃないよね、アンタ」

「そう……だな！」

続けざまに二発。銃声が鳴り響く。

『……嘘』

色扱は思わず、口に出した。

銃弾が、ユーリの額・心臓の前で「静止」していた。ユーリの笑みは変わらない。

「へえ、腕いいねアンタ。でも俺に銃は効かない」

静止していた銃弾が足元にポトポトと落ちる。

「狗鬼なら、そうでないといけません」

笑いながら菊塵が拳銃を元の場所に収めた。ユーリは、目を丸くしている色扱を見て、にやりと笑みを浮かべる。

「お？　なんか吃驚<sup>びっくり</sup>しちゃってるね、狗鬼の能力見るの、これが初めてなんかね？」

ユーリは面白げに色扱に語りかける。

「狗鬼にはね、一人に一つ、特別な能力がある。例えば、こんな風に、ね」

砂地から、ユーリは高く飛び上がると、空中に停止した。得意げな表情を浮かべているユーリの身体の下には何も無い。空間が広がっているだけである。

「そんじゃ、本題行ってみようか。お前潰して、その子貰<sup>は</sup>ってくよ  
空中から更に飛び上がり、隼<sup>はやぶさ</sup>のように降下してくる。

「……本来、こういうのは哭士の仕事なんですがね……色把さん、下がって！」

身を小さく屈めると、菊塵は左足をユーリの頭めがけて回し上げる。

「おっと！」

ユーリは落下していた途中から、急に横へと飛びずさる。何も無い空中で、落下の方向を変えるなど、通常ではありえない。そのまま菊塵に足を振り下ろしてくる。

「ね、びっくりした？ 普通の攻撃じゃ、俺に触ることすらできないよ。お前も狗鬼だろ？ 能力、見せてみるよ！」

菊塵は肩を擦ねじらせかわす。後ろに倒れ込み右足を振り上げるが、ユーリはまた空中で方向を変え、当たらない。

「くっ！！！」

廊下の床に背をつけてしまった菊塵。

「隙ありっ！！！」

体勢を立て直す暇も無く、ユーリが拳と共に下降してくる。

菊塵が背中から倒れきると同時に、ユーリもそのまま突っ込む。爆音のような音が響き、木造の床が大破した。周囲に木屑や砂埃が舞い散る。

パラパラと落ちる砂埃が落ち着いてくる。

「……哭士」

菊塵の前には、腕を交差させ、ユーリの拳を受け止めた哭士が立っていた。



「……五月蠅いばつじいから来てみれば」  
そこには、異邦人いほうじんと思しき闖入者ちんにゆうしゃと、相棒の菊塵が争っていた。目的は色把だろうと、容易に想像はつく。二日間の間で、哭士の体はかなり回復しており、菊塵と闖入者の間にも容易に割り込む事ができた。

色把は、というと、起こっている狗鬼同士の戦いが信じられないらしい。目を丸くして、その場に立ち尽くしていた。哭士と目が会つと、困つたような表情を浮かべ、唇を噛みしめた。

「はは、僕では、力不足だったようです」  
諦めたように、菊塵は笑った。

「何、お前？ その子の狗鬼か？」

色把を見、哭士に問うユーリ。答える必要は無いとばかりに、哭士は肩をすくめた。

「ま、いいや。相手が一人増えたところで、俺の目的は変わらない。なあ、アービュータスの社長を攫さらつたのもお前達だろう？ 困るんだよねえ、雇い主が居なくなつちゃうとさあ」

軽い、自信に満ちた口調。いけ好かない男だと哭士は思った。

「じゃ、第二ラウンド、始め！」

軽快な動きで中空へと舞い上がるユーリ。菊塵と戦っている時も、この男は何らかの能力で空へと飛び上がるといのは分かっていた。攻撃をすれば、見えない何かで防がれる。正体を掴めれば、勝機はある。ユーリの能力の正体を見極めようと集中するが、瞬間、見計らったかのように目の前にユーリが降下してくる。

「！」

右半身を後ろに引き、ユーリを交わす。すれ違いざま、左足をユーリの右脇に叩き込む。

「かはっ……………！」

小さく咳き込むユーリ。が、苦しそうな表情は一転する。舌を出してニヤリと笑う。

「……………なんてね」

ユーリに放った哭士の左足には、硬い感触が返ってきている。能力で打撃を防いでいるのだ。

「衝撃がハンパねえ……………すげー力。お前、あのメガネよりは出来そうじゃん？」

「さあな」

自信に満ちているこのようなタイプの人間は単独で行動することが多い。兎に角、単独で色把を攫いに来たのであれば、この男を戦闘不能にするか、逃げられないように手段をとらなくては、保守派の者達に色把の所在がばれてしまう。その為には、この男の能力の正体を見極めるのが先決だった。

高く飛び上がるユーリに続き、地面を強く蹴り上げ、同じ高さにまで飛び上がる。その瞬間、ニツと笑ったユーリは両手を組み、哭士の頭目掛けて振り下ろした。

「……………」

攻撃に気づき哭士は空中で拳を避けるがユーリの腕が肩を掠った瞬間、バランスを崩す。だが哭士はそれを狙っていた。瞬間に自らの足をユーリの足に絡め、引き落とした。思いもよらない行動に、ユーリの目が大きく見開く。

「しまった……………！」

中空でユーリの襟首を掴んだ哭士は、自身の体重ごとユーリを地面に打ち付けた。

庭に敷き詰められていた砂利が、二人が墜落した衝撃で天高く舞

上がった。パラパラと舞い上がった砂利が辺りに降り注ぎ、砂煙さじんが上がっている。

「クッ……」

砂煙が収まると、組み合ったまま落下したはずの二人の鬼は、距離を置き、地面にしゃがみこんでいた。哭土の右頬には、切り傷が一閃している。

「面白いよ。お前」

全身を打ちつけたらしく、苦しげな表情を浮かべてはいるものの、ユーリからは何の緊張感も感じられなかった。軽口を叩ける程の技量はあるらしく、戦闘においても絶対的な落ち着きを見せている。

「……」

頬の傷は浅い。だが、たちまちのうちに、首にまで血が滴ってくる。哭土は袖口で右頬を拭った。

「あーあ、首、狙ったんだけどなあ」

よろりと立ち上がるユーリにあわせ、哭土も立ち上がる。長身の二人が対峙たいじする。

目の端に色把が見える。

ユーリを哭土に任せた菊塵は、戦闘の余波から色把を守るため、傍らに立っている。菊塵の目は、これから行う哭土の行動を理解しているようだった。色把の耳に向けて、菊塵の唇が動く。

哭土は、まだ本気を出していません。けれど遊びはここまでですよ

(菊塵め、好き勝手言いやがって)

先に動いたのは哭士。正面から拳を振りかぶり、ユーリに殴りかかる。案の定、ユーリの体に拳が当たる前に、硬い感触が哭士の拳に返ってくる。

「ハッ、んな攻撃、当たつかよ」

ユーリの言葉に、哭士の口元がすりあがる、笑んでいた。  
「ブラフだ」

次の瞬間、現状は大きく変わっていた。

「お……前！」

目を大きく見開き、ユーリが膝から地面に崩れ落ちた。背中を向けるように、哭士が立っている。

ユーリからすれば、目の前の哭士の姿が消えたように見えたであらう。

「能力、分かった」

哭士の静かな声に反応し、ユーリが顔を上げる。

「お前の能力、『空気を固定』だな。ブロック状の塊を作り、上に立つ。これで、空中に浮いているように見える。生成できるブロックは一つ。ガードする場合は、必然的に範囲は一箇所、そして一面。淡々と哭士が放つ言葉に、ユーリの表情から余裕が消えた。

「……なんで分かった？」

「砂利だ」

「は？」

「さつき巻上げた砂利が、お前の近くで不自然に落ちていった。それで空中に透明な物質があることに気づいた。後は行動パターン。複数生成できるなら、もっと有効な攻撃をしてきていた筈だからな」  
ユーリと哭土が落下した直後に降り注いだ砂利の流れを、哭土は見ていると言っただ。ユーリは信じられないといった表情を浮かべていた。

「一体、何が起きたんですか？」

色柄には、哭土が突如ユーリの背後に移動し、そのユーリが倒れこむ様相しか分からなかった。

「哭土は、彼の能力が一箇所しか使えないことを見抜いたのでしよう。眼前でわざと分かりやすい攻撃を繰り返し出し、能力で防御させた。その後哭土は、神速に彼の背後に回り、ガードされていない背中を攻撃した。目に見えなかったのは、彼も同じでしょう。これが一般の狗鬼と、早池峰の血を持つ狗鬼との違い、だね」

説明を終え、菊塵は哭土と対峙しているユーリに目を落としました。

菊塵の説明と同時に、ユーリはまたしても立ち上がる。

「……ヤバイね。コレ。とてもじゃないけど敵いそうにねえや」

俯き、諦観とも取れる仕草。だが、向き直った面差しのユーリの

両目は、真っ赤に燃え滾っていた。

「でもよ、ここで引き下がるわけにはいかねえんだよ！ その子だ  
けでも貰っていく！」

速い。哭土の脇をすり抜けたユーリは、色把に向かってくる。振りかぶる手は真っ直ぐ自分に進んできている。菊塵が自身の能力を発動させようと、色把の前に立ちふさがる。

「菊塵、必要ない。動くな」

哭土の声に、菊塵が手を緩めた。色把の眼前が、突然真っ白になった。

# 1 23・氷雨

庭に鋭い音が響き渡る。

足元を冷たい風が通り過ぎていく。ゆるゆると瞳を開く。

色把の眼前には真つ白な光景が広がり、哭士も、ユーリの姿も見えなくなった。

『これは……？』

「久しぶりだな。哭士が『力』を使うのは」

傍らに立っている菊塵の言葉で、ようやく現状を把握した。ユーリから色把を守るように二者の間に白い壁がそそり立っていた。

「これが……お前の『力』かよ……」

興奮に戦く<sup>おの</sup>ユーリ。おそろおそろ色把は壁に手を伸ばす。触れた壁は色把の手の体温を奪う。氷の壁だった。壁は、色把の足元の床板を力強く打ち抜き、堅牢<sup>けんろう</sup>に色把を守っていた。

「哭士は、氷を自在に操る。既存の氷を動かす事も、何も無い空間に氷を生み出すことも出来る。滅多に使う事はないけどね」

菊塵は、メガネを押し上げ静かに語る。

「……お前を倒さなきゃ、その子に触れる事さえ出来ない……ってか！」

氷の壁に阻まれ、色把の奪還を阻止されたユーリは、ぴたりと足を止め、哭士へと向き直った。

「お前の能力は分かった。止めておけ」

哭士の制止もユーリには届かない。首を1度だけ横に振ったユーリの目の奥底には、先ほどまでは見えなかった気迫が滲み出している。中空に飛び上がり、ブロックの上に立ち上がったようだ。ユーリは哭士を見下ろし、今にも攻撃を仕掛けてくる構えを見せる。

哭士はさも仕方が無いといった様子で一度深く息を吐き出す。

「!?」

色把に、ポツリと一粒、何かが当たる。落ちた粒を拾い上げると、小さな氷の粒、雹ひょうだった。天気は晴れている。だが、その一粒を皮切りに、周囲に雹が降り注ぎ始めた。

雹は勢いを増し、絶え間なく落下する。空中に静止しているユーリの足元に、氷の塊が積もっていく。

「これで、お前が空中にブロックを生み出しても分かる。もうお前の手は利かない」

「はは……ははは！ 面白れーじゃんか！」

怯むどころか、ユーリは高らかに笑い、その身を翻ひるがえしてきた。大きく見開いたユーリの瞳、碧かった虹彩は赤く染まっている。

一つしか生み出せないブロックを瞬時に生成、消滅させながら、鋭敏に哭士に拳を繰り出す。先程の戦闘とは明らかに素早さも、込める力も違う。ある程度雹の動きでブロックの位置は掴めたが、長い腕を駆使して繰り出してくる攻撃に、思わず哭士もたじろぐ。

「俺の能力、当たり前だよ。ただ、一個違ってる事があったなあ。俺が作れるのは、ブロックだけじゃ無えんだ」

振りかざした手の先端。降り注ぐ雹が不自然に弾き飛ばされる。「刃物か！」

飛び交う雹から目敏く、ユーリの手の先にある形状を判断する。判断が出来たその時、ユーリの片腕は哭士の胸の前で一閃されていた。

「……流石、単身でここまで乗り込むだけの度量はありましたよ。」



ただ、巡り合わせが悪かった、とでも言いましょうか」

にやり、と菊塵が笑いながら言い放った直後だった。

「がっ……!!」

胸に一線が走り、血が飛び散ったのはユーリの方だった。

哭士の胸に傷は無い。信じられない表情を浮かべ、菊塵の顔を凝視する。

「哭士、ごころうさん。終了だ」

菊塵が声をかけると、降り注いでいた雷がぴたりと止んだ。

「僕の能力は攻撃反射、言うなればカウンターってところですかね。哭士に対する攻撃を反射させてもらいました。僕がここに居合わせ、てさえないければ、もっといいところまで行けたかもしれませぬ」  
中指でメガネを押し上げる。

「お前、何で自分が戦っている時に反撃しねえんだよ、チャンスは何回もあつた筈だろ？」

出血を手で押さえているユーリが問う。確かに、ユーリは何度も菊塵に攻撃を放っていた。

「一回でも軽い攻撃を反射してしまえば、お前は警戒して大きな攻撃を放ってこなくなる。そうなれば、僕の攻撃手段がなくなってしまうのと同じ事、でしょう？」

「はは、なーる程ね……完敗、完敗だ」

笑いながら、観念したようにユーリは目を閉じた。

## 1 24 ・本家の使者

ふと哭士が、こちらに近づいてくる気配を感じ取った。

「そこまで！」

女の高い声がある場に響き渡る。同時に、その場に居た狗鬼三人の体の自由が突如として奪われた。

「……………だ！」

体が重い。地面に引きずられるように、哭士、菊塵、ユーリは地面に手を付き、体を支える。

色把は、何も影響を受けていないらしく、目を丸くし、戦おのいていた。近くにいる菊塵に手を伸ばそうとした、その瞬間だった。

「！？」

大きな影が色把を遮り、庭の中心に色把を連れ出した。

重い体を必死に持ち上げると、一人の若い男が、色把を羽交はがい絞じめにしていた。男は派手な髪を短く刈り込み、両耳、鼻、唇には大きなピアスが付いている。色把が身じろぎするたび、男の腰から下げられている金属のアクセサリーがジャラジャラと音を立てる。哭士たちを殺気立った目で睨んでいる男の脇には、ほっそりとした小柄な少女、短いスカート、白いパーカーを羽織っていた。猫を思わせる表情に、髪は顔の横くらいまで切りそろえられ、外はねの髪型に整えられている。

少女は、三人の伏せている狗鬼達を見下ろす。先程の声の主はこの少女のようだ。哭士には覚えの無い人物だった。

「色把……………！」

羽交はがい絞じめにされている色把を見、思わず哭士は彼女の名を呼んだ。だが、色把は怯えた目をして哭士を見つめているのみだった。ピアスの男は哭士を見、挑発的に色把の頬の横に、顔を近づけた。

その様子に、哭士の心中がざわめく。だが、体は依然として鉛にでもなつてしまったかのように動かない。

「喧嘩はここでお仕舞い。さあ、大人しく話を聞きなさい」

少女の声、言葉に、菊塵は驚いた表情を見せる。

「莉子……!!」

菊塵は少女を知っているようだった。菊塵も状況は同じらしく、必死に重い身体を支えている。

「お久しぶりね、菊兄様」

莉子と呼ばれた少女はにこやかに、菊塵に笑顔を向けた。

「早池峰哭士、貴方とは初めてだったわね。私は黒古志 莉子、本家当主を守る狗鬼。今、貴方達の体には、体重の数倍の負荷をかけているわ。下手に動かない事ね」

この少女は、物の質量を自在に操るらしい。哭士、菊塵、ユーリの三人は重力に負けぬよう、食いしぼるのが精一杯であった。

「待てよ！　なんで本家の奴がここに来るんだよ！」

叫ぶユーリに、莉子は一瞥を返す。

「一介の狗鬼が口出しをしないで。私は本家、当主様の命令を受けてここに來ているの。アンタが時間を稼いでいる間に、籠女の少女を手に入れるように……ってね」

左手で胸の出血を押さえているユーリを見下ろす莉子。

「アンタは、籠女の少女を手に入れ、あわよくばアービュータスの社長、結城 啓二を取り返そうと思っっているのでしょうか？　人質に囚われていた、妹の為に？」

フン、と鼻で笑う莉子。ピクリと、ユーリが反応する。

「当主様から聞いていているわ、ユーリ・ヴァルナー。哀れなアンタに一つ教えてあげる」

ユーリの前に立ちはだかる莉子。ユーリは絶え間なく襲い掛かる重力に耐え、莉子に視線を上げた。莉子は邪よこしまな笑みをたたえ、ゆつくりと、大きく口を開いた。

「アンタの妹はもうとつくの昔に死んでるの。比良野の籠女を無事に連れ去れば、人質に取られていた妹を解放して貰えるんだったわよね。焦ったでしょう。社長の結城もろとも、籠女がコイツ等に攫われてしまったんだからね」

淡々《たんたん》と話す莉子に、わなわたとユーリの肩が震える。「救うべき妹はこの世に居ないのだから、アンタが比良野の籠女を連れ去る必要は無いの。籠女はこちらで載って行く。アンタは用済みよ」

莉子の言葉に、ユーリは咆え声を上げる。ユーリの声が、屋敷内の空気を切り裂く。

「出鱈でたらめ目を……言つなアツ！」  
負傷しているのにも関わらず、ユーリは力を振り絞り莉子の前に飛び出した。

「下流の血の狗鬼が、私に勝てるでも思っているの！」  
ユーリを見つめている莉子が目を見開く。

「マズイ！ 止せ！」  
菊塵が叫ぶが、遅かった。

「かつ……！」

ユーリの口から短い息が吐き出される。身体を庇かばう余裕も無く、そのまま胸から地面に墜落した。細い身体が落下したとは思えない、

ズン、という音が響き渡り、地面を重く揺るがす衝撃が、哭土の方にまで伝わってきた。

「身体……が」

体を起き上がらせようとしているが、ユーリの身体は中々動かす事が出来ない様子だった。

「今、アンタの体の負荷を、十倍に上げたわ。無理に動くと肺が潰れるわよ」

言い放つと、また更に莉子はユーリの負荷を増強させたらしい。ユーリは短く唸ると、そのまま気を失ったようだった。

動かなくなつたユーリから目を離し、菊塵、哭土に向き直つた。

その瞬間、哭土と菊塵にかけられていた負荷が解除された。身体が急に軽くなり、哭土は地面から跳ね起きた。

「さ、これで邪魔者は全部大人しくなつた。ここのお爺様も、中々手ごわかつたわ。お陰で服が汚れちゃつた」

そう言いながら、莉子は服に付いた返り血を手で払う。

「まさか貴様……！ 祖父様を！」

感情を顕あらわにする菊塵、目の色がみるみる変わってゆく。狗鬼は高揚すると瞳の色が赤く変わる。菊塵がこのような表情を見せるのは滅多に無い事だ。

「大丈夫よ、早池峰修造は生きてるわ。比良野の籠女の居場所をなかなか吐かないから、つい、ね」

今、少女の注意は菊塵に向いている。とにかく、色把をこちらに引き寄せておかなければならない。哭土は、身を屈め、臨戦態勢に入る。少女の背後の色把を奪取しようと莉子の背後の男に焦点を合わせた。

哭士の動きに気づいた莉子が、一言叫んだ。

「動くな！ 早池峰哭士！」

「……！」

哭士の身体がびくんと大きく波打ち、息が詰まる。

今まで受け続けてきた祖父の言葉のように、哭士の脳へ命令が直撃した。

「うっ……！」

身体が動かない、いや、動けないのだ。

「お爺様を黙らせた時にね、私、こんなも見つけちゃった」

悪戯いたずらっぽい表情を浮かべた少女が前に差し出した右手、人差し指と中指の間に挟まれている小さな石。

「……そいつは……！」

「そうよ。菊兄様。これは狗石いぬせき。狗鬼が生まれながらに持っていて、手にした者は、その狗鬼を自在に操れる石。見ての通り、この狗石は早池峰哭士のものよ、早池峰修造の肩に埋め込まれていたの」

薄笑いを浮かべ、指先で、狗石を玩もてあそぶ莉子。

「……！」

哭士は、莉子の指先から目が離せなかった。祖父の体内にあったという自分の石、目の前の少女の手の内にある。早く取り返さなくては、という本能的な衝動に駆られた。だが、身体がいうことをきかない。

「クソっ……！」

菊塵が舌打ちをした。菊塵が思うまでもなく、現在の状況は明らかに不利だ。

「凄いな。狗石って、自分以外のは初めて見たけど、こんなに効果があるものだとは知らなかった」

二人の様子を見て、ころころと笑う莉子。

「……返して貰うぞ！」

楽しいな莉子に、菊塵が隙を突いて飛び掛った。それに気づいた莉子は、その様子に臆する事無く、石を掲げながら、哭士に言い放つ。

「早池峰哭士、菊兄様を拘束して」

莉子の言葉に体が反応してしまう。空中に飛び上がった菊塵の身体を、哭士は地面に叩き付けた。菊塵の周囲に激しく砂塵が舞う。そのまま菊塵の腕を後ろに回し、ねじり上げた。

「くっ……」

痛みを噛みしめながら、菊塵が声を漏らす。

「てめえ……」

年端のいかない少女に、いよいよに操られている。自尊心が傷つけられた哭士は、ぶるぶると腕が震えている。必死に自分の行動を制御しようとしているが、抗う事は出来なかった。

「こいつに押さえられちゃ、どうしようもない、か……」

菊塵は長年の経験から、哭士の力には敵わない事を知っている。諦観と自嘲めいた笑いを浮かべ、菊塵は大人しくなった。

色扱は、哭士の様子を見、悲痛な表情を浮かべている。必死に、自分を捕らえている男の腕を外そうとしているが、男の腕は微動だにしない。

「べつに、これ以上どうこうしようという訳じゃないから安心して頂戴。大人しく話を聞いて欲しかっただけよ」

組み合っている哭士と菊塵の前に立ちはだかる莉子。

「私は本家の主の命を受けて、籠女の少女の奪還と、本家の意向の伝言を目的に来た。哭士、そのまま菊兄様を押さえていて」

奥歯を噛みしめる哭士の本心とは裏腹に、身体はきつく菊塵の腕を締め上げる。

「まず、比良野家から色把が攫われたのはこの男、ユーリ・ヴァルナーが属する保守派の一部の人間の行動が発端ね。その後は貴方達革新派により、早池峰家への拉致。これはちよつと穏やかじゃない。だから、狗鬼・籠女を統べる本家の当主が、彼女を今後どうするべきかを取り決める事になったってワケ」

「本家の奴等……そう来たか……」

菊塵は莉子の言い放つ言葉に、齒軋りをした。

「まずは当主の命令で、比良野家の籠女を本家で保護させて貰うことにした」

後ろに控えている色把を見て、莉子は説明する。

「そして、早池峰哭士。貴方も本家に来てもらう事になるわ」

「何だと」

哭士の表情が強張る。数年前に、自分を放棄した本家の者たち。

自分に罵声を浴びせ、手につけようとした者達の言葉が今も焼き付いている。その本家が、今になって何故自分を要するというのだろう。

「本家の当主が数年前に変わったのはご存知？ その当主は、貴方に興味を持ってしているわ。比良野の息女を連れてくると同時に、貴方も本家へ招待するように。そう言われてここに来たの」

哭士の心境を読み解いたかのように、莉子は説明をした。

「本家の門をくぐれるのは限られた家の狗鬼のみ。曾根越や、そこにいる朱崎の家では駄目。早池峰の姓氏を背負っている貴方しか、本家に入る事は許されない」

「朱崎……？」



ユーリを指して、莉子は朱崎と言いつつ。菊塵は、その事に考  
えをめぐらせているようだ。

「先に、籠女は本家に連れて行くわ。明日、早池峰哭土は本家に来  
る事。これは本家当主の命令。分かった？」

そう問われて、素直に答える哭土ではない。哭土は莉子を睨み付  
けた。

「って、従うわけないよねー。じゃ、交換条件。貴方が明日本家に  
来るまで、この狗石は預かっておくわ。返して欲しかったら来る事、  
じゃねー！」

莉子は後ろの男に目配せをすると、素早い動きで屋敷から去って  
いった。莉子が居なくなつた瞬間に、哭土の身体は呪縛から解き放  
たれたように楽になつた。

「野郎……！」

哭土は、莉子を追おうと、屋敷の堀の上まで追いかけたが、最早  
其処そこに莉子の姿は無かつた。

## 1 25 ・強敵去りて

莉子を見失った哭士は塀から降り立ち、元の場所に帰ると、未だに地面に臥しているユーリの前に菊塵が立ち、見下ろしていた。ユーリの意識が戻ったらしい。

「おい、立てるか？」

「はは……、ちよい、無理かな。骨、バッキバッキみてえ」

体の自由が利かないユーリは、戦闘意欲を無くし、菊塵の質問にも素直に受け答えしている。

「漸く、お前の正体が分かったよ。狗鬼ならず、どこかの家柄に属しているはずだからな」

そう言いながら、菊塵はユーリの目の前にしゃがみこんだ。

「んじゃ、答えを聞こうか」

「さつき、莉子はお前の事を、『朱崎』と呼んでいた。お前のもう一つの名前は『朱崎 龍』。現存する朱崎家一族の中で唯一の狗鬼まさか、その朱崎家の狗鬼が混血児だとは知らなかったが」

「……正解。俺の親父は朱崎家に生まれたけど、狗鬼でも籠女でもなかった。だから、朱崎の家を出て、ドイツ人と結婚した。でも、生まれたのが狗鬼の俺さ。それで両親は離婚。親父は日本人と再婚して、妹を授かった。妹の方も、籠女や狗鬼じゃない。朱崎の家からは狗鬼も籠女も生まれなくなって、もうダメだ、なんて言われてっし、日本名はあんま使わないようにしてたんだけどなあ」

諦めたようにユーリは笑って、菊塵に答えた。

「妹の名は、朱崎 千尋、だったか。……可哀想な事だったな」

「……ああ」

ユーリの目に、憂いの表情が浮かんだ。

「ま、これで俺はあの男、結城に従う理由は無くなったわけだ。結城は、どうしてる？」

アービュータスの社長の行方については、哭土も知らなかった。

「こちらで捕らえた後は、別の場所で尋問を受けているよ。保守派の一員だからな。出せる情報は全部引き出すつもりだ。殆ど拷問に近い。生きて出ては来ないかもしれない」

「……そっか」

フ、と笑うユーリ。

「ところでさ、何で、本家の狗鬼がお前の事知ってるの？ しかも兄様って」

「ああ、彼女は僕の『元』同僚」

「本家の人間と働いてたのかよ」

「莉子は、元は本家の人間じゃない。才能を買われ、本家の養子になったんだ。無名の狗鬼の家から、あれだけの力を持つ子が生まれるのは中々いない。莉子は以前から、血統に異常にこだわるどころがあつたからな。所でお前……」

菊塵が再度口を開きかけた、その時だった。

「ここにいましたか！」

桐生だ。走ってきたのだろう。息が切れている。

「マキさんから連絡が入ったもので……。修造さんの手当てをしてくきました」

「じじいは、どうなんだ？」

莉子の服に付いていた返り血は大量ではなかったものの、安否を確認したわけではない。哭士が桐生に問いただした。

「修造さんは肩から出血をして、廊下に倒れていました。マキさんが適切に止血をしてくれたお陰で命に別状はありません。ただ、年齢も年齢ですし、肩の肉が抉えぐられているので、僕の診療所に運んで処置をしています」

「……そうですか」

えも言われぬ表情を浮かべ、菊塵が頷いた。

「ところで、そこに横になっっているのは、狗鬼なのかな？」

桐生が目敏めんく、庭に倒れているユーリを見つめる。ひよい、と菊塵の背後を覗き見た。

「ああ、朱崎家の狗鬼です。本家の狗鬼と戦って、負傷しています」  
「そっかそっか」

桐生は白衣の袖をまくりながらユーリに近づいていく。

「わあ、大分やられたね、君。ちよつと、失礼」

「ちよつと……お前一体何なん……いーででででで！」  
腕をひよいと持ち上げられたユーリが絶叫する。

「ホラホラ、狗鬼は体が丈夫なんだから、大丈夫、大丈夫」

心から絶叫しているユーリに対し、桐生は非常に楽しそうだ。

「わ、流石、本家の狗鬼はすごいなあ。尺骨しゃくこつはボロボロだね。あーあ、肋骨ろっこつも大分酷いかもなあ。狗鬼の体をここまで出来るなんて、相当だよ」

ユーリが怪我で反撃できないのを良いことに、あちこち体を捻ひねり回す桐生。

「あーだだだだ！　ちよっ……！　ちよっ！　お前！　見てないで助ける！」

完璧に傍観者に回っている哭士に助けを求めるユーリ。

「無理だ」

桐生にここまで火が付くと、止められないのを哭士は知っている。自分に矛先が行かないように、余計な口出しはしない方が良く、哭士は判断した。

「てめっ……だああああ！」

恨めしげに哭士を睨んだのもつかの間、急に桐生に仰向けにされ、更に絶叫するユーリ。

「ま、こいつは桐生さんに任せておこう。しかし……彼女から目を離したのは不覚だった。まさかこんなにも早く、本家が色把を取り戻しに来るとは……」

色把が攫われた事を悔やむ菊塵。

「……俺が本家から取り返して来れば良いのだろう」

哭士の言葉を聞き、菊塵が目丸くする。

「意外だな、お前が自ら本家に行くなんて言うとは思わなかった」

「別に。本家のやり方が気に入らないだけだ」

「はは、そっかそっか」

菊塵はいつもの表情に笑みを浮かべ、庭から縁側へと歩みを進めた。

「祖父様は、桐生さんの診療所だったな。僕は様子を見てくる」  
菊塵は振り返り哭士にそう言い残すと、屋敷内に消えた。

「いつ……てえええ！」

未だに、庭内ではユーリの絶叫が響き渡っている。必死に桐生から逃れようとしているユーリに対し、ひたすら楽しそうな桐生。ほんの少しだけ不憫に思った哭士は桐生の隣に立った。

「こいつも診療所に運んだらどうなんだ？」

哭士の声に、顔を上げる桐生。

「ああ、ちよつと難しいみたい。骨がボロツボロでね、診療所に運ぶ為に動かすと、骨を接ぐのが難しくなっちゃうの」

「てめっ……！ 散々俺の体を弄くりまくってそれかよ！」

いわずもがな、哭士も同意見だった。

「怪我の現状を把握する為には必要でしたよー。ま、多少は骨がズレちゃったかもしれないけど、気にしない気にしない。少しなら大丈夫ー」

「……」

悪びれも無く言い張る桐生の言葉に、啞然とするユーリの表情。無理も無い。

「君、籠女は居ないの？ この怪我じゃ、僕の診療所まで連れて行けない。契約をした籠女に簡単な治癒<sup>ちゆ</sup>だけして貰えば、こちらで何とかなるんだけど。確か、朱崎家だったよね、君……朱崎家の籠女は……っつ」

そう言っつて、手帳を取り出してユーリの籠女を調べようとしているらしい桐生。

「ちよつ……俺の籠女だけは呼ぶな！ むしろ骨ズレてもいいから病院連れてつてくれよ！ マジで！ うあっ！ イテテ……」

自身の籠女を呼ばれるのが相当嫌らしい。思わず身を起こしてしまい、苦痛に顔を歪めるユーリ。

「ダメダメ、どっちにしろ君は籠女の血で、仮の治癒をしなきゃ動

かせないの。そのくらい酷い怪我なんだから」  
ユーリの意見などは聞くつもりは無いらしい。

「……はぁーん。ナルホドね。大分面白いね、君。今、連絡取ってくるから待ってて」

「なぁ！ シカトか！？ 俺の意見完全無視か！ 待て！ 待てつて！」

ユーリの籠女を突き止めたのか、ほくそ笑む桐生。哭土には何の事か分からず、黙ってその様子を見ていた。桐生はくるりと向きを変え、屋敷の電話を利用して戻っていった。

桐生を引きとめようとして持ち上げていたユーリの手が空しく宙を掻いていた。

遠くから、ドタドタと重い足音が近づいてくる。

「哭土さん！」

足音の主はマキだった。普段の血色の良い顔とは大きく違い、青ざめた顔で哭土を呼び止めた。

「旦那様が、お呼びです」

いつになく真剣な面差しのマキに、哭土は頷き、マキの後に続いた。

## 1 26 ・桐生診療所

早池峰家から僅か五分わずの所に、桐生診療所は建っている。狗鬼狂の桐生が経営する診療所だ。柔らかな物腰と人当たりのいい性格から、近隣の住人からの信頼は厚く、小ぎれいな建物に利用者も多いらしい。

哭士からすれば、桐生は自分を含む狗鬼を興味の対象とし、隙あらば調べつくそうとしてくる気の許せぬ人物であり、その人物が経営している病院であるからして、あまり近づきたくないというのが本音であったのだが。

今は、祖父の修造が莉子の襲撃で負傷し、収容うながされているのだという。

真っ白な廊下をマキの案内で進み、促うながされるまま病室まで歩いている。診療所内に入ってから、哭士は妙な違和感を覚える。祖父の、あの恐ろしい圧力を感じないのだ。

今まで哭士が感じていた祖父に対する畏怖の感情は、莉子しじが持っていたあの石が原因だったと見て間違いは無いらしい。そうなれば、石を取り除かれた祖父から恐怖を感じる事も無くなるわけである。

こんな時、如何どうすればいいのだろう。生まれて十七年間、祖父に對して、恐怖、畏怖、それ以外の感情を持ち合わせたことは無い。気持ちの整理が付かないまま、前を歩いているマキが、ある病室の扉の前で立ち止まった。



「旦那様、哭土さんが到着しました」

マキが入り口から、奥へと呼びかける。

「……哭土」

自分を呼ぶ老人の声に、歩みを止めた。この声は本当に自分の祖父か。やはり、今まで自身に降りかかっていた威圧感が微塵みじんも感じられない。

聞いた事のない、弱弱しいその声の調子に、僅かながら哭土は狼狽ろうたいする。

マキは病室の入り口で止まり、哭土を病室の奥へ進むよう手で促した。

病室に響く、自身のスリッパの音がやけに大きい。

ベッドに近づくにつれ、視界に入ってくる修造の姿。修造の顔が見えたときに、哭土は声を失った。

「……」

病室のベッドには、小さく、弱弱しい老人が一人居るだけだった。今まで自分があればほど大きく見え、怖がっていた『祖父様じじい様』の姿はどこにも無い。顔すらも恐ろしく見ることが出来なかったはずの修造と、今こうして向かい合っている事が、まだ哭土は信じられない。「すまなかつたな、哭土。……マキ、外してくれぬか」

修造は莉子に襲われた左肩に包帯を巻き、上半身を起こしている状態だった。案内をしてきたマキを修造は病室から遠ざけた。哭土は、修造のベッドの脇まで辿り着き、見下ろした。

「何故、俺の狗石を隠していた……？」

祖父の体内に哭土の狗石があった事で、十七年間、今まで哭土は祖父に怯え続けていたのだ。何故祖父が狗石をそこまでして隠して

いたのか、哭士は不思議でならなかった。

問われた老人は、一瞬遠い目をしてから、大きく息を吐き出した。

「お主に、話しておかなければならぬ。儂の体内にお前の石を埋め込んでいた事。まずはお主の母親、早池峰さくらの死について話さねばならぬ……酷こくな話かもしれぬ。心して聞け」

修造は、ここで言葉を一度切り、ゆっくりと話し始めた。

「十七年前の事だった、お主を身ごもっていたさくらは、予定より一ヶ月も早く産気づきおつた。その日は桐生も診療所にはおらず、街から呼ぶ医者も、その日の吹雪で我が屋敷に来る事は出来なかった」

「……………」  
初めて聞く、自分の母の話に、哭士は黙って祖父の声に耳を傾ける。

「屋敷には、さくら、夫の宗一郎そごいちろう、看護師の経験がある使用人の女と、そして、烏沼克彦からすぬまかつひこがおつた」

そう、克彦は、哭士が生まれた瞬間に、立ち会っているのである。「使用人の女と、宗一郎の立会いで、さくらは医者の手助け無しでお前を産んだ。使用人の女の知らせを受け、さくらの元に行こうとした時、奴の……克彦の叫び声が聞こえてきた」

哭士もその先は、克彦本人から何度も聞いている。容易に想像が

出来た。

「部屋内は、すべて氷に覆われておったよ。克彦は左頬に傷を負い、気を失っていた。部屋の中心には、氷像と化したさくらと宗一郎、そしてさくらの腕の中で産声を上げているお主だった。さくらの傍らには、お主が握っているはずの石、狗石が転がり落ちていた」

ここで修造は、大きく息を吐き出した。

「生まれたばかりの狗鬼は、力の御し方を知らぬ。故に手に持つて生まれてくる狗石が力を制御する。母親がその石を赤子から受け取る事で、赤子の狗鬼は安定を手に入れる。だが、お主の場合、何らかの事態があり、さくらが狗石を受け取れなかった」

「まさか、あの男か……」

現場に倒れていたという、烏沼克彦。自分の狗石を狙ったのだと哭土は思った。

「その可能性は大きい。だが、今となっては真実を知る者は克彦一人。奴が口を開くとも思えぬ」

修造はゆっくりと首を振った。

「狗石という制御を失ったお主の能力は、まずはさくらと宗一郎に襲い掛かった。そして部屋内に居た克彦を飲み込み、そして氷の刃物が儂の肩を貫いた。そう、まさにこの部分だ」

修造は、包帯が巻かれている自らの肩を指し示した。

「……」

哭土は身じろぎもせず、修造を見つめている。

「儂は狗石を拾い、静まるようにお主に命じた。やはり狗石の力は絶大だった。部屋内の吹雪は止み、儂とお主、そして克彦だけが残された。その時だ、克彦の意識が戻ろうとしておった」

哭土は、話の先の答えを見つけ、ゆっくりと頷いた。

「大事な孫の狗石を、奴にだけは渡すわけに行かなかった。絶対に見つからない場所にその石を隠す必要があった。……時間が無かったのだ」

こうして祖父は、肩の傷に哭土の石を埋め込み、克彦から哭土の石を守っていたのだ。あの恐ろしい祖父は、皮肉にも孫を思った行動から生まれてしまったのだ。孫を守ろうと、狗石を自らの体内に埋め込んだ事で、十七年の間その孫から畏怖のまなざしを向けられていたのだ。

どれほど侘<sup>わび</sup>しかったろう、哭土には量<sup>はか</sup>ることができなかった。

「哭土、石を取り返せ。主の力を他の者に渡してはならぬ」

あれほど恐ろしかった祖父の命令。だが、今は目を見てしっかり受け止める事が出来た。

「……ああ」

哭土は、祖父の言葉に、大きく頷いた。その様子に、修造は目を細めた。

「……狗石を持った儂に、お主は怯<sup>おび</sup>えの表情しか見せぬ。だが、幼い頃のお主は必死に怯えを隠し、唯一の肉親である儂に必死に歩み寄ろうとしているのが分かった。それが……辛かった。優しい言葉をかければかけるほど、お主が苦しんでいる。ならば、狗石が示すとおりの『祖父』になろうと……、敢<sup>あ</sup>えてお主に辛く当たり……。すまない、すまなかった」

弱弱しく頭を下げる修造。

「……」

修造の口から語られる真実。哭士には、返す言葉が見つからない。

「……別に、恨んでなんかいない。仕方が無かったんだろう」  
漸く、発する事ができた言葉。その言葉に、修造の目に安堵の色  
が広がる。

「ああ、やはりお前は、さくらに似ておる……」

言い終わると同時に、意識を落とす修造。

「祖父様！」

哭士は祖父の体を支える。

「麻酔が効き始めたようです」

いつの間にか病室の入り口に立っていた桐生。後ろには菊塵も立  
っている。

「哭士、明日本家に行くのなら、一旦屋敷に戻ろう。お前は少し休  
んだ方が良い」

早池峰家に戻ろうと促す菊塵。

「……いや、俺はいい」

修造を支え、奥歯を噛みしめている哭士の表情を菊塵は読み取っ  
た。

「……そうか。じゃあ明日、僕が車で本家まで送っていく。お前は  
祖父様に付き添っていてくれ」

菊塵の言葉に哭士は一度だけ頷く。桐生は祖父の様子を見、安静  
にすれば問題ないことを告げ、菊塵と共に病室を後にした。

桐生が菊塵に口を開く。

「良かったのかい？ 本家に行かせるのなら、それなりの心積もりをさせておかないといけないんじゃない？ 本家の事だ。あれやこれやと、君達革新派について探られるだろう？」

「……いや、哭土は狗鬼についても殆ど知識は無いし、派閥抗争については殆ど伝えていない。今更本家のしきたりやらなにやらを詰め込んだって、どうせボロが出る。穩便おんびんに話をつけて来い……なんて事も、無理でしょうね。交渉事に関しては不器用です。今のままの状態で行った方が、相手方に与える情報を最小限に抑えられる」

「はは、酷いなあ、哭土君が聞いたら怒りますよ。ま、今日は色々あったみたいだし、整理する時間が必要かもしれないですね」

「ええ、哭土は今、初めて本当の意味での『肉親』を手に入れたんですから。こんな時くらい、一人にしてやった方が良いでしょう。ところで、ユーリの籠女は？」

「ああ、連絡取ったんだけどね、忙しいんだって。酷いよねえ。仕方ないから、僕がストックしてあった籠女の血で応急処置。契約相手以外の籠女の血は、治癒能力が低くて本当はオススメしないんだけどね。今は別室に放り込んでるよ。最初からそうしろーなんて騒いでてねえ。口だけは元気なんだよねえ」

困ったような表情を浮かべた桐生。病室内でも騒いでいるユーリ

が目に浮かぶ。

菊塵は、哭士を頼みます、と桐生に告げ、診療所を後にした。

哭士は黙って祖父の顔を見つめていた。静かな寝息を立て始めた老人の様子に、哭士は椅子を引き、壁に背もたれた。

「……………」  
祖父と同じ空間に居て、これほど平常心を保っていられる日が来るとは思っていなかった。

この一晩、哭士は祖父を守るように一時も傍を離れなかった。

## 1 27 ・本家への道

黒い高級車が、林の中を走っていく。運転席には菊塵。後部座席には哭士が座っている。

「彼女……色扱は、僕達革新派にとって、非常に重要な存在なんだ。それは本家にとっても、同じ事が言える。本家は、中立の立場を保っているかのように見せかけているが、実質的には保守派の属性を持っている。保守派の都合の良い方向にしか動かない。つまり、本家に色扱が攫われた事、それ自体が、革新派にとって不利な状態になっているんだ」

ハンドルを握る菊塵の手に力がこもる。哭士は黙って聞いていた。

「僕が付き添えるのは正門の前までだ。正門の中には限られた血筋の狗鬼しか入る事は許されない。正殿せいでんの奥に本家の当主が居るだろう。お前は色扱を連れ戻す事、狗石の奪取だけ考えて動けばいい。本家の者達に何を言われても気にするな」

「……分かつてる」

窓の外を見つめたまま、哭士は答えた。雑木林の中をそのまま車は走り続けた。と、急に林の道が大きく拓ひらけた。

「着いたぞ」

サイドブレーキを引く菊塵。哭士は菊塵の視線の先を追い、車外を覗き見た。

入り口を示すかのように石柱が二本立っている。その先には細い上り階段が続いている。階段の上は木陰で隠れ見ることは出来なかった。



「これから少し歩く、本家は山の上にあるからな」

やはり、菊塵は二本建っている石柱に向かって歩き出す。哭土もその後が続いた。

本家に続く階段は苔むし、勾配こうはいがきつい。しばらく階段を登り続けていくが、なかなか先が見えない。

よほどの山奥らしい。草木独特の青っぽい匂いが鼻腔びじゅうを刺激し、山鳥の音がすぐ近くで聞こえる。

階段を上りきると、石畳が広がり、その先には立派な門が構えていた。そして重厚な門構えには似つかわしくない、派手な格好の男が一人立っていた。色把さくを攫った、ピアスの男だった。哭土たちの姿をみとめると、足を肩幅まで開き、挑発的に哭土を見た。

「お待ちしております。ハヤチネ様」

菊塵には見向きもしない。棒読みに哭土の名を呼び、頭を適当に下げた。

「じゃあ、帰るときには連絡しろ」

菊塵は、男の態度を気にするわけでもなく、哭土に一声かけると、元来た道を引き返して行った。

ピアスの男は哭土を一瞥した後、人差し指を曲げ、付いて来るように示し、門の中に歩いていく。男が腰から下げているアクセサリーは、ジャラジャラと忙せわしく鳴っている。男に続き哭土も門の中に歩みを進めた。

「……！」

哭土に、一瞬だけ大きな嫌悪感がよぎる。何をされた訳でもない。屋敷の中の雰囲気が一瞬にして哭土の身体に流れ込んできたのだ。嫌悪感は地面の下から突きあがってきたように思えた。唸るように

して息を吐き出した。

(……腐肉を嗅いだような)

本家の正門に一步踏み入れて感じた印象がこれだった。込みあがってきた嫌悪感は、一瞬で鳴りを潜めたが、既に哭土は少しでも早くこの屋敷を後にしたくなっていた。

屋敷は広い。山の上にあるとは聞いていたが、山の斜面をも利用して建てられているようだ。上り下りを進めながらピアスの男の後ろをただついて歩いていく。なかなか男は立ち止まるうとしない。

男の後ろを歩いている最中、何人が屋敷の者達とすれ違った。すれ違う者達は皆、哭土の顔を覗き見る。中には哭土とみとめ、含み笑いをしたり、すれ違いざまに舌打ちをする者さえ居た。

「まだ着かないのか」

ピアスの男の背中に話しかけるが、男は答えを返すどころか振り返ろうともしない。

「……」

仕方なく哭土は、男の後を引き続き歩き続けた。

やがて、細い廊下を通り過ぎ、他の部屋とは明らかに違う立派な襖ふすまの前に辿り着く。ピアスの男はそこで立ち止まり、顎あごでその襖を指した。入れという事なのだろう。

仕方無しに、哭土はその指示に従い、襖を勢い良く開いた。

「やあ、良く来たね。早池峰 哭士」

部屋の正面奥には、和装の少年が座り込んでいた。肘掛にだらしなく体重をかけ、頬杖を付いている。周囲には、当主の狗鬼であるはずの莉子も、護衛もいない。

「お前が本家の当主なのか」

哭士は少年に問う。当主というにはあまりに歳若い。耳まで掛かる黒髪、幼い顔。年齢は十五歳くらいだろうか。

「今更何を聞くんだろうねこの狗イヌは。僕は黒古志くろこし 鼎かなえ お前達、狗鬼一族を統すべる当主だ」

自信に満ちた表情。まさか、当主がこんなに若い人間だったとは。哭士はその場に立ち鼎かなえと向き合った。

「何、馬鹿みたいに突っ立っているんだ」

頬杖をついたまま、鼎かなえは問う。

「……色把は何処だ」

色把の居場所を問われた鼎の顔が笑みでゆがむ。

「ハッ……嫌だね。狗鬼って生き物は。何よりも先にまず『籠女』だ。物には順番つてものがあるだろ。僕が君より若いからって馬鹿にしてる？ いいから座れよ」

一つ一つの言動、わざとだろうか、哭士の神経を逆撫さかなでする。苛立ちを抑えながら、哭士は黙って鼎が掛けている台座の前に座った。

「当主の前なんだ、礼の一つでもしたらどうなんだ？」

挑発的に哭士を見下す。だが哭士にとっては、本家など、当主な

ど、まったく自分に関係の無い物だ。命令をされて礼をする義理など微塵も無い。

「……」  
黙り込んでいる哭士に、鼎の表情は揺るがない。

「服従しろ、狗」

「!？」

体の自由が奪われる。意思とは無関係に、体が勝手に動いてしまふ。必死に力に抵抗するが、意味を成さなかった。勝手に自分の両手が床につき、目の前の鼎に、頭を下げる形になってしまった。

勿論、哭士にとっては屈辱以外の何物でもない。

「お前……狗石を……」

莉子が持ち去った哭士の狗石は、当主の手に渡ってしまったようだ。憎悪の目を持ち、当主を見据える。

「ああ、莉子から預かっているよ。お前、自分の狗石の在り処も知らずに、今まで過ごしてきたんだってね」

狗石の効力が切れたようで、ようやく哭士は顔を上げることができた。苛立っている哭士とは裏腹に、鼎の表情はさも楽しげ、といった様子だ。

「そうそう、まずは籠女の事だったね……彼女は丁重にこちらで預かっている。まあ、元はといえば、彼女もここで暮らしていたんだから、預かっているって言い方は変かな。とにかく、お前をここに呼んだのは、聞きたいことがあったからだ」

そこで、ようやく鼎は肘掛から体を起こし、哭士に顔をまっすぐ向けた。

「あの籠女をアービュータスビルから攫った理由は何だ？ 革新派は何を起こそうとしている？」

その質問は、哭土あすかの与り知るところではない。その時の哭土は、祖父の命令で色把だっしゅを奪取するように言われていただけである。祖父の兵隊であった哭土には『何故』という疑問を投げる選択肢は無かつたのだ。

「知らない。俺は関知かんちしていない」

「嘘を吐くな、言え」

狗石を使った鼎の『言葉』だ。哭土の意思に反し、口が動く。

「……兄、友禅ゆうぜんの許婚いいなまけが攫さらわれたから助けると言われた。後は革新派にとつて重要な存在になるからだ。それだけだ。それ以上は知らない」

操られていなければ、これほどすらすらと言葉を並べ立てることは出来なかつただろう。

「ふうん……本当に知らないらしいな」

当主の前では、僅わずかな隠し事も出来ない。全て石による『言葉』で暴かれてしまう。哭土に苛立ちがつのる。

「それで、お前はまた、あの籠女をつれて帰るつもりなのか？」

「……そのつもりで来た」

さらわれたものは取り返す、哭土の言葉に、含み笑かなえいをする鼎。

「何が可笑しい」

「……お前は本当に無知なんだね。残念だけど、それは許されない」

「……何」

哭土は鼎を睨みつける。だが、鼎は意にも介さぬ様子で話を続けた。

「お前と色把は身分が違う。彼女は本家の、一番強い力を持つ狗鬼との婚約を約束されていた花嫁だったんだ。契約を結べない不良品なんかと一緒に居てはいけないんだよ」

鼎の言葉に、哭土が殺気立つ。その様子を鼎は見逃さない。  
「変な気は起こさない事だね。僕の手には、君の狗石がある。命令で自害させる事だってできるんだ」  
怒りを押さえ込む哭土。鼎はその様子を楽しんでいるようだった。  
「彼女は、本家が祀る【神】の神子になる。もうお前と会うことは無いだろう。大分彼女がお気に召していたようだけれど、それは狗鬼が持つ本能的なものだ。狗鬼は籠女に対し、無条件に庇護欲を持つからね。身分違いな考えはすぐに捨て、彼女のことは諦めるんだね」

### 狗鬼の出来損ないめ

哭土の脳裏に一瞬、悪夢が蘇る。鼎の目だ、哭土を蔑む鼎の目が、幼き頃の心的外傷トラウマを再び呼び起こさせようとしている。このままでは、いけない。  
気持ちが萎えそうになるのを、無理矢理押さえ込んだ。

「……………」

哭土は立ち上がり、鼎に言い放つ。  
「話はこれで終わりか。俺の狗石、返してもらおうか」  
哭土の言葉にも、鼎は狗石を取り出す素振りすらしない。鼎は、その場に立て膝をし、不敵な笑みをもって首を傾けた。

「まあ待てよ、まだ終わっちゃいない」

「何だと」

「僕は、お前が気に入った。早池峰友禅の弟で、狗鬼としての素質・能力は十二分。なのに契約を結べない。その所為で本家への栄進の機会を断ち切られた……」

「……」

哭士は、鼎を睨み付ける。だが鼎は哭士の視線に動じる事も無く、薄笑いを浮かべている。

「勿体無いと思うんだ、こんなに強く、猛々《ただけ》しいのに、あと少しで終わってしまうなんてね。それにその態度、屈服させ甲斐がある。お前の残りの命、僕に捧げる。今からお前は僕の狗鬼だ」

「ふざけるな……誰が手前なんかの……」

「お前に選択肢は無いんだ。狗石が僕の手の内にある以上、お前は僕の飼い狗だよ。不良品を使ってやるといつているんだ。名誉な事だろう？　ここに、残れ」

すぐにでも狗石を取り返し、この場を立ち去りたかった。だが、鼎の『言葉』がそれを許さない。

「……」

哭士に抗える術はなかった。

## 1 29 ・ユーリの病室

桐生診療所に戻ってきた菊塵。ある病室の戸を開く。

「あー！ キク……何だっけ？」

ユーリの部屋を訪ね、一番に言われたセリフがコレである。

「随分と馴れ馴れしいね」

「いいじゃねーか、昨日の敵は何とやら、だ」

ベッドに座り込んでいるユーリ。自分が昨日まで敵の立場に居た事は、彼の中ではさほど大きな物ではないらしい。桐生の治療で、ある程度体の自由が利くようになり、口もよく動く。

「やっぱ、契約を結んでいない籠女の血だと、治癒が遅いな」

ゆっくりと肩をまわしながら、ユーリが呟く。

「……だから、自分の籠女を呼べば良いと桐生さんも言っていただろっ」

「いや！ それだけはマジでカンベンだ！」

余程、自分の籠女と会いたくないらしい。自分の籠女に関する質問は返事が異様に早い。

菊塵がこの口の軽い狗鬼の病室を訪ねたのは勿論見舞いではない。

菊塵はベッドの横に立ち、ユーリを見下ろした。

「一つ、聞きたいことがあって来た」

「何、そのオツカナイ顔」

おどけた様子で首を傾げるユーリ。

「……答えようによっては、こうして面を合わせて暢気に会話なんか出来なくなる」

メガネの奥の瞳が、冷たい光を放ち始める。



菊塵の気迫に、ユーリの笑みが静まる。

「……何だ？ 聞きたい事って」

「お前は比良野家から直接、色把を攫<sup>さら</sup>つたと聞いた」

色把が話していた外国人、色把の様子から、その人物はユーリと見て間違いは無い。

「ああ、間違いはないぜ」

ユーリも素直に受け答えをする。菊塵に対する警戒心はもう無いらしい。

「その後、比良野家に居た人間、全員が虐殺されている。それもお前の仕業か？」

「……なんだって？」

菊塵の質問に、ユーリの蒼い目が大きく見開いた。

「答える。お前がやったのか？」

なおも冷静に問う菊塵。

「知らねえよ！ 何だって！？ あの家の人間、殺されてるだど！？」

菊塵に掴みかかろうとして、腕は空を切った。痛み顔に顔をゆがめる。まだ傷は完治していないのだ。

「僕の部下が救援に行った時にはもう遅かった。家の中は荒らされ、色把の祖母、使用人が絶命していた。……こちらで厚葬させてもらった」

「……」

肩が痛むのか、手で押さえているユーリ。菊塵の言った言葉が飲み込めないのだろうか。表情は硬い。

暫くの沈黙の後、ユーリは静かに言葉を発する。

「……知らねえ。俺はあの子をビルに連れてくるように言われただけだ。俺と一緒に、社長……結城ゆづきが数人部下を遣つかわせて来たが、無関係な人間に手はかけないように言い聞かせてある。勿論、俺だって、あの屋敷の人間は、誰も殺してなんかいない。一体誰がそんな事……！」

ユーリの目が真っ直ぐ菊塵を見据える。その目に偽りは無かった。

「……そうか。なら、いい」

菊塵は頷き、聞き質すのを止めた。

「……そっぴやあの子、本家に攫さらわれたんだろ？」

暫しの沈黙の後、ユーリが口を開いた。

「今は哭士が本家に行き、連れ戻そうとしている」

「ああ、あの氷の奴、コクシってのか。あの子は哭士の籠女なんだから？」

ユーリは、痛む肩を気遣いながら、ゆっくりと体勢を変えた。

「いいや。彼女はまだ狗鬼と契約を結んでいない。哭士も彼女の狗鬼ではないよ」

「……自分の籠女でもないのに取り戻しに行くのか？」

顔に疑問の表情が浮かんでいるユーリ。

「ま、こっちにはこっちの都合があるんでね。余計な詮索はこれ以上はしないで貰もらいたいね」

「なんだよ、つまんねー」

ユーリは起こしているベッドに背もたれた。

やけに背の小さな従者じゆうしゃに引き連れられ、現在哭士は本家の廊下を歩いている。

鼎かなえに本家の狗鬼になれと命令され、結局その令に抗えぬまま、当主の部屋を出されてしまった。狗石を使われた命令では、哭士はどうしようもなかった。

当主の部屋から解げせない様子で出てきた哭士に、慌てた様子で走り寄って来、部屋まで案内すると言ってきたのが、今、目の前を歩いている従者だった。

「オイ」

哭士の低い声に、背の小さな従者は、一瞬体をびくつかせる。

「ハ……ハイ！ 何でしょう!？」

声が裏返る。哭士に振り返った少年の顔からして年の頃は十二歳位。元から体の色素が薄いのだろう、栗色の髪に白い肌、細い手足が際立っている。

気の弱そうな顔をしているが、人相のあまり良くない哭士を見て、更に目の奥には怯えの色が見える。

「ここの当主は、何歳なんだ」

「か……鼎様、で御座いますか。鼎様は、現在御歳おんとし十五歳になられます」

哭士を見上げながら説明をする従者。

「……随分若い、と思うのだが」

十五歳という若さで、このような大きな屋敷の当主の役目を果たす事が出来るのだろうか。

「いえ、先代の当主様も十代の時に選出されたと伺っております。四年前、先代の当主様が亡くなられてからは、鼎様が十一歳の時に黒古志家の当主へ。当主を補佐する方々もいらつしやいますので、当主様がお若い方でも、さほど大きな問題は無いそうです」

若くして当主に選ばれるという事は、この限られた世界の中では稀有な事ではないらしい。

「……」

哭士は理解した意思表示に、数回頭を振る。従者は引き続き、哭士の案内を続けた。

「こちらになります」

従者は、ようやく振り返り、一つの部屋を指し示した。

部屋は広く、滞在に必要な道具も揃っているようだ。部屋を見回した哭士は振り返り、気になっていることを聞いてみた。

「お前、何か感じないか？」

「……はい？」

きよとんとした顔で、従者は哭士を見上げる。

「この屋敷、だ。初めて足を踏み入れたとき、何か嫌な感じがしなかったか」

哭士が屋敷に入った瞬間のあの嫌悪感、あれは自分だけの物だったのだろうか。

「……いえ……あの……ここにお遣えする身ではそのような事は言  
つては……あ」

その返事が、もう答えになっていた。従者も同じ不快感を覚えたらしい。

「済まなかった。これは聞き流してくれ」

「はい……。あの、この事、黙っててくださいね？ 上の方に知られたら、僕……」

青くなっている若い従者に、哭士は分かっている、といった様子で首を振る。その様子に、従者は落ち着きを取り戻したようだった。

部屋の中央の座卓に掛けた哭士。従者は、哭士の傍らかたわに寄つてくると、なにやら緊張の面持ちおもてで話し出した。

「早池峰様には、滞在いただく上で、守っていただきたくことがござ  
います」

いそいそと、紙切れを広げ、従者は読み上げ始めた。

「鼎様からの指示があるまでは、この部屋を出ない事。必要なもの  
に関しては、部屋を案内した従者、つまり僕にお申し付け下さい。  
部屋を出た場合、外には見張りがおり、すぐ分かるようになってい  
ますので」

従者は自分の名前をレキ、と名乗った。

「外に出るな……という事か」

これでは軟禁である。思わず舌打ちが出る。

「す……スイマセン！ これは、上からの指令で……どうしても、  
ダメなんだそうです」

苛立ちを見せる哭士にレキがまたもや怯える。

「では！　一先ず僕はこれで！」  
レキは勢い良く立ち上がり、哭土達が入ってきた襖とは反対の襖を開く。と突然、犬の吠え声が哭土の耳を劈く。一匹の吠え声ではない。

哭土が立ち上がり、部屋の外を見ると、大きな三匹の犬が庭に集まり、廊下のレキに向かって牙をむき出して吠え声を上げていた。「うわあ！」

レキは転げるようにして部屋内に戻った。犬の吠え声がぴたりと止む。

「スイマセン……あの犬達が、この部屋から出る者を見張っているんです。以前、このお部屋に住まわっていた方が飼っていた犬達で、ほかの者には一切慣れようとしません。屋敷の者以外の人間がこの部屋から出ようとすると、吠えて屋敷中に知れるようになって……。僕、まだ入って日が浅いから、判別され辛いみたいです」

見張りというのは、この犬達の事を言っているようだ。

困ったように頭を掻いたレキ。今度はそっと、犬たちに自分を見せつけるように部屋を出て行った。

次に犬の吠え声があることはなかった。

## 1 31・レキの狗石

屋敷内は静まり返っており、哭士の耳には人の動く音は殆ど聞こえない。たまに聞こえたとなると、レキが食事を運んだり、御用聞きをしに来たりするのみ。

この軟禁状態も、かなえ鼎の指示があるまで続けられなくてはならない。もって来ていた携帯電話も、山奥の為か電波は圏外になっていた。菊塵に連絡も取れない。

外はとうとう暗くなり、レキが部屋に布団を敷きに来た。哭士はレキに問う。

「当主の指示というのはいつあるんだ」

自身の狗鬼になれ、と命令をされた後は、おとこた音沙汰が無い。なんとも中途半端な状況に、哭士は落ち着かなかった。早いところ、さつさと話をつけて、早池峰家に戻りたいと思っている。

「ス……スイマセン。僕は何も聞いてないんです」

小さな体をさらに小さくさせて哭士に申し訳なさそうな顔を向けるレキ。従者のレキには、これからの説明がされないのも仕方が無いのかもしれない。

哭士は、寝床の支度を続けるレキを何とはなしに眺めていた。自分よりも大きな布団の塊を軽々と持ち運ぶレキ。恐らく彼も狗鬼のようだ。

「お前、自分の狗石はどうしてる」

「狗石、ですか？ 僕は契約が済んだ後は、狗石を飲み込みました。アレ、僕が狗鬼だっていいましたっけ？」

レキが狗鬼だと言い当てた事に、少し嬉しそうな表情をしている。「飲み込む……？」

意外な返答に狼狽を見せた哭士に、レキも少し驚いた様子で答えた。

「あれ？ ご存知ありませんか？ 狗石を飲み込めば自分が操られるという欠点を無くす事が出来るんです」

そしてレキは狗石の説明を続ける。レキの説明をまとめると、自分の狗石は飲みこむことができる。だが、その代わりに狗鬼の能力  
哭士という氷を操る力 が、なくなってしまうのだそうだ。

レキは能力が元から弱く、さほど能力を必要としていなかった為、早々に狗石を飲んだそうだ。だが、ほとんどの狗鬼は、能力を失うことを嫌がり、自身の狗石を必死に隠しているという。また、契約を結んでいない狗鬼が狗石を飲みこむと、能力が暴走し、命を落とすしてしまう、という事もレキは続けて説明した。

「……そうなのか」  
狗石が今まで祖父の体内に隠されていた事で、狗石に関する事柄ことからは殆ど知らなかった。初めて聞く狗石の説明に哭士は頷いた。

「では、僕はこれで。あ、御用がありましたら鈴がありますので鳴らしてください。すぐに参りますので！」

元から人懐こいのだろうか。大分哭士にも慣れているようだった。レキは、部屋の隅にある鈴を指し示すと、丁寧に部屋を出て行った。

狗石が鼎の手の内にある今、屋敷を抜け出したとしても、命令で連れ戻されるであろう事は容易に想像できる。抜け出そうという考えは毛頭無かったが、ふと、哭士は外に続く襖を開けてみた。

と、襖を開く音を聞きつけ、三匹の犬が廊下を挟んだ庭に集まっ



てきた。唸り声を上げ、部屋から一步でも踏み出そうものなら、大きく吠え出しそうな勢이었다。

「……………」  
ため息をついて哭士は静かに襖を閉めた。

一人で居るのはまったく苦では無いが、やはりこの状況は落ち着かない。

「……………」  
持ってきていた携帯で時刻を見ると二十二時。いつの間にか時間が過ぎていた。時間は早い特にすることも無い為、仕方なく哭士は床につくことにした。

## 1 3 2 ・深夜の訪問者

鼻びくろだるうか、不気味な鳴き声が遠くから風に乗って屋敷に届く。  
本家の中は明かりが消され、月明かりがやけに明るい。青白い光が障子を通り、部屋内を照らしている。

「……」

突然冷たい水が額の上に落ちてきて、哭士は布団から跳ね起きた。雨漏りかとも思ったが、外は雨が降っている様子も無く、続いて雫が落ちてくる気配も無かった。不思議に思いつつ、携帯で時間を確認すると、夜中の一時。三時間眠っていた。

「哭士……」

自分を呼ぶ男の声。庭の外から聞こえる。

どこかで一度聞いたことのある声。だが顔が思い出せない。訝いぶかしげに哭士はそろそろと襖を開く。

庭には妙な男が一人立っていた。男の足元には、見張り番である三匹の犬が大人しく従っていた。

哭士が部屋の出口に近づく動きをしても、吠える気配はない。

「大丈夫です。この犬達はもう貴方を見て騒ぎ立てる事はしません」  
男は、庭に出てくるように哭士を促した。部屋から出で、男に近づく。そこで男の妙な特徴に気づく。

やさしげな顔、その両の目の色が左右で違っている。服装はいたって普通の格好をしている為、余計にその奇異な姿態しだいが目立った。  
「貴方に会うのは二度目ですね、哭士。あの時は仕方が無いとはいえ、苦しい思いをさせて申し訳ありませんでした」

哭士はこの男を思い出した。色把と共に比良野家の屋敷に行った

時、色把と同じ姿をした少女と共に現れた男だ。この男が、襲い掛かった少女から色把を庇い助けたのだ。その時居合わせていた哭士は眩暈めまいに襲われ、声は聞いていたものの、男の顔を見ることは出来ていなかったのだ。

「あのときの眩暈はお前が引き起こしたものだというのが」

「はい。私は貴方の体内の水を操り、体の自由を封じました」

男は頷く。

「お前は何者だ。何故俺の名を知っている」

あのとときもそうだった。 哭士を、助けてください。 確かに

男は言っていた。

「私は、以前、この本家で暮らしていた狗鬼です。貴方の事は、その時……いえ、それ以前から存じ上げていました。この犬達も、私が飼っていたもの。私のことを覚えていたようです」

三匹の犬を撫で、柔和な態度にやわを崩さない男。

「哭士、これを」

と、男が哭士に向かって小さな何かを放つて来た。哭士は、咄嗟とっさにそれを受け止めた。手に伝わる温かい感触。

「……これは」

「当主の部屋から、こっそり持ち出してきました。貴方の狗石です。一度も手に触れた事がなかったが、手に持っている感触で分かる。確かにこれは自分の狗石だ。男の口元は静かに微笑んでいる。その表情からは男の心情は読み取れない。

「お前……」

口を開きかけた哭士を、男が手で制するせい。男は真っ直ぐ哭士を見据えた。

「お話したい事があります。付いて来て頂けますか」

狗石を握り、哭士は男の言葉に頷いた。

軽々と屋根に飛び上がる男。

屋敷の屋根の一番高いところまで哭士を誘導する。哭士も男に続いて、屋根の上に飛び乗った。

男は、遠くを見つめている。哭士も男に並び、目線の先を確かめた。

「あそこに、比良野 色把さんがいます」

遠くに見える、屋敷の建物から離れた小さな堂を指し、男は言う。そして、僅かの間考え込んだ後に、意外な質問を哭士に投げかけた。

「哭士、貴方は何故、籠女や狗鬼が存在するか、考えた事はありませんか？」

「……いや」

思いもよらない質問に、意表をつかれた哭士は、素直に首を横に振った。

「それが、ある一つの存在の意思で展開しているものだとしたら？ 私達、狗鬼が必死に足掻いてきた人生全てがその、一つの存在、

【神】の手の平の上の出来事だとしたら、貴方はどう思いますか？」

男の抽象的な言葉に、眉をひそめる哭士。男の顔は哀しげな表情を浮かべていた。

「本家は【神】に操られている傀儡かいらいにすぎません。いわば、私達狗鬼や籠女は、本家を通してその【神】に弄ばれているようなもの、なのです」

皆、それに気づいていない、と男は小さな声で続けた。

「何なんだ、その【神】とは」

「人ではない物、それ以上は私からは言えません。ただ一つはつきりとしているのは、このままでは、比良野色把、彼女そのものの存在が消失してしまう事」

「どういう事だ」

「彼女はこの後、ある場所へと運ばれ、【神】と一つになるのです……貴方を、救うことになる信じて」

「何……!?!?」

信じられない言葉の数々に、言葉を失う哭士。

ここで男は、真っ直ぐ哭士へと向き直り、姿勢を正した。

「まさに、私たちが立っているこの屋根の下。貴方が屋敷に到着する前に、比良野色把と、当主、黒古志鼎が『ある』協約を交わしたのです」

そして男は話し始めた。

### 1 3 3 ・当主のたくらみ

「おかえりなさい、というべきかな、比良野色把」

色把の前には一人の少年が鎮座している。黒古志くこし 鼎かなえだ。

「今日は特別に話があつてね」

「何故、私を……」

口を開きかけて、色把は自分の口元に手を当てた。哭土と菊塵は、色把の唇を読んで色把の言葉を理解する。だが、鼎にはその方法では通じないかもしれない、と気が付いたのだ。

「構わないよ、僕も君の言葉は理解している。そのまま話せばいい」  
鼎は色把の言葉を促した。

「何故、私を本家へ？」

「君は、保守派、革新派、どちらの派閥からも必要とされている。このまま放っておけば、一時沈静化していた抗争がまた激しくなる可能性がある。その為に保護した」

色把の質問に、鼎は正確に答える。色把の言葉はしっかりと伝わっているようだ。

「私はつい最近まで、籠女という言葉の意味すら知りませんでした。そのような人間を、何故……」

色把の言葉に、鼎の口の端が上がる。

「そうだろうね、言ってしまうえば、保守派も、革新派も比良野色把という人間そのものは必要とはしていないよ。世間知らずのお嬢様だもんね君は」

傍らの肘掛に鼎は寄りかかり、足を投げ出す鼎。

「必要なのは、君の体に流れる『血』さ。代々黒古志家の神を奉つてきた神子の家系『比良野家の血』だよ。君は、保守派と革新派のことは知っているよね」

鼎の質問に、色把は頷く。

「保守派は、狗鬼と籠女を古から続くしきたりに則って継続を望む者達が属する。革新派は、自らの力を現代の技術と融合させて、さらに高みを目指そうとしている者達が属している。比良野家つてのは、力の強い籠女が生まれやすくてね。どちらの派閥にしても、君の体に流れる血つてのは、魅力的なんだよ」

『そうだったんですね……』

「随分と暢気だね、これからも君は、保守派、革新派から付け狙われるんだぞ。……一つの選択肢を除いて、ね」

『一つの……選択肢？』

鼎の言葉に、色把は彼を見つめ、首をかしげた。

「本家、黒古志家の神子になれ。そうすれば本家の庇護を受け、君は安泰あんたいを手に入れることが出来る。手荒な仕打ちを受ける事もない。どうだ、悪い条件じゃないだろ？」

問われた色把に、ためらいが生じる。その様子を、鼎は見抜く。

「もう、君の祖母は死んで、家には誰もいないだろう？ あんな広い家だった一人で過ごすのか？ 狗鬼も居ないのに？ ……まさか、早池峰家に戻ろうなんて考えているのか？」

つるべ打ちにされる質問に、色把は視線を落としていたが、早池峰家の言葉に、思わず顔が上がる。

「あの家の狗鬼達は革新派だろう？ 任務で君を攫さらい、保護をしたまでの女をずっとあの家に置いておくものか。戻って喜ぶ素振りを見せても、それは君の血が手に入ったから、だ」

鼎の言葉が、色把の胸に突き刺さる。色把の心中がどよめく。

『そうなのでしょつか……』

早池峰修造は、あの屋敷に滞在しても構わない、と言ってくれ、色把もあの屋敷の雰囲気にならぎを感じ始めていたところであった。

だが、鼎の言う通りなのだろうか、あの菊塵も、哭土も、自身の派閥のために自分に接していただけ……なのだろうか。色把は早池峰家の人間を数日間近くで見、鼎の言うような人間達には到底思えなかつたのだ。

現に、哭土は比良野家に戻りたがる自分の願いを聞き届け、自分を守りながら同行してくれた。その事が、色把の中で大きなものになつていた。

色把の言葉に、一瞬、苛立ったような表情を見せた鼎だったが、その表情はすぐに掻き消えた。

「早池峰家が随分お気に召しているようだね」

色把の考えを見透かしているようだ。鼎は、色把に向かって不敵な笑みを見せた。

「大方、早池峰 哭土かな、……あの、契約が結べない不良品」

『そんな……！』

あまりの鼎の言葉に、思わず色把の口がついて出る。その色把の行動に、鼎が何かを掴んだようだ。

「彼は十七歳だったっけ。後僅かわずかで時間切れ。……契約を結ばなければね」

菊塵から聞いてはいたが、だが、鼎の口から改めて聞くとやはり重みが違う。

「勿論、君も、駄目だったんだらう？」

色把は俯うつむき、唇を噛んだ。



しばらくの間目を眇め、色把の様子を見ていた鼎。徐に口を開く。  
「……彼を助けてやるうか？」

「……!??」

信じられない言葉。色把は勢い良く顔を上げた。

「僕を誰だと思ってる？ 狗鬼を統べる本家の当主だぞ」

色把は、鼎の次の言葉を待つ。

「さつきも少し話したが、黒古志家には代々奉っている【神】がいる。籠女と狗鬼を生み出した強大な力をもった【神】だ。その【神】に掛ければ、一匹の狗鬼の制約など、簡単に解除できる。そして、その【神】と交渉するのが神子の役目。正確に意思を伝えるには、それなりの力量のある神子でなくてはならない。比良野の血であればそれは充分。……わかる、かな？」

哭士を救う代わりに、黒古志家の神子を担え、という事だろう。

「君がどう思おうと勝手だけどね、契約が結べなかった籠女を傍らに置いておくって事の方が、彼にとって苦痛なんじゃない？ だったら、君は神子になり、彼の制約を外す。そちらの方が、皆が救われる、そうじゃないか？」

「……」

色把は、鼎の言葉に暫く黙り込んでいた。

「……分かりました。私に出来るのであれば……私は、本家の神子になります」

「はい、良く出来ました」

頬杖をついた表情が、冷たく笑った。



## 1 3 4 ・男の正体

「以上が、この部屋の中で行われた会話です」  
男は、色把と鼎の会話の経緯いきさつを話し終えた。

「……………」

哭士はその場から動く事はできなかつた。

「彼女は、貴方の生命を救う為に、黒古志家の神子になる事を選びました。ですが、黒古志鼎、…………彼が言っていることは全くの出鱈目たらめなのです」

男はゆるゆると頭を横に振る。

「……………何だと？」

男は、振り返り、再度色把がいるという社を指した。

「黒古志鼎が彼女に話したことは、彼女を早池峰家に戻らせぬように仕向け、本家に留まらせるためのものに過ぎません。彼女は、神子ではなく、【神】に献上けんじょうする生贄いけにえ、なのです。貴方の制約を解除するということのも、嘘です。…………ですが、彼女はそれを信じて、今あの社の中で、閉じ込められています。夜明けと共に、【神】の元に運ばれ、彼女は命を落とす…………。放つてなど、おけないでしょう。彼女が必要としているのは、貴方なのです」

男の顔は悲壮ひそつに溢れていた。男の目が、色把を救えと訴えている。一体…………お前は何者だ」

目の前の見覚えの無い人物。何故自分に突破口を与えるのだろうか。

月明かりに男の顔が照らされている。短い髪に、一本の細く長く結われた襟足が靡なびいている。

「黙っていて、申し訳ありませんでした。私の名は、早池峰……。  
早池峰 友禅」

「!!!」

哭土は目を見開く。この男が、自分の 兄。

「お話をするのは、ここまでです。後は貴方の意志にお任せします」  
「待て！」

呼び止めたが遅かった。友禅は一瞬にして哭土の目の前から消えていた。

哭土の視力ですら、友禅の動きを捉えることは出来なかった。

「……」

呆然と立ち尽くす哭土に、友禅の声が耳に届く。

「……安らぎを求める事は、決して悪い事ではありません……勿論、  
貴方にとっても」

「!!!」

彼の言葉は、哭土の胸に大きく突き刺さった。自分でもまだ分からない、だが突きあがってくる本能的な衝動に、今は身を預ける事にした。

奥歯を強く噛みしめると、哭土は屋根の上から大きく飛び上がった。

## 1 35 ・ 贄の箱

ハッと意識を取り戻した色把。慌てて辺りを見渡すが、何も見えない。

瞼を開いているはずだが、色把の目は暗闇しか捉えない。座り込んでいる床からは、硬い感触、床から手を滑らせ、床を伝っていくと、すぐに壁に打ち当たった。落ち着いて周囲を探るうち、自分は大きな箱の中に居る事に気が付く。一向に目が慣れないことから、光の入らない、密閉された箱の中のようなだった。なんだか、足元が覚束おぼつかない。体に力が入らず、ふらふらと焦点が定まらないのだ。

色把は、何故このような事になっているのか、気持ちを落ち着かせ、思考をめぐらす。

(……一体、何が)

鼎と話をした後、軽く食事を取った。色把の意識はその少し後で途切れ、それ以降の記憶が無い。

しばらくの間、箱の中を探ってみたが、出口のようなものは無かった。箱は、屈んで中を移動できるくらいの大きさだ。広さとしては、およそ二メートル幅ずつ、高さは一メートル位の箱といったところだろうか。

突如、人が近づいてくる気配がした。色把は、息を潜め、外の気配を探った。

何人かが箱の周りで立ち止まった。

「じゃあ、恒河沙じょうがしや、見張りを頼んだよ」

鼎の声だ。どうやら、色把が閉じ込められている箱の周りに、見張りの人間を残したようだ。ひとりの気配が去っていく。

残った気配は二つ。おそらく、早池峰家に自分をさらいに来た莉子とピアスの男だろう。

「……この中にあの籠女が？」

木の床がきしみ、箱の周りを歩く男の気配がする。

「食事に混ぜた薬が効いて、今は眠っているよ。この子は生贄になる、哀れな娘……」

静かに答えた莉子の言葉に、色把は耳を疑った。

「生贄なんて勿体無え、いい二オイがした。俺が喰らってやりたかったよ」

恒河沙という男は、色把を連れ去ったピアスの男に間違い無いようだ。2人の人物は、色把が箱の中で会話を聞いているとは知らず、話し続ける。

「比良野家の娘ってのは、籠女としての資質が高いんだろう？ だったら、血肉にしる何にしる、狗鬼に多大な力を与えるはずだ。ああ、やりてえなあ」

色把の背筋に怖気が走る。なんと危険な男なのだろう。

「……アンタねえ……」

呆れた声を上げる莉子。

「分かってる。この女は黒古志家の神に捧げるモンだ。俺は何から守るとも知れず、こうして一晩籠女入りの箱を守るだけ。ああ、つまらねえつまらねえ」

どっかりと箱の前に座り込む音が聞こえた。

「……しかし、この女、よくまあ、あんな攫われ方をして本家に残ったもんだな」

喉の奥で笑う恒河沙。

「この子は例の、早池峰哭士の制約を外す事を条件に、ここに残ったんだよ」

哭士の名前が挙がり、色把は二人の会話に耳を傾ける。

「制約を？ 何故だ？ 契約さえすれば、寿命の枠なんてすぐに取り去れるだろ？」

恒河沙が動くたびに、金属が擦れ、ぶつかり合う音が聞こえる。

「その哭士という狗鬼は特殊らしくてね、契約を結ばないまま、現在十七歳になっているの」

「それ、何かの冗談か？ 契約が結ばなきゃ死んじゃうだろ。それに…… 契約を結ばずに制約を外すなんて、出来るのか？」

恒河沙の質問に、莉子は静かに息を吐き出した。

「……無理に決まっているでしょう。嘘よ。この籠女を本家に留まらせるための、ね」

「……」

色把の頭の中が真っ白になる。

(……嘘？)

哭士の制約が外せるのであれば。その気持ちで本家に残る事に決めた。だが、それは全て、自分をこの箱に入れるための嘘だったというのだ。

……お前、馬鹿正直にも程があるぞ

いつか哭士に言われた言葉。手が震える。まったくその通りだ。

自分への悔しさ、哀しさで目から熱いものがこぼれた。

「はは、じゃ、こいつ、まんまと騙されてんだ。で、この箱はいつまでここに置いておくわけ？」

「夜明けと共に、箱ごと【神】の元へ運び出す。……さきがはまじり 奇ヶ濱村へ、ね」

聞いたことのない地名、色把の心中に、急に不安感が湧き上がる。

「クツ……女の命も、これまでだな」

小さく笑う恒河沙。

生贄、神に供えられる犠牲。

自分がそうなってしまうという。哭士の制約を外すという嘘に踊らされ、誰も助ける事ができず、明日の夜明けに自分は……。

押さえ込んでいた恐怖が、独りになった色把に襲い掛かる。

(そんなのは嫌……嫌だ！)

必死に抗おうと、壁を思い切り叩く。だが、女一人の腕力では、壁を打ち破る事は出来ない。

「目覚めていたのね……」

はっとする莉子の声。

「……うるせえんだよ」

恒河沙の言葉に構わず、色把は壁を引っかき、叩き続ける。色把は手に血が滲んでも箱を叩くことを止めなかった。



「……うるせえって言うてんだろつが！」

恒河沙は苛立ちを見せ、箱に向かって手をかけようとした。が、頭に血が上りかけている恒河沙を、莉子が制する。

「ちよつと、触っちゃダメ。その箱に狗鬼が触れると、ただじゃ済まないよ」

「……何だよ！」

恒河沙が動きを止め、莉子を睨み付ける。

「その箱の表面には、狗鬼が触れないよう術を施した布を巻いてるの。籠女と当主しか触れない仕掛けだよ。うっかり触れようものなら、手が焼け付いちゃうよ」

「一体何だつてこんな事……」

恒河沙の舌打ちをする。

「生贄を受け取る【神】からすれば、狗鬼は『穢れたもの』らしい。だから一晩、狗鬼を遮断して、籠女の身を清めるのだそつよ」

「なんだそりゃ！ふざけんな！」

恒河沙は、またもや舌打ちをし、床を蹴り飛ばした。莉子の説明が、恒河沙の怒りに油を注いだようだ。

「……落ち着いて、恒河沙」

莉子の声はあきれ返っている。

「落ち着いてられつかよ！胸糞悪い！こんな箱、ぶつ壊してやる！」

どうやら、恒河沙という男は切れやすい性格らしい。一緒に居る莉子のため息が僅かに聞こえてくる。ガン、ガンと何かで箱を打ち付けてくる音と衝撃が伝わってくる。

だが、衝撃が伝わってくるばかりで、箱が壊れる気配はまったく無かった。

「あーあ、馬鹿みたい。一晩中そうやってれば？ 私は鼎様のところに戻るわ」

莉子の気配が遠ざかってゆく。色扱は必死に恐怖に耐え、耳を塞いでいた。

箱に向けられた衝撃はしばらく続いた。箱に傷一つついていない様子に、ようやく恒河沙は箱を壊す事を諦めたようだ。罵声を吐き続ける恒河沙の声が聞こえるが、箱に対する危害はこれ以上加えられる事がなさそうだ。

ほっと胸を撫で下ろす色把。だが、現状は最悪だ。箱を出なければ、夜明けと共に自分は生贄としてこの屋敷を運び出されてしまう。その先にあるのは、恐らく死。

だからといって何とかしてこの箱から出たとしても、外には殺気立った恒河沙が待ち構えている。

暗闇の中で思い出すのは、祖母、菊塵、修造、マキ、そして、哭士。

このような事態の時に思い浮かべるのは身勝手というのは分かっている。

必死に頭に思い浮かべないよう試みるのだが、どうしても消し去る事は出来なかった。数日の間で、色把の中ではあの人物達が、非情に大きな役割を果たしている事に気づいた。

(もう、遅いんだ……)

色把は、諦めの表情を浮かべ、箱の中心に蹲すくまった。

哭士はどうなったのだろう。本家に今、来ているのだろうか。

なんだか身体が上手く動かない。徐々に身体から力が抜けていき、薄れていく意識。色把は箱の中心部に倒れこんでしまった。

## 1 36・贅の番人

色把の気配が強まっている。社に近づくにつれ、自身を呼ぶような強い衝動が増していく。

初めて対峙をした兄、友禪ゆうぜん。彼の言葉が哭士を貫いた。

安らぎを求める事は、決して悪い事ではありません

自分には、与えられるはずが無いものだと思っていた。出来損ないのしのと罵られ、命令された事だけを遂行してきた機械のような、自分になど。

そして、そこに現れた少女。自分の心のうちをかき乱す分からない衝動に、疎ましいとさえ感じた。だが……その先は自分でもまだ分からない。自分が欲しているものとは……。

哭士はそこで、考えるのをやめた。

社の扉を何も考えずに開け放つ。古い木造の扉は、開け放たれた衝撃で外れ、大きな音を立てて倒れた。部屋の中には大きな箱が鎮座している。

箱の前には、莉子と共に色把を攫い、そして自分を屋敷内に案内したピアスの男。

「……お前……」

男は哭士を確認し、驚きの表情を見せる。哭士は黙って男を見据

えた。鋭い目元に愉悦ゆえつとも取れる表情が浮かんだ。

「女を取り戻しに来たってか？ 上等じゃねえか。どうやってあの部屋を出たんだ？ あの犬共は殺したのか？ ……まあ、そんな事はどうでもいい。一度、お前とは手合わせを試してみたかったんだ。早池峰の血つてのがどんなものかをな」

舌なめずりをする男。哭士は、何も答えずに男の前に立ちほだかっ

つた。  
「自己紹介がまだだったな。俺は恒河沙じゅうがしゃ。本家に飼われている狗イヌだ」  
見せ付けるように、手首をポキポキと鳴らす恒河沙。挑発している。

カタン、と恒河沙の背後の箱の中から微かな物音が聞こえる。哭士は瞬時にそれが色把が発したものだ気づく。

「女に気い取られてんじゃねえぞ！」

徐おもむきに、恒河沙の拳が左頬に向かって飛んできた。哭士は瞬時に恒河沙の拳を受け止める。と同時に、すかさず相手の右手が飛んでくる。哭士は飛んできた拳を掴み、後ろに倒れこみながら恒河沙の腹を狙って右足を繰り出した。

じやらりと金属の音が鳴り、恒河沙は身を擦よじって哭士の足を避けた。哭士も恒河沙の次の攻撃を警戒し、身を翻ひるがえした。部屋の両端に、恒河沙、哭士が向かい合う。

「中々楽しめそうだ」

改めて哭士は、恒河沙の姿を確認した。派手な髪の色、肉食獣を思わせる残虐な顔つき。ベルトから伸びる鎖、五本の指にはめられたゴテゴテとした指輪。顔中に付けられたピアスは、舌にも付いているらしく、にやりと笑うと口内に光るものが見える。

「なあ、あの女とは何処までいったんだ？ イイ声で鳴くのか？ あの清纯すましてるような女は、この手でぐちゃぐちゃにしてやりたくなるぜ！」

恒河沙は、部屋の中で焚かれている燭台しよくだいを撥ね飛ばす。赤々と燃えている材木が哭土に飛来する。

「……ッ！」

咄嗟に、材木を避けて左へ飛びずさる。一瞬、飛来する材木に氣をとられ、恒河沙への意識が薄れていた。僅かな時間に、恒河沙は哭土のすぐ横にまで接近していた。クツと低く恒河沙が笑う。

「縛りプレイといこうか、早池峰。野郎になんざ気乗りしねえが、今日は特別だ」

哭土の左腕に、重い感触が伝わってくる。腕に鎖が巻きついていてた。恒河沙のベルトから伸びていた鎖だった。腰から何本か下がっていた鎖は、何重にも巻かれた一本の物だったらしい。瞬時に取り外し、殴りかかると同時に哭土に投じたようだ。手馴れている。

恒河沙は拳を後ろに引いた。巻きついてた鎖が締まり、腕に食い込む。鎖の一つ一つは刃物のように研ぎ澄まされ、容赦なく哭土の腕に傷を刻む。食い込んだ鎖に哭土の血が伝ってゆく。

勢いに引き倒されそうになった哭土は右足を大きく踏み出し、逆に恒河沙を引きずり倒そうと右手をかけた。

「もう遅い、無様に鳴けよ」

恒河沙の口の端が大きくゆがんだ。

目の前に白い火花が散った。一瞬の仰け反るような痛み。

「があッ……！」

思わず哭士は声を張り上げた。体が固まり、自由が利かない。

「電撃つてのはどうだ？ 刺激的だろ？ 野郎が悶える姿を見て興奮するなんて趣味は無えが、今は最高に気分がいい。こつも簡単に嵌はまつてくれるとはなあ」

哭士に放たれたのは高压の電流だった。一瞬の事だったようだが、哭士の体には大きなダメージが残る。上手く息が吸えず、体が麻痺し自由が利かない。鎖が巻かれた腕の肉は焼け、嫌な臭いを発している。

硬い靴底が哭士の肩を攻める。腕が痺れ、痙攣けいれんし、痛みは無かった。哭士は床に崩れ落ちる。

「ハッ、所詮早池峰の血を引いていようがその程度かよ」

浅い呼吸を繰り返す哭士の姿に、恒河沙は勝ち誇った表情を浮かべた。

「大事な籠女を奪いに来た奴を捕らえたとなりや、大手柄だ。手前を痛めつけた後に、どうにかあの箱を開けて女を味わうとするかな。夜明けに戻しておきや、誰も分からねえ」

「……！」

恒河沙の言葉にありつたけの力を込め、顔を上げる哭士。目に力が宿る。

と、同時に木造の床を破り、氷の槍が恒河沙の足元目掛けて突き上げてくる。

「おっと！」

寸での所で槍先を避けられる。恒河沙が持っている鎖につられ、哭士の体もずるりと床を引きずられる。

「お前の力は、あの金髪野郎との戦いで見ていたからな、そんな三工ミエの攻撃は無駄だぜ」

恒河沙の声は届かないのか、哭士は氷の槍を生み出しては、恒河沙に向けて放ち続ける。

と、恒河沙が飛び上がった瞬間に、自らの左手に巻かれている鎖を掴み強く引く。鎖の先は、勿論恒河沙に繋がっている。

「!!!」

飛び上がっていた恒河沙は、哭士の強い力に、腕ごと引つ張られた。

哭士の射程距離内に恒河沙を捕らえた。鎖で繋がっているのであれば、逆にそれを利用する。体の自由が利かなくなっているのであれば、繋がっている鎖で引き寄せる。力であれば負ける事はない。

一瞬驚いた表情を浮かべた恒河沙であったが、その面持ちは、先程の物と変わらない。

「肉弾戦に持ち込めば、勝てるっても？ 甘いぜ」

振りかぶった哭士に対し、恒河沙は空中で逆さになりながら言い放つ。哭士の拳が恒河沙の体に触れた刹那、また大きな白い火花が散る。

「うアッ！」

一声唸る哭士。弾かれたように、床を転がる。

うつ伏せになった哭士。その哭士の左腕を、巻かれた鎖で引き上げる恒河沙。

「別に金属を通さなくたって直接流せるんだぜ？ 狗鬼つてのは辛いよなあ……只の人間ならとっくに昇天してる所だぜ。なまじ体が丈夫に出来てるから、味わう苦痛も長引く……。痛めつける方にと

「つちや、最高の遊び道具になる」  
痛烈な電撃に、筋肉が収縮しているのだ。体の自由が利かない。

哭士の襟首を恒河沙が持ち上げる。哭士の喉の奥から搾り出すよ  
うなうめき声が漏れる。

「良いザマだぜ、早池峰」

軽々と哭士の身体を引きずる恒河沙、色把が閉じ込められている  
箱の前に辿り着く。

「この箱、本当に狗鬼は触れないのか……。試させてもらっぜ！」  
言い終わるか終わらないかのうち、恒河沙は哭士の身体を箱に叩  
きつけた。

「があアアッ！」

箱に巻きつけてある布に触れた瞬間、であった。哭士の体から白  
煙が上がる。

酸でもかけられたような壮絶な苦痛。思わず哭士は叫び声を上げ  
る。

「うお、すげえ」

恒河沙は、驚きの声を上げながらも、ゆがんだ笑みを湛え、さら  
に哭士の身体を箱に押し付ける。白煙は更に濃さを増し、肌を焼く  
音が哭士の苦痛の声と共に立ち上がる。

哭士は、渾身の力を込め、恒河沙を振り払う。だが、体が上手く  
動かず、恒河沙はさらりと哭士の腕をかわす。

右頬、右腕が痛々しく焼け爛ただれている。哭士はその場に両手をつ  
き、崩れ落ちた。

「もう立てねえか、早池峰！ この程度、この程度かよ、命乞いで  
もしてみるか？」



恒河沙が手に持つ鎖が音を立てる。哭士に向かってゆっくりと歩いてくる。

「……好きなだけ吠えやがれ、サド野郎」

今まで言葉を発しなかった哭士が呟く。

「……ンだと？」

恒河沙の眉根がピクリと動く。絶対的な優越感、それを感じていた恒河沙に、哭士の言葉は滑稽こっけいにも思えた。

「どうやら、まだ足りないらしいな？ 軽口叩いたこと、後悔させてやるぜ」

恒河沙は倒れている哭士の腹部を撃蹴げきせうする。哭士は小さくうめき声を上げた。

「そろそろ、イこうか？ 最大出力で行くぜ」

三度目の火花が散った。

## 1 37 ・弊履の族

「がアアアッ！」

断末魔の叫びを上げたのは、哭士ではなく恒河沙いひがしやの方だった。

鎖を持っていた恒河沙の右手に、『ヒビ』が入っていた。

「……勿論、知っているだろう？ 金属は電気も通す。……熱も、な」

哭士の左腕に絡んだ鎖は、当然仕掛けた恒河沙の右手に繋がっている。哭士は、恒河沙が自分に攻撃する事に気を取られている間に、鎖を通じてじわじわと恒河沙の右手の熱量を奪っていた。

熱量を奪われた恒河沙の腕は、水分が凝固して、すなわち『凍った』状態になる。凍った事で痛覚が無くなり、自分の右手の変化に気が付かなかつたようだ。自らが放った電撃の強さに、自分の右手にダメージを与えてしまったのだ。

「う……おおおお！」

恒河沙は自らの右手を押さえながら咆哮を上げた。

哭士は右足を大きく踏み出し、裏拳で恒河沙の右腕を狙う。凍った右腕を左腕で咄嗟にガードし、体を捻って避ける恒河沙。少し掠った衝撃で、指先が脆く崩れている。

「あと、何秒だ。次の電撃は」

「……！」

鎖を外しながら哭士が言い放った言葉に、明らかに狼狽の色を見せる恒河沙。

「お前の能力は連発出来ないようだな、次に力を溜めるまで……あと少し時間がある」

哭士は見抜いていた。一回電撃を放った後、十数秒の間隔を置いてから次の電撃を放っている事に。一回の力を溜める時間は、秒数

としては、およそ三十秒。

完全に受け手に回っていた哭士から、思いもよらぬ指摘を返され、一瞬恒河沙の表情が険しくなる。だが、その表情もつかの間、顔には邪悪な笑みが宿る。

「そうだよなあ？ やっぱこうじゃなきゃ、楽しくねえよなあ？」  
とがった犬歯を剥き出し、大きく高笑いを上げる恒河沙。

恒河沙の右腕にダメージを与えた事で、三度目の電撃を避けることが出来た哭士。体に残っていた痺れも少しずつ抜け、動く事は問題なさそうだった。恒河沙の攻撃に備え身構える。

「普段なら、弱らして鬨り殺んだがな、こうまでされちゃあ、俺のプライドに関わる。……全力でぶっ潰す！」

瞬間、飛び上がった恒河沙が哭士の目の前に現れ、蹴りを繰り出してきた。

「……！」

速い。哭士は体を折り曲げ、恒河沙の足をかるうじてかわす。だが、その避けた哭士の首を恒河沙が捕らえ、床に叩きつけた。先程の恒河沙の動きとは明らかに違う。激しい振動が部屋に響き渡る。

口の中が切れたようだ、鉄の味が口内に広がる。やはり、恒河沙は電撃を放ってこない。

恒河沙の見た目は先程と変わらない。だが哭士の視力をもってしても、今の恒河沙の動きを捉えるのは難しくなっている。

思わず哭士は、恒河沙を凝視する。

「なんで急に動けるようになった……？ そんな顔してるぜ、早池峰」

恒河沙が繰り出す拳を、手の平でうけとめる。重い衝撃が手の平に返ってくる。突然強さを増したこの拳はまともに食らうと、二度

の電撃でボロボロになっている身にこたえる。戦闘は長引くと不利だ。

哭士は素早く身を屈め、恒河沙の脇に回り、顔面を狙う。

「……！」

目の前から突然消えた哭士を、恒河沙の双眸が素早く探る。目の前に迫っていた哭士の拳に気づき、恒河沙は慌てた様子で顔を引く。鼻先をかすめ、当たらない。寸でのところで避けられてしまった。

だが、俊敏に脇に移動した哭士の動きを捉えていたわけでは無いようだ。

哭士に向かって攻撃を放つ恒河沙の体から、一瞬、火花が飛び散る。

「お前」

恒河沙の動きと動きの間に、不自然な動作が目立つ。そこで、哭士は一つの憶測に辿り着く。

恒河沙は何らかの力で強制的に限界以上の力を発揮させているのではないかと。

「……気づいたみたいだな。確かに、俺の能力は最大出力なら数十分、力を溜めなきゃなんねえ。だが、さほど大きくない電圧であれば連発は可能だ。筋肉に電流を与えりゃ、強制的に力を引き出せる」

人間の筋肉は、脳からの弱い電気信号で動いている。限界以上の力を出さないようにセーブされながら、である。恒河沙はその脳からの電気信号以上の強い電流を自らの筋肉に流し、限界を突破した力を引き出していたのだ。

だが、電圧による負荷をかけ続ければ、その体もただでは済まないだろう。現に恒河沙の額から脂汗が流れ落ちている。いくら強靱な身体を持つ狗鬼であれど、身体に負荷をかけ続ければ、それなりのダメージを受ける。

「……体がもたないぞ」

「百も承知だぜ、だが早池峰の血筋に勝てりゃ、俺の体はどうなつたつて構わねえ！」

恒河沙が吠える。恒河沙の虹彩が真つ赤に染まっている。本気だ。瞬間、哭土の体に大きな衝撃が襲いかかる。

建物全体が揺れたのではないかと思うほどの大きな轟音を立て、哭土は壁に弾き飛ばされた。勢いで木と漆喰の壁を突き破る。パラパラと崩れ落ちる木屑と埃。思わず哭土が噎せ返る。

間髪をいれず、立ち込める砂埃の間を恒河沙が割り込んで追撃を仕掛ける。氷の壁でガードをするも、砂埃で不純物が増している氷は、増大している恒河沙の筋力に、脆くも打ち砕かれた。

「……恒河沙つて名、妙な名だろ？ 恒河沙つてのは、ただの役回りの名前さ。本家にこき使われる狗鬼は、弊履へいりの族つて言われてんだ」

弊履へいりとは、『不要な物』の意味である。恒河沙の様に、本家の狗鬼としてではなく、本家の下で使われている狗鬼達は、あまり良い待遇をされていないらしい。

「弊履の奴らは、数を表す名前前で呼ばれる……。恒河沙つて名は俺のものじゃねえ。ただの『区別』の『記号』なんだよ！ 人間とも狗鬼とも認められない、本家に死ぬまで飼われる哀れな狗だ！ 俺はそんなの御免だね！ こんなんで人生終わらせて堪るかかってんだ！ てめえみたいなの血統だけでのさばってる野郎共をぶち殺して、俺がのし上がってやる！」

恒河沙の拳に一層力が強まる。腹部に突き入れられた恒河沙の攻撃は、哭土の強靱な肉体にもダメージを強く残す。内臓のどこかが負傷したらしい、更に濃くなる鉄の味に、吐き出した唾はやはり赤かった。

振り下ろされる恒河沙の手を横に避け、その瞬間に下から腹部を蹴り上げた。

「！！！」

どこにそのような体力が残っていたのかと、思わぬ強さの反撃に、恒河沙は目を見開く。

飛びずさった恒河沙。哭士は距離を詰める事は無く、その場に起き上がった。

「血統など……こんな血、誰が望んで欲するものか」

独り言のように呟く哭士。

「何？」

気が一瞬それた恒河沙。天井がミシリと音を立てる。

恒河沙の足が止まったその一瞬だった。

バキバキと激しい音を立て、部屋の天井の太い梁が恒河沙に向けて落下してきた。

恒河沙が哭士の攻撃に気を取られている間に、哭士は自身の能力で梁の端々を侵食し、落下させたのだ。

「こんなちやちなモンで俺に攻撃を仕掛けようとして……」

恒河沙の表情が一瞬にして引きつる。

足が氷によって床に固定されていた。剥がす事など狗鬼の力であれば造作ない。だが、落下している梁が接近している今、一瞬のこの動作が命取りになる。

「畜生がああ！！！」

激しい轟音と、恒河沙の叫びが同時に部屋の中に響き渡った。

1 38 ・ 本家の従者

「お見事です。早池峰様」

聞き覚えのある声が、哭土の耳に届く。

「！！」

梁の落下した埃で、周囲が見えない。咄嗟に哭土はその声の主に呼びかける。

「……レキ……？」

徐々に埃が落ち着き、声の主の姿が顕になってくる。哭土が壊した梁の隣に、屋敷の使用人、レキが立っていた。呆気に取られていた恒河沙が傍らに座り込んでいる。昼間のビクビクとした居ずまいとは大きく変わり、変に大人びた、毅然とした態度でその場に立っている。

レキは、軽く哭土に会釈をし、恒河沙に向き直った。

「聊か、やりすぎではありませんか？ 私が助けに入らなければ、貴方、戦闘不能になっていましたよ」

息を吐き出し、ゆっくりと言いつつレキ。

「レキ……！ てめえ……！」

レキによって恒河沙は救われた。だが恒河沙はその事が気に食わない。齒軋りをして、レキを睨み付ける。だが、レキは怯む様子はない。

レキは一つため息をつき、周囲を見渡した。哭土と恒河沙が争った事で、建物内は大破している。

「当主は勝手なことをして、籠女を閉じ込めた拳句、下の弊履は弊履で命令を破ってこのような大暴れ……。当主側の人間は、これだから……」

( 当主、側？ )

本家の中にもどうやら派閥があるようだ。哭士は二人の様子を静観した。

「……古参側の回し者が、口を出すんじゃないねえ！」

「強がるのは其処までに。貴方の身体はもうボロボロです。特にその腕は、一刻も早く籠女による処置を行わなくては、壊死してしまいます」

「黙れ！ 腕の一本なんか……」

恒河沙の言葉を遮るように強いたため息を吐くレキ。

「……仕方ありませんね」

鋭い動きで恒河沙前に立つと、額に中指を叩きつけるようにあてがう。トンと軽い音がしたかと思うと、興奮状態だった恒河沙は静かにその場に倒れこんだ。レキの小さな身体は、倍はあるうかという恒河沙の長身の身体を受け止め、肩に担ぐ。哭士に振り返り、レキが息を吐き出す。

「恒河沙がこのような行動に出るとは……、こちらとしても予想外でした。申し訳ございません」

淡淡とした物腰、自信に満ち溢れた表情。口元には余裕とも取れる笑みが浮かんでいる。

「……お前、一体」

何者だ。

哭士の口から思わず吐いて出そうになった言葉。姿形は同じだが、昼間のレキとはまるで別人だ。

「嫌だなあ、昼間もお話したじゃないですか。やっぱり、昼のように子供らしいほうが話しやすい……ですか？」

と、言い放つと、昼間見た人懐っこい笑顔を見せるレキ。だがその子供らしい笑みも、一瞬で消えた。

「私は本家の従者、それに違いはありません。ただし、私は当主に



忠誠を誓っているわけじゃない。だから貴方が、当主が欲しがっている色把さんを助け出そうとしているのを止めるつもりはありません」

「……それは、お前が古参側、だからか」

恒河沙がレキに咆えていた『古参側の回し者』という言葉。当主に対して、また別の派閥があるのだろう。

「……」

レキは静かな笑みを湛え、何も答えなかった。

「いずれ、お分かりになると思います……また、会いましょう。早池峰様」

恒河沙を軽々と背負い、部屋を後にしようとするレキ。

「待て！」

呼び止める哭士に、微笑んだままレキが振り返った。

「ああ、そうそう。色把さんを助けるなら急いだ方が良いでしょうよ。箱の外装には狗鬼を被う仕掛けが、中には、籠女の体力を奪う仕掛けがされていますからね。もう、中の籠女は体力が限界なんじゃないですかね」

「……」

目を見開いて箱を振り返った哭士。その隙にレキは音もなく立ち去った。

色把が閉じ込められている箱の前で立ち止まる。

立ち去るレキを見逃してしまっただが、哭士はそれどころではなかった。

目の前の箱に意識を向ける。感じる色把の反応が徐々に薄くなってきたことに焦りを覚える。

箱には、隙間なく、狗鬼の皮膚を焼きつかせる布が巻きついていて。哭士は布を引き千切ろうと手をかける。

「……！」

やはり、哭士が触れると同時に、肉の焼ける嫌な音と煙が、布に触れた瞬間に立ち上がった。だが今、哭士を動かしているのは、本能的な衝動だった。構わず布を引き剥がしにかかる。

爪が剥げ、手が焼け付いても、箱に手をかける事を止めようとはしなかった。指先の皮膚は布が触れるたび痛々しく焼け爛れていく。

箱に巻かれていた布の一部分を剥がし終える。現れた木の板を、何も考えずに突き破ろうとするが、思っていた以上に頑丈な造りの箱は、傷ついた身体に力が入らず、なかなか壊れない。

「……！」

残された力を振り絞り、ありつただけの力で拳を叩きつける。箱に伝わる振動は床を伝い、大破した建物全体を揺らす。剥がれずに僅かに残った爪も割れ、激しく出血している。だが、哭士の手は休まらない。

なんとか開いた穴に手を差し入れ、思い切り引き剥がす。箱の中に光が差し込むと、投げ出されたままの白く細い腕が哭士の目に映

った。

「色把！」

強い口調で名を呼ぶ。だが白い腕はピクリとも動かない。隙間から腕を伸ばすが、肩幅が邪魔をして色把に届かない。箱を破壊する手に、更に力がこもる。

はがれた箱の布の破片が、哭士の身体にまとわりつく。布が張り付いた部分は、哭士の皮膚を容赦なく焼く。哭士は構うことなく、箱の破壊を続けた。

ようやく哭士が身体を滑り込ませる事が出来るだけの穴が開いた。最早哭士の体は、先の戦闘の負傷も合わせ満身創痍だ。だがわき目もふらず、倒れている色把を抱き上げ、箱の外へと連れ出した。

色把の体は僅かに熱を持っているのみ。引き寄せた色把の身体に力は無く、細く白い腕はだらりと垂れ下がった。

今まで湧き上がったことの無い感情が哭士を支配していく。この人物を救いたい、と。

「色把……」

箱から色把を運び出す。ぐったりとし、相変わらず身体は冷たい。「目を開ける」

体温を上げようと頭を抱え、包み込む。以前触れた時のほんのりと温かい体温が今は感じられない。触れた身体の温度は低く、呼吸は哭士の聴力を持ってしても漸く聞き取れるほど浅い。

哭士の心中に焦燥が広がる。色把を抱き上げる哭士の腕に、更に力がこもる。熱い哭士の体温は、色把の肌になんげと広がっていく。

「俺は、お前が疎ましかつた。俺の残り少ない時間に……介入してきたお前が。勝手な行動をして、俺の全てを分かったような口を利く」

哭士の口から小さく息が吐き出された。

十八歳までのあと僅かな時間、出来る事なら思いを残さず、露のように消えてしまいたい、そう思っていた。

だが

言葉の話せぬ一人の少女と僅かに時間を共にするうち、哭士の中の感情は変わりつつあった。

常に苛立ちばかり覚えていた哭士は、日が経つにつれ、少女の行動に心中が凪いでいくようになる。

一度はそれを突き放そうとした。出来損ないのこの狗には……あと僅かで消えてしまう自分には、この感情は必要無いもの、と。

だが、抑えていた渴望は、兄の言葉を切欠に、こうして衝動となって現れてしまった。

この感情が、籠女を護る狗鬼の本能だとしても、俺は構わない

言葉には出さず、哭士は色把の顔を覗き込む。騙されていたとはいえ、自分の為に本家の神子になる事を決めた色把に、哭士は大きく揺さぶられていた。

その時であった。

色把が小さく息を吐き出し僅かに身じろいだ。

色把は、全身が力強い何かに包まれていることに気づく、沈んでいた意識が、ようやく戻ってくる。体が温かい。

(懐かしい、香り……)

まだ薄ぼんやりとしているが、さっきの箱の中ではないらしいことは分かる。

自分を包み込んでいた存在に気づいた。瞼を押し上げ、最初に見えたのは、切れ長の目、真っ直ぐに結ばれた口。

「哭士……？」

自分は腕の中に居る事に気づく。名を呼ばれた狗鬼は、双眸を細めた。

意識が半濁している色把は、彼の心中を察する事はできなかった。だが、彼の頬に無数の火傷のような痕があるのを見つける。

「……傷が」

無意識的に右手を哭士の頬に差し出す。自らの手の平の血と、哭士の傷が触れた瞬間、信じられないような速さで、哭士の傷が埋まっていく。

ほんの僅かに、驚いた表情をした哭士だったが、奥歯を噛みしめ、苦しいような、哀しいような表情で色把を見つめた。

【神】と一つになどさせるものか

一瞬色把の心中に哭士の強い思考が流れ込んできた。思わず色把は哭士の顔を見上げる。

哭士の唇が動いた。

「帰るぞ、色把」

確かに聞こえた。叶う訳がないと思いながらも、心の奥底で願っていた言葉だった。  
色扱は一度、だが力強く、頷いた。

1 39 ・ 氷解（後書き）

ここで【ウソブクヒツジ】第一部終了です。読んでいただいた方、本当にお疲れ様でした！

これより幕間を挟み、第二部に移ります。これからは是非お付き合い頂ければ幸いです。どうか、よろしくお願い致します。

## 第一部のあらすじ 登場人物（前書き）

第一部のあらすじと、登場した人物の簡単な紹介です。

第一部を読んでいない方にはネタバレになりますのでご注意ください。  
い。

不要の方は、次話にお進み下さい。



## 第一部のあらすじ 登場人物

【第一部のあらすじ】

十八歳を迎えるまでに、籠女との「契約」を結ばなければ命を落としてしまう狗鬼。

狗鬼として尊い家柄に生まれながらも、籠女との契約を身体が拒んでしまう哭士は、一八歳になるまでに数ヶ月を切っていた。契約を結べぬ苛立ちと寿命に対する諦めを抱き、日々の祖父からの指令に身を投じていた。

ある日哭士は対立する派閥、古参派の拠点ビルから「あるもの」を奪還するように命令を受ける。相棒の菊塵と共に警備を突破し、哭士の前に現れたのは、幼少の記憶と声を失った籠女、色把だった。

色把の護衛を命じられたものの、他人との関わりを不要とする哭士は色把を避ける。だが何故か哭士の心中はざわめいていた。

育ての親である祖母を思い、自身が育った家へ戻ることを願う色把だが、祖父から色把を護る事を命じられている哭士は、その願いを聞こうとはしない。色把は屋敷を抜け出し、自身の力で自宅へと向かう。籠女である色把の血を狙い、籠女为天敵、影鬼が襲い掛かる。襲い掛かる影鬼の前に、追いついた哭士が立ちはだかる。影鬼との戦いで傷ついた哭士を前に、色把は自身の祖母の生死の真実を確かめようとしたのだと語る。涙する色把を前に、哭士は色把が家に戻るまでの間、同行する事にしたのだった。

そして、比良野家に現れた、色把と瓜二つの少女。哭士は身体の自由を奪われ、少女は無理矢理に契約を結ぼうとする。だが、身体は契約を拒み、哭士はその場に昏倒する。色把の命を奪おうとする少女の前に、謎の男が現れ、少女を引き連れ闇に消えていった。

色把は哭士に対し、少しずつ心を開き始める。

契約を失敗した後遺症で伏している哭士に、自身も契約を願い出るが、その契約も失敗に終わってしまう。

そして色把を狙い、刺客ユーリ・ヴァルナーが姿を現す。哭土はユーリの能力を見抜き、戦闘は終着をみせるが、その直後、本家当主の狗鬼を名乗る男女の狗鬼が現れる。哭土に本家へと来るように言い残し、哭土を操る事のできる狗石と色把を連れ去ってしまう。

色把を取り戻すため、哭土はかつて自身を不要物と罵った本家へと向かうことを決める。

本家の当主から自身の狗鬼になるよう命じられ、拒む哭土だが狗石によって本家に拘置されてしまう。

真夜中、哭土を呼ぶ声に目を覚ますと、奇妙な風体の男が一人。男は自身が哭土の兄であると明かす。兄は色把が捕らえられ、後に命を奪われてしまう事を語り、色把を救い出すように言い残して消えた。

色把が捕らえられた箱に立ちふさがるのは、本家に奴隷のように使われる狗鬼、恒河沙。

激しい戦闘の末、止めを刺そうとする刹那、哭土の前には本家の使用人、レキが恒河沙と哭土の間に割り込む。まったく違う表情を浮かべ、哭土との再会を約束する言葉を残す。

満身創痍になりながらも哭土は色把を救い出し、自身の胸に抱く。

胸に抱いた色把を前に、哭土は本当に護らなくてはならないものに気付き始めていたのだった。

## 【登場人物紹介】

早池峰 はやちね 哭土 なくち

十七歳の狗鬼。氷を操る力を持つ。何故か身体が籠女との契約を拒んでしまう為、このままでは一八歳になった瞬間に命を落とす運命

を辿る。常日頃から無感情無表情、他人との関わりを持つことをあまり好まない。幼い頃から祖父に恐怖心を抱き、十七歳になっても直視が出来ぬほど恐れていたが、それが祖父の身体に埋め込まれていた自身の狗石の影響だったことを知る。

色把と出会うことで、少しずつ変化が見え始める。

比良野 色把

十七歳の籠女。代々強い力を持つ神子の家柄でもあり、時折他人の見たものを映像のように読み取る事がある。十歳よりも前の記憶が無く、声も出すことが出来ない。哭土達とは言葉を話すように唇を動かし、それを読んでもらうことで会話が成立している。自身が籠女であることをつい最近になり自覚した。

穏やかでおっとりとした性格だが、芯は強く、正しいことは貫き通す強さも持っている。

当初、哭土達には不信任を抱いていたが、やがて心を開き始める。

曾根越 菊塵

二十一歳の狗鬼。物質を反射させる能力を持つ。哭土の祖父、修造に仕え、哭土の相棒を勤める。客観的に物事を分析する能力に長け、参謀役となることが多い。

早池峰 修造

哭土の母方の祖父。株式会社ブリリアントという大手製薬会社の会長。

克彦から哭土の狗石を守るため、身体に狗石を埋め込んだことで、哭土から畏怖の目で見られていた。

筒井 マキ

早池峰家の家政婦。大きな屋敷を彼女一人でまわしている。非常に明るい性格で、細かいことは気にしない。

烏沼 克彦

哭士の叔父。だが、早池峰家と血は繋がっていない。哭士の父方の祖父の妾の子である。

顔に大きな凍傷の痕があり、幼い哭士につけられたものだと言語。哭士の父母の最期を見た唯一の人物。

何度も早池峰家に足を運び、金をせびるが、哭士の狗石が目的。

桐生

狗鬼や籠女に非常に詳しい医者。早池峰家の屋敷の近くに診療所をひらいている。

穏やかな表情の裏は、何を考えているのかを読むのが難しい。

黒古志 莉子

本家の当主に仕える狗鬼。物質の質量を自在に操る力を持つ。かつて、菊塵と同じ組織に属していた事があり、菊塵の事を「菊兄様」と呼ぶ。

黒古志 鼎

本家の当主。現在十五歳。幼くして本家の当主となった。哭士を挑発し、本家に残り自分の狗鬼になるように命ずる。

レキ

本家の使用人。おどおどとして気の弱そうな少年だったが、哭土と恒河沙の戦闘に割り込み、思いも寄らぬ身体能力を発揮するなど、底の見えない人物。

恒河沙<sup>こがしや</sup>

本家に奴隷として使われる弊履の族という狗鬼。電撃を操る能力を持つ。恒河沙という名は彼自身の名前ではなく、役割としてつけられた記号のようなもの。派手な赤い短髪に、顔中に付けられたピアスが光り、獰猛な印象を受ける。

## 第一部のあらすじ 登場人物（後書き）

あらすじ、人物紹介は試験的に投稿しています。  
修正が入ったり、削除する場合がありますので、ご了承ください。  
ます。

## 幕間 古参の者たち

「確かに僕は、哭土あいつの狗石を袖の中に入れていたんだ！ 絶対に失くすはずなんか無かった！ なのに……いつの間にか無くなっている……」

老婆が一人、薄暗い和室に正座している。そして向かい側には、幼い当主、鼎かなえが動揺した様子で座り込んでいた。深い皺が刻まれた老婆の顔から、今の表情は読み取れない。

「言い訳はいらぬ。何故勝手なことをした？ アタシの留守の間に勝手なことはすると言っていた、婆の言いつけが聞けなかったのかえ？ 弊履へいりまで屋敷に上げよって……奴は贅ニエを慰みものにしたろうとしたそうではないか。下卑た汚い狗よ。だから弊履は信用ならぬのだ」

老婆は吐き捨てるように言い放った。

「籠女を攫さらうのも、狗石を手に入れるのも、今が一番いいと思ったから！ 恒河沙じやうがしや……弊履へいりの族を使ったのも、僕は本家の為になると思っ……」

そこまで言いかけ、目の前の老婆の眼力に、口を噤む鼎。

「もう良い、鼎」

「だけど……！」

食い下がろうとする鼎を老婆は一喝する。

「聞こえんかったか！ 部屋に戻れい！」

身体をすくませる鼎。そのまま怯えた表情の鼎は、何も言わずに部屋を後にした。

鼎が部屋を去った暫くの後、襖が開き、和装の青年が一人、入つて来た。肌の色は白く、整った顔つきをしている。茶色がかった髪の毛。真つ直ぐ伸びた長い四肢。しなやかに老婆の前にやつてくると、静かに正座をした。

「お子様の玩具オモチャと籠女は、帰らせましたよ。良かったんですよ、これで」

柔らかな口調で、青年は老婆に話しかける。

「良い。あの籠女も元は忌いみモノ。本当に必要なのは『トリナ』の方じゃ」

高齢にしてははつきりとした話し方である。

「その為に、昔、処分しかけた不良品を使うのですか？」

青年の言葉に、ゆっくりと老婆は頷いた。

「まさか、ここで使えるとは思わなんだ。どうせいらぬ物じゃ、使つて捨てた方が良からう」

老婆は正座した膝の上に乗せていた手を軽く両の手で握った。

「……確かに、そうです。ただ、『彼女』がそろそろ限界に達しますよ。早いうちに手を打たなくてはなりません」

「そうじゃな、『トリナ』を一刻も早く手に入れなければならぬ。

アレを見張つておれば、護られている『トリナ』は必ず現れる」

老婆は曲がつた背を、ゆっくりと動かし、一度大きく息を吐いた。「ですが、向こうに警戒心を持たせてしまいました。まったく、あのお子様は余計な事をしてくれたものですよ」

青年は深くため息をついた。

「構わぬ。奴には、最後に仕事をしてもらわねばならぬ。これしきの事、さしたる事ではない」

老婆の言葉に、青年の口元に笑みが浮かぶ。



「そう、ですか。では、私は彼らの監視をする事とします」

青年は、老婆に深く一礼した。

「頼んだぞ。『トリナ』を引き出すには、早池峰できそこ哭な士いが必要なのだから、の」

## 2 1 佐々乃 苑司（前書き）

第二部、これより開始します。

引き続きお付き合頂けると大変嬉しいです！

## 2 1 佐々乃 苑司

「結構大きな街じゃないか……」

佐々野苑司は目に飛び込んでくる景色を見ながら一人呟いた。

街の中心から外れているものの、高い建物が連なっている。窓越しから見える景色は、殆どコンクリートの灰色と、窓にはられたガラス達が目に入っては消えていく。

ガタンガタンとゆれる電車特有の振動と、ビルとビルの間から差し込む光の温かさに心地良さを感じる。

電車のアナウンスが、目的地の駅の名前を告げた。昼時だということに、混雑している電車内では、隣に立っているサラリーマンが立ちながら居眠りをしていた。サラリーマンの肩が苑司の頭に当たり、すこし暑苦しさを感じていた所だった為、目的地のアナウンスに、ほっとした表情を浮かべる。

緩やかにスピードが落ち、これもまた灰色の駅が近づいてきた。

一人暮らし、かあ。

苑司は、ぼんやりと父の声を思い出していた。

急に、海外に行く事になってね。

二ヶ月前に、突然、父親から海外赴任が決まった事を告げられた。苑司の家族らは、一家の大黒柱の急な話に戸惑いを見せたものの、家族内の話し合いの結果、父に付いていくことにしたのだった。苑司も、同じく家族と共に海外に暮らすのだと、ぼんやり思っていた矢先だった。

苑司、お前は残りなさい。日本の方が、学業に専念できるだろう。

何故か苑司だけは、日本で暮らすようと父に言われたのである。海外で暮らすという事に少し抵抗を感じていた苑司は、日本に残ってよいのだと言われ、そのまま素直に父の言葉に頷いた。

もう、お前の住む家は手配を頼んでいるんだ。

頼れる親戚も居なかった苑司の父は、一人の友人に相談をしたのだという。

その友人は、とある会社の社長であり、かなりの資産を持っている人物なのだそうだ。

父は友人に依頼をした。自分の赴任を終えるまで、息子に力添えをしてはくれないか、と。

その人物は、昔の父に恩があるそうで、恩人の息子の支援を快く承諾してくれたそうだ。

よって苑司は、父の友人が経営する会社の近くで、一人暮らしをする事になったのである。苑司の住む事になるアパートも、その友人が手配をして、すでに住めるような形になっているらしい。

大きな会社を経営している父の友人とは、苑司はまだ会ったことはなく、手紙だけのやり取りが続いた。

手紙には、苑司がやってくる今日、会社で鍵を受け渡し、道案内がてら、そのままアパートに送っていく、といった事が書かれていた。その文面に、苑司の父も安心した顔を見せ、家族と共に海外に旅立っていった。苑司はこれから、父の友人の元へ向かい、アパートの鍵を受け取りに行くところなのである。

苑司の手元にあるのは、ボストンバックに詰め込まれた荷物とま

とまったお金、父親の友人の会社までの地図。そして、父から友人に渡すように言われているアルミ製のアタッシュケースがある。アタッシュケースは電車の網棚の上においてある。

「よっ……と」

苑司は背伸びをし、頭上近くにある網棚から手探りで荷物を引っ張り出した。背が低い苑司は、この動作が一苦労だった。

「あ！」

アルミ製のアタッシュケースは、苑司の手をすり抜け、車両内の床に叩きつけられた。一際大きな音に、乗客の視線が一気に苑司に集まる。アルミのアタッシュケースは、角の部分が凹んでしまった。

「スイマセン……」

小さな声で周囲の乗客に謝ると、そそくさと荷物をまとめ、降り口のドアに移動した。

大きく一揺れし、完全に停止をした電車。間もなくしてドアが開いた。

苑司はポストンバックを肩にかけ直し、右手にアタッシュケースを持つ。一つ大きな深呼吸をすると、電車から飛び降りるように駅に降り立った。

駅の改札を出た。この後はバスを乗り継いで会社まで向かう。父の友人との初めての面会に、少々苑司は緊張していた。

父の友人からの手紙には、会社での待ち合わせ時間が書かれている。もう一度手紙で待ち合わせ時間を確認すると、苑司はバス乗り場へと向かった。

## 2 2 ・忘れ物

「……ど、どういう事ですか？」

会社に着き、受付に父の友人との面会を依頼したが、返答する受付嬢の言葉に苑司は耳を疑った。

「……ですので、社長の結城啓二は、現在連絡が取れなくなっている状態です……」

困ったような表情を浮かべ、受付嬢は苑司に説明する。

「結城さん……、いえ、社長さんが失踪しちゃってるってことですか？」

「お答えできかねます」

受付嬢は首を振る。

「か……会社は？ アービュータスって大きな会社ですよ？ 社長さんがいなくなっちゃって、どうやって……？」

「役員で稼働させている状態です」

ええー……

苑司の足元がふらつく。父の友人に会って、アパートの鍵を受け取る。夜にはアパートに着いている。これが、苑司宛に出された手紙での手順だった。ここで結城に会うことが出来なければ……。

つまり、今日から僕の住む家が……無い？

それは困るのだ。家族は既に海外に旅立ち、自宅は引き払ってある。遠方に来ているため友人に頼れそうにもない。唯一、この会社の社長、結城 啓二が頼りなのだ。

「こ……！ 困ります！ 僕、どうしても結城さんに会わないと！ ほら、手紙にもこうやって面会する事に……！ 何か、アパートの鍵とか、そういうのは預かってないんでしょうか！？」

苑司がカウンターに乗り出す。

「……申し訳ございませんが、返答出来かねます。どうかお引取りを」

取り付くしまも無かった。

丁寧にお断りされ、打ちのめされたまま、苑司はアービュータスビルを後にした。もう外は日が落ち込み、薄暗くなっている。

「……事前に、ちゃんと連絡を取っておけばよかった……」

相手が大きな会社をまとめている社長という事もあり、自分から連絡を取る事に気後れしていた。手紙で、アパートの鍵の受け渡し場所、時間が伝えられていた事に、安心しきってしまったのだ。

「……今日はどこかに泊まるとして……これからどうしよう……」  
手元にまとまったお金はあるとしても、金額としてはホテルに数日宿泊できる程度である。

親から仕送りはしてもらえない事になっているが、仕送りまでにかかりの日数がある。ホテルに何度も泊まってしまえば、勿論、所持金はすぐに底をついてしまう。

「……」

思考をめぐらすも、自分の行く先に希望を見出せず、苑司は途方に暮れた。

「あれ……?」

ビルから少し歩いたところで、ふと気づく。

バックが、ポストンバックが、無い。頭の中が真っ白になる。

落ち着け、落ち着くんだ

昔からそそっかしい苑司は、自分に言い聞かせる。順に自分の行動を思い返す。電車から駅に降りた時は確かにあった。駅からバスに乗ったときも、膝の上においていたのを覚えている。ビル内では、カウンターの受付に話をしているときに、床に置いた。

「ビルだ！」

慌ててビルにとんぼ返りする。

受付嬢は、再びの来訪者に目を見開いた。が、苑司はそれどころではない。

受付カウンターの前には、カバンらしきものは見当たらない。

「あのっ！ここに置いてあったポストンバックがあったはずなんですけど！？」紺色の、白のロゴが入っているバックが！」

床を指し、ポストンバックの在り処を尋ねる。カウンターに乗り出し、もう苑司の足は床に付いていない。

「いえ……あの……？」

困惑している受付嬢の表情に、苑司はここまで来て少し冷静さを取り戻す。苑司のカバンは床に置いていけば、受付嬢からは見えなはずである。

「し……失礼、しました」

「もしかして、これの事かい？」

中年の女性の声がある。苑司は勢い良く振り返ると、背後には、清掃会社の格好をした中年の女性が立っていた。左手にはモップとバケツ。右手には……

「そ！……それです！」

間違いなく、自分が持つてきていたポストンバックだった。

苑司は、安堵の表情を浮かべる。

「これねえ、トイレのゴミ箱の上に置いてあったのよ。いらないんだと思って、持って来ちゃったんだけど。良かったわね、見つかって」

「……トイレ、のゴミ箱、ですか？」

はて、自分はこのビルのトイレなど利用していない。嫌な予感が、苑司の脳裏をよぎる。



ポストンバックを受け取り、中を覗き込む。

「……無い」

すぐさま異変に気づく。

「財布が……！ お金が入った封筒も……！」

財布から始まり、親から預かっていた大金の入った封筒、携帯、ゲーム機まで、金目の物が全て無くなっていった。残っているのは、着替えくらいのも物だった。完全に盗難である。

再び苑司は絶望の淵に立たされた。周囲の雑音が消えて行く。スカスカになってしまったポストンバックの感触だけが苑司に重い現実を突きつけていた。

清掃婦がなにやら慰めの言葉をかけていたが、苑司の耳には届かなかった。

## 2 2 ・忘れ物（後書き）

失踪している社長、「結城啓二」は第一話で哭土が捕らえた男です。  
話題には出るものの、出番は一回こっきりだったので……念のため（笑）

## 2 3 ・さびれた公園

「犯人、見ていないんでしょ？ それじゃあ、ちょっと捕まえるのは難しいかなあ」

白髪が目立つ警官は、被害の調書を取りながらも、諦めたほうが良いと遠まわしに諭していた。

「でも、中学生がこんな大金、持ち歩いているの、お巡りさんは感心しないなあ」

僕、高校生ですけど

もう、言い返す気力も無かった。

ぐったりとして、交番を出た。この街に来てからというもの、何一つ上手くないかない。それどころか、明日からの自分の生活さえも危うくなってきている。携帯も盗まれてしまい、家族に電話も掛けられない。この上ない孤独感が苑司を襲う。

とにかく、静かな場所に行きたかった。繁華街を抜け、マンションの隙間にひっそりと存在していた公園に辿り着いた。利用者はあまり無いらしい。遊具は所々さび付き、芝生も手入れがされていないようで茫々に草が伸びていた。

大きな木の下には、ベンチが備え付けてある。見知らぬ土地を歩き回って疲れた苑司は、その場に腰を下ろした。同時に、深いため息が漏れる。思わず頭を抱え込んだ。

結局、まともに自分の手に残っているのは、行方不明になった社長宛のアタッシュケースだけである。

苑司は暫く微動だにせず、アタッシュケースを見つめた。

「何か……入ってたりしないかな……」

無意識に出てしまった言葉に、苑司はハツとして首を振る。

「駄目だ……預かり物じゃないか……！」

流石に、他人に渡す物を勝手に開けるのには、ためらいが生じる。だが、今自分が置かれているこの状況は、何かにすがりたい一心だった。

「……」

しばらくの間考えあぐねた結果、やはりアタツシユケースを開けることにした。

「……父さん、結城さん、ごめんなさい……！」

ベンチに腰掛けた自分の横にアタツシユケースを置き、取っ手の横の金具を広げる。パチンという金属の弾ける音が響く。これでは開くはずだ。アタツシユケースの縁に手をかけた。

「あ……れ？　口が固いぞ」

二枚合わさったアタツシユケースの上蓋はがっちりと閉まり、開かないのだ。他にロックがあるのか、ぐるりとケースの周囲を見渡すも、先程の金具しかロックらしきものは見当たらない。苑司の心中に焦りが生じる。

今は、手元に残ったこのアタツシユケースが頼りなのだ。苑司は咄嗟に公園内に落ちていた釘を拾い、無理矢理アタツシユケースの口にねじ込む。やはりケースはピッタリと閉じてしまっており、釘はなかなか入っていかない。

と、ここで、昼間電車内でアタツシユケースを落とす、角の部分がゆがんでいるところを見つけた。苑司はすかさず、そのゆがみの部分に釘を差し入れ、こじ開けに掛かる。

ギツ、ギツと金属の擦れる音。徐々に、隙間が広がっていく。

「よし……もう少し……」

指が入るくらいの隙間が開いた。ここまで開いてくれば、後は簡単である。

「……何か、頼りになるものが入ってますように……！」

力任せに、勢い良くアタツシユケースを開く。ここで、小さく「プシュ」と、何かが噴き出す音がしたが、苑司の耳には届かなかった。

「……なんだ、こりゃ？」

ケースの中身に、苑司は困惑の表情を浮かべる。アタツシユケースの中は、黒いウレタン素材になっていて、真ん中には小さなビンが一つ。

ビンを取り出し、振ってみる。中身は透明な液体、ラベルも何も貼られていない。蓋にはローマ字で一つの言葉だけが書かれていた。

「K、O、H、J、I、N……コージン？」

聞いたことも無い単語に、意味はさっぱり汲み取れない。ため息をついて、ビンをアタツシユケースに戻す。

結局、今の自分に役立つものは何も入っていなかった。

「……本当に……どうしよう……」

八方塞もいいところである。苑司は頭を抱え込んだ。

苑司の耳に、聞き慣れない音が届く。テレビの砂嵐や、ラジオのノイズにも似ているが、それよりも生物的な何かを感じさせる音だった。

周囲を見渡す。辺りは、生い茂った草であまり見通しは良くない。公園内には街灯も立っているが、申し訳程度といった位で、明るさはあまり無い。

「猫、かな」

注意深く辺りを見渡した。特に変わった様子は見受けられない。アタツシユケースに、目を落とそうとした矢先だった。

「!?!」

一瞬、視界の端に、妙なものを捉えた。光る小さな二つの玉、である。

もう一度、光の玉が見えたところに視線を戻す。

……見間違いではなかった。横に並んだ、不自然に爛々と光る二つの小さな光。苑司はそれを見て、何故か鳥肌が立った。嫌な気配を無意識に感じ取っていた。

二つの光は同じ間隔を保ちながら左右に振れ、こちらに近づいて来る。

おれ おれおれ

二つの光が動くたび、耳障りな音が苑司の耳に届く。

先程の音も、この光の正体が発しているもののようにだ。

「何……？ 何なんだよ？」

冷や汗が背中を伝っていく。動物……ではない。

アタツシユケースと、軽いポストンバックを抱え、公園の出口まで横歩きをして距離を取る。が、光の玉は、明らかに苑司に向かっ

て距離を縮めてきている。

「わっ」

茫茫と生えた草の中に空き缶が落ちており、苑司は空き缶に足を取られた。バランスを取ろうと体がぐらつく。足元に一瞬視線を落とした苑司。

わんわん わんわんわんわんわんわん

激しいノイズ音を立てて、一気に光の玉が距離を縮めてきた。その動きは敏捷で、気が付いた時には苑司の目の前まで迫ってきていた。

ここで、苑司はこの不気味な生き物の姿を捉える。

「何だよ……！ なんだよこれええ！！」

恐怖のあまり声が裏返る。一言で言ってしまうえば、黒い毛玉のような物だった。だが、身体は薄く透け、モヤモヤと体が蠢いている。数本生えた足で移動する姿は、頭の無い蜘蛛のようだ。

化け物！

認識するのに時間は掛からなかった。

誰か、人のいるところへ！

助けを求めなくてはいけない。だが、苑司の足は地面に根を張ったように動こうとはしない。

化け物との距離が縮まる。

死にたくない！ まだ死にたくない！

「うわあああ！！」

腹の底から叫び声を張り上げた。

## 2 4 ・襲い来る影

突如、苑司に向かってくる化け物がぴたりと足を止めた。

「……………なんだ？」

化け物の反応に、苑司は辺りを見回した。苑司の足元に、小石が転がる。

猫が威嚇をするような唸り声を上げ、化け物は公園の入り口

小石が飛んできた方向　　に体を向けた。

化け物が向いている方向に苑司も目をやると、少女が一人、街灯に照らされて立っていた。肩までのまっすぐな黒髪、真一文字に結ばれた小さな口。

少女が振りかぶり、影に向かって石を投げつける。

小石が化け物に当たり、黒い生き物は数歩後ずさる。二個目、三個目と、少女は続けざまに石を化け物に向かって投げつける。続いて投げた石は化け物に当たりはしなかったものの、化け物を怯ませるには十分な効果を上げた。

助けに、来てくれたのか？

少女の表情に恐怖は見られない。少女は、手を大きく振り自分の方へ来るように促す。だが……

「足が……………！」

恐怖で足が鉛のようになってしまっている。足の動かし方を忘れてしまったようだ。



苑司の様子を察したのか、少女はこちらに向かって駆けてくる。  
「危ない！」

思わず苑司は叫んだ。同時に、少女に向かって飛び掛る影。

少女は、咄嗟にその場にしゃがみこみ、影をやり過ぎそうとするが、影のほうが早かった。

苑司は思わず声を上げる。影の鋭い足は少女の背中を掠り、少女はその勢いで地面に倒れこんだ。

少女は、ゆっくりと体を持ち上げた。どうやら、無事のようにだ。

「痛っ！」

少女に気を取られていた。黒い影が苑司の腕を掠め、苑司はその場にしりもちを付いた。少女を襲った化け物が、苑司の脇をすり抜けていったのだ。化け物が掠った箇所はみるみるミミズ腫れとなった。

相変わらず足は鉛のように動かない。しりもちをついた体を必死に持ち上げようとすが、体は一向に言うことをきかない。

猫の威嚇のような声は続いている。更に苑司に危害を加えようと、一定距離を保ち、苑司に狙いをつけている。

と、その時だった。

草を踏みしめる音が一瞬だけしたかと思うと、突如、自分の体が

持ち上げられた。

「うわっ！」

混乱した頭で必死に状況を探る。首が苦しい。苑司の服の襟首が誰かに掴まれていた。

頭を必死上げる。が、自分を軽々と持ち上げた人物の顔は今の体勢では見る事が出来ない。苑司の視界には、その人物の黒い靴とジーンズしか見えない。靴は男のものだった。

「な！ ななな……何！？」

突然の男の登場に事態が飲み込めない苑司は、情けなく声を上げるのみだった。

苑司の体が地面にゆっくりと降ろされる。

自分の立っていた場所を振り返ると、そこにはあの影が蠢いていた。飛び掛ってきた影から苑司を遠ざけてくれたらしい。

傍らに立っている人物を見上げる、背の高い男性であった。顔立ちは刃物のような鋭さを感じさせる。苑司には見向きもせず、周囲を素早く見渡している。

「八体か」

舌打ちと共に、低い声で男は呟いた。

男の声に周囲を見渡すと、先程の不気味な光の玉が複数、苑司と男を円状に取り囲んでいた。

「増えてる……！？」

「黙ってる」

男が言い放った言葉の威圧感に苑司は慌てて口を閉じた。

うち、遠巻きに見ていた一体が、円から飛び出し、苑司に向かって飛び掛って来た。耳障りな雑音が、大きくなってくる。

「動くな」

一言、苑司に指示を出したかと思うと、男は素早く化け物に反応し、足を伸ばすと化け物を踏み潰した。一際激しいノイズ音が苑司

の耳に届くと、潰された影の化け物の目玉から光が消え、体は蒸発するように暗闇に溶けていった。

わんわんわん わんわん わんわんわん わん

一体の突撃を皮切りに、周囲の円が崩れ、化け物達が一斉に襲い掛かってくる。男に慌てる様子は無い。苑司は、男の『黙ってる』の命令を必死に護り、叫ぼうとする口を手で必死に押さえている。

飛び掛る化け物に右手を払い、かき消す。傍らからもう一体、身体を半回転させ、右足で影を地面に叩きつける。軸足になった左足に牙をかけようとする影にも、瞬時に飛び上がり蹴り飛ばす。

動きに一つの無駄もない。

「伏せる！」

男がにわかに大きな声で苑司に言い放つ。

「へ？」

苑司は咄嗟に反応できない。と、突然化け物が苑司の頭に飛びついてきた。

「うわ……！うわあああ！！」

重さは何も感じない。だが、鋭い爪があるのだろうか、頬を引っかかれ、パニック状態に陥る苑司。

「落ち着け、動くな」

頭を振り、影を払おうとしている苑司に男の声は届かない。

その様子に、仕方が無いといった様子の表情の男。一瞬男は目を細めた。

鋭い音が一瞬響き渡ったかと思うと、苑司の頬をつめたいものが掠めた、気がした。

壊れた玩具の様に手をバタバタしている苑司の肩に手を置く男。  
「もういい、終わりだ」

肩に乗せられた男の手に、はたと動きを止める苑司。気づけば、自分の顔に飛びついてきた影の動きが止まっている。

残っていた化け物達も同じように動きを止め、何故か全身が白く結晶のようになっていく。

頭に飛びついてきた化け物も、動きが止まり、苑司が頭を振ると、簡単に落ちた。

バリン、という音と共に、化け物が砕け散る。化け物の身体は、先程と同じように闇に溶け消えた。

苑司は周囲を見渡す。と、男を中心に地面が放射状に白くなっていることに気づく。化け物の身体に付いていた白い結晶と同じものだ。

苑司は白い物体を手で触ってみた。ひやり、とした瞬間に、白い結晶は水に変わる。

「じ……氷？」

何がどうしてこうなったのか、苑司の頭の中は混乱している。傍らに立っている男から、大きなため息が吐き出された。

呆然としている苑司を余所に、少女が男の元に駆け寄ってくる。

「危険な行動をするなと言ったはずだ」

男は、少し強い口調で少女に言い放つ。苑司を救う為に、化け物に石を投げた事、苑司の元に走り寄って行った事を言っているのだろう。それに対し、少女は一生懸命男に向かって口を動かしているが、苑司の耳には届かない。余程声が小さいのだろうか。

「……まあいい。今度は先走るな」  
男には少女の声が届いているようだった。男の言葉に、頷いた少女を見る限り、会話は成立しているようだ。

「あの……！ さっきの化け物は一体……？ それに、何で突然氷が……」

苑司は思い切って声を張り上げる。

男は眉間に皺を寄せ、苑司の声に顔を向ける。鋭い男の目つきに、苑司は怯んだ。

「あの……？」

あまりに長い沈黙に、苑司は声をかける。

「少し待ってる」

小さく静かに苑司の言葉を遮ると、携帯電話を取り出し、どこかに連絡を取り始めた。

静かな公園内に、コール音が僅かに響く。やがて、電話口に誰か出たようだった言葉は聞き取れないが、電話口の相手は若い男のようだ。電話口の声を待ち、目の前の男は徐に話し出す。

「……一つ聞きたい。影鬼は一般人も襲うのか」

なにやら返答する声が電話から漏れてきている。男は、相槌も打たずに黙って聞いている。

「……子供が、襲われていた」

僕、一応高校生なだけだ。

ここで言い返しても、あまり意味が無いような気がし、苑司はそのまま男が通話を終えるのを待つことにした。

「……そうだ、見られた。全てじゃないが」

ここでチラリと男が苑司を見る。苑司は咄嗟に目を逸らした。男の目は苑司に少し恐怖感を与える。

「仕方が無いだろう」

語尾を強める男。電話口の先では、小さな声が何やら話を続けている。

「……連れて来ればいいんだな」

一方的に電話を切った男は、苑司に向き直った。

「来てもらおうか」

徐に言い放つ男の言葉に、苑司は目を丸くする。

「ど……どこにですか？」

主語が無い男の言葉、そして今しがた起こった訳のわからない出来事に、正直苑司は混乱していた。

「……医者、の所、だ」

何がどうして、こんな事になるんだ……？

混乱した頭では、答えなど到底導き出す事が出来ない。男の隣に静かに立っていた少女も、苑司の肩を軽く叩く。

『いこっ』

短い言葉は、口の動きでなんとなく分かった。少女の大きな目に吸い込まれそうになりながらも、苑司は少女の言葉に合わせて、一緒に頷いてしまっていた。

とりあえず、良かった、のか？

兎に角、今夜は雨風を防げる場所に行く事ができそうだ。さつさと歩き出している男と、苑司を手招く少女の後を、苑司は黙って付いていくことにしたのだった。

## 2 5 ・荷物の秘密

「へえー。これはこれは……」  
白衣を着た男性は、嬉しそうな声を上げ、手元の資料をしげしげと見つめた。

小さな診療所につれてこられた苑司は、訳のわからないまま診察室に通されたのだった。あの化け物は何だったのか聞こうとしたのだが、白衣の男性は半ば強引に採血やら何やらの検査を続け、苑司はなかなか口を挟めなかった。

夜も更け、患者は勿論居ない。光が漏れる診察室には、苑司と、目の前に居る白衣の男性、自分を助けてくれた少女と男、そして新たに、眼鏡をかけた男性が加わった。

「どうなんですか？ 桐生さん」

眼鏡をかけた男性が、白衣の男性に問う。白衣の男性は、桐生と  
言うらしい。

「うん、とつても興味深いね」

満面の笑みで言い放つ桐生。もったいぶっているのか、中々先を話そうとしない。

「早く先を言え。ヤブ医者が」

苛立った様子で男が桐生に言い放つ。

「あはは、ここ一週間のうちに、大分性格が丸くなったと思っただけ  
ど、やっぱり酷いなあ 哭士君は」

朗らかに笑う桐生に対し、男は言葉を冷たく言い放つ。先程自分を救ってくれたこの男は哭士、苑司は名前を一人ずつ心に刻んでゆく。

「うん、佐々乃君といったかな。今日、あの影に襲われる前、何か  
変なことは無かったかな？」

桐生は、優しげに苑司に問いかける。

「へんな事……ですか？ もう今日は色々なことがありすぎて、何がおかしいのか分からなくなっています」

苑司は首を振って、今の心境を素直に桐生に告げた。

「そうかそうか。じゃあ、今日、どこに行って何をしたのか順を追って話してくれるかな？」

「……僕の行動、ですか？」

さっぱり桐生の真意がつかめない。

「うん、ちよっとね。今日、君の身に絶対に何かがあったはずなんだ。あの化け物を呼ぶきっかけになる出来事が」

苑司は、記憶を辿り今朝からの自分の経路を、順に話をしていた。話が詰まったり、上手く言い表せない状態になっても、桐生は朗らかな笑みを湛えたまま、丁寧に相槌を打っている。哭士はというと、苑司の話に耳を傾けてはいるものの、熱心には聞いていないようだ。

「そこで、アービュータスビルで、鍵を受け取る約束を……」

……

「アービュータス？」

ここで、哭士と眼鏡の男性が反応を見せる。少女も少しだけ表情が強張った気がした。

「はい、アービュータスの社長と、僕の父親が友人で、アパートを手配してもらったんです。あと、荷物を渡すようにって」

「その荷物は、まだありますか？」

眼鏡の男性は物静かに話す。眼鏡の奥の目が真剣そのものだ。

苑司は頷くと、眼鏡の男性にアタッシュケースを差し出した。

「……僕、開けちゃったんです。貴重品が全て盗まれてしまって、どうしようもなくなっちゃったから……」

不自然に縁が曲がってしまっているアタッシュケースに、言い訳



をするように苑司は付け足した。

「！！！」

アタツシユケースを手を取った瞬間、眼鏡の男性の頬が強張る。

「菊塵君、どうかしたかな？」

菊塵のこわばった顔に、桐生が促す。

「桐生さん、見てください」

菊塵が指し示す箇所、診療室にいる全員が注目する。

「はい、なるほどなるほど」

菊塵の指先を見、桐生は声を上げた。菊塵が指し示したのは、アタツシユケースの縁。苑司は最初気づかなかったが、小さな吹き出し口のようなものが付いている。

「哭土君、このウレタン、ちよつと剥がしてみてください」

桐生がアタツシユケースを差し出す。哭土は黙って受け取ると、アタツシユケースの内部に張り付いたウレタンを驚づかみ、いとも簡単に引き剥がした。

「やはり、な」

驚いている苑司を尻目に、アタツシユケースの底をみとめ、哭土は呟いた。

ウレタンの下には、簡単な装置が取り付けてあった。装置には小さな薬品のビンのようなものがくっ付いている。

「これで、二個目だね」

桐生は眼鏡の男性に確認するように言い放つと、苑司に向き直った。「このアタツシユケースは、特殊な方法じゃないと開かない仕掛けになっているんだよ。無理矢理このアタツシユケースを開けると、開いた人間に、この薬品が吹きかけられるようになってるわけ」

しげしげとアタツシユケースの装置を興味深げに見つめている桐

生。

「それで、薬品の効果って言うのが……」

予想は出来ていたが、苑司はその先を聞いてみた。

「そう、あの化け物『影鬼』を呼び寄せる薬品だね。中身は相当外部に漏らしたくないものなんだろうね。一般人は影鬼に襲われたらそりゃもう、どうしようもないだろうから」

安穩と言い放つ桐生。

「で……！ それで、この薬品は落ちるんですか！？ お風呂に入ったら取れるんでしょうか！？」

あの化け物とは、二度と遭遇したくない。思い出すだけで、鳥肌が立ってしまう。

「うーん。微量に皮膚に浸透しちゃってるんだよねえ。お風呂に入つて、いい汗流しても、成分は暫くしないと取れないかなあ」

そんな満面の笑みで絶望的なこと言っただけ欲しくなかったなあ……。  
がっくりと肩を落とす苑司。

「……」

桐生は黙ってアタツシユケースの中に入っている小瓶を見つめている。

「桐生さん、それに何か心当たりでも？」

菊塵が桐生の様子に声をかける。

「んー、この瓶については、僕は分からないなあ。ただ、このアタツシユケース、面白いと思ってるね」

笑みを崩さず、空になったアタツシユケースを見つめながら桐生は言う。

「どういうことでしょうか？」

菊塵は哭土から受け取ったアタツシユケースを診療台の上に置き、

問う。

「うーん、何から話せばいいのかなあ」

迷った様子を見せた桐生だったが、やがて全員の顔を順に眺めながら語り始めた。

「彼に付着した狗鬼を呼び寄せた薬、僕が作ったの。昔、革新派の研究室にいた頃にね」

あつさりと、だがとんでもないことを言い放つ桐生。

「じゃあ、そのエイキだかを寄せなくなるようにするのも、すぐに出来る……んですよね!？」

苑司が桐生に言い寄る。だが、桐生の表情は変わらない。

「それが、僕が作った当時と同じ成分であれば、ね。それを開発したのは、僕が若い頃なの。それこそ、もう二十年以上前になるよ。多分、僕が研究室を離れてからも、この薬品は改良されているみたいだね。今、簡単に成分を解析したけれど、僕が調べていた当時ものとは大分かけ離れたものになっているし。もっと解析しない事には何とも言えないよ」

「……」

苑司は、桐生の言葉にガツクリと肩を落とした。

桐生は話を続ける。

「それでね、気づいたんだけど、アタツシユケースの装置や中身からして、この荷物は、革新派が用意したモノ、だよな？ それを何故、保守派であるアービュータスの社長、結城啓二宛てに届ける事になっていたのかなって、そう思ったの。革新派の方からも特にそういう話は出ていなかったんでしよう？」

桐生は菊塵を見上げる。菊塵はその問いにすぐさま頷いた。

「ええ。こちらは何も聞いていません。確かに、妙ですね。保守派、革新派の一部で、なにか繋がりがあるということでしょうか」

菊塵は、ちらりと苑司を見る。

「このアタツシユケース、お父様は何処から受け取ったかは、聞いていませんか？」

菊塵の質問に、苑司は色々思考をめぐらすが、アタツシユケースは父が最初から持っていたもの、としか印象が無い。

苑司は、菊塵に対して、首を横に振った。

その後、菊塵は苑司の父の名前・勤務先を聞き、調べておきます。と話を切った。

「この瓶、僕が貰っちゃってもいい？」

アタツシユケースの中に入っていた小さな瓶を指先で振る桐生。

「そうですね、恐らくアービュータスの社長が必要としているのなら、狗鬼、もしくは籠女に関するものなのでしょうね。専門的な知識のある桐生さんが持っていたほうが良いでしょう。いいかな、佐々乃君？」

瓶を桐生に渡してもよいか、という事だろう。渡す主が居なくなってしまうのだから、と苑司は考え、菊塵の質問に頷いた。

「社長さん、何処に行っちゃったんでしょう」

「結城は戻ってこない」

哭士の言葉に、菊塵は苑司に見えぬように小さく首を振る。

「……だろうな」

最後に、憶測になるように哭士は付け足した。

「え」

苑司の表情が固まる。

「しかし、彼の住処がなくなってしまったのは困った事ですねえ」

菊塵は、眼鏡を押し上げ、誰ともなしに言い放つ。

「どうだ、哭士、佐々乃君をしばらく泊めてあげては？ これから

彼は色把さん以上に影鬼に襲われやすくなる。影鬼の寄らないお前の家が一番安全だろう」

「……」

哭士の眉間の皺が深くなる。

と、その様子に、色把と呼ばれた少女が哭士の腕を軽く拳で数回叩く。困ったような表情を顔に浮かべ、哭士を見上げる。苑司の宿泊を促してくれているようだ。哭士は一度大きくため息をついた。

「……仕方ない」

渋った様子の割には、色把の押しに随分あっさりとは滞在を許した哭士に拍子抜けしながら、苑司は真っ直ぐ哭士を見た。

「あ、ありがとうございます！」

大きく頭を下げた苑司に、哭士は反応に困ったのか、ふいと横を向いた。

## 2 6 ・契約のしるし

桐生が早池峰家に連絡をすると、程なくしてマキがやってきた。苑司はマキに連れられ、一足先に桐生診療所を離れていった。

診療室内には、哭士、色把、菊塵、桐生の四人。

「ん？ 色把さん、怪我されてます？」

桐生が、色把の異変に気づく。色把は桐生の言葉に頷くも、大丈夫である身振りを桐生に返した。公園で苑司を影鬼から避難させようとその時は必死だった。今もさほど痛みを感じていない。

「色把、診てもらえ」

哭士は色把に短く言い放ち、診療室入り口近くの椅子に掛ける。

「そうです。影鬼にやられたのでしたら、見せて下さい。万が一の事があつては大変ですから」

色把は頷き、桐生に怪我をした首の後ろを見せた。桐生が失礼、と色把に断りを入れ、確認する。

と、一瞬桐生が妙な表情を浮かべる。

「傷は……大したことはないのですが……」

何かをふと発見した素振りであった、桐生は色把に問う。

「どうか、されましたか？」

菊塵が桐生を促す。

「色把さん、以前に狗鬼と契約を？」

まったく覚えの無い質問に驚き、色把は強く首を振る。

「どういうことだ？」

少しの間を置き、哭士が問う。

「いえ、契約を結んだ後というのは、籠女も狗鬼も首の付け根部分に印が現れるんですが」

そう言つて、桐生は菊塵を手招いて近くに寄せると後ろを向かせた。おもむろに菊塵の襟首を掴み、スーツの襟とワイシャツの襟を一緒にぐい、と下げた。菊塵は『ぐっ』と苦しそうな声を上げる。首の付け根を人差し指で軽く叩くと、模様が浮かび上がった。

「ほら、菊塵君の場合も、華のような印が出ているでしょう。これが、契約を結んだ後、狗鬼に浮かび上がる印です。契約を結んでいない哭士君にはコレが無いんですね。……いやあ、それにしても見事な印だ」

苦しそうにしている菊塵を余所に、印が現れた瞬間、にわかには嬉しそうな表情になる桐生。やはり、狗鬼・籠女のことになると、周りが見えなくなるらしい。浮かび上がってきた模様は、痣のように見えるが、細かな部分まで美しく表れている模様は、やはり印と言い表すのが適当であつた。

「……桐生さん、言ってくれば印くらい見せますから」

「ああ、ゴメンね」

菊塵の言葉でふと我に返り、首を開放する。軽く首が絞まっていた菊塵は、咳払いをしながら襟を正した。

「籠女にも、結んだ相手の狗鬼と同じ印が現れます。これで自身が危険だという事を、印を通じて狗鬼に伝達するわけですね。色把さんにも、印のようなものが付いているので既に、狗鬼と契約を結んでいる、と思つたのですが。これは印、でいいのかな……？」

自分の首の後ろにある為、印は見る事が出来ない。色把は周囲の人物たちの表情を見渡した。

それにしても、自分に契約の印らしきものがあるらしいという、自分にまったく覚えの無い事に正直困惑していた。狗鬼を知つたの

はこの数週間の間のことなのである。契約など、結べるはずも無い。桐生は、というといつの間にか手元に持ってきていた資料をばらばらと捲っている。

「私も一通りの狗鬼の印は見ていて、どのようなものかは分かっているつもりだったんですが……色把さんのこの印……：狗鬼の契約によるものなのか、少々判別が辛い。痣のようにも見えるし、印と言われれば印にも……」

「……はつきりさせろ」

やや苛立った様子の哭士。

「そうだ、哭士の印じゃないのか？ 一度契約を試みているだろう？」

思いついたように、菊塵が声を発する。

「いえ、哭士君の方には今も印が現れていません。哭士君の印では無いと思われます。いやいや……：実に興味深い」

しげしげと色把の印を見やり、一人で頷いている桐生。色把は身の振り方が分ならず困惑する。

全員、次の桐生の言葉を待つが、桐生は一向に言葉を発しようとし無い。「判別が辛い、というの？」

自分の世界に入ってしまった桐生を、菊塵が呼び止める。

「ああ、普通ですね、印というのは普段は外に出ていないんです。何らかの刺激を与えるか、本人の意思で浮かび上がってきます。ほら、こんな風に」

「ぐっ」

そういうと、またもや桐生はおもむろに菊塵の襟首を引き下げ、指で首の後ろを叩く。薄ぼんやりと、印が浮き上がってくる。



「桐生さん……」

「ああ、失礼失礼。ですが、色把さんの物は、痣のように常時首の後ろに現れています」

色把は、今も首の後ろを桐生に見えるようにしている。哭土、菊塵が見つめているところを見ると、色把の印は消えてはいないらしい。

「契約を結んで印が出るのは分かった、だが、印をつけた狗鬼が死んだ場合はどうなるんだ。こうやって痣になって残るんじゃないのか？」

冷静に話を聞いていた哭土が桐生に問う。

「そういう場合は、籠女側に現われていた印が消失します。後に残るといふ事はありません。契約をどちらかが破棄した場合も、籠女側の印が消えます。ですから、色把さんのように、痣のような形で残り続けるということは無いんです」

色把は、哭土の顔を見上げた。哭土はいつものように眉間に皺を寄せ、不機嫌そうな表情を浮かべている。だが、色把には、困惑している様子押し隠そうとしているように見えた。

## 2 7・重い言葉

「そういえば、哭土君、色把さん。早池峰家に戻るのは久しぶりでしょ？」

会話が途切れたところで、桐生は二人の顔を見つめ微笑む。

哭土と色把は、本家を抜け出した後、一週間、菊塵の部下達と共に早池峰家から離れ、本家の様子を窺っていたのだ。

「哭土はともかく、色把さんを取り戻そうと追いかけてくる、と見ていたんですが」

「ちらり、と菊塵は哭土を見る。」

「こちらの様子を探っている者は無かった。一週間の間、全く追っ手の気配がしない」

他の狗鬼より知覚が優れている哭土が言うのであれば、ほぼ間違いはない。

「僕の部下も、この二人の周囲にいましたが、本家の追っ手らしい者は無かったそうです。ここまで何も無いと逆に不気味ですね」

菊塵は首をかしげた。

「本家から、修造さんには何か連絡は無いの？」

哭土の祖父、修造は、哭土が移動をしている一週間間に怪我の治療を終え、早池峰の屋敷に戻っていた。菊塵は桐生の問いに首を振る。

「マキさんからも、そう言ったお話はありませんでした」

「そっかそっか。ところで、色把さんはこれから、どうするの？」

哭土君と一緒に居るの？」

一旦は早池峰家に世話になる事になったものの、本家からの使者に攫われる等、度重なる出来事に、色把はまだ、自分がこれからどうするのか、という事を話してはいなかった。

色把は、身を挺して自身を守ってくれた哭士に何か恩を返したい、籠女として契約は結べずとも、何かしら、制約を外すための力添えができれば、そう思っていた。

できるのであれば、哭士の制約を外すことが出来るまで、早池峰の家に身を置かせて欲しい、と口を開こうとしたその時、であった。

「色把には家を出てもらおう」

哭士が口を開く。その言葉に、色把はハツとした表情で哭士に振り返る。

「……哭士」

菊塵が諫める口調で名を呼んだ。

「革新派の方で色把に合う狗鬼を見つけなければいい。元はと言えば、じじいを通じて革新派から色把を連れてくるよう言われたのだろう」  
哭士はそう言ったきり、何も語ろうとはしなかった。だがこれは、本家から抜け出し、一週間で哭士が出した一つの答えだった。

一週間前の記憶を、哭士は思い出していた。

贄の箱から色把を救い出した後、哭土は本家を後にし、色把を担ぎ上げたまま、一気に山を駆け下りた。本家があった山から降りると、日もまだ昇らぬ薄暗い道を更に走り続けた。

やがて、田んぼのあぜ道にポツリと立っていた錆だらけのバス停を見つけ、縁台に色把を座らせると、哭土は携帯電話で菊塵に連絡を取った。

「……暫く家には戻れない。追っ手が来る可能性がある」

簡単な状況を説明した後、哭土は菊塵に言い放った。

「僕の部下をそちらに向かわせる。詳しい話はそこで」

菊塵との通話が切れた。

程なくして現れた菊塵の部下数人。哭土も顔を良く知っている。

部下達は黒のワンボックスカーに哭土と色把を乗せると、田んぼ道を発進した。

ガタガタとゆれる車内で、菊塵の部下は本家での出来事を一つ一つ哭土に質していく。

殆ど単語に近い哭土の返答。だが流石に菊塵の部下である。哭土の特性を知っている彼らは、言葉をつなぎ合わせ、やがて大体の状況を把握した。菊塵と連絡を取っていたらしい部下が哭土に近づくと、追跡者がいるかもしれませぬ。このまま暫く走行を続け、替え玉の車と入れ替えます。今日はホテルの方へ」

「……」

哭土は、部下の言葉に頷き、了承の意思を示す。

車に乗り込んでから二時間ほど経過しただろうか、外に視線をや

ると、車は市街地を走っていた。もう外は明るみ、早朝ともいえる時間帯であろう。周囲には通勤の車がちらほらと走り始めている。

後部座席に掛けている色把に視線をやると、色把はシートに腰掛け、黙って外を見つめていた。かなり箱の影響で弱っているはずである。だが、色把はそんな様子を見せることなく、菊塵の部下達に声をかけられると、ぱつと振り返り、頷いたり首を振ったりと、しっかりと受け答えをしていた。

哭士は視線を正面に戻し、深くシートに座りなおした。

「哭士さん、その様相では人目に触れます。手当てと着替えを」

部下は哭士の着ているシャツを指す。先の戦闘で服はぼろぼろに破け、露出した肌の所々は焼け爛れ、また、切り傷が走っていた。

哭士は徐に服を脱ぎ、部下から差し出された新しい服に着替える。色把は哭士の半裸に、赤い顔をそらした。

「……着替えだけでいい。あとは、自分でやる」

救急箱を持ち、手当てをすると申し出た菊塵の部下に対し、他人に体を触れさせたくない哭士は部下の手当てを首を振って拒否する。箱から消毒液と包帯を取り出す。乱雑に傷口へ消毒液をふりかけ、布を当てると、慣れた手つきで包帯を巻いていく。

狗鬼の体は怪我をした場合、傷口を外気に触れさせないようにし、睡眠を取れば短時間で回復する。籠女の血が傷口に触れれば一瞬で傷は塞がるが、長い間籠女が居ない哭士は、自身で手当てをするのがいつもの事であった。包帯の端を咥え、慣れた手つきで結ぶ。

ものの数分で、大きな火傷の傷が目立っていた腕には綺麗に包帯が巻かれ、哭士は救急箱を閉じた。だが、身体の部分は、服で隠れてはいるものの、本家での戦闘でボロボロの状態。正直な所、身体は少しでも体力を回復させようと睡眠を欲している。だが、他人に無防備な姿を晒す事に抵抗がある哭士は、ピリピリとした雰囲気

纏い、窓の外を見つめ続けた。

車は緩やかにスピードを落とし、そして停止した。

「哭土さん」

部下の呼び声の方に顔を向ける。

「ホテルに着きました、部屋は取ってあります。色把さんの和装も目立ちますので、裏口からお入り下さい」

「ああ」

「……！」

シートから立ち上がった瞬間、哭土の視界が揺らぎ、体が僅かに傾ぐ。色把は咄嗟に哭土の肩に手を沿え、支えた。

「……桐生氏を呼んでいます。こちらでも貴方がたと同じ方法で移動をいただく為時間が掛かるかと。部屋でお待ち下さい」

哭土の様子を見、菊塵の部下は静かに話す。その言葉に哭土は一度だけ頷くと、部下に示された部屋に向かった。

与えられた部屋は二部屋。哭士と色把の部屋はそれぞれ廊下を挟んで対面していた。

「……何をしに来た」

お互いの部屋に入ってから五分後、部屋をノックしてきた色把に哭士は言い放つ。色把は、先ほどまでの和装から、シフォンの白いワンピースに着替えていた。

「籠女の血で、狗鬼は回復するのでしょうか？　少しでも治療した方が……」

哭士が車内でよろめいたのを見たからだろう。色把は自分の血を哭士に使いたいと申し出た。

「もうじき桐生が来る。わざわざお前の血を使わなくても……」

ふと色把の手が視界に入り、哭士の言葉が止まった。

「そう……ですよね、ゴメンなさい……」

哭士の様子が僅かに変わった事に気づかず、色把は肩を落とす。その色把の手が、小刻みに震えている事に哭士は気づいた。

菊塵の部下と別れ、ようやく緊張が解れたのだろう。それと同時に、本家での出来事が色把の中で蘇ってきたらしい。哭士に言葉を伝えようとする唇も、僅かに戦慄わななしていた。

色把の両目が哭士を捉え、その両目の光に哭士は僅かに硬直する。  
この目、また、だ。

石を持っていた祖父への畏怖とはまた違う。自分の中で抑えつけ

ている庇護欲が掻きたてられる。色把の視線から目を外し、哭士は一言、言い放つ。

「……落ち着いたら自分の部屋に戻れ。治療はいらん」  
部屋番号の書かれた扉を左手で押し開き、色把を促す。

「座れ」

哭士の言葉に、色把は驚いていたものの、同時に安堵の表情を浮かべる。哭士の腕の下を潜り、部屋のベッドの端に、ふわりと腰掛けた。

その様子を見、続いて哭士も備え付けの一人用のソファに腰掛けた。哭士は少し逡巡したが、色把の顔を見、言葉を切り出した。

「……屋敷で、兄に会った。比良野家でお前を救った、あの男だった」

哭士の言葉に、色把が顔を上げた。複雑な表情が入り乱れている。

『生きて……おられたんですね』

漸く一言、色把はそれだけを口にした。哭士は頷く。

「なぜ、今になって現れたのかは分からん。だが兄……、友禅はお前を救うようにと。そして本家が祀る【神】の事を話し、去った。

……それだけだ。【神】とは何か、お前は知っているのか？」

哭士の問いに、色把はゆるゆると首を振った。

『鼎さんとお話をして、初めて……知りました。サキガハマ村……そこに【神】がいると、鼎さん……そして箱の前に来た狗鬼の二人はお話していました』

聞いた事のない村の名。だが、サキガハマ村 哭士の心中がざわめく。

「お前、村名に覚えは？」



『……ありません。ただ……その名前を聞くと、何だか少し苦しい……』  
そう言い、自身の胸に手を当てる色把。色把も、哭士と同じものを感じたらしい。

言葉は止まり、二人の間に沈黙が流れる。

ふと、哭士の鼻腔を、柔らかい香りがくすぐる。  
その香りに、哭士の緊張した身体は弛緩し、心地よさに包み込まれる。  
押し込めていた疲労が一気に押し寄せ、やがて頭を擡もたげて居る事すら、困難になってきた。

「……………」  
哭士は黙って立ち上がり、色把がかけているベッドに、そのまま倒れこむように横になった。  
哭士らしからぬ行動に驚いている色把に対し、哭士は色把に背中を向けたまま静かに言い放つ。  
「……………お前も妙な箱に入れられて大分消耗しているんだろう。少し、休め」

色把の位置からは、哭士の表情を見ることは出来なかった。声が

いつもよりも柔らかい、と感じたのは、色把の気のせいだったのだろうか。

『……はい』

哭士の言葉に、色把は頷く。哭士と同じ空間に居た為だろうか、いつの間にか、身体の震えはおさまっていた。

『さつきまで、震えが止まらなかったんです。貴方がもしも、来てくれなかったら、私は今頃……』

自分の唇が見えない位置に移動してしまった哭士には伝わっていないかもしれない。だが色把は口に出しておきたかった。

『怖かった、本当に恐ろしかった。でも、貴方が来てくれて……私……』

ここで、色把は言葉を止めた。振り返ってみても、案の定、哭士は何も反応を示さない。

『ありがとう、ございました』

聞こえないとは分かっている。だが、哭士の背中に一言、色把は言葉をかけた。

色把の心中は、数分前では考えられないほど落ち着きを取り戻していた。

色把は小さく息を吐き出すと、自身の部屋に戻ろうとベッドから腰を上げた。

『……』

と、立ち上がろうと上げた身体は、後ろに強く引かれ、すとんとベッドにまたもや座り込んでしまった。

後ろを振り返る。哭士はこちらに背を向けてベッドに横たわったままだ。

ふと自分の腰の辺りを覗いてみると、哭士の体が、色把の服の裾

の上に横たわっており、色把は身動きが取れない状態になってしまっていた。裾を引っ張り、哭士の体から引き抜こうとするが、思いのほか深く哭士の身体に巻き取られているらしく、一人の力ではどうにもならなかった。

「……哭士」

足を揺すってみるが哭士に動く気配は見られない。それどころか、深い寝息が色把の耳に入ってきた。

等間隔の呼気と吸気。完全に寝入ってしまったている。

あれほど、周囲の異変に敏感だった狗鬼とは思えない。あまりの哭士の無防備さに、色把は背中を凝視してしまった。

何度か揺すってみたものの、哭士は一向に目覚める気配は無い。身動きも取れない状態で、如何するべきか色把が迷っていると、小さく哭士が唸るような寝息を上げ、寝返りを打った。

「……！」

哭士が動くと同時に、色把の裾が引っ張られ、色把はベッドの上に倒れこんでしまった。

両手で口元を隠すようにして、暫く息を潜めた。だが、部屋内には、空調の静かな音と、仰向けで眠っている哭士の深い寝息のみ。色把が倒れこんだ事で、ベッドは一度大きく揺れたが、それでも哭士が目覚める気配は無かった。胸の前で腕を揃え、口の前で両手を握っている色把には、自分の鼓動の音ばかりが聞こえていた。

どれくらいの時間が経っただろうか。やがて色把の動悸も治まり、

静寂が訪れた。

哭士は相変わらず深い寝息を立てている。色把の背中には、哭士の体温が伝わってくる。熱は色把を優しく包み、安堵を与えるものであった。

こんなに、強く熱を持っているのに、数カ月後にはこのまま儂く消滅してしまう。

きっと、何か方法があるはず……。

背中に伝わる熱の安堵感に揺蕩たゆたいながら、色把は静かに身を任せ  
た。

むくり、と哭土が起き上がる。いつの間にか眠ってしまった。  
哭土は心中で舌打ちする。

疲弊していたとはいえ、自身の無防備な状態を晒してしまった。  
目が覚めて未だにはつきりとしなない頭。かなりの時間眠っていたらしい。身体の方は睡眠を取った事で、回復は進み傷は塞がりかけている、万全な状態には程遠いが随分と楽になった。

( 深い、眠りだった )

周囲の気配に気を張り巡らせずに眠るのは、何年ぶりだろうか、本当に久しぶりの事であった。

色把と向かい合っていたときから、部屋の中に甘い芳香が漂ったように思えた。その甘い芳香は、自身の緊張を解きほぐし、そして柔らかい眠りを誘うものだった。警戒心など持つことすらも忘れ、気がついたときには眠りに落ちていた。このような心地よい眠りは何年も味わっていなかった。

色把は、自分の部屋に戻ったのだろうか。

自身の寝姿を見られてしまったのはこれで二度目。しかも今回は寝入る所に立ち会われてしまった。

( …… とんだ失態だ )

色把は、他人に対して敵意を持たない為か、近くに居ても哭土は警戒心をさほど抱かない。自宅で昏倒してしまった時もそうである。近くで手当てをしている色把に気づかず、のうのうと眠っていた。

結局、色把には見られたくない部分ばかり晒してしまっている。

「…………！」  
水を飲もうとベッドから降りようとしたその時だった。視界に飛び込んできたモノに、哭士は思わず固まってしまった。

自分が眠っていたすぐ隣で、今も色把が寝息を立てていたのだ。

(…………いつから、だ?)

まとまらない頭で、哭士はしばらく色把を見つめていた。

小さく色把が身じろぎ、肩をすくめる。僅かな衣擦れの音が哭士の耳に届く。

部屋を訪れた時の青ざめた顔色とは打って変わり、今では頬に薄桃色がさし、安らいだ表情で眠りに付いている。その様子、そして甘い芳香に、哭士のささくれ立った心中にも、僅かではあるがせいおん静穏が訪れる。

自身に安閑とした時間を与える少女。

この存在を失うまいと心に決め、本家から奪い取ってきた。だが。

(…………結局、俺は何がしたかったというのだ)

自分には、この少女を『守る』と誓うことは出来ないのだ。

狗鬼の役目は籠女を影鬼から護る事。

狗鬼は籠女を守ると誓い、契約を結ぶ。だが、その契約すら、自分には結ぶ事が出来ない。

「……………」

哭士は心中に渦巻く靄を、深く息とともに吐き出した。

外の空気を吸い、この身に渦巻く凝りを振り払ってしまいたかった。

目を覚ます気配のない色把を起こさぬように、哭士はするりとベツドの脇を抜け、部屋を出ようと扉の取っ手に手をかけた。

「……………」  
扉の外に人の気配を感じる。わずかな物音でその人物を特定した哭士は、静かに扉を開いた。

「わあ、びつくりしたなあ」

本当に驚いているのか、のんびりした声の主が振り返った。見知った顔、桐生だった。

桐生は、大きな鞆を手に、哭士に向き直った。

「色把さんの部屋、ノックしたんだけど居ないみたいなの。大分怪我をしたらしいから、様子を見に来ただけけど」

そう言いながら、もう一度哭士に背中を向け、色把の部屋の扉を拳の甲の部分で叩いている。

「……………中で、寝ている」

哭士は顎で自身の部屋の中を示す。

「あれま、僕、お邪魔だったかな？」

屈託なくにこりと笑う桐生に、哭士は何も返答しない。桐生に自身の部屋の鍵を渡し、そのまま廊下を歩き出す。

「あれ、哭士君、どこに行くの？」

「すぐに戻る」

行き先は告げず、哭士は長い廊下をずんずんと歩き続ける。

一度も足を止めることなく、ホテルを出た。すでに時刻は昼を回っている。

今までに無かった感情、沸きあがってくる胸のざわめきをごまかすかのように、すれ違う人々の間を、哭土はすり抜けて歩き続ける。哭土に気を留めるものは誰もいない。

沢山の言葉が哭土の心中を回る。

契約を結べない不良品なんかと一緒に居てはいけないんだよ

安らぎを求める事は、決して悪い事ではありません

身分違いな考えはすぐに捨て、彼女のことは諦めるんだね

哭土は揺れ動いていた。

今まで契約を試みた籠女に対し、色紙に抱くような感情を持ち合わせたことは無い。

雑踏の中で、歩を進めながら狗石を握り締める。自分が、只の人ならざるもの、狗鬼である証。

契約を結ばなければあと数ヶ月で命を失うこの狗鬼に、壊したくない、守りたい。そう心から思ってしまう者が現れてしまった。

数週間前の自分であれば、このように揺れ動くことは無かったで



あろう。残りの数ヶ月の期限に目を背け、一人「死」というものを受け入れないままであったに違いない。

だが、色把が自分の人生に飛び込んできた事により、大きく人生観が変わり始めていた。恐ろしかった祖父の、本当の心情。出会うはずの無かった兄との対話。そして、色把に対する大きな感情を自分の中で認めつつある。

そして、寿命があと僅かしかない、という事も、漠然とではあるが、受け入れ始めていた。

色把を護りたい。神になど明け渡したくは無い。

(だが、色把を本家から連れ出したからといって、何も状況は変わってなどいない)

自分に残された時間は、このままではもうすぐ無くなってしまっただ。

だからこそ、哭土は一つの答えを出した。

色把には家を出てもらう。

桐生診療所内は、哭士の放った言葉で静まり返った。

「……籠女を欲してる狗鬼なら沢山居るだろう。本家から連れ出したのも、本家のふざけた【神】とやらの贄にさせない為だ」

哭士はあえて色把を突き放す。色把は懸命に哭士に何かを訴えようとしますが、哭士の目は色把の口を見ようとしない。

「……」  
菊塵は、哭士の横顔を黙って見つめている。

「あと数ヶ月しか護れない、契約出来ない狗鬼を近くに置いてどうする。俺が護らなくとも、適当な狗鬼に守らせればいい」

「……！」  
その言葉に、色把は一瞬その身を硬直させ、勢いよく立ち上がる。哭士の前に立ちはだかった。

何事かと色把を見上げる哭士の左頬に、色把の右手が飛んできた。まさか、色把が平手打ちを放つとは思わなかった哭士は、色把の攻撃をそのまま受けた。人に手を上げた事が無かった色把の指先は、頬には当たらず、爪先が哭士の鼻を引っかく事になってしまったが、『どうして、逃げるんですか？ まだ、終わってなんかいないのに……！ 貴方は、鼎さんと同じ事を言っています！』

静かな診療所、色把の言葉は、声に出ていなくとも、その場に居る者達に大きな動揺を生んだ。

「……」

指で、色把が叩いた部分を摩る哭士。色把の顔を睨みあげると、椅子から立ち上がり、踵を返す。

「おい！ 哭士！」

菊塵の制止も聞かず、そのまま診察室を出て行ってしまった。診療所の扉は、哭士が乱暴に閉めた所為ではねかえり、激しい音を立てる。

「あちゃあ、ドアノブで壁に穴あいちやったかなあ」

鷹揚に構えている桐生を他所に、初めて人を叩いた色把の右手は、激しく震えていた。

契約が結べなかった籠女を傍らに置いておくって事の方が、彼にとつて苦痛なんじゃない？

若い当主、鼎の言葉が、色把の脳内を廻っていた。

## 2 12 ・ふたつの事件

「<sup>タテハラ</sup>蓼原、お前まだその事件調べてんのか」  
「<sup>タテハラ</sup>がらんとした警察署内の資料室で、<sup>タテハラ</sup>蓼原 <sup>ケイスケ</sup>圭輔は、かけられた声に振りかえった。上司の大杉だった。」

「納得がいきませんよ。あんな終わり方されちゃあ」

「<sup>タテハラ</sup>蓼原は大杉に向きなおった。」

「だからって、四年前の事件を今の今まで一人で調べ続けてるのか？ たいした成果は上がらんだろう」

大杉は、呆れたように腰に手をあてた。

「……知り合いの被害者<sup>ガイシヤ</sup>に、このままじゃ顔向けできませんよ」  
「<sup>タテハラ</sup>蓼原の言葉に、大杉は神妙な顔つきになる。」

「……そうか、そうだったな」  
「ええ」

四年前のとある事件。

「<sup>タテハラ</sup>蓼原は、偶然にも、その現場発見者になった。」

派手な音と、地響きが<sup>タテハラ</sup>蓼原の居た建物内に鳴り響き、思わず<sup>タテハラ</sup>蓼原はその場に駆けつけ、発見者となった。マンションの一室で、その事件は起きた。

お姉ちゃん！ お姉ちゃん！！

同じく現場に居合わせた、少女の悲痛な叫び声が<sup>タテハラ</sup>蓼原の耳に今も残っている。

現場は凄惨たるものであり、そして、常軌を逸していた。

「パイプベッドが分解されて、死体に刺さっていたんだっけな？ 被害者は、二人だったか？」

資料を見つめ、過去を彷徨っていた蓼原に、大杉の声が降りかかる。我に帰った蓼原は、ため息を吐き出すのをこらえ、首を横に振った。

「死体に、ではないです。生きた状態で、分解されたパイプベッド……それが一人の被害者の身体を貫いていました。もう一人は眼に損傷を受けていましたが奇跡的に失明は免れたようです。……被害者はどちらもまだ生きてます。一人は、植物状態……ですが」  
表情無く語る蓼原に、大杉は掛ける言葉が見つからない様子だった。

現在、植物状態となっている被害者は、柳瀬フユヤナセという。当時女子大学生であった。腹部を数本の鉄パイプがまさに「貫いている」状態で発見をされた。被害者、柳瀬フユの飛び散った血痕に、当初は絵の具でもぶちまけられたのではないかと思っただほどである。猛烈な勢いで鉄パイプが刺さった証拠であった。

重篤の状態で病院に運び込まれ、何とか命は繋ぎとめたものの、現在も病院で『眠っている』のである。

鉄パイプが刺さっていたのは被害者だけでは無い。その現場になった部屋の壁、床、天井にまで、鉄パイプはあちこちに突き立てられていた。

被害者が部屋から運び出され、現場検証が始まった。指紋は被害者の身体に突き刺さったパイプから、被害者本人の物しか検出されなかった。

「重機でも使わなきゃ、あんな所業、無理ですよ。しかも、現場は建物の三階……。重機なんて大層なもの、運べるはずがない。自分が現場に駆けつけたときも、そんなものは無かった。それ以前に、何故、『犯人』はこのような事をしたのか……。謎ばかり、残っています」

蓼原と、大杉の間に、警察署内のざわざわとした音だけが流れる。蓼原は続けた。

「なのに、……。どう考えたっておかしいです。犯人も捕まっていな  
い、手がかりだってあるのに、捜査が打ち切られるなんて」

事件があつてから一週間。突然、捜査本部は打ち切られ、報道もぱたりと止んでしまった。当初は問い合わせが何件があつたが、事件にかかわりの無い人間は、そうそう一つの事件を意識して覚えては居ない。報道されなくなった事件に、人々の記憶からこの事件は薄れていったようだった。今、蓼原の所属する署内では『なかったもの』として扱われようとしている。

「蓼原、あまり大声で言うな。あの件については、他の奴からも声が上がってる。だがな、警視庁うへから直々にウチの署に指令が来たんだ。こんな事、俺も初めてだ。……。お偉いさん方にや、お偉いさん方の都合があるのだからよ。俺ら下っ端がああだこうだと言つたつて、どうなるわけでもないだろう」

「……………」  
蓼原は、納得の行かない表情を押し隠し、手に持った資料を棚に戻した。

「ところで、なにか？」

上司が自分の所に来るのは、世間話の為ではあるまい。

「ああ、お前の追っている鉄パイプの件じゃないのは悪いんだがな。」

三日前の『切り裂き』の件、解剖結果が出たそうだ」  
蓼原は、大杉の言葉に頷く。

切り裂き事件　　三日前に署の管轄内で起きた事件、である。

一人の男性が、自宅内にて何者かに殺害されているのを発見された。死体の損傷は激しく、ナイフのような鋭いもので全身を切り刻まれた状態で発見された。部屋内には凶器のようなものは無く、男の近くには、空のスーツケースが置きっぱなしになっているだけであった。

手がかりは、その男の死体である。死体に残された傷から、何か発見があるかもしれない。

蓼原も捜査担当になっていた。大杉の言葉を切欠に、脳内をその事件へと切り替えた。

「病院、行ってきます」

大杉に断りを入れ、蓼原は資料室を飛び出した。

早まった、か。

先に電話で確認を取っておくべきだった。蓼原が解剖担当医から聞いた言葉は、『凶器特定にならず』というものであった。

様々な大きさ、硬さの刃物で切り刻まれている事は分かったが、死体から凶器や犯人の手掛かりとなるような物は発見されなかった。そうなのである。ただ、妙な事に、外傷に対し、床に残された血量が異様に少ない、という事。そして、体内に残された血液も殆ど

なくなっており、『消えた血液』がある、という事であった。

だが、『消えた血液』に関しても、少々頭に残りはするが、青白くなった実物を見せられずとも、電話一本で事足りる結果であった。蓼原は、医師に礼を述べ、早々に病院を後にした。

正面の入り口から外に出る。どうも、病院は苦手だ。病院内の空気が、吸うたび肺に淀みが堆積していく気がするのだ。

肺の換気だ

煙草を控えようとしている自分へ、言い訳を考えてしまう事に苦笑しながら、煙草に火をつけた。

と、蓼原は病院を見上げる一人の青年の姿に気づいた。



## 2 13 ・波紋

「……曾根越ソネゴエじゃないか」

スーツに身を包んだこの青年、数年前に蓼原が担当した事件の関係者だった。

曾根越 菊塵。被害者、柳瀬フユの『元、交際相手』、そして、被害者の一人』である。

不可解な事件。人の業とは思えぬ凄惨たる現場。蓼原の脳裏に、資料室で見た情報が飛び交う。

「ああ、蓼原さんじゃないですか、お久しぶりです」

声をかけられた曾根越は、蓼原をみとめ、にこやかに笑む。青年が見上げていた先を追うと、一つの病室があった。カーテンは閉められていた。

彼女の病室、か。

「見舞いか？ フユ、の」

手に持った煙草を指で弾き、灰を落とす。そんな蓼原に、曾根越はゆっくりと首を振った。

「彼女のご家族が僕を拒否しているので、病室には入れてもらえません。看護師の話ですと、目を覚ます望みは殆どないそうで。……それくらいしか分かりません」

「……そうか、まだ……」

煙草の煙を吐き出す蓼原。

「蓼原さんだったら、彼女の病室に入れるじゃないですか。彼女とは従兄弟でしょう？」

「ああ、そう……だな」

蓼原の父の、兄の子。歳が離れているために、あまり交流は無かった。柳瀬フユとは盆と正月に顔を合わせる程度だった。

あの事件の数日前、『娘に交際相手がいるらしい』と伯父が妙に落ち着かない様子で話をしていたのを覚えていた。だが、その後に事件が起きた。その事件の後、皮肉にも柳瀬フユの家族とこの青年は初めて対面し、それ以降、彼は彼女との面会を許されていない。

家族はまだ、こいつの事を……？

彼と、彼女の家族の間で一体何があったのか、蓼原には知らされる事は一度として無かった。

「目の調子はどうなんだ？ よくなったらしいが、その後は？」

蓼原が追っている事件の現場に、この青年も居合わせている。それも、犯行のその瞬間に、である。だが、彼は『目撃者』にはなっていない。まさに犯行が行われたその瞬間、彼の目は、『見えない』状態になっていたのだ。

「通常の視力、とまでは行きませんが、大分回復しました」

眼球に甚大な損傷、失明は免れない、と診断が下った。ところが、数ヶ月の後、彼の目は奇跡的な回復を見せた、らしい。眼鏡の奥の瞳は、しっかりと蓼原を捕らえている。

「今は、何をしてるんだ？」

眼鏡の奥の瞳を見つめ、蓼原は菊塵に問う。

「嫌だなあ、取り調べですか」

蓼原の質問に冗談めいた柔らかい笑みが浮かべる菊塵。

「馬鹿言え、世間話だ」

菊塵の笑みは変わらない。蓼原は大きく紫煙を吐き出す。

「製薬会社に、勤務を」

「ほお、何処の会社だ？」

蓼原は吸い終わった煙草を携帯灰皿にねじ込んだ。

「ブリリアントです」

普段からTVなどでも良く見かける会社だった。

「……大手じゃないか、よく入れたな」

菊塵の口から放たれた意外な会社名に、思わず蓼原は本音を漏らしてしまった。

「親族が役員でして。コネクションですよ」

コネクション、という言葉の時にだけ、菊塵は肩をすくませた。

季節柄、凍えるような風が二人の間を吹きぬけた。菊塵の羽織っているコートが風に膨らむ。

「ところで、蓼原さんは？ 病院に何か御用で？」

「ああ、捜査でな」

もう一本煙草を取り出そうとし、思いとどまる蓼原。菊塵は、蓼原の手元を見つめながら更に問う。

「……何か病院で事件でも？」

と、蓼原は先程まで微笑んでいた菊塵の目に、一瞬だけ違和感を覚える。

彼の目は、自分 刑事と 似たような雰囲気をかもし出すように思える。人を見る目が、一般人とはどこか違うのだ。

一般人の仮面を被り、時折その仮面から、刺すような鋭い視線を覗かせる。蓼原が菊塵に持つ印象はこれだった。少しの動作も見逃さないような鋭い目が、端端で見受けられる。それは、特に自分、蓼原に対し、強く向けられているように思えるのだ。

菊塵の目に気を取られていた。蓼原は口を開く。

「いいや、今回は検死の結果をだな。ニュースにもなっていたらどう？ 三日前に、マンションで男が殺された事件。ほら、部屋には死体と、荷物しか無かったっていう、アレだよ」

ニュースで報道されている程度の情報であれば、一般人に話をしても何の問題も無い。

「ああ、それ、蓼原さんの署の管轄なんですか」

菊塵の問いに、そうだと蓼原は返す。

「そういえば、現場の部屋に置かれていたスーツケース、なにか入っていたんですか？　なんだか意味ありげですよね」

目の前の青年はまた一般人の仮面を被った。『自分は何も知らない普通の人間です』そう見せ付けるように、無防備を装っている。

思い過ぎだろうか。

蓼原は、菊塵に悟られぬよう、不敵な笑みを浮かべる。

「いいや、空っぽだった。今は署で保管を……って、おいおい、一般人にはこれ以上言えない」

「ですよねえ。うっかり何か言わないかって、ちょっと期待していたんですけれど」

「この野郎」

菊塵を肘で軽く小突いた。

「ところで、だな」

この青年が、四年前のあの事件の鍵を握っている事は間違い無かった。無駄だとは分かっているが、蓼原はどうしても聞かすには居られなかった。

「四年前の、事件だが……あの後、何か思い出したことは？」

菊塵の目に浮かんでいた笑みが僅かに引っ込むのを、蓼原は感じた。

「……お話したとおりです。僕はあの時、何者かから目を切りつけられ、何も見えない状態でしたから。痛みで周囲に気を配る事も出

来ませんでしたし。ただ、現場の写真を見る限り、とても人間の所業とは思えませんよね」

「何度も何度も言ってきたであろうセリフを、眉一つ動かさず、こうして蓼原にも言い放つ。彼からは、今後これ以上の情報を得る事は出来ないだろう。」

「すまないな、何度も聞いて」

「いえ、とんでもないです。当事者としてはもっと情報を提供できればいいんですけど、すいません。これが精一杯なんです。……では、僕はこれで」

軽く蓼原に会釈をする菊塵。

「最後に一つ、いいか」

蓼原は菊塵に聞いてみたいことがあった。菊塵は蓼原の言葉に顔を上げた。

「お前自身は、どう思ってるんだ、あの、現場」

ふ、と菊塵は蓼原から一瞬目を逸らす。

「凄惨な現場、ですよ。……鬼が来て暴れまわった、なんて言った方が、信憑性があるんじゃないですか。……それでは」  
につこりと笑い、菊塵は背中を向けた。

蓼原は、菊塵が去った方向を見つめている。二本目の煙草に火をつけた。

一つ、菊塵の言葉で気になった事がある。話題が切り裂き事件に移った時である。

なぜ、あいつは『スーツケース』と分かった？

蓼原は、現場に残されていた物を、『荷物』としか説明していない。報道陣にも、部屋にあったのは『カバン』と公表している。

刑事の妙な勘が動く、曽根越は、何かを知っている？

蓼原は、菊塵の背を追い、帰るべき署とは逆方向に歩みを進めた。



「本当に、良かった。あのままだったら僕、路頭に迷って道端で死んじゃってたかもしれないよ」

両手で胸の前に荷物を抱えた苑司が早足で哭土の歩幅に合わせて歩いている。声の調子は安心しきっていた。

苑司が早池峰家に滞在を許された翌日である。

苑司は生活に必要な物を買いに出かける事になり、何故か哭土もそれに同伴することになってしまった。

昼間であれば、影鬼は襲ってこない。だが、菊塵からは念のため、と哭土は苑司の護衛兼、荷物持ちに任命されて、こうして帰路にしている。

「あの、重くない？」

両手に大きな荷物を持つている哭土に、苑司は遠慮がちに問う。

布団が詰め込まれている大きな荷物を、哭土は片手で軽々と運び、もう片方の手も重そうな紙袋をぶら下げている。

「ああ」

哭土は短く答える。

「あ、うん。どうも、ありがとう」

買い物をしているときからそうであったが、長く会話が続かない哭土に、苑司は少し困っているようだった。

哭土は時折、視線を周囲に配りながら、ずんずんと歩みを進めていた。

程なくして、二人は早池峰家に帰宅した。

哭土はいつものように靴を脱ぎ、さっさと家に向かってしまうが、

苑司は重厚な玄関のつくりで遠慮をしながら、玄関の隅にスニーカーを揃え、そろそろと廊下に入った。

「あ、早池峰、お帰りー」

居間に足を踏み入れ、一番に掛けられた言葉に、哭士は立ち止まる。

眉間に深い皺を寄せた哭士の視線の先には、大きな飯台に足をつつこみ、大型テレビの前で頬杖について寝そべっている金髪の狗鬼が一人。頬杖について居る肘の下には二つに折られた座布団まである。完全に寛いでいる状態だった。ちらりと哭士に視線を寄越したものの、テレビの笑い声にあわせ、その狗鬼は遠慮の無い笑い声を上げる。

「……」

対照的なこの二人の狗鬼。あからさまに苛立っている哭士に対し、この男、ユーリはそんな哭士の様子を気にする気配はまったく無かった。

「……外国の人？」

哭士の後ろから、苑司が顔を出し、小声で哭士に問う。

「んにゃ、俺は混血児ハーフね。一応国籍は日本人よ、コレでも」

何も答えない哭士に代わり、苑司に視線をよこしながら答える金髪の狗鬼。

「……何故、お前が居る」

哭士の声はいつにも増して低い。先日争ったばかりの人物である。それに加え、部外者が自宅内をうろつく事をあまり良しとしない哭士は、この男、ユーリ・ヴァルナーに対しても同じ感情を抱いた。「ここのおバチャンの飯、美味いんだもん。オマエが居ない間も、何回かご馳走になったぜ」

ユーリの言葉に、哭士の眉間の皺が更に深くなる。



不機嫌さを隠しもしない哭土の表情に、一番狼狽えているのは、状況が飲み込めていない苑司だった。

と、そこへ大鍋を抱えたマキが台所から現れる。哭土の不機嫌そうな表情には慣れていいのか、気にする様子もなく大きな声を張り上げた。

「あら！ 哭土さん、苑司さんお帰りなさい！ ご飯出来てますけど、お召し上がりになります？ もう寒くなってきましたから、温かいものでも」

哭土はマキの問いに答えず、ユーリを睨み付けている。

「流石オバチャン！ 俺、煮物好きなんだよね。豚汁もあるの？ 気が利くなあ」

マキが運んできた料理にユーリは歓声を上げ、卓につく。哭土の鋭い目線に気づき、ユーリは屈託の無い笑みを浮かべ、哭土を見上げた。

「ああ、一応ね、修造さんから許可もらってんの。俺もう、保守派の手下じゃないしさ、俺が持つてる情報提供するって言ったら、この家、出入りしてもいいって」

「……」

すっかり早池峰家に馴染み、祖父の許可までちゃっかりともらっている人物に、哭土の方が折れて出るしかないようだった。哭土は深くため息を吐き出した。

いつものように出される食事に、哭土は黙々と箸を進める。斜め向かいにかけているユーリも、食べる時だけは大人しくなるようで、忙しく箸をつまんでは口に運んでいる。つけられたままのテレビ

の音だけが騒がしい。

と、傍らで箸を持ったまま固まっている苑司が目にも留まった。

「なあ、お前、食わないの？」

哭土の様子を見て感づいたのか、ユーリが苑司に声をかける。ハツと苑司は我に返ったようになる。

「いや……お茶碗が井なのはどうしてなのかなって……」

苑司の目の前には大きな井が一つ。大量の白米が盛られている。

苑司の言葉に、丁度大皿に盛られたおかずを運んできたマキは笑いながら両手で小さな輪を作る。

「色把さんはこーんな小っちゃい茶碗でお召し上がりになりますけど。若い男の方って、普通これくらい食べるんじゃないんですか？ 哭土さん、いつつもこれで軽く三杯はいきますよねえ。ユーリさんもお代わりなさるでしょ？」

と言っているマキに、無言で哭土は空になった井をマキに差し出す。

慣れた手つきでまたもや大盛りに白米をよそい哭土に渡す。

「こっ……！ こんなに無理ですよ！」

マキは『あらあら』と笑いながら、白米をよそいなおし、横でユーリは『食べないと大きくなれないぞ』と茶々を入れては笑っている。

程なくして平均的な分量のご飯が苑司の前に置かれた。『次は色把さんと同じお茶碗かしら』と笑いながらマキは台所に消えていった。

「これが普通なのに……」

まだ信じられない様子で哭土とユーリの手元を見る苑司に対し、ユーリが口を開く。

「狗鬼は燃費、悪いよー。食べる時にひたすら食つとくからね」

怪しい持ち方の箸で苑司を指しながらユーリは笑う。

「コーキ？」

苑司はユーリの言葉に首をかしげる。苑司には、狗鬼、籠女の存在は語られていない。

「ユーリ、それ以上言うな」

哭土の言葉がびしゃりとユーリを打つ。当のユーリも、哭土の言葉と苑司の反応に『ああ』と納得した様子を見せ、その後は何も語らずに箸を進めだした。苑司だけが不思議そうな顔をしながら、大きな丼に小さく盛られ直した飯を口に運び始めたのだった。

## 2 15 ・小さな訪問者

「すみません、回覧板をお隣に届けてきますね」  
台所から丸い顔をのぞかせたマキは、手に持った板をひらひらと振ると、食事を囲んでいる三人の若者たちに声をかけ、そのまま台所の奥に消えていった。ドタドタと重い足音が遠ざかっていく。

「なあ、早池峰」

ユーリが哭士に声をかける。哭士は僅かにユーリの言葉に反応を見せる。

「お前の相方は？ 一緒に居ないのか？」

ユーリは周囲をきよるきよると見渡し、色把を探しているようだ。

「色把は俺のものじゃない」

一言、そう答えると、またもや箸を進め、黙々と目の前の食事を食べ進める哭士。

「ああ、そついやそつだつて。 んじゃ、なんで契約もしていない籠女と一緒に住んでんのさ？ キクは教えてくれないし、聞きたくてしょうがなかったんだよね」

「……」

答えない哭士に対し、ユーリは『なあ』『おい』と声を掛けていたが、何も語ろうとしない哭士に、ユーリは肩をすくめあきらめた様子を見せた。

と、その時であった。玄関の方から、呼び鈴の音が三人の耳に飛び込んできた。

席を立つものはいない。

一度、二度。呼び鈴は、居間に鳴り響く。

「そういえば……家政婦さん、回覧板届けに行っているんだね」  
苑司が誰ともなしに口にする。

「……」

唯一の家人である哭土は、仕方なしに立ち上がり、玄関へと向かった。

格子に磨り硝子のはまっている戸を横に開くと、小さな客人が一人、玄関の前に立っていた。

華奢な体つきで哭土の胸元までの身長だった。深く帽子をかぶっている為、客人を見下ろす哭土からは、小さな口元しか見ることは出来なかった。

「龍は、いる？」

小さく、幼い声、だがその声はしつとりとし、強い意志を持っているように感じられた。

「……龍」

どこかで、聞いたことがある名前だ。

「ユーリを迎えに来ました。ここに居るはず」

そう言われて、ようやく哭土は、現在我が家に蔓延っている金髪の狗鬼の顔を思い浮かべる。彼の日本名が『朱崎 龍』だった、と思いついた。

「こつちだ」

さつさとユーリを連れ出してもらいたかった哭土は、客人を家中に通す。

長い廊下を進み、食事をしていた居間までたどり着く。

「……ユーリは、どこに行った」  
居間に残っていたのは苑司一人だった。

「本当についさつき、あわてた様子で部屋の奥に行っちゃった。どうしたんだろう?」

困った様子で、哭士と客人を見上げている。苑司の指は、台所を指している。

「逃げた」

ポツリと客人が漏らす。

「奥に、行ってもいい?」

苑司が指した方を見、客人は哭士を見上げる。哭士は軽く何度か頷き、許可する旨を伝えた。

客人は迷い無く台所を突っ切り、さらに廊下を進む。哭士は客人の後について歩く。何故か苑司も哭士の後を付いてきている。

やがて客人は一つの襖の前にたどり着くと、勢いよく襖を横に引く。

「げえっ!!」

悪戯が見つかった子供のようになり、大きな声を上げたのはユーリだった。

「あ……アキ……!」

和室に身を潜めていたユーリは、引きつった顔で客人の名を呼び、狼狽える。

「今まで何をしていたの」

アキと呼ばれた客人の言葉尻は冷たい。腰に手を当てて、座り込んでいるユーリを見下ろしている。視線を向けられている当の本人の表情は引きつっていた。

「いや、これは話せば長く……」

「来て」

「ハイ」

先ほどまでの自由奔放さはどこへやら、明らかに年下のアキにユリは静かに従っている。

「うちの龍がお邪魔しました。もう連れて帰るから」

哭士を見上げ、帽子を外した。ショートカットの、瞳の大きな十五歳程の少女だった。

「あ、あ、あ……」

少女の顔を見た苑司が口を開いたまま、声を洩らし、アキを指さしている。

「……どうした」

苑司の反応に哭士が問う。暫く呆然とした表情をしていたが、哭士の質問に我に返ったらしい。

「や……柳瀬アキさん!？」

目を丸くしながら、苑司は哭士に訴える。

「……知り合いか」

静かに驚き、アキを見下ろす哭士の表情に、苑司は驚愕の表情を浮かべる。

「とっ……とんでもない！ 有名人だよ！ テレビで見ない日は無い位の！」

必死な苑司に対し、あくまでも哭士は淡白だ。苑司が言うには、本業は歌手、らしい。まったく興味が無かった哭士は苑司に対し、「そうか」という返答で留めておく。

そんな二人を余所に、当のアキとそれに引き連れられているユリは二人の前を通り過ぎ、玄関へと向かう。

「それでは、失礼します」

まだ驚いている苑司を置いて、哭士も居間に戻りがてら、二人の

後続いた。

渋い顔をしてアキの後ろをついて歩くユーリは、先ほどの五月蠅さからは考えられないほど大人しい。

と、廊下の先の玄関から、引き戸が開く音がする。哭土はその音を発した主が菊塵であると察する。菊塵の気配は玄関に上がり、こちらに向かつて進んで来る。

菊塵が自宅に上がってくるのは何時もの事である為、特に哭土はそれ以上気に留めることは無かった。

「……………」

だが、突如、先を歩いていたアキが息をのんで立ち止まる。何事かと哭土はアキに視線を寄こす。

「オイ、アキ。どうしたんだよ？」

ユーリもアキの様子に気づいたらしい。不思議そうにアキの顔を覗き込む。アキは微動だにせず、近づいてくる菊塵を見つめている。スーツを身にまとった眼鏡の青年も、廊下を歩く団体に気づいたらしく、哭土らに視線を寄越しながら足取りが緩まる。

ふと哭土はアキが何かを握りしめる様子に気づいた。

今まで静かに言葉を発していたアキが、突如鋭い声を上げる。

「龍！ 菊塵を始末して！」

「なっ、なんだと!？」

驚きの声を上げたのはユーリである。アキが握りしめていたのはユーリの狗石だったらしい。



抗う暇もなく、ユーリは瞬時に跳び上がり、菊塵へと躍りかかる。狗石の命令では、自分の抑制がきかない。

「キクツ……！ 避けるっ！」

だが、当の菊塵は一瞬目を大きくしたがその場を動かない。

「がアツ！」

次の瞬間、弾かれたように吹き飛んだのは飛びかかっていったユーリの方だった。

ユーリの体は漆喰の壁に、激しい音を立てて叩きつけられた。

漆喰の壁には深いヒビが走り、木片と、ほこりが周囲に舞っている。

「何！？ 何が起こったの！？」

一人、何も知らない苑司だけが哭土に追いつき大声を上げる。状況の説明をしてくれないかと、哭土に視線を向けたようだが、当の哭土はアキの引きつった横顔をじっと睨み付けているのみだった。

「……いきなり、石で狗鬼を差し向けるとは、穏やかではないですね」

菊塵は、跳びかかってきたユーリを自身の能力ではじき返したらしい。涼しい顔をして、菊塵はアキに向きなおる。アキは菊塵を睨んだままだ。

「痛つてて……」

壁にめり込んだ体を持ち上げ、ユーリが起き上がる。金髪にはうつすらと埃がかぶっている。

「テメエ！ アキ！ いきなり何すんだ！」

ユーリが訴えかけるが、アキは微動だにしない。

「アキ……！」

ユーリが呼んだ『アキ』の名に、菊塵の表情がわずかに険しくなる。

アキは菊塵に一步近づく。

「お姉ちゃんを、返して」

静かに、だがまっすぐ放たれた言葉に、菊塵の頬が痙攣する。その横を、アキは足早にすり抜けていった。

「アキ、待って！」

申し訳なさそうな表情を浮かべ、両手を二人に合わせた後、ユーリもアキの後を追って去って行った。

複雑な表情を浮かべている菊塵、哭士は黙ってその様子を見守る。

「……今の、一体何？」

一人状況を呑み込めない苑司が、静まり返った空間で呟いた。

## 2 16 ・ 思わぬ出会い

曾根越 菊塵を追い、タテハラ 蓼原が行き着いた先は、閑静な住宅街だった。

「ここは……」

菊塵が入っていった建物は重厚な門構えの屋敷、である。白壁が延々と続き、塀の奥には、ずっしりとした日本家屋の屋根と、立派な松の木が見える。門の脇の、古びた表札に目をとめる。

「ハヤチネ……？」

変わった苗字だ。そして、どこかで聞いたことがある。

近所の主婦を捉まえて、話を聞いてみた。製薬会社の創始者の家だと判明するのに、そうそう時間は掛からなかった。どこかで聞いたことのある感覚に漸く合点がいった。菊塵の勤めているアービュータスの会長、である。

屋敷に住んでいるのは、創始者の早池峰修造と、その孫。出入りしているのは使用人の女性。最近は、若者が数人出入りしているのを見かけるといふ。おそらく、菊塵もその内の一人なのだろう、と蓼原は考える。

早池峰修造の孫は十七歳、高校には行っておらず、祖父の会社、アービュータスで、会長である祖父の身の警護をしている、とも話があった。全て早池峰家の使用人が話していた事だそう。ほぼ正確な情報とみて良さそうだった。

ただ。

早池峰さんの家から、銃声のような音がしたことがある。その後で解体工事のような大きな音と地響きがした。大きく古い家だから、工事なんかも必要になるのかもしれないが、工事車両が出入りした気配は無かった。

こんな言葉が女性の口から出た時、思わず蓼原は怪訝な顔を浮かべてしまった。銃声のような音がしたのも、大きな音がしたのも、一週間程前の同日だったそうである。蓼原は、手帳に主婦の言葉を書きとめると、礼を述べ、その場から離れた。

蓼原の中の『勘』が、何かを訴えかけている。

心中には、四年前の事件がまた渦巻いていた。人外の力で壁に突き刺さっていた鉄パイプ、その前に聞いた凄まじい物音、そして地響き。菊塵を追いかけて行ったその先でも同じ派手な音と地響きの証言。

こじつけ過ぎるかな。

そう、自分に言い聞かせ、早池峰家を後にしようとしたその時だった。

「……」

一瞬、だが確かに蓼原の耳に届いた。早池峰家の内部から、木材の割れるような音。まさか、聞き込みで得た現象が今まさに起こるとは。早池峰家に背を向けた体をもう一度反転させ、蓼原は様子を伺った。

それから、例の音は鳴り響くことはなく、しんと住宅街は静まり返っていた。

暫く早池峰家を見つめていたが、その後何の変化も無い。

一体、何だっただ。

蓼原が一つ大きなため息をついた瞬間だった。早池峰家の正門が静かに開き始めた。

開いた門から出てきた人物らに、蓼原は一瞬目を疑った。

「アキちゃんじゃないか」

蓼原の従姉妹である。彼女の母親の厳しい教育を受け、現在若干十五歳にして、芸能界に足を踏み入れ、現在は歌手として活動している。中々の人気を博していたはずだ。

アキも蓼原に気づいたらしい。アキに連れ立ってきた金髪の外国人も、アキと共に蓼原に歩み寄ってくる。ギリシャ彫刻を思わせるような彫の深さに、スラリとした長身。

随分と、美丈夫な男だ。

蓼原は一目見てそう思った。黙って小さく首をかしげ蓼原を見つめている彼の年齢は読み取れない。大人びているようにも見えるが、どこかしら子供らしさも残っているように思える。

「圭<sup>ケイ</sup>さん、どうしてここに？」

アキは蓼原の事を『圭さん』と呼ぶ。見上げて首をかしげる少女に、尋ねたいのは自分のほうだった。

「いや、仕事で偶々通りかかったんだが……アキちゃんこそ、何故？」

アキは、蓼原の質問に、隣に居る外国人を見上げた。

「なあ、アキ、誰？ コイツ」

徐に、アキの隣に立っていた外国人が口を開く。流暢な日本語、という以前に、砕けすぎている言葉だった。

アキは、外国人の言葉に、足を思いつきり踏みつける。踏まれた当の本人は、一瞬ものすごい形相を浮かべ、そのまま黙り込んだ。表情からはまだ痛みを堪えている様子が伺えた。

「彼を、迎えに来ていたの」

彼、とアキは痛みを必死に押し隠している外国人を指した。外国人は、名をユーリ・ヴァルナーと名乗った。蓼原も続いて名を名乗る。

「ここ、『友人』がいるもんで」

引きつった笑顔でユーリは屋敷を親指で指す。

「それは、こちらのお孫さん？」

「ええ、まあ」

ユーリは蓼原の問いに素直に答える。

「中には、曾根越 菊塵という方も？」

蓼原の問いに、明らかな動揺を見せたのは、ユーリの傍らに立っていたアキのほうだった。

「アキちゃん……」

四年前からそうなのだ。曾根越 菊塵の名を聞くとこうして身を硬くし、黙り込んでしまう。事件直後の事情聴取の時からである。

家族が重傷を負った場面を見た衝撃のせいであろう、と取調官は漏らしていた。

だが、蓼原は知っている。伯母が娘、アキの事を話す時に、『アキは嘘をつくときに下唇を軽く噛む癖がある』と。

蓼原は、あの事件のときに、自分が知らない『何か』を見たのではないか、そう思っている。

だが、その小さな胸の内に何を潜めているのか。何度尋ねても、この少女の口は、何も語られる事はなかった。何も知らない、下唇を

かみ締めながら、少女はそう一言告げるだけなのである。

「なあ、さっきのもだけだよ。『お姉ちゃんを、返して』ってどう  
いう意味だよ?」

ユーリが突如口を開く。

「!?!」

お姉ちゃんを、返して?

「それは、曾根越 菊塵に言ったのか?」

蓼原はユーリに問う。

「ああ……そうだけど」

「籠」

アキの小さな言葉が、ユーリの言葉を止める。

「もう、行かないと」

昔から、表情の少ない娘であったが、その瞳の奥には、焦燥が広がっている。アキの若さでは、人の心理をある程度見抜ける刑事の目は誤魔化せない。

「アキちゃん、今の……」

引きとめようとする蓼原の脇を、アキは足早にすり抜けていく。

蓼原は今、『あの』事件の捜査員ではなくなっている。彼女を拘束する法的手段を持ち合わせていない。

「……」

去っていくアキを見送るしかなかった。

「おいっ！ アキ！ アキってば！」

困った様子で、小柄な少女の後ろを、スラリとした長身が追いかけていく。

残された蓼原は、二人が去っていった方向を暫く見つめていた。

柳瀬アキの姉……柳瀬フユ。

そして、柳瀬フユと交際相手だった曾根越 菊塵。

『お姉ちゃんを返して』とアキは菊塵に話したという。

もう一度、曾根越と柳瀬フユの周りを洗いなおすべきなのかもしれない。

一度だけ早池峰家を振り返る。白壁に囲まれた立派な日本家屋の屋根は、何故か、見上げている蓼原をあざ笑っているようにも見え  
た。



## 2 17 墓前の花

早池峰家の書齋には、沢山の本が眠っていた。色把は修造から許可を貰い、書齋の中の本を何冊か借りてきた。

読書を好む色把は、借りた本を読み、数日を過ごしていた。

この日もまた、自室で本を読んでいると、襖の外から、声が降りかかった。

「色把さん、いらっしやいますか？」

菊塵の声だった。色把は、カーディガンを羽織ると、声かした襖を静かに開いた。そこには菊塵が一人だけ、哭土は居なかった。

「すみません、急にお呼びして」

『どうか、されましたか？』

静かに佇んでいる菊塵に、色把は首をかしげる。菊塵がこのように色把の部屋を訪ねる事は今まで無かった事だ。

「もし、お時間があるようでしたら、お付き合い頂きたい所があります」

太いフレームの眼鏡の奥は、相変わらず柔らかい目をしている。

哭土との一件以来、哭土にあまり顔を合わせないよう、屋敷内を出歩くことを憚っていた色把は、菊塵の言葉に素直に頷いた。

菊塵の運転する黒いセダンに揺られること半刻。狭い一本道をひたすら進んでいたが、対向車は一台も無かった。肌寒く感じた外の気温ではあったが、やわらかい日が出ている。車の窓から降り注ぐ木漏れ日は色把の腕に温かみを残していた。

殆どエンジン音のしない静かな車内、ラジオのニュースだけが流れている。

天気予報、地域のニュース。聞きなれた地名が何度かラジオから発せられていた。

やがて車は開けた場所に止まり、先に車を降りた菊塵は、色把の座っていた助手席のドアを開く。降り立った色把は周囲を見渡した。空気がしっとりとして湿っているような、静かな場所だった。

『ここは……』

「霊園です」

菊塵の言葉に、色把はぎゅっと身を縮めた。これから何と対面をするのか、色把には見当が付かない。

セダンのトランクから、花束を取り出す。花を下に向け、菊塵は優しく色把を導いた。

四角い墓碑の間をスーツの青年に続いて歩く。さわさわと静かに色把の髪を風が撫でていく。

霊園の一番奥までさしかかり、菊塵は足を止めた。

花束を持っていない左手の平で、すつと一つの墓碑を示した。間をすり抜けてきた墓碑とは一回り大きく、そして、真新しかった。

色把は細い指を強く握り締め、足を踏み出す。石畳に、色把の靴がコツコツと大きく響き渡る。

墓碑には名前が一つ。

比良野 今日子

「おばあさま……！」

祖母の墓だった。今まで必死に流すまいと押さえ込んでいた涙が、堰を切ったように溢れ出す。

墓碑の名は涙で霞み、息は震えてうまく吸えない。静まり返った霊園内には、色把の声無き嗚咽と、鳥の穏やかな囀りが響いていた。

「もつと早く、お連れできればよかったです……。本当に申し訳ございません」

慎み深い表情を浮かべ、菊塵は静かに語る。その言葉に、色把は顔を覆ったまま頭を振った。色把の肩が震えている。

「彼女の命を救えなかったこと、本当に心から悔やまれます」  
菊塵は手に持っていた白い花束を墓前に供えた。

「……おばあさまを、ご存知なのですか？」  
墓に向けられる菊塵のまなざしに、色把は問う。

「ええ。政界、医療界、様々な方面に精通している方でしたので。僕が今の仕事に就く際、随分とお世話になりました。……ご立派なお方でした」

そう言い、墓前に手を合わせる菊塵。初めて聞く、新たな祖母の顔だった。

祖母の仕事を初めて知った、と菊塵に話すと、菊塵は静かに口を開く。

狗鬼はその特殊な能力や身体能力を買われ、表立った舞台には立たないものの、諜報員や護衛役を仰せつかり隠密に活動をしている者が多いらしい。医療についても、彼らの身体能力、治癒能力は医学の進歩の大いなる近道につながる。研究者にとっては垂涎ものなのだそう。

色把の祖母、今日子はそういった世界と狗鬼との仲介役の一人であつた、と菊塵は語る。

「そういった意味では、狗鬼は既に、この世界には欠かせない存在になつているのかもしれませんが」

色把は菊塵の説明に静かに頷き、祖母の墓を見つめた。

「……狗鬼とは、籠女とは一体何なのでしょう。一体、何のために存在しているのでしょうか？」

素直に心中にある疑問が言葉となつて現れた。静かに風が吹き抜け、芝生がざわりと音を立てる。

「籠女、狗鬼の実態は、現代科学をもつてしても解明されていないものが殆どなのです。社会に公に出来ない分、研究も滞っている。籠女が何のために存在をしているのか、存在理由すらはつきりしていない。額を合わせただけで、何故籠女側に印が浮き出するのか、それすらまだ分かっていません」

「それだから、哭士……彼が何故、契約が結べないのかも分からないのですね」

「……思いつく限りの方法は試したのです。あらゆる状況、あらゆる籠女……ですが……」

菊塵の表情は晴れない。

「もう少し、お待ちいただけますか。この件に関して、僕よりも詳しく説明ができるお方が間もなくこちらにいらっしやいます」

菊塵の目的は色把を祖母の墓に連れてくるという以外にもう一つあったようである。色把は頷いた。

「……それと、哭土の先日の言葉、あまり悪く思わないでやってください。言葉こそ少ないものの、奴なりに何か考えがあつてのことなのです」

菊塵は困つたような表情で、墓碑を見つめながら話す。色把は、菊塵の言葉に、首を縦に振つた。

『私こそ……感情的になつてしまつて……』  
昨晩の哭土の表情が浮かぶ。強く色把を睨み付けた目が焼きついている。

お前は何も知らないだろう

哭土の目はそう訴えていたように思う。

色把の後悔は、胸の中に渋みをのこし、今も漂っているのだった。

冷たい風が、色把の横をすり抜けた。菊塵は、僅かな気配に、ゆつくりと後ろに振り返った。

「……どうやら、いらしたようです」

菊塵の言葉と同時に、背後で靴音。色把も菊塵に倣い、靴音に目を向けた。

「ご足労をおかけいたしましたね」

色把と菊塵に丁寧な頭を下げる人物。四十代後半位の、上品な女性が立っていた。

黒いレースの手袋をした細い手には白い百合の花束。

「いいえ、とんでもありません」

菊塵は、女性に向かってゆつくりと礼をする。色把も続いて女性に頭を下げた。

「色把さん、ですね。本当にお綺麗になられました」

優しい笑みで、色把に声をかけるこの女性。色把の記憶に、この女性の姿は無かった。

「最後にお会いしたのは、貴女が本当に小さなときでしたから、私のことは覚えていらっしやらないでしょう」

色把は、困ったような表情を浮かべ、女性に向け頷いた。

「すみません、先にお参りさせていただいて宜しいでしょうか」

色把と菊塵は、女性に道を譲る。

全身を黒い洋服に包む小柄な女性の動向を、色把と菊塵は静かに見守った。

「今日子さんは、百合の花が大好きでしたね」

墓前に花束を供え、手を合わせた後、静かに女性はつぶやいた。

「自己紹介が遅れて申し訳ございません。私は、桐生きりゅう 彩子さいしと申します」

彩子は、色把に向き直り、まっすぐに名を名乗った。

『桐生……』

名を聞き、真っ先に浮かんだのが、町医者「桐生」だった。色把の様子を察したのだろう、菊麿が色把に説明する。

「この方は、『あの』桐生さんの奥様です。そして、僕たち『革新派』の主幹となるお方です」

「夫の桐生 祥吾しょうごがお世話になってます」

深々と頭を下げる女性に、失礼とは思いながらも『あの』桐生は不均衡に思えてしまう。色把の驚いた視線を感じ取ったのだろう、節目がちに彩子は薄く笑みを浮かべた。

「また、狗鬼、狗鬼と追いかけているのでしょうか。まったくお恥づかしいことです」

が、それもつかの間、彩子は色把にまっすぐ視線を向け、言い放った。

「色把さん、私は……いえ、革新派の代表としてお話ししたいことがあります、こちらにいらしてもらったのです」

ただならぬ彩子の雰囲気。色把は身を硬くし、次の言葉を待った。

「貴女はすでに【神】についてご存知なのでしょうか？」

問われた色把は、困惑する。鼎から【神】という単語は聞いている。本家が奉る、狗鬼と籠女を生み出した強大な力を持った【神】。

だが、贅の箱の中で、【神】の力をもってしても哭土の制約を外す事は出来ないということを知らされた。どこまでが本当のことなのか、色把に判断など出来るわけがなかった。

困っている様子の色把に、菊塵が助け舟を出す。

「イエス・ノーで答えられなければ、仰ってください。彩子様に貴女の言葉を伝えます」

色把は菊塵に頷いた。

『本家の当主から、お話がありました。ですが、詳しいことは、何も。わかったのは、【神】にも狗鬼の寿命の制約を外すことが出来ないと言ったこと……です』

色把の唇を読んだ菊塵が、彩子に告げる。彩子は色把の目を見つめながら、菊塵の言葉に頷く。

「本家が『所有』している【神】が、籠女と狗鬼を生み出したということは確かです。そして、影鬼も」

『影鬼……！』

あの恐ろしい生き物も、同じ【神】から生み出されている、ということなのだろうか。色把の衝撃は計り知れない。

「そう、私たち籠女も、狗鬼も、あの影鬼も、一つの存在、【神】の創造物。その【神】は、まもなく寿命を迎えます」

寿命？

色把が思う『神様』とは、全てを超越し、恒久的に人々を見守っている、そういうイメージを持っていた。人間や他の生物が持つものと同じく『寿命を迎える』という言葉に、色把は違和感を覚えた。「およそ百年に一度、【神】は死に、新たに生まれ変わるので。そして、今また、【神】の生まれ変わりの時が迫っているのです」

そこで色把は納得をする。生物が一度ずつしか体験しない生と死を繰り返し行い、永い時を生きているのであれば、それもまた『神様』に相応しい存在の仕方だ。色把の顔に浮かんだ表情を見つめ、彩子は続ける。



「【神】の寿命が迫るとき、本家は【神】に贄を差し出します」  
『贄』という言葉、色把の身体にあの夜の恐怖が僅かに蘇ってくる。色把の心中を察したのだろう、彩子は声の調子を僅かに下げた。  
「【神】は、百年の間に朽ちた体を再生させるために、若い娘の身体……『器』を欲するのです。身体を挿げ替えながら、何年も……何百年も……」  
『そ……んな……!』

彩子の言葉に色把の体中の血の気が引いていくのが分かった。

色把の想像していた尊い『神様』の姿は、彩子の言葉により、朽ちかけた女の形をした恐ろしいものへと変化してしまった。

哭士があの時、助けに来なかったら……百年という永い月日の間、自分の身体が【神】の器として使われることになっていたというのだ。色把の想像の中の女の顔が、自分の顔に変わる……衝撃のあまり、足元がふらつく。菊塵は駆け寄り、色把の肩を支えた。

「今日子さんは、それを察し、懸念していました。【神】の滅する時期がちょうど重なる貴女が、贄にされるのではないかと」と  
祖母のことを話すと、彩子は遠い目をして言葉を紡ぐ。

『おばあさまが……』  
「通常、本家に召し上げられた籠女や狗鬼は、男女別々に生活しながら婚姻の日までを本家で過ごします」

『あ……』  
色把は気づいた。十の誕生日を迎え、友禅との婚約を公表した時、祖母は比良野家へと自分を連れ出した。

「早池峰友禅との婚約を、生まれたときに取り付けたのは今日子さ

んです。そして、記憶が無かった貴女に、一から生活の基本を教える、と貴女を本家から連れ出した。少しでも『贄』の可能性から遠ざけるために……いざというときに、すぐに自分が貴女を守れるように……」

乾いていた涙が、またこみ上げてくる。祖母は、そうまでして自分を守ろうとしてくれていたのだ。

彩子の表情が曇る。

「……ですが、【神】の寿命が迫ったことで、保守派の者たちに焦りが生じた。保守派……彼らは、狗鬼・籠女の恒久の存続を願っている者たち……。【神】を失うわけにはいかなかったのです。保守派の一人、結城啓二は、朱崎家の狗鬼、ユーリ・ヴァルナーを使い貴女を攫わせた……。恐らく、今日子さんは、貴女が攫われた後に比良野家を襲撃した狗鬼に殺されてしまったのでしょう」

彩子の背後で、菊塵が頷く。ユーリは今日子を殺してはいない。菊塵から彩子にそれは伝わっているらしい。

息を詰まらせながら、色把は彩子の言葉に一つ一つ頷きながら聞いていた。【神】の所為で、祖母は死んでしまった。そう思ってしまうと、やりきれない。色把の胸は張り裂けそうだった。

色把の心中を察したのだろう。暫くの間、今日子の墓前には、沈黙が流れていた。

色把は、一つ大きく息を吐き出し、彩子の話の続きを促した。

「……保守派……いえ、その背後にある本家は、何かを起こそうと  
しています。それも、そう遠くない未来で。色把さん、先日、この  
地域で殺人事件があったのはご存知ですか？」

色把は、彩子の言葉に首を振る。哭土との一件後、色把は早池峰  
家内をあまり歩き回っていない為、新聞もテレビも見えていなかった。  
彩子は事件の概要を色把に話す。

マンションの一室で、男性が一人何者かによって殺されていた。

男性は狗鬼でも籠女でもない一般人だという。その男性の遺体の近  
くには空になったスーツケースが一つ残されていたというのである。  
「そのスーツケースも、苑司君が持っていた、影鬼を呼ぶ薬物を散  
布する装置が付いていたのです」

彩子の説明に付け足すように、菊塵が言葉を発する。

「！！！」

色把は目を丸くする。

「発見された遺体は、影鬼により切り裂かれ、体内の血を吸われて  
いました。あのスーツケースを空けたことによって、薬品が被害者  
にかかり、呼び寄せられた影鬼に教われた……」

狗鬼でなければ滅することは出来ない異形の化け物、色把の背中  
に怖気が走る。

「警察に押収されたスーツケースは、詳しく調べられる前にこちら  
ですり替えました。今、警察が必死に調べているのは、同型の、何  
の変哲もないスーツケースです」

彩子は、菊塵の説明に一度ゆっくりと頷き、再度色把を見つめ、  
口を開いた。

「あの、影鬼を寄せる薬品は、革新派の研究者、私の夫が開発したものだ。しかし、その薬品と、そしてそれを散布する装置が外部に持ち出されたことを、私たちは把握しておりませんでした。革新派の内部に、裏切り者が居ます。裏切り者は一般の人間を使い、本家に『あるもの』を運ぼうとしている、と結論に至りました」

『あるもの、とは一体……？』

菊塵は色把の言葉を彩子に訳す。苑司のスイツケースの中には透明な小ビンが一つ入っていた。あれが『あるもの』なのだろうか。「ヒトが【神】の力を模するためのもの。今はそれしか言えません。しかしそれが、すべて保守派……本家に渡ってしまえば、大変なことになるます」

彩子の目は、まっすぐに色把を捉え離さない。

「今は、何が起るかわからない状況なのです。貴女を取り戻しに、いつ襲撃があるかわからない。だから、色把さん」

彩子はここで一旦言葉を切った。

「革新派の本部にて、貴女の身を保護します」

「彩子様」

話が違います、と菊塵は僅かに声を乱す。

「菊塵、貴方にも分かって欲しいのです。彼女がどれだけ大切な存在なのか。これは貴方達だけではない、狗鬼、籠女達全てに関わる事なのです」

彩子の強い目が、菊塵を刺す。

「……………」

菊塵はそのまま、口を閉ざした。その閉ざした口内で、奥歯をかみ締めている。

『私は……早池峰家に』

「なりません」

言葉は聞こえずとも、色把の言わんとすることを読み取ったのだろ。彩子は色把の言葉をさえぎった。

「これ以上、早池峰家に貴女を置いておくわけにはいきません。監視が、います」

『監、視……？』

今まで色把が早池峰家に滞在し、『監視の目』を感じたことは無かった、はずである。

「からすぬま 烏沼 かつひこ 克彦」

静かな声で、彩子が言い放つ。

痩せぎすの、顔色の悪い男が浮かぶ。哭士を嘲り、早池峰家に金をたかりに来るあの男が、監視者。

『まさか……！』

「早池峰 修造とのつながり。早池峰 哭士の叔父、という立場は、革新派、本家、どちらにも出入り出来る都合の良いもの……」

色把は、彩子の言葉をなかなか飲み込めずにいた。烏沼 克彦、あの酒とタバコの嫌な臭いのする男。マキが言っていたのは、早池峰家とは血のつながりが無いということ。色把は、マキの言葉を彩

子に伝える。

「狗鬼や籠女であれば、『血』は非常に大きな役割を持ちます。只、狗鬼に関わる通常の間人であれば、『血』のつながりはさほど大したものではないのです。どれ位強い力を持つ者との『関係』であるのか。それが、通常の間人が狗鬼や籠女の世界で通じる地位、なのです」

彩子の言葉に、菊塵が付け足す。克彦は、哭土の父、早池峰 宗一郎の弟であるが、全く血はつながっていない。宗一郎の父 哭土から見て父方の祖父 の後妻の連れ子だったそうなのだ。

「あの男が早池峰家に入りにしている以上、貴女をそこに留まらせておくわけにはいきません」

厳格な彩子の声が、色把に『拒む』という選択肢を奪っていた。

「今夜、貴女を迎えに参ります。それまでに準備をしておいてください」

## 2 20・鳥沼 克彦

「からすぬま 鳥沼 かつひこ 克彦……」

修造の口から、その言葉が発せられ、思わず哭土も口にだした。

自分が母と父の命を、奪うことになってしまった原因を作った男。目が爛々とぎらつき、卑屈に笑う男の姿を思い出し、哭土の心中はざわめいた。

「奴には、気をつけよ」

ブリリアント社内、修造は会長室内で哭土に呟くように言い放った。目を引く一番大きなデスクの前に、来客用に黒皮のソファが備え付けてある。哭土と修造は、小さなテーブルを挟み、向かい合っていた。

「お主は、本家で【神】という言葉聞いたそうだな。なきがはまむら 寄ヶ濱村という村名も」

「ああ」

菊塵を通し、哭土に起きた出来事は修造にも伝わっている。

「……お前が生まれる、少し前のことだ。お前の母、さくらは……【神】に呼ばれ、寄ヶ濱村へ向かった。夫の宗一郎と……克彦を共にして」

枯れ木のような修造の手は、しっかりと身体の前で組まれたままだ。

「……」

哭土は顔を上げ、祖父の顔を見つめた。

哭土が生まれる二年前、さくらが二十四歳の頃。本家から呼び出しがあった。

【神】が、早池峰さくらを呼んでいる。というのだ。

【神】が狗鬼一人を指し、呼び出すなど、今までに無かったことだった。本家も、呼ばれたさくら本人も、困惑していた。

さくらは、本家の従者に連れられ、宗一郎、克彦と共に【神】の許へ赴いた。

「……奇ヶ濱村で何があったのかは分からぬ。戻ってきたさくらも、宗一郎も、克彦ですら、村で何があったのかを語ることは無かった」  
だが、と修造は続ける。

「克彦は、変わった。宗一郎は言っておった……奴は【神】に魅せられたのだ、と」

奇ヶ濱村から戻ってきた克彦は、目つきががらりと変わった。本家に入りするようになり、こそこそと何かを嗅ぎまわるような真似ばかりしているというのだ。

「また、随分と悪者にされているようですねえ」

不快感を覚える声。修造は勢い良くソファーから立ち上がった。

声が出た方向　会長室の入り口　には、克彦が立っていた。



「どうやって入ってきた」

刺々しい修造の言葉、だが、克彦は鼻で笑い飛ばす。

「なアに、早池峰修造の親族です、と言ったらスンナリ通してくれましたよ。本家から籠女を盗み出したという狗が居ると聞いたものでね、見に来たところです。あの娘はどこにやったんです？ 大事に大事に隠しているのですか？」

わざとらしく会長室内を見回す克彦。哭土は黙って瘦せぎすの男を睨み付けている。

「出て行け、会社には立ち入るなど言っていたはずだ」

「嫌だなあ、お義父さん。数少ない身内でしょう？」

媚びるような、だが、人を小ばかにしたような不愉快な笑みを浮かべ、克彦は修造へ言い放つ。

「お前に父と呼ばれる筋合いなど無いわ。さつさと去れ」

修造のこめかみには、血管が浮き出している。そんな修造の言葉をさらりと受け流し、不愉快な態度を崩さないまま克彦は続ける。

「さくらを失って悲しいのは貴方だけではありませんよ。イイ女だったなア……、気が強くて、一筋縄ではいかないところが良かった。夜はどんな顔をするのか、兄貴が羨ましくてならなかったよ……」

火傷の痕が残る頬を引きつらせながら、克彦は笑う。

「貴様、さくらと宗一郎を侮辱するのは許さぬぞ」

「おお、恐い怖い」

肩を震わせ、嘲るような態度の男。ふと、視線が哭土を捉える。

「しかし、契約が出来ぬ哭土に、行方知れずの友禅。狗鬼で名高い早池峰家も、もうお終いだね。……【神】に見放されたさくらから、早池峰家は滅ぶんだ」

やけに、大きく耳に残った、克彦の言葉。 【神】に、見放された？

「何だと」

思わず哭土は修造と克彦の間に立つ。

「教えてやるうか、駄犬。さくらが【神】に呼ばれて寄ヶ濱村に行つたときのことだ。【神】はさくらに言ったんだ。『氷の仔を産んだとき、お前は死ぬ』ってな。予言どおり、コイツを産んで、兄貴と一緒に死んじまった。コイツを産まなきゃ生きてたものを……」  
克彦が蔑むように、哭士を一瞥する。

「だが、仕方ないか。友禅は兄貴の……」  
「克彦！！」

今までに聞いたことの無い、物凄い剣幕で祖父は一喝した。冷静を装っているが、祖父の内側は今までに無いほど激しくいきり立っている。

「……出て行け……。ここから、出て行け」

祖父からは、克彦に対する怒り、憎悪。その場の空気が修造の発する雰囲気でビリビリと震えた。

「また、来ますよ。『お義父さん』」

不愉快な笑い声をあげると、克彦は身を翻し、会長室のドアから消えた。

「……監視に来たのだ。色把を、探っておる」

克彦が消えたドアをにらみ、ため息と共に呟いた。

「……奴の他にも一人、家の周りをうろついている人物が居る」

「何と……！ そいつは誰だ？」

「苑司と外出した時に尾行つひられていた。歳は三十五歳ほど、恐らく刑事。……だが、目的は俺や苑司では無さそうだ」

「では？」

「菊塵」

哭士の言葉に、修造は一瞬で察した。

「まだ、追うものがおつたとは……」

修造は、拳を強く握り締める。複雑な表情を浮かべる修造の視線。思考は過去を彷徨っているようだった。

「今日はもう出歩かぬ。警護の役、ご苦労だったな」

哭士は修造の言葉に頷き、ソファから立ち上がる。部屋のドアノブに手をかける。

修造は口には出さぬとも、克彦の言葉に消耗をしているのが見て取れた。

「一つ、いいか」

背後で、修造がこちらに視線を向ける気配がした。

「友禅は、生きてる」

「……！」

「本家で、俺の石を取り返したのは、奴だ。本家で会って、話をした」

背後の気配で、修造が立ち上がったのを感じる。

「友禅が……！」

修造の喉から嗚咽が漏れる。五年も消息を絶っていたのだ、生存を絶望視していたに違いなかった。おお、おお、と唸るように咽ぶ修造の声、哭士はそのまま振り返らずに、部屋を後にした。

## 2 21・一枚の写真

ソネゴエ キクジン。

十一歳の時に、自宅に強盗が押し入り、家族を失う。当時外出していた為、一人助かる。犯人は、現在も逃亡中。

その後親戚の家に預けられ、地域の中学、高校へ。成績は優秀。法科大学へと進学するも、一年で中退。現在の勤務先、ブリリアントにて、同会社会長 早池峰 修造の秘書を勤める。

ヤナセ フユ。

曾根越菊塵と同じ大学へと進学。彼と初めて会ったのも大学と思われる。大学へ行っている間は、近くのアパートで一人暮らし。妹が良くアパートに遊びに来ていた。

蓼原は資料を閉じた。

(大学中退は、あの事件の直後……か)

目は大怪我を負ったのだ。勉強どころでは無かったのは容易に想像できる。

何度見返しても 曾根越 菊塵の経歴はこの程度。事件の資料も手元があり、眺めてみるが、鉄パイプには被害者 柳瀬フユの指紋しか検出されていない。さらに、曾根越菊塵と柳瀬フユ以外で、事件の間に部屋に誰かが立ち入った形跡も無い。

そうになると、曾根越菊塵が怪しい、となるのであるが、彼自身、目に怪我を負い、犯行どころではない。

それ以前に、人間には不可能な事件現場が出来上がっているのである。だが、

お姉ちゃんを返して

柳瀬アキが曾根越菊塵に放った言葉。お姉ちゃん、とは勿論、被害者の柳瀬フユのことである。曾根越が、柳瀬フユが重篤の状態になっってしまった原因とでもいうのだろうか。

今の所、『当事者』以外に、事件で彼を結びつけることは出来ない。それ以上……容疑者……として、何か結びつけることは出来ないのか、そう願ってしまっている。今まで勤めてきた仕事上、そう思ってしまうのは仕方の無い事である。

(ああ、煙草が吸いたい)

気分が苛立つてくると、身体がああ煙を欲する。資料を元の場所に戻し、汚れた薄い扉を押し開いた。

「きゃっ！」

扉に何か当たったような感触。続いて、大量の紙がバサリ、と落下する音が耳に届く。

「ああ、すまない」

慌てて蓼原はしゃがみこむ。廊下にしりもちをついた若い女性警官に詫びを入れた。

「た……！ 蓼原さん！ 私こそすいません！ ボーっとして……！ あ！ いいです！ 私やりますから！」

女性警官が落としてしまった資料を蓼原が拾い始めると、女性警官は何故か頬を赤くして慌てて蓼原を制した。

「ぶつかっておいて、片付けないのも悪いだろうに。……それにしても、かなりの量だな」

ファイルに、冊子に、ディスク。女性一人で運ぶのは困難な量だ。「小学校の防犯キャンペーンから帰ってきたら、いきなり、大杉さんから呼び出しが掛かったんです。そうしたらコレですよ。すべて

破棄にするんですって」

口を尖らせながら女性警官はすべての資料を重ね終え、よたよたと抱えて立ち上がった。

「手伝うよ。これは流石に重いだろう」

「いいえっ！ 大丈夫です！ これくらい！ 大丈夫ですから！」  
妙に強い口調で断られ、蓼原は差し出した手をおとなく引くしかなかった。

がに股で、署内の廊下を進んでいく女性警官に、すれ違う人々は静かに道を譲っていた。

ふと、蓼原は足元に何かがある事に気づく。拾い忘れた物がまだ何個か落ちていた。蓼原はしゃがみ、それらを拾った。

一つは黄緑色をしたプラスチック製の防犯ブザーだった。防犯キヤンペーン、という女性警官の言葉を思い出し、小学生に配るものか、と一人で納得をする。後で、あの警官に届けよう。スーツの懐にししまいこんだ。

そしてもう一つは、写真のようだった。事件の押収物だろうか、開いてあるスーツケースが写っている。蓼原は、それに見覚えがあった。

写真の裏をしてみる。見覚えのある事件番号 切り裂き事件のものだ。

「……一体、何故」

ここで、蓼原はふと思いつく。あの女性警官は、資料を破棄する、と言っていないかったか？ 蓼原は、大原の居る刑事課へと早足で向かった。

「大杉さん!!」

部屋に飛び込んできた蓼原に、課内に居た者数人が振り返る。呼ばれた本人は、分かっている、とでも言いたげに目をつぶって頷いた。

「『切り裂き』の資料ですよ？ さつきすれ違った警官が破棄すると……」

蓼原の言葉の終わりを待つように、何度も何度も大杉は頷く。半ば高揚している蓼原を制するように、大杉はゆっくり口を開いた。

「捜査本部、撤収だそうだ」

「……」

破棄される予定の写真を見てから、うつすら分かっていた。大杉の言葉に、蓼原は大きく息を吐き出した。

「……これで、二回目、ですか」

「そうだな」

「また、警視庁から……」

「そうだ。こつちだって、何も聞かされぬうちにこんな状態だ。わけが分からんよ」

肩をすくめ、乾いた笑いを浮かべる大杉。力なく腕を下げた蓼原の耳に、今まで聞こえていなかった課内のざわめきが戻ってきた。熱が冷まったと自分でも分かる。

柳瀬フユの事件といい、今回の切り裂き事件といい、自分が追っている事件を、誰かが止めようとしてもしているのだろうか。右手に持っていた写真をなんとはなしに見つめる。実物も見ている、切り裂き事件のときに現場に置かれていたスーツケース。どうやらこの事件も、蓼原は公式に追うことは二度と出来なくなってしまうたようだ。

と、蓼原は、一つの出来事を思い出した。写真を大杉に差し出す。「これ、マスコミには、『カバン』としか言っていないませんでしたよ

ね？」

「ああ、そうだが」

もう一度、写真を見つめる。カバンと言われて、スーツケースを想像するものはあまり居ない。だが、カバンを聞いただけで現物を当ててしまった人物が一人居る。その人物は、今回の事件について何かを握っている可能性が大きい。もみ消された事件、この二つに関わっている可能性が高い唯一の人物。

思い過ぎしなのかもしれない。しかし、僅かだが事件と、その人物を繋ぎ止める糸口が見えた気がした。

「すみません、失礼します」

上司の大杉に一礼すると、蓼原は大杉の返事も聞かず、課を飛び出した。



## 2 2 2 ・政府のイヌ

今日子の墓前から彩子が去り、色把と菊塵が残された。

「ああ、まだ居た。良かった」

聞きなれた、安穩とした声。菊塵は振り返らずともその声の主を察した。

『桐生……さん』

町医者 of 桐生だった。普段着の上に白衣を羽織っている姿は、霊園にはとてもではないが似つかわしくない。

「何故、ここに？ 奥様は既に帰られましたよ」

桐生の妻、彩子は今夜早池峰家に迎えを寄越す旨を話し、去った。それから数分もしないうちに桐生本人の登場である。

「うん、本当はね、彩子と僕は一緒に君たちと話をする予定だったの。でも、話をするだけなら彩子一人でも十分でしょう？ ほら、あの人コレは達者だから」

そう言って、口の横で指をはじく動作をする。口が回ると言いたいのだろう。

「僕は、別件で菊塵君に忠告があつて来たの」

菊塵は、この柔和な顔が崩れたところを一度として見たことは無い。その菩薩のような顔の裏で何を考えているのか、菊塵の観察眼をもってしてもなかなか読み取れない。

「……ガバメンタルドッグ（Governmental Dog）が動き出すよ。政府の犬が、本家に牙を剥くみたい。間もなくね」

菊塵の視線は桐生の足元付近を一瞬だけ彷徨い、最終的に桐生の

目へと戻った。

「……僕はもうGDジーデーではありません」

自身の『過去』に触れられ、僅かに菊塵は動揺した。桐生は柔和な表情を崩さない。

ガバメンタル ドッグ。通称GDジーデー。政府が飼う隠密部隊。幼少の頃に菊塵はその部隊に所属し、情報収集のノウハウを叩き込まれた。ある出来事を境にGDから離れた現在でも、仕事の上でその能力は大きく役立つている。

「君はそれで完結しているのかもしれないけど、『彼』はそうは思っていないみたいだよ」

「……！」

頬が少し強張ったのが自分でも分かる。

「彼は君の能力が欲しくて仕方が無いんだよ、きつと」

菊塵の様子に気づいていないのか、はたまた気づかないふりをしているのか。桐生の表情は変わらない。

「……僕は、誰のものにもなりません」

菊塵の言葉に、桐生は柔らかに微笑む。

「ふふ、何だかんだ言って、君もまだ若いねえ。そういうの好きだよ、僕」

腰に手を当て、笑みを浮かべたまま小さく首をかしげる桐生。色扱は、その場で心配そうな表情を浮かべ二人を見つめていた。

「……桐生さん、貴方の奥様は何をお考えなのでしょうか」  
菊塵の言葉に、桐生は首を振る。

「僕も分からないよ。僕と彩子はお互い、都合が良くて夫婦という  
関係を取っているだけなの」

手のひらを上に向け、桐生は肩をすくめた。

「僕は狗鬼を研究する支援が、彼女は僕が持っている情報が必要。  
だから、あの人が何を考えて、何をしようとしているのか、僕の与  
り知るところじゃないんだよね」

「さ、僕のお話はこれでおしまい。とりあえず、君の古巣の事を小  
耳に挟んだものだから言っておいたほうが良いと思って」

そう言って、色把と菊塵の二人の顔を見る桐生。

「お心遣い、感謝します」

菊塵は桐生に小さく頭を下げた。桐生は色把と菊塵の脇をすり抜  
け、墓前に立つ。目を瞑り暫く手を合わせた後、白い墓標に一礼し  
た。

振り向きざま、桐生は菊塵に言い放つ。

「ああ、菊塵君。色把さんなら僕が早池峰家に送りとどけるよ。君  
は久しぶりに『家族』に会って来たらどう？」

「……」

他人のために自ら動くことが殆ど無い桐生である。色把を送り届  
ける、ということにも何か彼なりの意図があるらしい。

「わかりました。色把さんをお願いいたします」

菊塵は桐生に承諾の旨を伝える。

「じゃあ、行こうか、色把さん」

桐生は色把に手を差し伸べ、先導する。色把は頷き、桐生に続く

も、菊塵を気にしたように何度か振り返る。

「後から向かいます。ご心配なく」

この言葉に、色扱は小さく頷き、墓前を後にした。

園内の芝生が風にもてあそばね、さわり、と音を立てる。

真新しい今日子の墓とは打って変わり、霊園の隅にひっそりと佇む、苔むした小さな墓が一つ。

周囲には所々に雑草が生えている。菊塵はその雑草を踏み分け、墓の前に立った。

墓碑には、かつて『家族』だった人々の名前が刻まれている。

苔むし、風雨にさらされた墓石の様子から、かなりの年数が経っていることが伺える。

もう、十年以上前になるのか。

今でも、昨日のように思い出すことが出来る。

靴下に水分が染みる生ぬるい不快感、その不快感に視線を下げると、白い靴下は赤黒く染まっている。

鼻につく鉄分の臭い、投げ出された白い手とは対照的な赤い色。

床に広がる赤色に浸された、長い髪の毛。

近くの木立から、鳥が羽ばたく音で菊塵は現実に戻された。  
「まったく……僕らしくも無い」  
菊塵は腕を組み、自身の家の苗子が記された墓碑を静かに眺めていた。

## 2 23 ・菊塵の過去

「いやあ、ごめんね。きれいな車じゃないんだけど」

菊塵が乗ってきた黒のセダンに横付けされていたのは、白いバンタイプの車だった。

桐生の言葉に、ゆるゆると首を振る。型は古いが、中は綺麗に掃除されており、丁寧に使い込まれているのが分かる。業務で使うのか、後部の座席は取り払われており、折りたたまれた担架が立てかけられていた。

「寒かったですでしょう？ ひざ掛け使っていないからね」

色把に渡されたのは薄いブラウンのひざ掛け。色把は受け取り頭を下げる。ひざ掛けを広げている間に、桐生はキーシリンダーに差し込まれた鍵を回す。車体は一度、ブルンと大きく唸ると、エンジンの振動が伝わってきた。

「じゃあ、行こうかー」

黒いセダンをすり抜け、白いバンは霊園の出口へと向かう。往路で通った一本道に入ると、いつもの調子で桐生は口を開いた。

「身体の方はもう大丈夫？」

桐生に向け、色把は頷く。色把の様子に「うん、良かった」とにつこりと笑むと、桐生は視線を正面に戻した。

「ガバメンタルドッグって言葉、初めて聞いたでしょう？」

車内はラジオもかかっていない。バン独特の大きなエンジン音だけが車内に響く。運転中に色把の唇を読むことは出来ない為、色把は桐生の質問に、動作を大きくし、知らないという意思を伝える。

「狗鬼一族の本家が日本政府と協約してね、莫大な資金と引き換えに狗鬼を派遣しているの。その派遣された狗鬼の集団が、ガバメンタルドッグ。通称、GD<sup>ジーデー</sup>ね。警護っていう仕事一つ取っても、狗鬼

が一人いれば、要人の警護に数十人の人間を置くより遙かに安全だからね。ところが今ね、本家とGDの上層部のほうがうまく行っていないみたいなんだ」

車の速度が落ちる。急なカーブに差し掛かったためだろう。

「菊塵君は、数年前までGDの隠密部隊にいたんだよ」  
ガハメンタルトック

今は修造の下で秘書として働いているが、彼の情報収集能力は目を見張るものがあり、何をするにも短期間で確実な情報をつかんでくる。桐生の説明はこのようなものだった。

「サポートしてもらっている哭士君もだいぶ助かっているはずだよ。ああ、それから本家にいる黒古志 莉子君。彼女も菊塵君と同じ、GDの一員だったみたいだねえ」

色把が本家に攫われる時、莉子は菊塵のことを知っていた。『菊兄様』と名を呼んでいた。

「君のおばあさんのお墓の近くにね、菊塵君の家族のお墓があるの。言っちゃってもいいよね、と独り言を呟いて、桐生は突如切り出す。

「彼が十一歳の時ね、菊塵君以外の家族が全員、何者かによって殺されているんだ」

『！……』

色把は息を呑む。

「十一歳だと小学校だね。ちょうど夏休み、一人外出していた彼が帰宅したときには既に家族全員が亡くなっていたそうだよ」

早池峰家に来たばかりの色把に、祖母が亡くなっていることを伏せながら話す菊塵の顔が浮かぶ。幼い菊塵に降りかかった耐え難い不幸。祖母を失っている色把は、当時の菊塵の心情を思うと、胸が張り裂けそうだった。しかも菊塵は、家族全員の亡骸を目にしているというのだ。

「それから菊塵君は、遠い親戚である『曾根越家』に引き取られた」

「……え？」

思わず、運転席の桐生の顔を凝視してしまった。

「彼は元々、曾根越姓ではないの。『曾根越 久弥』<sup>ひつや</sup>という男性に引き取られて、曾根越姓を名乗るようになったんだねえ」

菊塵の本当の家族も、狗鬼筋の家柄らしい。ただ、さほど力の強い血筋でもなかったそうだ。

「力が強くない血筋の家からでも、たまに物凄い才能を持った狗鬼や、治癒力の高い籠女が生まれたりするの。菊塵君は、狗鬼の能力としてはかなり珍しい力を持って生まれてきたんだねえ」

色把も何度か目にしたことがある。自身、もしくは他者に向かってくる力を『撥ね返す』力だ。桐生は楽しげに、哭士君も、彼の能力で一度ひどい目に遭っているんだよ、と続けた。

「ここで話が戻るんだけど、曾根越 久弥という人はね、GDの司令塔、幹部の一人なんだ。その関係もあってか、菊塵君は引き取られてからすぐ、そういつた『教育』を施されたみたいだねえ。そうして、今の彼があるってわけ」

普段から理性的な菊塵、彼の半生がこうも波乱に富んだものだったとは考えも付かなかった。色把が言葉を失い、黙り込んでいると、桐生はさらに続ける。

「でも、数年前、菊塵君はGDから抜け出してしまったんだ。曾根越 久弥は菊塵君を引き戻そうと躍起になってるってわけ」

桐生が菊塵に対し言い放った『彼』、おそらくその、曾根越久弥の事を指していたのだろう。

「菊塵君は今まで、歯牙にもかけていない様子だけれど、今回、本家とGDでひと悶着ありそうじゃない？ きつと何か仕掛けてくると思うんだよねえ……」



心配、心配、と自身に言い聞かせるように桐生は呟いた。

桐生の中で、説明が終わったらしい。その後は特に口を開くことも無く、早池峰家までの道のりをひたすら走り続けた。

## 2 24 ・忍び寄る脅威

霊園の入り口へと菊塵は戻ってきた。

菊塵が運転してきたセダンの横に、真新しいタイヤの跡が残っている。おそらく桐生の車だろう。

運転席側の扉を開錠し車に乗り込もうとしたその時だった。

「よう。数年ぶりだな」

男の声。菊塵はその覚えのある声に、一瞬動きを止めた。

「久弥……さん」

一人の男が立っていた。四十代を迎えている位の年齢であるが、着崩したスーツを纏っている体軀は逞しい。短く刈り上げた髪に、肌の色は浅黒い。不敵な笑みを浮かべ、一歩一歩菊塵へと近づいてくる。菊塵は、運転席のドアを閉め、車の前に立つ。半歩右足を引き、僅かに身構えた。

「その眼鏡はどうした？ 伊達か？ 似合わないな」

「何故ここに？」

久弥の質問には答えず、菊塵は短く言い放った。その様子を特に気にも留めず、久弥は言い放つ。

「二人つきりになる機会を待っていたのさ。お前もなかなか忙しいようだからな」

菊塵は奥歯をかみ締める。幼い頃から数年前までは、この男を近くで見っていた。それ故、この男の手ごわさは痛いほど身にしみて分かっている。

菊塵が黙り込んでいる様子を見やり、久弥は大きく息を吸い込んだ。表情から笑みが消える。

「……本家に宣戦する。お前の力が必要なのだ」  
やはり来たか、と菊塵は内心舌打ちをする。予想通りの言葉だった。

「僕はもうGDに戻るつもりはありません」

静かに、だが強い口調で言い放つ。久弥が纏っていた雰囲気が一瞬にして険しいものになる。

「そんな答えは求めていない。身寄りのないお前をここまで育ててやったのは誰だ？ 恩義を尽くそうとは思わないのか？」

気性の荒いこの男。菊塵の答えに対する反応も、予想の範囲内のものであった。これから放つ言葉により、何が起こるのかも菊塵には手に取るようにわかる。だからこそ、菊塵はまっすぐに久弥を見つめ、口を開いた。

「貴方の力になる事は、これからありません」

久弥の口の端が痙攣する。そして、次はこう言い放つのだ。菊塵の中にいる久弥と、目の前の久弥の口が重なった。

「……ならば力づくでお前を連れ戻すまでだ」

菊塵の眼前から久弥の姿が一瞬にして消える。

地面を踏みつける音が一度、二度。

「……！」

突如、衝撃が体を襲う。菊塵は黒いボンネットに背中から叩きつけられた。轟音が響き渡り、周囲の雑木から鳥が羽ばたく。

「……除隊願いは提出したはずです」

ボンネットカバーは見事にひしゃげ、体がめり込んでいる。細かくヒビが入ったフロントガラスは、背中が擦れるたびザリザリと音を立てる。覆いかぶさるように菊塵を押さえ込んでいる久弥に菊塵は静かに言い放った。

「認めるわけがないだろう。お前を育てるのにどれだけ金と時間を費やしたと思ってる？ やすやすと手放してたまるものか！」

襟首をつかまれ引き上げられると、太い指が菊塵の頸部を締め上げる。菊塵の能力では、自身に既に触れているものは撥ね返すことは出来ない。徐々に強まる力に、菊塵の視界が薄暗くなっていく。

久弥の右手が自身の顔に向かってくる。左頬に久弥の指が刺さる。

(このままでは……！)

背中に右手を回す。手に触れたものを力の限り引きちぎり、久弥のわき腹に向けて突き立てた。

「がッ！」

久弥の力が緩まる。一瞬の際に菊塵はボンネットから離れ、首をさすった。せき止められていた血液が循環を始め、軽いめまいを起す。

一方の久弥も、菊塵が離れた車から数歩後退する。

「……味な真似をしてくれるじゃないか」

久弥の左わき腹に深々と突き刺さっていたのは、車のワイパーだった。わき腹から生えている鉄棒を見やり、余裕とも取れる笑みを浮かべる。

久弥は徐に鉄棒を無造作に掴むと、顔を苦痛にゆがませ、息を深く吐き出す。僅かにうめき声を上げながら、久弥は鉄の棒を抜き出した。体から引き抜かれる黒い棒に、滴り落ちる赤黒い液体が、地面に赤い斑点を作る。菊塵の鼻腔に、僅かに鉄の臭いが広がる。久弥は無造作に鉄棒を投げ捨てる。乾いた音を立て、鉄棒は地面に沈んだ。

「まあ、いい。今度こそ狗石を奪い取るまでだ。……お前の狗石は俺にしか取り出せないのだからな」

顔をゆがめて笑む久弥の言葉に、左目を眇<sup>すが</sup>める菊塵。

久弥は、懐に手を差し入れる。その動きに警戒をしながら、菊塵も自身の懐に手を入れ、胸元に仕込んでいた拳銃に触れる。

「そんなもの、狗鬼にとつちや玩具にもならんぞ」

狗鬼、しかも戦いなれている久弥に対しては、銃弾など役に立たないことは百も承知だ。だが、菊塵は久弥の言葉には反応を示さずに胸元に手を差し入れたままだ。

「GDから離れ、お前がどれだけ成長したか見せてもらおうか」

突如、懐に差し入れていた右手を振りかぶる久弥。光るものが三つ、バラバラに菊塵に向かって飛んでくる。

菊塵は動じない。飛んできた物が三本のナイフだと判断する。と同時に胸に差し入れていた手を思い切り振り上げた。小気味良い金属音が鳴り響き、飛んできた一本を拳銃の銃身ではじき返す。残りの二本は、自身の能力で撥ね返した。二本は迷い無く久弥の胸の中心に向かって吸い込まれてゆく。

「流石、といった所か。だが、俺の能力を忘れたわけではあるまいな」

不敵な笑みを浮かべた久弥にナイフはまっすぐに飛んでいく。だが、ナイフは久弥の腹部に吸い込まれた直後、彼の背後でカランと音を立て、あっけなく地面へと落下した。

「……透過……」

ナイフの落下の後、暫時の静寂が訪れた。菊塵は久弥の問いに答えるかのように、静かにつぶやいた。

久弥の力は、自身、もしくは自身が放った物質を透過させる力を持つ。故に、銃弾は勿論のこと、肉弾戦も通用せず、拳は体をすり

抜けてしまう。狗鬼の攻撃は、久弥にとって脅威ではないのだ。

「先ほどは不意を突かれたが、お前さんに勝ち目は無い。大人しく狗石を寄越すがいい」

「確かに、貴方の能力がどれほど厄介なものか、この身に痛いほど染みしています。ですが……僕はもう、退くわけにはいかないのです」

まなじり 眦を決する菊塵。その目は強い意思が満ちていた。

菊塵の放った一言に、久弥はゆっくりと息を吸い込んだ。

「……柳瀬フユ、か」

久弥から吐いて出た、思わぬ人物の名前。菊塵に僅かに動揺が広がる。

「俺が知らないとしても？ お前が仕事を忘れるほど熱を上げた女だ、把握はしていたさ」

「……」

菊塵の目は、自身でも意識をしないうちに、険しいものになっていた。

「曾根越、今日の帰り空いてる？」

大学講堂内で広げていた教科書をそろえて鞆にしまっていると、菊塵の背後に声がかけられた。ゆっくりと振り返ると、同じ科の男子学生が二人立っていた。

「今日の夜さ、コンパあるんだけど、行かない？ 男の人数が一人足りないんだよ」

「いえ、結構です」

鞆を肩にかけ、学生二人の脇をすり抜ける。

「だから言ったじゃねえか」

「だって、あいつ顔は悪くないしさあ」

「スカしてて嫌なんだよ、それにアイツのあの噂、知ってるだろ？」

「シッ、聞こえるだろが」  
「聞こえねえよ、もう大分離れているしさ」

(……聞こえてるんだけどね)

背後で会話している男子学生の声。一般人には到底聞き取ること  
は出来ない距離まで離れているが、菊塵の耳は、言葉の端々にかか  
る感情までが読み取れる。

必要最低限の関係だけで十分。

大学に通っているのも、GDの指令の遂行のためだった。学生た  
ちと親交を深める所などない。  
ざわめき立つ廊下、学生たちの間をすり抜け、菊塵は玄関へと向  
かう渡り廊下へ降りる。

ふと、菊塵は足を止めた。

彼の耳は、小さな異音を捉えた。何かが軋む、不自然な音だ。

音の方向に視線を向ける。大学の建物の四階の窓。

転落防止のために付けられた柵から、風に煽られるたび、僅かに  
不快な音が菊塵の耳に届く。

(落ちる……)

軋む音は、徐々に大きくなり、柵が窓から外れるのは時間の問題  
だった。

「!?!」



窓の下に視線を落とすと、中庭を一人の女学生が歩いている。このままでは鉄柵が、間違いなく女の頭に落下する。

見過ごしてしまっても良かった。だが、自身の周囲で、不要な騒ぎが起きるのは避けておく方が良いと瞬時に判断した。

(仕方無い)

渡り廊下を飛び出し、中庭へと駆け出す。

菊塵が踏み出すと同時に、鉄柵は甲高い音を立て、窓から離れた。重力に任せ、鉄柵は徐々にスピードを上げていく。

柵が外れる音に気づいた何人かは、数秒後の事態を察したらしい。短い叫び声の方々で上がる。

声に気づいた当の女は、ハッと上を見上げる。もう眼前に迫っている落下物に、女の細い体は瞬時に強張った。

距離にして数十メートル、落下物が女に接触する寸前で、菊塵は女を抱きとめ、地面へと転がり込んだ。

抱きかかえた女の口から、小さく叫び声上がる。

鉄柵は大きな音を立て地面と激突すると、脆くなっていた部分から外れ、激しく中庭へと散らばった。勿論、鉄の破片が飛来してこない箇所我倒れこむのも十分計算のうちであった。

飛び散った鉄棒が全て静まり返ったのを見計らい、菊塵はその場に立ち上がった。

腕時計のベルトの金具部分が衝撃で壊れてしまったようだ。ゆるくなってしまったそれを、無造作にむしり取り、上着の懐にしまい

こんだ。

「怪我は、無いですか？」

腕に付いてしまった土ぼこりを払いながら、菊塵は女学生に問う。周囲は構内で起こった事故に、大きくざわめき立っていた。

菊塵の声に反応し、女は顔を上げる。艶めいた長い茶髪と、大きな瞳が印象的な女だった。

「う……うん」

起こった事態がまだ把握できていないのか、菊塵の顔を見上げ、目を大きく見開いたまま、縦に首を振った。

「なら、良いです。お気をつけて」

渡り廊下まで戻り、自分の鞆を拾い上げると、菊塵は振り返ることなくその場を後にした。

二回目に出会ったのは、大学の食堂だった。

食堂内はざわざわと、話し声と笑い声でざわめき立っていた。

「あのさ、ここ、空いてるよね」

四人分のテーブルに一人で掛けていた菊塵は、降りかかった声に、いぶかしげな表情で視線を向けた。

声をかけてきたのは、昨日のあの女。菊塵の向かい席を指差している。一晩経って落ち着いたのか、顔には笑みが浮かんでいる。ひざ上のスカートに、すらりとした足は白く細い。

「……別のテーブルが空いているでしょう？」

昼時を少し過ぎた時間帯、食堂内のテーブルは、人が掛けているものより、空いている方が多く見受けられた。大抵、ここまであからさまに接触を拒めば、相手はすんなりと引き下がるのが常であった。だが。

「昨日のお礼がしたくて」

菊塵の返事を聞くことなく、椅子を引くと菊塵の目の前に腰掛けた。

「座つてもよいと返事をした覚えはありませんが」

「貴方の許可が無いと座つちやいけないわけでもないでしょ」

口角を上げ、なにやら嬉しそうな表情を浮かべている女。

「私、小野 フユ。法学部の二年です」

頭をぺこりと下げ、フユと名乗った女は、菊塵に対しにつこりと笑いかけた。

「昨日は本当にどうもありがとうございます。あの時は碌に話も出来なかったから」

「大学内で死人が出るのが嫌だっただけですよ」

菊塵は手元で開いていた本を閉じ、隣の椅子にいていた鞆にしまいこんだ。女は菊塵のそっけない返事を気に留める様子もない。席を立つそぶりを見せる菊塵に、フユは笑顔を崩さずに口を開く。

「やっぱり。噂の通りだね、曾根越君」

自分の名をフユが知っていることに菊塵は驚くことは無かった。もう、慣れているのだ。

自身が幼いときに巻き込まれた殺人事件。それが大学内の一部の人間の間で広がってしまったのだ。

……曾根越 菊塵が、事件の犯人である、という噂をつけたまま。当時、菊塵は十一歳、他者を殺めるなど出来る歳ではない。殺人事件の事を尋ねられて無視をすればするほど、面白がって噂を広げるものが出てくる。現にこうして噂を聞きつけた見知らぬ人間から、好機の目を送られたり、話しかけることがしばしばだった。

「昨日の出来事をきっかけにして、件の殺人事件のお話を聞きだそ

うとするなら、時間の無駄ですよ。そこいらで僕たちを遠巻きに見ている連中に話を聞いてみたらどうです？ 僕なんかの話より、尾鰭のついた恐ろしい殺人事件のお話が聞けますよ」

小野フユが菊塵に話しかけてきた時点から、ちらほらと視線を感じていた。件の殺人事件の噂を信じる学生達だ。感づかれないようにこちらを観察しているようだが、菊塵にはそれが全て手に取るようにわかった。

あまり好奇の目に晒されているのも良くない。菊塵は音も無く席を立ち、食堂の出口へと向かう。

「やだなあ、そんなのが聞きたいわけじゃないってば」  
からからとフユは笑い、菊塵の隣に並んで歩き出す。

「ね。昨日、どうやってあの距離から私の所まで来れたの？」

菊塵の顔を覗き見るフユの言葉にぎくりとする。顔が強張っているのが分かったかもしれない。

「何か、勘違いをしているんじゃないやありませんか。僕は初めから中庭に居ましたよ」

菊塵の言葉に、フユは ふうん、と鼻を鳴らす。

「ね、お礼をさせて。口だけのお礼じゃ、絶対に足りないもの」

菊塵の前に一歩躍り出て、見上げるフユ。

「結構です。それでは」

きつぱりと言い張り、踵を返す。厄介な事に巻き込まれては、指令の遂行に支障が生ずる。背後では、立ち止まって菊塵の背中を見送っているフユの気配が感じられたが、その後は追いかけてくる様子はなかった。

翌日、菊塵はうんざりした気分で手元の本を閉じた。

食堂内、昨日と同じ席に掛けていた菊塵の前に、勢い良く缶コーヒーが置かれたのだ。

「あげる」

「いりません」

フユが話し終わるか終わらないかのうちに、菊塵は返答する。

「あれ？ 砂糖入りが良かった？」

臆する様子もなく、飄々としているフユの態度。差し出した菊塵の前のブラック缶コーヒーを開けて飲み始めた。

何の返答も返さない菊塵をまつすぐに見つめ、缶を細い指で包み込みながらフユは口を開いた。

「お礼させてくれないのなら、こっちで勝手にやるわよ。毎日毎日まいいにち、甘い缶コーヒー買って、届けてやるんだから」

「……」

深いため息が漏れてしまう。どうやらフユは、お礼をさせてもらえないまで、頑として引くつもりは無いらしい。

「……分かりましたよ」

菊塵の言葉に、フユの顔にパツと笑みが差す。

「それで、お礼とは？」

ため息混じりに問いたただいた菊塵に対し、フユは一つ大きく頷いた。

「それ」

フユの指先には、菊塵の左手首。何も変わったところはない。菊塵は小さく首をかしげる。

「腕時計、壊れちゃったんでしょ？ 弁償させてよ」

「……」

意外だった。あの騒ぎの中で、菊塵の腕時計が壊れてしまっていたところを見ていたという。女の観察眼に、菊塵は素直に感心する。

それくらいであれば、と菊塵はフユの申し出を受け入れた。その様子に、フユは今までで一番の笑顔を見せ、一方的に待ち合わせの日時と場所を告げると、嬉しそうに去っていった。

「約束だからね！ 絶対来てよ！」

菊塵には、組織からの指令を遂行する義務があった。

だが、フユの嫌みの無い強引さに、珍しく菊塵も、一日だけならば、という気持ちを抱いてしまったのだった。

「遅い、遅い、おそーい」

フユに指定された待ち合わせ場所、最寄の駅前に、約束時間より十分早く到着した菊塵は、掛けられた言葉に大きいため息をついた。数メートル先に居たフユは、短めのスカートに黒っぽいジャケットを羽織り、菊塵の姿を見るや、大きく手を振り、駆け寄ってきた。周囲の男性達が、声をかけた先の菊塵を見とめ、少々残念そうな表情を浮かべる。フユ当人は視線を浴びていることなど、まったく気づいていない様子だ。

「まだ約束の時間ではありませんが」

「大学生たるもの、十五分前行動は基本だよ曾根越君。アレ、大学で見るよりも結構お洒落だね、君」

菊塵の目の前に立ちふさがるフユ。菊塵の服装をぐるりと見ては、嬉しそうな表情を浮かべている。

「……そういう貴女は、何分前に来たんです」

「三十分前。歩いてきたら意外に早く着いちゃったんだよね」

嬉々として言い放つフユに、菊塵はまたもや、大きいため息をついた。

「で、約束の物はどちらに買いに行くんです？」

フユの言う『礼』とやらを、早く済ませるつもりで居た。このままでは遅々として進まない。駅前のデパートか、はたまた駅に隣接しているショッピングモールに入っている時計店か、菊塵がその方向に足を踏み出したその時だった。

「んとな、その前に、見たいものがあるんだ」

「は？」

思わず菊塵は振り返ってしまふ。すこし困ったように眉毛を下げ、振り返った先のフユの手には、二枚の紙が挟まっていた。

「映画。チケット、買った……」  
「……」

何度目のため息だろうか。菊塵は右手で額を押さえた。

「前からすつごく見たかったの！ でも、一人で行くには寂しいし、ちよつと良かったな」と思つて」

フユは手に持ったパンフレットを眺めていた。映画の余韻に浸っているのか、パンフレットを眺める目は、どこかうつとりとしている。

菊塵の時計もまだ購入せず、流れ流され今はファミリーレストランの中で、フユと向かい合っていた。

「それは結構な事でしたね。僕、そろそろ帰らないといけませんので」

菊塵には組織から課せられた指令がある。こうしてフユとのデート紛いの交流も、一回で終わらせなくてはならない。

「お礼の方は、もう結構ですよ」

テーブルの端に置かれたレシートをつまみ上げると、何か言い出そうとしているフユに背を向け、菊塵はつかつかとレジへと向かう。

会計を済ませていると、眉毛を下げたフユが、菊塵の元へと歩いてくる。



その時だった。

菊塵とフユの間の席から、そろりと手が伸び、フユの太ももに触れた。

「！！！」

身を強張らせ、すばやく飛びずさるフユ。その睨み付けている視線の先には、数人の若い男達がへらへらと笑い、フユの様子を観察している。

男達のテーブルの上には、複数の生ビールのグラスが散らばっている。店内に居たときから不穏な空気を醸しだしていた集団だ。

「おねーさん、綺麗だねー。あの兄さんよりさ、俺らとどっか出かない？」

「お前、止めとけってー」

男達の集団が、ふざけたように声を上げる。言葉こそフユに触れた男を止めるように言っているが、声の調子は明らかに煽っている口調だった。

フユに手を触れた男が立ち上がる。身長も高く、がっしりとした体躯。髪は金髪に染めている。

一般の人間であれば、避けて通るような危険な雰囲気を持っている。

危険だな。

菊塵の嗅覚は、男達から発せられている決して微量とはいえないアルコールの臭いを捉えていた。

一步、また一步と男はフユとの距離を詰めている。何が起きてもおかしくない状況だ。

男の手が、フユの白く細い腕を掴み上げる。

「ちよつと……！ 止めて……！」

女の力では敵うはずもない。フユ全力で男の腕を振り払おうとしているが、男はびくともしない。

菊塵は、今の状況が飲み込めず立ち尽くしている給仕の脇をすり抜ける。

次に男の動きに何かあれば、すぐにでも止めに入る姿勢を整えた。

フユを掴んでいない片方の男の手が、振り上げられる。

菊塵は、地面を蹴ろうと、小さく身を屈めた。

その時だった。

パシン、と店中に響き渡るような、鋭い、だが小気味良い音が菊塵の耳に飛び込んでくる。

次に、どさりと倒れこむ鈍い音。

「……！」

フユが大きく身体をひねり繰り出した平手打ちは、油断しきっていた男の左あごに痛烈に直撃したのだ。

酒も入っていた事と、当たり所が悪かった為だろう、男はそのまま床に倒れこんだのだった。

「ベタベタベタ触るんじゃないわよ！ 気っ色悪いわね！ ぶわぁーか！」

未だに事態が飲み込めず、床にしりもちをついてぼんやりしている男に捨て台詞を吐くと、フユは肩をいからせ、ファミリーレストランを後にした。

「……」

思わぬフユの行動にあっけに取られていた菊塵。男の仲間達が、フユを追いかけてくるつもりは無い事を見届けると、菊塵は会計を済ませ、フユの後へ続く。

店内はしんと静まり、フユが出て行った店の出入り口に視線が集まっていた。

ファミリーレストランの入り口で、フユは腕を組んで立ち、菊塵が出てくるのを待った。今のフユの顔をみれば、誰が見ても、怒っているのがわかるだろう。

もう、最悪……。

昨夜は眠れなかった。やっとここまで　　一緒に出かけられるまでこぎつけたのに……。

程なくして、ドアの開く気配がし、菊塵がフユの隣に並んだ。

「本当、あつたまに来る。昼からお酒を飲むのは個人の自由だけだね、赤の他人に迷惑かけないで欲しいわ。ね、そう思わない？」

フユの横顔を見つめていた菊塵に、フユは勢いよく振り返った。

ここまで来てしまえば、デートなどという浮かれた雰囲気どころではない。菊塵もおそらく今までのように冷たく返されるのが常であ

ろう、と思っていたが、今回だけは様子が違った。

「って、曾根越君……何その顔」

顔はフユの方向を向いているものの、視線をフユの顔からそらし、手で口元を覆い、何かを堪えているようだった。

肩を小さく持ち上げ、フユの顔へ視線が動く。普段は冷たいその瞳は、今まで見たことがなく、目元が緩んでいた。

「やだ、何……その顔」

フユの掛けた声呼び水になったのか、一度大きく噴き出す菊塵。そのまま左手で目を覆い、小さく笑い声を上げている。

ようやく落ち着いたのか、震える声で菊塵はフユを見下ろす。

「……その歳で、『ぶわぁーか！』は無いでしよう………それにあんな平手打ち、初めて見ましたよ」

またもや小さく肩を震わせ手で口を覆う菊塵。フユの行動に驚いた末の笑いだろう。あれほど大学では表情を一つも変えなかった菊塵の意外な笑顔に、思わずフユも顔がほころんでしまう。

しばらく笑いを堪えていた菊塵が落ち着くのを待ち、フユは歩き出す。自然に二人の肩が並ぶ。

その日から、フユと菊塵の間にあった壁は、僅かに、だが確実に取り払われていったのだった。

## 2 27 ・嵐の夜

あのフユと出かけた日からというもの、菊塵とフユの間の距離は急速に縮まっていった。

食堂で読書にふける菊塵の向かいで、フユは他愛のない話を続ける。菊塵は本に視線を落としたまま、フユの言葉に相槌を打つ。

はたから見れば、迷惑そうな菊塵に、フユがしつこく話しかけているように見えたことだろう。

だが、菊塵にとってその時間は心地の良いものとなり、フユもそれを言葉に出さずとも察しているようだった。

一月、二月と時間をすごすうち、その感情は勢いを増し、少しでもフユとの時間を過ごしたい、そう思うようになってゆく。

今まで、政府の狗の一員として育て上げられていた菊塵であったが、押さえ込んでいた十代らしい浮ついた感情が今になって湧き出し、自身を僅かに狂わせ始めていた。

一度として欠くことの無かった組織の指令を一度、二度、徐々に無視する回数が増えていった。

アパートの一室で、菊塵はベッドの端に、手を組み座り込んでいる。

目の前のテーブルに置いてある二つの携帯電話のうちのひとつが、先ほどから何度もメールの着信を告げるバイブレーターの音が鳴り響いている。

点滅を繰り返すのは組織から支給された携帯電話だ。指令に関わるメールに違いない。

「……」

静かに震える携帯電話に視線をちらりと寄越すと、それを察したように振動は鳴りを潜める。

僅かに建物が揺らいでいる。窓には先ほどから忙しくなく滝のように雨が降り注ぎ、時折激しい稲光が鋭く目に飛び込んでくる。

組織へ戻ってくるように連絡を受けてから、二日が経とうとしていた。組織には連絡を取っていない。

今まで、受けた指令は全て完璧に完了していた菊塵は、今回完遂した指令が不完全なものであることは十分承知していた。

現在も、自身が組織から与えられたマンションには戻らず、フユの暮らしているアパートの一室にこうして座り込んでいた。

このままではいけないことは分かっていた。だが、家族を失って以来、味わうことの無かった、人の温もりに触れ、菊塵は自身でも弱くなってしまったと心痛している。

ガバメンタルドック  
元の世界に、戻ることに逡巡してしまっているのだと、自分でも思う。

組織に戻れば、また血と鉄と硝煙の臭いがする世界に戻らなくてはならない。だが、できることならば、『普通の大学生』として、このまま生活を続けたい、心の奥底で願っていることは、隠しきれない事実だ。

そして、その願いのさらに奥底には、生意気に微笑む一人の女。

「全く、僕はどうしてしまったのか……」

誰に語りかけるでもなく、苦笑を含んでは一人ごちる。菊塵が放った小さな独り言も、絶え間なく降り注ぐ雨風の音にかき消された。

と、玄関のチャイムが一度鳴り響く。

時刻は夜の八時。フユは今日、実家に戻ると言っていた。気配を消し、玄関の覗き穴から廊下を覗き見る。

「……フユ……！」

丸い覗き穴の中央には、ずぶ濡れになったフユが立ち尽くしていた。表情は明らかに暗く、たっているのがやっという状態で今にも崩れ落ちそうだ。ロックを解除し、すぐさまフユを迎え入れる。

「どうしたんです？ こんな天気……！」

フユは今日、一人暮らしをしているアパートには戻らず、実家に戻ると言っていたはずだ。

ドアを開けると、玄関には強い風が吹き込んでくる。新しいデザインの吹き抜けになっているアパートの廊下は、叩きつける雨で黒く濡れていた。

フユは、菊塵の問いに答えようとしなない。

「とにかく、中へ」

肩に手を回すと、フユの肩は凍えるように冷たい。長時間雨の中に居たに違いない。ベッドに座らせ、バスタオルを肩にかけようと、菊塵が近づく。

と、フユが菊塵の顔を見上げ、腰の辺りを強く引いた。菊塵はそれにたづねられるようにひざを折り、フユに視線を合わせた。

手繰るように菊塵の胸元を掴む。

「菊……」

尋常ではないフユの様子に、菊塵は黙ってフユの次の言葉を待つ。

「逃げよう、菊……！ 二人で、誰も居ないところに行こう……！」

フユの手を取ると、フユの手は大きく震え、氷のように冷たい。「落ち着いて下さい。一体何があったんです？」

覗きこむ菊塵の顔に、フユは目を合わせられない。フユに掴まれている菊塵の胸元の生地が、フユの指の動きに合わせ小さく軋む。

「私……私……」

ようやく、目の焦点が戻り、静かに口を開き始めたフユ。菊塵はフユの次の言葉を待った。

その時だった。

鋭く風を切る音が、菊塵の耳元を掠る。同時に、フユの背後で、バサリと紙が落ちる音。

「……」

すばやく反応をし、振り返ると、白い壁には一本の釘が突き刺さっていた。カレンダーを留めるために壁に刺していた釘だ。それが何故か今、菊塵の背後の壁に向かって飛来してきたのだ。

「これは……」

その事態に、菊塵以上に戸惑っていたのはフユだった。先ほど以上に体が震えだし、息が荒くなる。

「……何で……？」

フユの言葉が終わらぬうち、彼女の体は、電気が流れたように激しく一度波打つ。

「フユ!？」

尋常ではないフユの様子に、菊塵はフユを抱きとめようと一歩踏



み出す。

「離れて！」

金切り声にも似たフユの叫び声。自分を抱きしめるようにして、菊塵の腕から逃れる。

「……一体、どうしたというのです」

今まで見たことの無いフユの顔。菊塵にも動揺が広がる。

突如、フユの背後のベッドが大きく軋みを上げる。

誰も触れていなかった鉄パイプのベッドは、一瞬で形を崩し、鉄棒の集まりとなった。

「……！」

目を見開く菊塵。こんなことが出来るのは 狗鬼しか居ない。

組織が、自身を連れ戻そうとしてきたのか。

周囲に意識を張り巡らせる。自分が標的ならフユを安全な場所に移動させなくてはならない。

だが、次の瞬間、菊塵の耳が捉えたのは、信じがたい言葉だった。

「……私、狗鬼なの」

目の前の、かけがえの無い者から発せられた言葉。菊塵は言葉を失った。

フユが、狗鬼……。

菊塵の思考が一瞬だけ止まったその刹那、鋭い痛みで菊塵の停止した思考がよみがえる。

鉄パイプが、菊塵のわき腹を掠めたのだ。

出血を止めようとわき腹を強く押さえつける。喉の奥からうめき声が漏れ出す。

「誰かが、私の狗石を使って……貴方を殺せて……！ 菊、逃げて……！」

フユの顔は悲痛な表情に染まっている。

「私の名前……、本当は、柳瀬って言うの……」

菊塵の記憶にもその家の名は残っている。かなり強い力を持つ狗鬼や籠女が生まれる家だ。狗鬼らは、苗字で自身の血筋を分け、苗字を聞けばどこの家柄の者かを把握できる。

自身が狗鬼の家筋と打ち明けるフユ。結果的に、フユは菊塵が狗鬼であることを知って、近づいたという事になる。

一体、何のため……？

フユが話している間にも、鉄パイプは容赦なく菊塵に襲い掛かる。床を転げ、避ける端から、激しい音を立て、床に、壁に突き立つ鉄棒。

「狗石はどこにあるんです！？」

菊塵が叫び、フユに問う。その間にも、二本、三本と、鉄パイプが菊塵の脇を掠める。

狗石で操られているであろうフユは、必死に狗石から下される命に背こうとしているのだろう。顔からは、汗が滴り落ちている。

「隠してた！ ちゃんと隠していた……！ なのに……！」

苦しい表情を浮かべているフユ。その瞬間、はっとした表情を

浮かべる。

「避けて！」

悲痛な同時に、菊塵の懐にフユが飛び込んでくる。

やはり、常人とは思えぬ身のこなし、菊塵は改めてフユが狗鬼であることを確信した。

後ろに飛びずさり、身をかがめた菊塵の太腿に、大きな衝撃が走る。

「……！」

思わず声を張り上げた。

太腿を貫く、一本の鉄棒で床と菊塵が留められた。

肉体をえぐる鉄棒を抜こうとするも、床に深く突きたてられたそれは、僅かに軋みを上げるのみだった。

「菊！」

悲鳴に近いフユの声。叫んだフユの頬からは、数滴の粒が零れ落ちる。

「殺して！ 私を殺して！」

フユの金切り声が、部屋に響き渡る。菊塵にフユの叫びが痛いほど心に突き刺さる。狗石を操るものを止めるか、狗鬼自身が死ななければ、この攻撃が止むことは無い。

「……出来るわけ、ないでしょう」

太腿に突き刺さった鉄棒を握り締め、呟くように言い放った。菊塵の言葉はフユに届いたらしい。強く息を呑みこみ、フユは大きく首を振った。

自身では抗えぬ力、その力で愛するものの命を奪うことは、誰に

とっても耐え難いものに違いない。ならば、自分の命を絶つほうが良い。菊塵にとっても、それは同じことである。

菊塵は、身構えるのを止め、両手を下ろし、すべてを委ねるよう  
にフユを見つめた。

フユの唇は戦慄き、首は小さく横に震えている。

小さな唇は、嫌だ、嫌だという言葉を繰り返し刻んでいる。

絶え間なく下されている狗石からの命令に、今も必死に抗っているのだろう、飛び交う鉄棒は時折不自然な動きを見せ、フユのこめかみを掠る。

飛び散る鮮血は、フユの頬を真っ赤に染めた。

だが、フユの抵抗も空しく、一際太い鉄棒が浮き上がり、菊塵に照準が向いた。

それを捉えたフユの目は何かを決心したように、色が変わった。

「菊塵、ごめんね。こうするしか、無いみたい」

悲しげでいて、それでも強い口調のその言葉は、以後の菊塵の心に、強く残るものとなった。

「脇がから空きだぞ！」

怒声に、菊塵は現実引き戻された。咄嗟に半身を引き、飛び掛つてきた久弥の拳を避ける。凄まじい勢いに、掠った菊塵のスーツの端は、無残に千切れ去った。

「どうした、あの女の名前が出てから、随分動きが鈍ったようだが」  
菊塵は久弥の表情を見つめる。フユの事を話し、自身の動揺を引き出そうとしていることは明らかなのだ。

「しかし、なかなかあの女もしぶといようだな。一思いに逝けば良いものを。みつともなく命を永らえさせて……」

耳を劈く銃声が冷たい空気を引き裂き、久弥の言葉を遮った。思わず引き金を引き絞ってしまった。

菊塵の髪は、押さえ込んだ感情で逆立っている。だが、湧き上がった怒りは、菊塵の虹彩を真紅に染め上げる。

「……そうだ、その目だ。ようやく昔のお前が戻ってきた」

久弥へと向いている銃口からは薄い煙が立ち上っている。当然、銃弾は久弥の眉間をすり抜け、傷一つ負わせてはいない。

この男が菊塵に向ける瞳は、不敵な笑みを浮かべているものだった。

久弥の笑みを目の当たりにする度、この男に出会った直後のこと

を思い出すのだった。

身寄りが無くなった幼い菊塵を引き取ったのは、遠い血縁関係であることや、慈悲の心では無かったことを思い知るはこの男と出会って間もなくの事であった。

ガバメンタルドッグ  
政府の犬という大きな組織で、一つの消耗品として拾い上げられただけだったのだ。

だが、久弥にとって思いもよらなかったのは、使い捨てとして捨てた狗鬼が期せずして大きな働きをするようになった事であろう。

かつて、まともな訓練も施されないまま、敵地に放り込まれ、囚として取り残されたことがあった。戦い方を知らぬ、同じく久弥に拾われた狗鬼たちが次々に落命する中、菊塵は自身の能力を駆使し、自力でGDに戻ってきた事があった。それが、久弥の目に留まったのである。

「敵地から一人で、それも無傷で帰ってきたお前さんを見て、鳥肌が立ったよ。こいつは『化ける』ってな」

自身の心情を読み取ったかのような久弥の言葉、だが菊塵は無表情を装う。

久弥直々の『教育』が始まったのは、それからまもなくの事だった。

「お前は教え込んだ全てを吸収し、俺の右腕にまで成長した。だが、金と時間を掛けた大事な大事な子供にも等しい部下を、突然現れた女一人の為に失うことになる……この気持ちがかかるか！」

「……！」

瞬間、久弥が目の前に現れた。腕で防ぐ間も無く、菊塵の体に衝撃が襲い掛かる。鍛え上げられた腕から放たれる拳は重い。中肉中背の菊塵の体がいとも簡単に吹き飛ばす。

地面に体を強かに打ち、うつ伏せになった状態でようやく止まっ

た。菊塵の濃灰色のスーツの上着は既に砂塵で所々が白くなっている。

腕に力が入らず、立ち上がれないでいると、砂利で汚れた革靴が菊塵の視界に入ってくる。

「……ぐっ」

スーツの襟首をつかみ上げると、久弥はぐい、と自身の顔に菊塵を引き寄せた。

菊塵のつま先は地面から僅かに浮き上がっている。吹き飛ばされた衝撃は未だ体に残っており、久弥の手を逃れようと身じろぐことしか出来ない。

「一つ、教えてやろうか」

久弥の言葉は静かに、だが重く低く菊塵の耳に届いた。

「柳瀬フユが倒れたあの晩、狗石を使ったのは……俺だ」

「……」

菊塵の目が大きく見開かれる。菊塵の脳内で記憶の断片が目まぐるしく駆け巡る。

窓に激しく当たる大粒の雨、壁につきたてられた鉄パイプ、体中を赤く染め倒れる女……

女の唇が静かに動く。

菊塵、ごめんね。

「嫉けた女を殺せば、お前も目を覚ますだろうと思ってな。だから、壊してやったまでのこと。……だがまさか、お前がこんなにも脆いとは、俺にも予想が出来なかったがな」

菊塵の奥歯が軋む。

「お前が……」

先ほどまでの体の軋みは何処かへ行ってしまった。

「お前がフユを……！！」

襟首をつかみ上げている久弥の腕をひねり上げる。僅かに下がったその腕を軸に、菊塵は地面を蹴り上げ、膝を男の顔に叩き込む。が、顔面へと叩き込んだ膝は空を切る。突如、掴んでいた久弥の腕の感覚も無くなり、菊塵はそのまま地面に崩れ落ちた。

久弥が能力を発動させて、菊塵の攻撃をすり抜けたのだ。

地面に手についている菊塵の背に、久弥は懐から取り出したナイフを差し向ける。がばりと起き上がり、それを避けた。

菊塵の目は冷静さを欠き、血走っていた。一瞬身を屈め、俊敏に久弥に踊りかかる。

が、菊塵の体は久弥をつき抜け、反対側の地面へと無様に落下した。

「……俺の能力を忘れるほど激高するなんてな」

既に眼鏡は壊れ、何処かにいってしまった。菊塵の双眸は、真っ赤に染まりながら、久弥の顔のみを睨み付けている。

最早、普段の冷静さなど吹き飛んでいる。しまいこんでいた拳銃を取り出し、久弥に銃口を向ける。

「お前がッ！ お前がッ！！」

銃弾は久弥にとって全く無意味だ。侮蔑と嘲りが入り混じった視線を菊塵へ落とす。菊塵は震える手で我武者羅に引き金を絞った。

四発、五発。

あたりに響き渡る銃声。その後は、菊塵の引き絞る指に合わせ、



カチ、カチとむなしい音を立てるだけだった。

「クソッ！」

拳銃をかなぐり捨て、吼え声を上げる。普段の菊塵からは考えられない姿だった。

「…………お前も堕ちたな…………失望した」

菊塵のわき腹に衝撃が走る。突然の攻撃に、息が詰まり、声を上げることはなかった。

背中から激しく地面に倒れ、鋭い痛みが背中を駆け抜ける。

打ち付けられたことで体は呼吸を忘れ、胸がひくひくと痙攣している。

「埋め込んだ狗石だけでも、頂いていくぞ。お前がこんな状態では、捨て駒にしかならないと思うがな」

菊塵に馬乗りになった久弥は、菊塵の首根を掴み、菊塵の左目に向かって右手を近づける。

「自身の狗石を見るのも十年ぶりだろう。俺がこの力で左目に狗石を埋め込んでやったんだからな」

狗鬼である以上、狗石という、自身の自由を奪いかねない物を外にさらしておくのは脅威以外の何者でもない。ある者は能力を失うことと引き換えに狗石を飲み込み、ある者は肌身離さず持ち歩き、またある者は誰も知らない山奥に狗石を埋めて隠す。だが、狗石という物質が存在している以上狗石を使われ、自身の自由を奪われる

という脅威から逃れることは出来ない。

G Dの狗鬼たちは、狗石という弱点を少しでも無くすため、久弥の『透過』の能力により体に埋め込まれる。無論、狗石を飲み込んだわけではないので、特殊能力が失われるということは無い。

久弥の右手が菊塵の顔面に沈んでいく。苦痛に表情をゆがめたままの菊塵。

突如、久弥の表情が強張る。

「貴様！ 狗石をどこにやった!？」

久弥の言葉に、菊塵の目に光が戻る。口の端がゆっくりと上がる。

「があアッ!!」

刹那、猛り声を上げたのは久弥だった。

銃弾が六発、音も無く見事に久弥の背中を打ち抜いたのだ。開いた口から、決して少量とは言えない鮮血が溢れ出す。菊塵のスーツにも、傷から溢れ出した血が垂れ、染みを作った。

「貴……様ッ！」

久弥の目が憎悪に染まる。が、強い言葉とは裏腹に地面に肩から崩れ落ちた。

菊塵はゆっくりと立ち上がり、久弥を見下ろす。

「ずっと待っていたんです。貴方が『静止して』能力を僕に使おうきを」

「!!!」

菊塵の言葉に、久弥の唇がわなわなと震える。

「貴方は、自分の視界で捉えたものと、背後であれば意識をしなければ透過させることは出来ない。そして、透過能力を発動している間は、別の部位に能力を使うことは出来ない」

掴み上げられた菊塵が、久弥に蹴りを繰り返したときのことだ。頭部に向かってくる菊塵の足を透過でやり過ごしてから、菊塵が掴んでいた腕に能力を使い、菊塵の腕をはずした。攻撃をやり過ぎたのであれば、わざわざ最後まで腕を掴ませておかずとも、全てを透過させ、菊塵を地面に叩きつければ良いはずである。

「僕に対して能力を使い、そして、背後に隙ができるのは、狗石を奪いに来るその時しか無いと思っていました。背後を狙う弾丸を違和感無く放つには、少々演技が必要でしたが」

先ほどと立場が逆転している。動揺を隠しもしない久弥に対し、菊塵は軽く胸元を手で払いながら、静かに笑みをたたえている。

「……今まで放った銃弾を、全て俺に向けて放ったのか」  
「はい。貴方の意識が完全に僕に向くまで、今まで放った六発の銃弾を反射、反射を繰り返しながら『保持』していました。まあ、それで自分への攻撃は全て受けなくてはいけなかったんですけれど」

菊塵の言葉が耳に届いているのかいないのか。久弥の口からは重い歯軋りの音が聞こえてくる。

「いつから……知っていた!?!」

自身の能力の欠点を、ということであろう。冷静を欠いている久弥に対し、菊塵は静かに息を吐き出した。

「貴方の能力を見た、そのときから、です」

「!!!」

目を大きく見開く久弥、だが次の瞬間にその表情は大きく崩れ、大きな高笑いを上げた。

「これは！ とんだ笑い話だ！ 飼い犬に手を噛まれるどころか、全て見透かされていたとはな！」

地面にこぶしを突き立て、ゆっくりと久弥は立ち上がった。大きな体躯が、ぐらりと揺れる。

「今は退く。だがやはり、貴様はGDに必要だ」

にやりと笑みを浮かべた久弥は、数歩下がり一度大きく後ろに飛びずさると、久弥の姿は見えなくなった。

久弥が立っていた場所には、大きな血だまりが出来ている。相当な出血量、常人であれば、動くことすら困難な怪我であっただろう。幾度も戦いを潜り抜けてきた猛者の執念を菊塵は感じ取った。

「……くっ……」

ぐらりと視界が揺れ、菊塵はその場に膝をついた。

戦いにおいて、哭土ほど負傷に慣れていない菊塵の体は、負荷に耐え切れずに悲鳴をあげている。

ここに桐生が居れば、と悔やんでも遅い。既に桐生は色把を連れ、早池峰家に到着している頃だろう。

「車も……動きませんね……、どうしたものか……」

ボンネットが大きく歪んでいる車は、運転して帰るのは不可能だ。この体では、走って帰ることもままならない。連絡を取ろうにも、先の戦いで既に携帯は壊れてしまっている。

人目につく場所ではないものの、横になり身体を休めるには適さない場所である。久弥が去ったという心の緩みが、抑えていた痛みを思い出させる。

身体が、動かない。

絶え間なく体を襲う痛みが、あの夜のことを思い起こさせるのだ。つた。

菊塵、ごめんね。こうするしか、無いみたい。  
あの雨の夜。

菊塵の顔面を、今までに無い大きな衝撃が襲い掛かった。  
瞬時には自らの身に何が起きたのかを理解することは出来なかつた。

だが、直後に襲い来る壮絶な痛みにも、菊塵は喉が張り裂けるほどの猛りを上げ、顔面を押さえながらうずくまった。

同時に、床に硬いものが転がる。

左目から零れ落ちたのは、菊塵の狗石だった。

顔を押さえ込んでいる菊塵の手は、見る見るうちに真紅に染まっ  
てゆく。

少量とはいえぬ生ぬるい液体が指の間を流れ落ち、襲いくる苦痛  
に、体がくの字に折れ曲がる。

「何故……僕の狗石の在り処を……!!」

痛み能耐えながら、搾り出すようにフユに問う。体内に狗石を埋  
め込んでいることは、埋め込まれた菊塵と、久弥しか知らないはず  
である。

フユは、菊塵の狗石の在り処を初めから知っていたようである。

「……血の、流れ。私の能力は鉄を操れる、だから……」

短いフユの言葉で菊塵はフユの言わんとしていることを察する。

血には鉄分が含まれている。鉄を操れるフユは、人の血の流れを  
も察することが出来るのだろう。

その為、菊塵の左目付近の血流が、不自然になっていること気づいた。その為狗石が埋め込まれていることを知っていたのだ。

一步、また一步と、フユは菊塵の元へと足を進める。震える体を必死に操り、フユは菊塵の前に転がり落ちた小さな石を拾い上げる。苦しい表情を浮かべながらも、菊塵の狗石を、優しく握り締める。

その感触は、菊塵の体を包み込む。狗石を握るフユの手から、これからフユが行おうとしていることが狗石を通じて流れ込んできた。それは、逆の立場であったとしたら、菊塵が迷うことなく行っていたであろう事。

「止める……！」

猛る声はフユには届かない。最後まで、自身に下された命令に抗おうと、フユの表情は苦痛に満ちている。フユの目が、見上げている菊塵の目と交差した。

目が合い、一瞬にして、緩まるフユの表情。これから行おうとしている事に迷いを捨てた、柔らかくも強い瞳。菊塵は息を呑んだ。ゆるりと開いた唇から、紡がれる短い言葉。

フユの背後には、無数の鉄棒。すべて先端は菊塵に向けられている。

「ちよなら」

フユの言葉と同時に、次々に菊塵に向かって来る無数の鉄棒。まるでコマ送りのように近づいてくる鉄棒。

うづくまった状態から無我夢中で伸ばした右手は、フユに届くはずも無い。

まぶたを強く閉じるフユ、窓に当たる大粒の雨さえも、菊塵にはその時全てを知覚することが出来た。

それは一瞬の事だった。

軟らかい物を貫く、生々しい音。轟く雷。そして、一拳に多数の鉄棒が床に突きたてられた事で、建物は大きく揺れた。

見開いた菊塵の右目が、認めたくない現実を映し出す。

「あ……ああ……！」

開いた口からこぼれだす言葉は、すべてが叫び声となって意味を成さない。

無数の鉄棒が腹部を貫かれている、フユの姿。床が一瞬で真っ赤に染まっている。

顔は天井を仰ぎ、膝からフユは崩れ落ちた。背中から突き出した鉄棒は、フユが倒れ臥すと同時にけたたましい音を立てた。

力の限り、鉄棒が刺さっている足を振りぬいた。

引き千切れる鈍い音と太腿の痛みと共に、菊塵の右足は自由を得た。半ば這うように、菊塵はフユの元へとたどり着く。

フユは、菊塵の狗石を使い、菊塵に放った攻撃を全て自分に向けたのだ。菊塵の能力まで、フユは最初から知っていたのだろう。

「フユ！ フユ！」

名を呼び続ける菊塵の叫びにも似た声に、閉じられたフユの瞼がピクリと動き、フユの瞼がゆっくりと開かれる。

多量の出血。菊塵の体を、自分の物ではない生ぬるい液体が伝う。フユの命が流れ出している。

「……」

フユの左手がゆっくりと持ち上がり、菊塵の頬に触れ、菊塵はフユを見つめた。

何か言いたげなフユの瞳、フユの口がゆっくりと動く。

私が、守る。

確かにフユの唇が刻んだ言葉。

「……フユ？」

フユの言葉を飲み込めない菊塵。見開いた右目が、何か光るものを捉えた、が、瞬時にそれは激痛へと変わり、菊塵の目は光を失った。

釘が、残った右目にも襲い掛かったのだ。

直後、フユの首が下がる。同時に重くなるフユの体。

この人物の命が、後わずかで燃え尽きてしまいそんなことを、菊塵は感じ取った。

右目の傷など、然したることではなかった。掠れた声で何度も何度もフユの名を叫ぶ。だが、菊塵の声は、フユにはもう届かない。



こみ上げてくる制御の出来ぬ感情。自身の怪我など忘れ、体温を失いつつあるフユの体を抱きとめた。

雨は激しく降り続けている。

抉られた左目も、自ら引き剥がした右足の傷も、知覚することを忘れ、菊塵は、今しがた起こった出来事が信じられずに、ただ呆然とフユの体を抱きとめていた。

だが、その時間も長くは続かなかった。

背後で響き渡る、悲鳴。

目は見えずとも、菊塵の聴覚は、その声の主をも聞き分ける。フユの妹、アキの声。そしてその背後には聞き覚えの無い人物の足音。「これは……一体……！」

声からは屈強そうな体躯であることが想像できる。この壮絶な部屋内の様子に、言葉を失っていた。

それからは、現場に駆けつけた屈強そうな男、蓼原の手配で、菊塵とフユは別々の病院に運ばれ、治療を受けた。

菊塵は偶然にも、桐生が所属する病院へと運ばれ、桐生の素早い処置により、失明を免れた。

だが、不幸にも『人間』用の病院へと搬送されてしまったフユは、狗鬼としての治療が遅れ、今も眠ったままの状態なのである。

これが、全ての真相だった。

菊塵はフユに手をかけていない。だが、フユを傷つけていない、

とは言い切れない。

自分が未熟だったばかりに。心をゆるしてしまっただばかりに、今もフユは、病院の一室で、管をつながれた状態で眠っている。

僕の甘さが、彼女の人生を奪った。

菊塵の心中には、その思いだけが消えることなく残っている。

## 2 30 かつての仲間

「!」

ふと、自身に近寄ってくる一つの気配を感じ取り、菊塵は現実引き戻された。

久弥のものではない。身体を起こそうにも、腕に力が入らない。じつくりと気配を探るが敵意を感じられない。菊塵は近づいてくる気配の動向を見守った。

背中に恐る恐る触れる細い手。

「菊兄様……」

聞き覚えのある声に、菊塵はその声の主の名を呼んだ。

「莉子……」

かつて、同じGDに所属していた、妹のような存在だった少女がそこにいた。

「何故、ここに」

「腕、出して」

菊塵の問いに答えようとしない莉子。地面についた菊塵の腕をとり、スーツの袖をまくった。

腕の支えを失った菊塵は、肩から地面に倒れ伏す。小さくうめき声上がる。

「莉子」

伸びてくる手を振り払おうとするが、莉子は首を横に振り、それを拒む。

莉子が何をしようとしているのか察した菊塵は、口を閉じ莉子の様子を見つめた。

むきだしになった菊塵の腕に莉子は迷いも無く噛み付く。血管の浮いた腕から一筋の血が流れ出すと、すかさず莉子は、上着の懐か

ら小さな薬ビンを取り出した。籠女の血の、治癒成分を抽出したものであると、菊塵は一瞬で理解した。透明な液体は、莉子がつけた傷に吸い寄せられるように集まり、浸透していった。

薬品が体に回ってくると同時に、体中についていた小さな切り傷はみるみる塞がっていく。

絶えず広がっていた体中の痛みも、静かに引いていくのが分かる。

「久弥に妙な動きがあると聞いて……」

久弥の動向を探りに来て、傷ついた菊塵を見つけたのだろう。莉子はそこで言葉を切り、唇をかみ締める。何か言いたげな表情を浮かべている。かつて同じ組織に組んでいた時、しばしばこのような表情で、莉子は菊塵を頼ってきた。

「菊兄様……私……」

彼女が何か、自身の力を必要としていることは分かる。だが、今おかれている立場では、その願いを叶えることは不可能であろう。菊塵は、静かに立ち上がり、何かを言いかけている莉子を見下ろした。

「……傷の当て、感謝します。ですが今は僕と貴方は別の組織に組する人間です。貴方のその安易な行動が、何かの引き金になりかねない。違いますか」

莉子はかつて、行動を共にしていた仲間、である。だが、今や目の前の少女は本家の当主を守る狗鬼。片や菊塵は、本家が抱く保守派の意向に対立する、革新派の一員である。ともすれば、敵同士。こうして手当てを施している場面を誰かに見られでもすれば、忽ちに問題が発生する。菊塵は、あえて莉子突き放した。

「……そう、だね。ごめんなさい」

菊塵の言葉に、莉子は小さく呟く。一つ弱く頷くと、軽く地面を蹴り上げ、静かにその場を立ち去った。

「……」

完全に、菊塵の周囲には誰も居なくなつた。息を大きく吸い込み左手を身体の前で握り締める。どこも痛むところは無い、身体は既に全快していた。

莉子が何のために、自身の怪我を治癒させに来たのかは分からない。

（今や、彼女は本家の狗だ）

一度頭を振り、心中の淀みを打ち消した。

まだ、自分の仕事は残っている。早池峰家に帰らなくてはならない。

菊塵は、身体をほろい、ある程度の砂埃を落とすと、早池峰家に向かつて歩を進めた。

曾根越が関わる事件は、次々と闇に葬られている。どうしても自分の目で確かめたかったのだ。

勢いで早池峰家の前まで来てしまった。

（だが、どう切り出す？）

自分の直感でたどりついた結果は独りよがりのものに過ぎないのだ。

だが、ここでの機会を逃してしまえば、自身が掴みかけた、真実につながるかもしれない一片を永遠に失ってしまうことになるかもしれない。

もう、後には引けないのだ。

（外に出てきたところを押さえるか……）

早池峰家の門に注意を向けながら、張り込みを続けた。

が、蓼原の思惑は外れてしまった。

早池峰家の前で待つこと数十分、黒いセダンが早池峰家の正門に横付けする。セダンから降りてきたのは曾根越本人だった。

正門から出てきた色白の少女を助手席へと座らせると、曾根越は運転席に乗り込み、静かにセダンを発進させた。

「……………」

走り去った黒い車を見送り、蓼原は煙草に火を点けた。車で出かけたとなれば、暫くは戻って来ないだろう。

（……………出直すしかないか）

紫煙を吐き出し、吸い終わった煙草を携帯灰皿へねじ込む。

その時だった。蓼原は、一人の人物の影を捉える。

(あの少女は……)

先ほど菊塵と車に乗り、出かけていったはずの色白の少女だった。早池峰家に入りをしている人間の一人で、名は比良野 色把だったか。

それが今は一人で歩いて屋敷に入っていく。

(何か、妙だ)

数回、張り込みをした際に見かけただけであるが、どこにでも居そうなおっとりとした少女という印象を持っている。だが、今蓼原の視界が捉えている少女は、なにやら纏っている雰囲気が違うように思えた。どこか妖艶な色香を持っているように思えるのだ。

その場を離れようとしていた蓼原の足は止まっていた。胸騒ぎがする。

蓼原は、そのまま様子を見守った。

数分も経たぬうちに、少女はまたもや姿を現した。

少女の後ろには、一人、小柄な少年が続いている。少年にも見覚えがあった。早池峰家に寝泊りをしている、苑司という少年だ。

「色把さん、一体どこに？ 哭士君が僕を呼んでるって……」

苑司が、前を歩く色把に声をかける。だが、色把は何も答えず、苑司を振り返ると、にっこりと笑みを浮かべ、苑司の手を引いて歩き出す。

「え……！ え……！ ちょっと……！」

顔を赤く染め、慌てた様子を見せるが、色把の手を振り払うわけ

でもなく、大人しく手を引かれるまま歩みを進める苑司。

(曾根越は……どうしたのだろうか?)

車に色把を乗せる様子からも、少女を大事に扱っている様子が伺えた。だが、今は周囲に曾根越の姿は見当たらない。

そうこう考えているうちに、色把と苑司は、早池峰家の門からどんどん遠ざかってゆく。

「……………」

もう一度周囲を見渡すも、やはり曾根越は居ない。

蓼原は、黒髪の少女と、小さな少年の後ろを、気づかれぬように追いつめた。



## 2 3 2 山道の先

色把は、大通りまで出ると、苑司の手を引き、迷いもなくバスへと乗り込んだ。

曾根越の車は如何したのだろうか。

二人の他に、数人の乗客がバスに乗り込む。蓼原も、一般の乗客に紛れ、バスへと駆け込んだ。

(随分と、さびしい所だな)

高級住宅街を抜けてしまえば、そこはもう、民家が点在する寂れた町並みへと変わる。

だが、寂れた町並みを過ぎても、色把と苑司は降りる気配が無い。やがて、バスの乗客の人数は減り、車内は、色把と苑司、蓼原のみとなってしまう。

蓼原は、バスの中で居眠りをしているフリをし、静かに二人の様子を探った。

色把は窓の風景を眺め、苑司はなにやら落ち着かない様子で視線が定まらない。

やがてバスは、終点へとたどり着いた。

ここでようやく、色把が腰を上げる。苑司も色把に反応し、席を立つ。

色把と苑司がバスから降りるのを見計らい、蓼原も後に続いた。

人気の無い道、直後ろを歩いていては、流石に怪しまれてしまう。遠くに二人の姿を確認できるまで距離をとり、後を追い続ける。

時刻はまだ16時頃と早い時間だが、日が早く落ちるこの時期は、夕方のように薄暗くなりかけている。

周囲は、人が住んでいるのかわからないような古びた小屋や、積み上げられた大きな木材、手入れのされていない田畑が広がっている。地面のアスファルトは暫く舗装もされていないようで、ひび割れ、間からは雑草が生えてきている。

一体、このような場所に、何の用事があるというのだろうか。

このまま歩みを進めれば、僅かに建物がある地域すらも通り過ぎ、その先に見える山道へと入っていくことになってしまう。

バスの中で遠くに見えていた山は、もうすぐ近くにまで迫ってきている。

手を引かれていた苑司も、様子がおかしいことに気づいているようだ。

「ねえ、本当にこんなところで僕に用事があるって言うの？」

色把の歩みを止めようと、何度か進めている足を緩めるも、その度に振り返り、小さく縦に首を振る色把。

通常と様子の違う色把の強い瞳の色に、苑司は何も言い返すことが出来ずに、またもや色把に手を引かれ、されるがままになっている。

鳥が一声鳴き声を上げて飛び立つ。

案の定、色把と苑司は目の前の山に足を踏み入れる。苑司が履いているスニーカーは兎も角、色把の履いている女物の靴は、山を歩くのには明らかに不適切だ。

だが色把は、そんなことはまったく気にも留めていない様子で、まっすぐに足を踏み入れていく。蓼原の足元はすでにアスファルト

から砂利へ、砂利から踏み鳴らされた土へと姿を変えていた。

入り組んだ山の中では、二人を見失ってしまふ。

蓼原の足が速まり、二人の若者らの背中を追いかけた。

(こんな所を、あの二人は進んでいったのか……)

獣道とは言わないが、人が一人通れる位の狭い道。真新しい女物の靴跡と、スニーカーの足跡が重なって蓼原の前に続いている。

スーツに合わせた革靴が、足を踏み出す度に土の水分で滑る。周囲は霧が出てきたようで、足元の草が湿っているのだ。

体力には自信がある蓼原も、危なげな足元に閉口してしまふ。

どの位進んだか時間の感覚はなくなっていた。霧はどんどんと濃くなり、周囲も徐々に暗くなってきた。

ふと、蓼原の目に、一瞬だけ明かりが映る。

気のせいかと目を瞬かせ確認をするも、確かに、蓼原の先に、何か明かりが漏れているものがあるのだ。

目的が見つかり、自然と足が速まる。何度か湿った草に足をとられ、斜面に膝をつきながらも、何とか上りきると、平坦な場所へと繋がっていた。そこには古びた大きな建物が姿を現した。

何かの工場跡のようだ。トタンが張られた壁は、所々がさび付き、大きな穴が開いている箇所もある外側に見える窓のガラスはほとんど残っていない。外壁には、何に使っていたのか分からない機械のガラクタが積み上げられている。

蓼原が見た明かりは、その工場跡から漏れ出していた。

明らかに人の気配がする建物に、蓼原は息を殺し、割れた窓から中を覗き込んだ。

焚き火が焚かれている。火の周囲には色把と、十代を漸く迎えた  
くらいの幼い少女が見える。苑司の姿は蓼原の位置からは見ること  
が出来ない。

「……………」

蓼原は更に中を覗き込み、様子を探る。

そして、次の瞬間に、蓼原は信じられない光景を目の当たりにす  
るのだった。

「何だ……………アレは……………!？」

辺りは既に暗くなってしまった。

莉子の手当てで回復した菊塵は、何とか徒歩で帰宅することは出来た。だが、久弥との戦闘で破損したスーツ姿で人目につく所を歩くわけにも行かず、早池峰家にたどり着くまでにこれだけの時間がかかってしまったのだった。

まずは哭土の祖父、修三に報告をしなければならぬ。

ふと、早池峰家の正門前に、街灯に照らされた見慣れた人物の姿を見つける。

刑事の蓼原のようだった。だが、様子がおかしい。街灯の逆光で影になっているが、その姿が傾いているのである。ボロボロの状態の姿で蓼原に会うことは憚られたが、様子の違う蓼原の姿に、菊塵はそろそろと歩みを進めた。

近づくとつれ、その影は明確な姿を結び、菊塵の前に現れた。立っているのがやっと、といった状態である。

「どうなさったんですか……？ その様子は……！」

菊塵程の負傷ではないが、蓼原が纏っているスーツも、肩口が裂け、太腿付近が汚れている。彼の身に何かがあったことは間違いが無かった。蓼原は、菊塵の姿を見つけ、ふらりと菊塵と向かい合った。

通常であれば、菊塵のボロボロの状態に気を留めるであろう蓼原は、今回ばかりは違った。菊塵の顔を見、にやりと笑みを浮かべた。「よう、待っていたぜ」

肩が上下している。所々体が痛むのか、わき腹を押さえている。

いつも菊塵を探る蓼原の目は、今夜は何かが違う。

「狗石とは、何だ」

蓼原が言い放った言葉に、菊塵は一瞬耳を疑った。だが、蓼原の言葉は止まらない。

「色把と言ったか……あの黒髪の少女は何者だ？ 狗鬼とは？」

一般人には知りえない、狗鬼、狗石という言葉、何故蓼原は知っているのだろうか。

一度言葉を切り、蓼原は話し出す。

「……二つの事件が上からもみ消しされた。柳瀬フユの事件、切り刻みの事件。何故お前は、内部しか知らないスーツケースのことを知っていた？ ……事件には、常にお前の影がちらつく。お前なら何か知っているのだろうか？ そして、それは狗鬼というものに関係がある……違うか！？」

菊塵につめ寄る蓼原。

「……」

蓼原の目を見つめ、菊塵は口を閉ざしていた。

「答える！！」

辺りに蓼原の怒声が響き渡る。

間違い無い。蓼原は確実に、狗鬼の存在に気づき、こうして菊塵の元までやってきた。隠し通すことは出来ない、と菊塵は踏んだ。

「……まさか、ここまでやってくるとは思いませんでした。いいでしょう。お話します」

菊塵は、早池峰家の正門を開き、蓼原を招き入れた。

かつて愛した柳瀬 フユ、その従兄弟、蓼原 圭輔に全てを話す  
為……。

## 2 3 4 ・ 狗石を狙う者

「何さ？ 早池峰」

無然とした表情の哭士に気づき、目の前のユーリは肩をすくめ笑う。まったく悪びれた様子が見えないユーリに、哭士はひとつ大きなため息をついた。

「お前、あの女はいいのか」

「いーのいーの、アキは仕事だから、終わり頃に戻りゃいいの。俺が走ればテレビ局まですぐだしね。それより大事なのは今日の晩飯だ」

「……………」

図々しくも晩飯まで相伴に預かろうと卓についているユーリに、哭士は掛ける言葉が見当たらず、黙って座り込んだ。

目の前には、やけに神妙な顔で苑司が座り込んでいた。

喋るユーリの為か、食卓は普段の早池峰家よりも随分と騒がしかった。その様子を黙って見つめながら、哭士は静かに箸を進めていた。

あらかた全員の食事も終わりがけた頃だった。

「哭士さん、お風呂が沸けましたよ」

マキが声を掛けに来る。哭士は頷き、脱衣所へと向かった。

広い湯船に浸かる。随分と晩飯の時間が騒がしかった為か、浴室内の静けさが心地よく感じる。

「……………」

と、浴室の外に人の気配を感じ取った。音を立てずに湯船から上

がり、腰にタオルを巻きつける。気配は一つ。物音を立てないようになっている様子が窺えるが、哭士の聴力は、そんな様子も全て捉えていた。

一気に浴室の扉を開け放つ。

一人の人物の姿が顕になる。

「こ、哭士……君！」

目を見開いてこちらを見つめているのは苑司だった。哭士の姿をみとめ、手が止まる。しゃがみ込んだ苑司が、その手に持っているのは脱衣所で脱ぎ捨てた哭士の服と、右手に光る小さな石。

「……！」

苑司の右手の石を捉えた瞬間に、哭士の体は動いていた。一般の人間が、只の石に見えるそれを欲するはずは無い。哭士にとって自分の狗石を狙う者は、即ち敵である。

「と……とまれ！」

石を掲げ、哭士に命ずる。だが、哭士は命令に屈する様子は無い。

「お前、何故石のことを知っている」

哭士は苑司の背後に瞬時へ回りこむ。

「な……んで!？」

命令に屈しない哭士に呆気にとられている苑司。哭士はすかさず襟首を掴み上げ、浴室に向かって小柄な少年の身体を放り投げた。

激しいガラスの割れる音と同時に、広い湯船に高い水しぶきが立ち上がり、苑司の身体は湯船に沈んだ。

「ごほう！」

突然の出来事に咽ながら、空気を求め湯船から顔を出した苑司に、更に哭士が襲い掛かる。

苑司の胸元を掴み上げ、湯船からさらに引き上げる。哭士の手には、先程苑司が哭士の服からまさぐり出した石が収まっている。哭士はその石を躊躇うことなく握り潰した。



「そんな……っ！」

「菊塵に渡されていた模造品だ」  
冷たく、低い声。

「夕方から、妙に様子がおかしいと思っていた。一体、何者だ」  
哭土の目は敵を目の前にした闘争心を表すが如く、真っ赤に燃え滾っている。

「う……わああ……！」  
恐怖に滲んだ顔の苑司。彼の目もまた、一瞬赤く染まり、腕を振るう。

小さな血しぶき。哭土の手の甲に赤い一線。素手でこのような事ができる者は……。

「……貴様！ 狗鬼か！」  
珍しく哭土の声が荒ぐ。

哭土は左手で苑司の胸元を掴み上げたまま、右腕を湯船に突っ込む。瞬時に湯は氷へと変わる。

氷床から、バキリと右腕を引き抜く哭土。  
「あ……ぐっ……」

周囲の湯が突如氷に変わってしまい、苑司は湯船の中に固定されてしまった。

苑司の髪の毛を掴み上げ、哭土は唸るように問う。  
「本家の差し金か。俺の狗石を如何するつもりだった」

石で操られた屈辱がしみ込んでいる哭土は、どうしても狗石を狙うものに対し、敏感になっている。手加減をする事も忘れ、苑司に向かって凄む。

「し……らない！ しらないよ！」  
目に涙をいっばいに溜め苑司は首を強く振る。凍えのためか、それとも恐怖か、苑司の身体と声は小刻みに震えていた。

数人の駆け足が近づいてくる。  
「哭土！ 何をしている！」

争う音を聞きつけ、菊塵と、ユーリが駆け込んでくる。その後ろにはヨレたコートを着た、見覚えのある男が一人。菊塵を追っていた刑事だと気づく。

哭士は男を睨み付けるが、男は哭士の視線を気にすることなく苑司を見、口を開く。

「この小僧はニセモノだ。本物は別の場所に居る」

「……！」

この男の言葉に、苑司の表情が変わる。涙を浮かべながらも気を張っていた様子から、突如泣きそうな表情へと変貌する。

苑司に変化が現れたのはその瞬間だった。

苑司の輪郭が一瞬ぼやけ、髪の高い少女の姿へと変貌した。哭士はその様子に目を見開いた。

「姿を変えられる能力の狗鬼ですか……この子が苑司君に成り代わっていたわけですね」

菊塵が呟く。少女は観念したように、何も話そうとはしない。

「早池峰、氷を解除してくれ」

ユーリは少女の腕を掴み、氷から引き上げようとしていた。湯船全体を覆っている氷は、少女の身体を包み、自力では抜け出せない状態になっていた。

「……」

目を細める哭士。と、瞬時に氷は水へと変わる。支えるものが無くなり、湯船に沈みそうになる少女をユーリは抱き上げた。少女は十代を漸く迎えたくらいだろうか。怯えたように身体を強張らせている。

ユーリは湯船を跨ぎ、少女を床に横たえる。後からやってきた色把は、状況を読み取ったのか、タオルで少女の身体を包もうと近づく。

「……！」

色把の姿を見た瞬間、少女は、がばりと色把に抱きつき突如大声

で泣き声を上げた。

「取那<sup>トリナ</sup>！ 怖かったよお！」

突如、大声で泣き出す少女に、色把は戸惑いながらも頭を撫でる。  
「取那？」

色把は首を傾げる。だが、その場に居た数人は、ある一つの可能性を頭に浮かべた。

「あの女の名前は、取那というのか」

比良野家を見た、色把と同じ姿の女。色把に抱きついてトリナと呼ぶところを見ると、少女は色把とその女を間違えているに相違なかった。

色把もそれを感じたらしい。同意を求めようと、ぱっと哭土に向かって顔を上げた色把。

それもつかの間、真つ赤な顔をして視線をそむける。

「……哭土、着替えて来い」

哭土が身に纏っているのは腰に巻いているタオル一枚。

「……」

哭土は黙って脱衣所に消えた。

## 2 35・シイナ

「もう、何を見ても驚かない自信がある」

再び客間に通された蓼原は、苦笑を浮かべ正直に心情を語った。今日目の当たりにした出来事は、夢であって欲しいとすら思っている。

まさか、こんな事が本当に起こるとは。

他人の姿に取って代わることが出来る少女。意のままに氷を操る目の前の少年、哭士。

曾根越 菊塵の言葉が正しければ、彼らはヒトの姿を持った人外なる者であり、そして、それを語る曾根越、そして退屈そうに大あくびをしたユーリ・ヴァルナーも、そうであるという。どう見ても、姿は、普通の十代、二十代の青年達であり、どこにそのような力があるのかと、蓼原は紫煙を吸い込み、客間の中に居る若者達を見渡していた。

「シイナ、と言いましたね」

菊塵は、静かに口を開いた。色把が持ってきた着替えに身を包んだ少女は、菊塵に名を呼ばれると、怯えたような表情を浮かべ、上目遣いで菊塵を見返した。毛先がまだ湿って、細かい束を作っている。

「な、何」

かけられた声に、シイナは身をすくめている。

「確認です。何のために、苑司君に成り代わっていたか、教えていただけますか？」

色把が『取那』とは違う人物だとは理解をしたようだが、やはり心細いのだろう。シイナは色把の腰にまわりついている。菊塵の問いに、色把の腰へ回した手が、小さく握られる。

「取那が、コクシの狗石を探して、持って来いって言ったから……」  
シイナの返答に、僅かに眉がピクリと動く哭土。

相手が子供のためだろう、菊塵は一つ一つシイナに質問を投げかける。

「取那とは、色把さんと同じ姿をしている女性で間違いはありませんね？」

「……」  
その問いに、シイナはこくりと小さく頷いた。

「何故、取那は、哭土の狗石を狙うのですか？」

シイナは、唇を突き出し、暫し悩んだ表情を浮かべる。

「……よく、分からない。でも、コクシを自分のものにして本家を見返してやるって、そう言った」

シイナの言い放った言葉に、蓼原以外の人物達に緊張が走る。

「あの女は何者だ。何故本家に楯突くんのだ」

哭土が卓に小さく身を乗り出し、シイナに問う。先の騒ぎで哭土から容赦の無い攻撃を受けたシイナは、哭土に対し、大きな恐怖心を抱いたようだ。哭土の声に身を強張らせ、色把の後ろに隠れてしまった。当の色把は、困ったように哭土を見つめる。

菊塵は、哭土に目で合図を送る。自分に任せろ、と訴えたのだろう。菊塵と目が合った哭土は、フン、と小さく息を吐き出すと、もう干渉はしない、とでも言いたげに腕を組み、壁に凭れ掛かった。

「シイナ、教えてもらえますか。取那、という少女は、何者ですか？ 色把さんとどういう関係が？」

ゆっくりと、一言ずつ語り掛ける菊塵。シイナは取那の背後から

ゆっくりと顔を出した。だが、その顔は、ゆっくりと横に振られた。「分かんない……。だって、取那は、取那だもん。取那は友禅と三人でずっとあたしと一緒に居てくれただけ……」

シイナの声が震えだし、色把の背中に顔をうずめる。だが、シイナから、思わぬ人物の名が出、哭土、菊塵、色把の三人はお互いの顔を見合わせた。

「おいおい……。友禅って、お前の兄さんの名前じゃないのかよ？」  
退屈そうに卓の上の糸くずを弄んでいたユーリも、聞き覚えのある名に、顔を上げ、哭土を見つめた。

「……」

哭土の脳内に、色把を比良野家に連れていった時の映像が浮かぶ。目の前に現れた色把と同じ顔の少女。眩暈を起こし、倒れた後に現れた友禅。取那と友禅、そしてそこには姿を現さなかっただけで、シイナも一緒に行動していたのであろう。

「友禅さんも、今は取那と一緒に居るんですか？」

シイナの様子に気を配りながら、静かに菊塵は問いかける。

「……いない。みんな、バラバラに、なった……」

シイナは色把の背中に顔を埋めたまま、小さく答えた。肩が大きく震え、しゃっくり上げる声が部屋に響く。

色把はシイナの様子に悲しげな表情を浮かべ、抱きしめながら頭をなでた。

取那が何者なのか、何故友禅は取那から離れてしまったのか、謎はまだ残っているが、今は、これ以上シイナから情報を引き出すことは不可能だろう。

色把は、シイナの様子を気に向け、菊塵に許可を取り、シイナと

共に部屋を離れた。

静かな場所で休ませるつもりだろう。襖が閉まり、二つの軽い足音が遠ざかっていった。

「……おい」

哭士が、蓼原に向かって口を開く。ぞんざいな哭士の話し方を特に気にも留める様子は無く、蓼原は灰皿に煙草を押し付けながら哭士に向き直った。哭士の目は真っ直ぐに蓼原を捉える。

「何故、苑司が偽者だと分かった」

一般人である蓼原が、初めからシイナの正体を知っているわけが無い。蓼原は、哭士の言葉に頷いた。

「話せば長くなるがな」

蓼原は、ゆっくりと語り始めた。

蓼原が追い、そしてもみ消された二つの事件、それに関わる菊塵を追っていたこと。更に、偶然にも苑司が連れ出される場面を目撃し、後を追ったこと。

「あの時、俺は彼女……色把さんが、佐々乃君を連れ出したと思っていた。だが、それは色把さんではなく、その取那、という少女だった」

そう言い放ってから、蓼原は工場跡で目撃した出来事を、ぼつぼつと語り始めた。

## 2 36 ・工場跡

苑司と色把を山中まで追いかけた蓼原は、ようやく工場跡までたどり着き、明かりの漏れる建物内を覗き込んだ。

そこには、焚き火を中心に、色把、そして、十代をようやく迎えたばかりと思われる少女、そして、ぐったりと倒れている苑司の姿があった。

「……！」

緊張に身をこわばらせる蓼原。異常な事態であることは間違いが無い。踏み込むことも考えに入れ、中の様子が見えるように少し身を乗り出した。

「シイナ」

言葉を話せないはずの少女が、シイナに向かって声をかける。

(あの少女は……色把ではないのか……!?)

ここで蓼原は、目の前に居る少女が色把ではないことに気づく。息を殺し、蓼原は次の少女の言葉を待った。

「こいつに成りすまして、哭士の狗石を持ってきて頂戴。出来るわよね？」

少女の言葉に、シイナは大きく頷く。

(一体、何を言っているんだ?)

確かに、苑司という少年は歳の割には背も小さく、幼い顔立ちをしている。シイナとも、あまり身長は変わらないだろう。だが、シイナという少女とは似ても似つかぬ顔立ちをしている。成りすます事など、出来るはずは無い。

シイナは倒れている苑司の前にしゃがみこみ、じつくりと彼の姿



を観察している。

大きく息を吐き出した次の瞬間、蓼原の前では信じられない出来事が起こった。

シイナの輪郭が一瞬だけぼやけた、ように思えた。

そこには既に幼い少女の姿は無く、倒れている苑司と同じ姿の少年がシイナに成り代わっていた。

「これでいい？ 取那」

声や話す言葉の調子まで苑司とまったく同じだった。取那、と呼ばれた少女は、満足げに一度頷いた。

だが、身に着けている衣服は元の状態のままの為、シイナは本物の苑司の上着を脱がせにかかっている。

「何だ……アレは……！？」

まるで夢でも見ているようだった。自身の目が信じられない。

蓼原の足は、無意識に後ずさっていた。

静まり返った山中で、一度、だがハッキリと、パキリ、という甲高い音が響き渡る。

(しまった……！)

気がついたときにはもう遅かった。後ずさった右足が、ガラクタの一部を踏んづけ、音を立ててしまった。

「誰……！」

取那は蓼原の存在に気がついてしまった。向かってくる声も、明らかに自分の方向を向いている。

「シイナ、追って！」

鋭い取那の声が、シイナを嚇ける。蓼原は、身を翻し、今まで来た道へと蹴りだす。

だが。

蓼原の鼻先を、何かが掠める。

先ほどまで建物の中に居たシイナが、一瞬にして蓼原の前に現れた。佐々乃 苑司の姿をしたまま、にっこりと笑う。

「おじさん、何でこんなところに居るの？」

笑顔の奥に垣間見える、明らかかな殺意。蓼原は思わず懐に忍ばせていた拳銃へと手を伸ばす。だが、拳銃は署に戻ったときに置いてきてしまっていた。勤務外に持ち出すことは許可されていない。

目の前にはたった一人の小柄な少年が居るだけである。だが、なぜか蓼原はこのただならぬ状態に、こちらから手を出すことが出来ないでいた。

「ダメだよ、こんな所に来ちゃ」

無邪気にひらりと身を翻したかと思うと、蓼原の体に大きな衝撃が走る。

柔道三段の腕前を持つ蓼原の巨軀が、気がついたときには、一メートルほど吹き飛ばされ、木へ強かに背中を打ちつけていた。

受身も取れずに、蓼原は地面へ崩れ落ちた。

（何だ、何だコイツは……！）

恐らく、わき腹を蹴られたのだろう。それすらも認識できないほど鋭い動きだ。

小柄で細い苑司の姿からは信じられない人外の力。得体の知れないその力の前では、力に自信のある蓼原でさえ、歯が立たない。

頼みの綱の拳銃は手元には無い。自身の命の危険を感じ取り、咄嗟に何か身を救うものは無いかと懐を弄った。

と、懐に一つ、プラスチック製のつるりとした物が手に当たる。

取り出し、蓼原は舌打ちをする。

昼に、女性警官とぶつかったときに拾った防犯ブザーだった。

(ダメだ)

こんな山奥で鳴らしたところで、誰か来るとは思えない。手の中で防犯ブザーを無意識に握った。

「取那、始末しちゃっていいの？」

取那に指示を請うシイナ。見つめてくる目は本物の殺意だ。

(次の動きについていけるのか)

蓼原は身構える。だが、シイナの動きは目の前で一瞬揺らいだだけだった。

シイナの姿が消えた瞬間に、またもや、身体に衝撃が走る。右肩から地面に叩きつけられ、そのまま数回地面を転がった。

と、その時だった。

辺りに、けたたましい電子音が鳴り響く。

「わっ！」

シイナが目を見開き、耳を押さえて離れる。

蓼原が握っていた防犯ブザーが、攻撃を受けた瞬間に、スイッチが入ったらしい。

「何だよ……！ この音！」

余程、ブザーの高音が耳に響くのだろう。

シイナは苦しげに声を張り上げ、電子音から逃げるように蓼原から離れた。

蓼原は、防犯ブザーをかなぐり捨て、体の痛みも忘れ、転げるように山道を下った。

往路よりも霧が濃くなり、明かりなども何も無かったが、蓼原は

下を目指し、一目散に山を下った。シイナが追ってくる気配は無い。

枝が、体を掠める。夜露は、蓼原の体に容赦なく降り注ぐ。

偶然に目撃してしまった人の姿をした、人ならざるもの。

山中を駆けながら、どこか冷静さを保とうとしている蓼原は、やはり事件の事を思い出す。

もみ消しされた事件、いずれも共通するのは、通常ではありえない事態。だが、このような者たちが存在するのなら話は別だ。

重機で無くては突き立てられぬ鉄パイプも、あれほどの力があれば容易いだろう。

見てはならなかった。蓼原が知ってよい世界ではなかったのだ。

だが、本物の少年は倉庫の中で横たえられていた。これを知っているのは自分しか居ない。

彼のことを、伝えなくては……。

そして蓼原の足は、早池峰家へと向かっていた。

「……と、まあ、情けない話だが、命からがら逃げ帰ってきたわけだ」

蓼原は肩でひとつ息を吐き出す。

「子供とはいえ、狗鬼が相手です。無理もありません」

菊塵が蓼原に向かって頷く。

「ですが、蓼原さんの話を聞いた限りでは、状況は芳しくないですね」

菊塵は腕を組んだままこめかみに中指を当てる。哭土も状況を察したのか、菊塵の言葉に目を眇めた。

「何が良くないってんだよ？ 護衛の狗鬼は今色把と一緒に居るし、残りは取那って籠女と苑司だろう？ ちゃちゃっと迎えに行きゃいいじゃんか。そこで取那って女から直接何者か聞き出しゃいい」

卓に凭れ掛かっていたユーリが口を開く。その様子に、小さくため息をついて哭土が呟くように声を発した。

「……まだ、無事ならな」

哭土の言葉に、ユーリもはっとした表情を浮かべる。

「苑司君の体には、影鬼を寄せる薬品が付着しています。その効果はまだ薄まっではないでしょう。そして、狗鬼が近くに居ない籠女もまた、怪我などして、血を流せば影鬼を寄せる芳香を放つ。そして、山中の工場跡……十分暗い。影鬼は闇が在る所であれば、どこにでも湧いてくる。襲われる条件は、十分すぎるほど揃っています」

菊塵は、蓼原に向き直る。

「蓼原さん、貴方が見た工場跡の場所を教えてください」

「なら、俺が案内する」

「いえ、いけません」

びしゃりと言いつ放つ菊塵の口調。今までの柔らかい話し方とは全く様子が違う。

「これから向かう場所は、それこそ『化け物』という名が相応しい生物が跋扈しています。僕たち狗鬼には、それらを遠ざける力があります。人間であつても明かりを持つていれば別ですが……何があるか分かりません。襲われる危険性は僕らより遥かに高い。その時に、あなたを守れるかどうか」

菊塵の視線は、鋭く蓼原を射た。蓼原は脱力したように、ふと笑みを顔に浮かべる。

「つまり、足手まといということだな」

菊塵が口を開こうとしているのを、手で制す。

「分かった。分かっているよ。あんな力を見せられちゃ、警察だの何だのという次元じゃないことは誰にだってな。大人しく待たせてもらうよ」

手のひらを上に向け、肩をすくめる蓼原。

蓼原は菊塵に、工場跡の位置を伝えた。その言葉を切欠に、窓の縁に腰掛けていた哭士がするりと部屋を抜けていく。ユーリも哭士に続いた。

「この家を、頼みます」

菊塵は小さく頭を下げる菊塵。その言葉に、蓼原はああ、と答え、菊塵を見送った。

狗鬼の足を持ってすれば、工場跡がある山まではものの数十分で

到着してしまう。

辺りは外灯も無く、人気は全く無い。

哭土、菊塵、ユーリの三人は足音も立てずに真っ暗な夜道を進んでいく。狗鬼の目には、真っ暗な道も昼間とほとんど変わらない。

「お前、何で来た」

ユーリは偶然居合わせただけで、苑司の救出にまで関わる由縁は無い。哭土のやや後ろを駆けていたユーリは、背後でにやりと笑う。「え？ だって、面白そうじゃん？ 色把の双子ちゃんってのも見てみたいしさ」

「……」

相変わらずのユーリの態度に、小さくため息をついた哭土の口は閉じられたままだった。

三人が立ち止まる。蓼原が取那と苑司を追いかけてたどり着いた山の入り口に到達したのだ。

「どこから斜面が上がっていったんでしょう……」

菊塵が考えあぐねる。と、哭土が一直線に山の斜面に足をかける。「オイオイ、あの刑事の足跡を辿らないと、工場跡にや着けないぞ」ユーリが声をかけるが、哭土の足は止まらない。

「煙草の臭いが残っている。あの刑事と同じものだ」  
「はあ？」

哭土の言葉に、ユーリも周囲の匂いを嗅いでみるものの、感知が出来ない。あつけに取られているユーリを尻目に、菊塵も後に続く。「一度彼と戦って分かっているでしょう。早池峰の狗鬼は一般の狗鬼とは性能が違うんですよ」

菊塵の言葉に、肩をすくめたユーリも、哭土が踏み分けた道に続いた。

赤くなつた目をこすり、シイナは布団に包まっていた。

色把は、シイナが横たわっている布団の傍らに座り、小さく膨らんだ布団の山を優しくなでていた。

「コクシたちは、苑司を迎えに行ったの？」

か細い声で、シイナは色把に問う。色把は、シイナと目が合つと、ゆっくりと一度頷いた。

お前は、ここに居ろ。いいな

ノックもせず色把の居る離れの部屋を開け放つた哭士は、色把の姿を見とめると、その言葉だけを言い放ち、色把が返答をするのを待たずに部屋を去つた。

影鬼を寄せる性質を持つ籠女を連れて歩けば、危険はいつそう増す。哭士は色把に付いて来ないように釘を刺しにきたのだろう。

「ねえ、色把」

シイナの細い腕が布団から伸び、色把の袖口を柔らかくに引く。色把はシイナの声がしつかりと聞こえるよう、顔を近づけた。

「コクシ達は、取那に酷いことしない？」

色把に問うシイナの目からは、涙が溜まっている。

取那は一度、哭士に接触し、契約を結ぼうと試みている。取那が何か攻撃を仕掛ければ……、哭士は迷いも無く反撃に出るだろう。

「……………」

色把が返答に困っていると、シイナは更に続ける。

「取那は、本当は優しいんだよ。皆に酷い事されたから、誰も信じ



られなくなってるだけなんだよ……」

大きな目から、ぼろぼろとこぼれだす。

取那に対する絶対的な信頼。比良野家で出会った取那は、自分に憎悪の目を向けていた。

一体、取那という少女は何者なのか、過去を探ろうにも、色把には十歳以降の記憶しか持ちえていない。

胸に何かが詰まったような感覚を覚えながら、小さくしゃっくり上げるシイナの額に手を乗せた。

「……」

一瞬にして、色把の感覚に、映像が流れ込んでくる。

焚き火、倒れている苑司。

その前に立つ、自分と全く同じ、取那の姿……。

「色把？」

きつく目を瞑り、小さく震える息を吐き出している色把の様子に、シイナが感づく。

以前、哭土に触れたときと同じような感覚だ。シイナを通じて、色把にさまざまな情報が流れ込んできているのだと理解する。だが、以前よりも、長く鮮明に色把の脳に映像が次々に焼き付いていく。

大きな二つの眼を持つ黒い闇、崩れ落ちる瓦礫、笑っている男、叫ぶユーリ、小さな獣。

そして、最後の一瞬。強く鮮烈な映像が色把を打ち抜く。

それは、口から大量の血を吐き、崩れ落ちる哭士の姿、だった。

「哭士！」

弾けるように、上体を起こす色把。

額からは、微量とはいえぬほどの汗が滴り落ちている。今し方浮かび上がった映像に、色把の体は小刻みに震えだしていた。

居ても立っても居られなくなり、色把はシイナの顔を見た。

「何かが見えた？」

シイナの問いに、色把は小さく頷く。

「取那も、時々そうなるんだよ。色把は……コクシの所に行くんだね」

色把が何も語らずとも、シイナは、何かを感じたらしい。掴んでいた色把の袖口をそっと離す。

「大丈夫だよ。あたしはもう、悪いことしない。黙って、ここに居るよ。約束する」

布団から腕を抜き、小指を差し出すシイナ。

色把は、シイナの小指に自身の小指を絡ませ。一度強く頷いた。

静かな夜だった。

今日、一日で起きた出来事を整頓できぬまま、冷えた縁側で、蓼原は一人煙草をくゆらしていた。

(こつやって空を見るのは何年ぶりだろうな)

縁側から見える下弦の月は、ぞっとするほど美しい。もう数日もすれば新月になるだろう。

自身を包む静寂とは裏腹に、蓼原の心中は落ち着くことは無かった。

無力だと分かっているにもかかわらず、事件の真実を菊塵の口から聞かされ、そして今起こっている狗鬼たちの戦いに思いを馳せ、焦燥感にも似た感情が蓼原を支配していた。

蓼原の背後の襖が、静かに開いた。

気配に蓼原が振り返る。

「色把さんか」

色把の表情は、どこか硬い。何か言いたげな色把の様子に、蓼原は先ほど菊塵らから話を聞いた応接間に戻った。

蓼原が座布団に座るのとほぼ同時に、色把も傍らに座る。

そして、一枚の紙を、両手で蓼原の前に差し出した。

紙には、小さく綺麗な文字がつづられていた。

私を、哭土の所へ連れて行ってください。

「色把さん……」

色把は、蓼原の視線を受けながら、手元の紙に更に文章を綴った。

危険なことは重々承知しています。工場がある山の前まででも結構なんです。

色把は、蓼原に紙を渡すと、蓼原に向き直り、深く頭を下げた。持ち上げた顔、色把の両目には、十七歳の少女とは思えぬ程の、強い意志が滾っていた。

少女の大きな両目は蓼原を捉える。唇の読めぬ蓼原でも、色把の口が刻んだ『お願いします』という言葉は理解が出来た。

蓼原は一度大きく息を吸い込む。菊塵が話していた影鬼という化物。蓼原には想像もつかない。だが、驚異的な身体能力を持つ鬼たちが警戒心を持つほどの化け物という事は確かなのだ。

（今行かねば、俺は一生後悔するんだろうな）

吸い込んだ息をゆっくりと吐き出すと、蓼原は色把に問いかけた。「ここで、車を借りることは出来るか？」

蓼原の問いに、色把は目を丸くする。だが、その直後、色把の表情は凜としたものとなり、大きく頷いた。

## 2 39 ・ 焚火の音

パチ、パチという何かが爆ぜる音で目が覚めた。

なにやら体が言うことをきかない。うつすらと目を開けても、あまり明るさが感じられない。

体は芯から冷え、うつぶせになっていた胸は、体をよじると軋みを上げた。

「いてて……」

床は氷のように冷たく固く、ざらざらとしている。

少しずつ感覚が戻ってきたところで、苑司は自分の置かれた状況によろやく気づく。

パチ、パチという爆ぜる音は、錆びた一斗缶に廃材が突っ込まれ、焚き火が炊かれていたからだだった。

自身の両腕は後ろ手に縛られ、冷たいコンクリートの床に投げ出されていた。

「何、ここ！？ え！ え！」

頭の中は混乱し、口から出る言葉はほとんど意味を成さない。

「五月蠅いわね、静かに寝て居ればよかったのに」

女の声が苑司の耳に届く。バタバタともがく足が止まり、苑司の視線が泳ぐ。

「色把……さん？」

姿は色把そのもの。だが、普段の様子とは全く違う表情を見せるその姿に、苑司は色把であると確信が持てなくなってしまっていた。早池峰家から連れ出されたときから、感じていた違和感が、苑司の中で再燃する。

「色把さんなの？」

そう訊ねてしまうほど、雰囲気が違うのだ。何より、声を出すことが出来ないはずなのに、強い口調で苑司に語りかけたのだ。

少女は、焚き火から離れたドラム缶に座り込んでいた。苑司に訊ねられた少女は、一度冷たく笑った。

「本物の色扱は、私」

「!？」

少女の言い放つ言葉を、苑司は飲み込めない。

「あの女は、私から名前を、未来を、全てを奪ったの」

少女の両の目に、憎しみが宿る。

全てを、奪った？

普段見ていた柔和な、言葉を話せない『色扱』、彼女が誰かから何かを奪う、というその言葉自体がそぐわない。

状況が全く把握できない苑司を見かね、少女は口を開いた。

「悔しいけれど、今の私の名前は取那<sup>トリナ</sup>」

取那は、座っていたドラム缶から音も無く飛び降りると、横たわっている苑司の前にしゃがみこんだ。

「貴方には悪いことをしたわね。巻き込んでしまった。傷つけるつもりは無いから……今は運が悪かったと思っただけであきらめて頂戴」

取那は立ち上がり、顔を上に上げる。工場の廃屋は、天井も朽ちて穴が開き、下弦の月がうつすらと光っている。

「……今夜で全てが片付く。もうすぐここに哭土が来るわ。彼を私のものにして、それでおしまい。貴方も無事に家に帰してあげる」

苑司は、後ろ手に縛られた状態で体を引きずり、何とか上半身を起こした。

「……哭土君が、誰かの言いなりになるわけ無いよ」

哭土の、孤高の獣のような人を近づけまいとする普段の様子。た

とえ色把と同じ姿をしていようと、彼を手懐けるなど、出来るわけが無い。

「アンタは、狗石のことを知らないのね。狗石さえ手に入ってしまったら、どんな狗鬼でもいうことを聞く」

狗石、という聞きなれない言葉。苑司は黙って取那の次の言葉を待った。

「早池峰家の男と契約を結べば、私は早池峰の狗鬼の花嫁として本家に迎え入れられる。……私を見捨てた本家が、間違っていたことを思い知らせてやるわ」

取那の両こぶしが固く結ばれる。

「哭士が契約を結べないのだから、あの女が偽者だからよ……。本物の本家の籠女である私だったら、彼を解放できる。あの夜だって、あの女が哭士に何かしたに決まっている。今度は哭士の狗石を手に入れて契約を結べば、絶対にうまくいく」

取那は、苑司に語りかけているものの、その言葉は自身に言い聞かせているようにも取れた。

ばちん

焚き火の廃材が爆ぜる。

オレンジ色の明かりに照らされた取那の横顔。色把と全く同じ顔立ちをしているのに、彼女が苑司に与える印象は間逆のものだった。外から聞こえる木々のざわめきと、焚き火の爆ぜる音のみの空間。

苑司はゆっくりと息を吸い込んだ。

「僕は、狗鬼とか、籠女とか、そういうのは良く分からないよ。……でも、哭士君を自分のものにして、本家ってところを見返して……」

…それから何が生まれるって言うの？ 空しいだけだよ……、こんなことをしたって、絶対に誰かが幸せになるとは思えない。復讐なんて！」

「五月蠅い！」

取那の声が、苑司の言葉を遮る。

「何で……何でアンタがあいつと同じ事を言うの……！」

強い口調とは裏腹に、取那が数歩後ずさる。表情は明らかにうろたえ、動揺し、顔を僅かに左右に振っている。

「……私はもう、戻れないのよ。約束された幸せを根こそぎ奪われて……、死ぬより辛い辱めを受け続けて……！……それを、何もしないで忘れるなんて……私には、出来ない……。出来るわけ……ない」

わんわん

苑司の耳に、聞き覚えのある嫌な音が届いた。

「今の音……」

静まり返った廃屋の中で、苑司は周囲を見渡す。

「……影鬼エイキよ」

取那は自分の調子を取り戻したようだ。ゆっくりと苑司の近くに歩み寄る。

苑司は、影鬼という言葉に身をこわばらせた。

「大丈夫、籠女の私の気配に近づいてきただけ。明かりの近くにさえ居れば、餌でもない限り襲ってこない」



取那は、影鬼から身を守るための焚き火の近くに立ったようだ。

「……エサ？」

「籠女の血。影鬼を寄せる芳香を放つ。今、私は怪我をしていない。大丈夫」

冷たい目で、苑司を見返す取那。だが、苑司の心中には、ざわめきが生じる。

「……まずい、まずいよ……」

無理だとは分かっていても、自身の両腕を拘束している縄から開放されようと身じろいでしまう。

「僕の体には、今、影鬼つて怪物を寄せる薬が掛かっているんだ」

苑司が話す間にも、耳障りな音は、徐々に近づいてきている。

「何ですって……!!」

取那の表情が瞬時にこわばる。

今、影鬼を狩れる狗鬼は居ない。身を守れるのは、明かりの近くに居る、ということだけ……。

一瞬の静寂。

大きな爆音と共に、苑司の目の前の壁が吹き飛んだ。

「うわあああ！」

突然の出来事に、悲鳴を上げる苑司。同時に、軽自動車位の大きさはあるつかという大きな塊が飛び込んでくる。

トタンで囲っていた壁は、いとも簡単に崩れ去り、周囲にバラバラと瓦礫が散らばる。

「あ……ああ……！」

公園で見たものとは比べ物にならない大きさ、そして迫力だ。

光の玉である目は爛爛と輝き、二人を見つめる。息をするたびに体は、不愉快な音と共に上下を繰り返している。感情など読み取ることの出来ない光る目が捉えたのは、取那ではなく苑司だった。

飛び掛ろうと影は小さく身をかがめた。

次の瞬間に影鬼がこちらに飛び掛ってくることも頭では分かっていた。だが、苑司の体は恐怖に支配され、全く動かなくなってしまうっている。

「何してるの！ 立ちなさい！」

腰が抜けて立ち上がれないで居る苑司を、取那が引き上げる。直後、苑司に突進をしてきた影鬼は、背後の瓦礫に突っ込んだ。

激しい音を立てて、瓦礫は周囲に飛び散る。

「瓦礫から頭を引き抜く影鬼。」

実体は無いはずの黒い霧。だが、体を大きく一度震わせると、影鬼の体の上に降り積もった瓦礫が大きな音を立てて地面に落下する。あれほど強い衝撃でぶつかったはずなのに、影鬼は何事も無かつ

たかのように、再度苑司へ照準を向ける。

不愉快なノイズ音と共に、獣の唸り声のような声が、影鬼から漏れ出している。

苑司の恐怖心を煽るには十分だった。

「ど、どうするの……!?!」

取那には、この状況を打破する何か策があるのだと思い、問いかける。

取那に引き上げられて何とか立ち上がった苑司であったが、後ろ手に縛られたままだ。

両手が自由だったとしても、影鬼に攻撃などすることは出来るわけは無い。苑司の腕をつかみあげている取那の手に、力がこもる。

「決まってるでしょう! 逃げるのよ!」

一般人と、籠女。この強大な化け物に対抗する手などひとつも無いのだと知る。

取那は踵を返し、工場の出入り口へと駆け出す。取那の一言に絶望の二文字を打ち付けられた苑司も、腹をくくって、取那に続いて駆け出す。

しかし。

「!?!」

瓦礫に足を取られ、苑司は無様に肩から転んでしまう。手を後ろで縛られている苑司は、立ち上がることも出来ずに、体をよじる。

迫ってくる影の姿に、恐怖で声も出ない。呼吸は荒く、刻む心臓の音は五月蠅いほどに耳に届く。

(もう、ダメだ……!)

地面を蹴り上げ、素早い動きで追ってくる影鬼。視界いっぱい

その影が広がり、苑司は強く両の目を閉じた。

わんわん わんわん わん

わん

だが、苑司の耳に届く不快な音が、一瞬静かになる。ゆるりと苑司は瞼を開いた。

苑司に今にも襲いかかろうと、覆いかぶさっていた影鬼の目は、何故か苑司を捉えていない。影は上体を起こし、何度か空中の匂いを嗅ぐような動作を繰り返している。

そして影は、がばり、と工場の出口に顔を向けた。

苑司も影の向いた方向に視線を向ける。

「取那……さん」

取那が、工場の出口を背に、立ち止まっていた。

何故か右腕を真横に伸ばし、その手は、きつく握り締められている。

「本物の籠女の血はこつちよ。……いらっしやい」

握り締められた手のひらが、ゆっくりと開かれる。パラパラと落ちるのは、ガラスの塊と、そして、赤い液体。

影鬼は甘美な食事の香りに一度大きな咆哮を上げると、苑司にはもう振り向きもせずに、取那に向かって躍りかかる。

「アンタは今のうちに逃げなさい！ 分かったわね！」

苑司に向かって叫ぶと、取那は一直線に出口に向かう。影は取那を標的に定め、後を追う。

「取那さん！」

苑司は取那の背中に向かって叫ぶ。だが、取那の姿は、見る見るうちに遠ざかり、工場の外の闇の中に消えた。

影鬼は、少しでも取那に追いつこうと、大きく一步を踏み出した。

このままでは、取那が影鬼の餌食となってしまう。

取那を救いたい。だが、打破することの出来ないこの状況。苑司の大きく開いた口からは、叫び声が漏れるだけだった。

ズン、という重い音。そして、小さな振動が苑司の体に伝わってきた。同時に影鬼から発せられる不愉快な音が一層高まる。悲鳴のようにも聞こえるその音に、苑司は呆けたように目をよこす。苑司の頭には、パラパラと小さな粒が降り注ぐ。

「……氷、だ」

影鬼の体には、一抱えもある太い氷の柱が、突き立てられていた。自分の頭から落ちた粒は、地面に落ちると水に変わり、コンクリートに浸透していった。氷、という物質を見て、苑司は一人の人物を思い浮かべる。

「哭土君……？」

周囲に視線をめぐらせるも、哭土の姿は見当たらない。

影は、一度大きく雄たけびを上げ、氷の柱から体を引き抜く。ずるり、と抜け出した影鬼が纏っている霧は、氷の柱に付着している。心なしか、影鬼の体が一回り小さくなったように思えた。

激昂した影鬼は、体を大きく揺すぶると、照準を苑司に向ける。  
攻撃対象を苑司に切り替えたようだ。

「え……！ う、嘘……！」

苑司はまだ地面に這い蹲ったままだ。体は自由に動かず、苑司は  
起き上がろうと必死にもがいた。

みるみる距離を縮める影に、苑司は声を張り上げた。

## 2 4 1 二人の狗鬼

影鬼が工場に飛び込んできたように爆音が鳴り響き、建物は大きく揺れた。

建物の壁に影鬼が突撃をしたのだ。

だが、苑司はというと、どこにも怪我をしておらず、何故か体が宙に浮いている感覚が身を包んでいた。

「間一髪だったなあ」

間延びした声が、苑司の頭上に降り注ぐ。苑司は、硬く下ろした脛を、ゆっくりと持ち上げた。

「……！」

苑司の目に飛び込んできたのは、先ほどまで自分が転がっていた床だ。だが、自分がまるで、宙に浮いているかのように床は何故か数メートル程先に見える。

「落ちる！ 落ちる……！」

今置かれている現状も理解できぬまま、悲鳴を上げて混乱状態に陥る苑司。だが、一向に自分の体が床に叩きつけられるような様子も無い。

「落ち着け、落・ち・着けて」

再度降りかかる聞き覚えのある声に、苑司は暴れるのを止め、苦しい体勢になりながらも顔を上に向けた。

「……ユーリ？」

苑司の体を持ち上げているのは、早池峰家で何度も顔を合わせたユーリ・ヴァルナーだった。どこか楽しげな表情に、苑司の混乱も少しだけ落ち着きを取り戻す。

「な、何で浮いてるの……！」

ユーリの足元には何も無く、空中に『立っている』状態だ。

「説明は面倒だから後でな。しかし、あんな大きな影鬼、初めて見たぜ」

左腕で苑司を抱えあげているユーリは、空いている手で遙か先に在る床を指差した。ユーリの指先には、瓦礫から顔を引き抜き、苑司の姿を探す影鬼の姿があった。

影は苑司の匂いを嗅ぎつけ、苑司を見上げては唸り声を上げる。

「どうする？ アイツ、お前に会いたいみたいだけど？ 目の前に降るそうか？」

「冗談じゃない！」

ユーリは苑司に向かい、にやりと白い歯を見せた。冗談だとは分かっている、苑司は何度も何度も大きく首を横に振る。

その様子に、高らかに笑い声を上げながら、脇に抱えていた苑司を下に降ろす。

「ま、ここに居りゃ安全だ」

苑司の足元は、透明な床があるようだった。苑司は足元を確かめるように、足踏みを繰り返す。

「おっと、あんまり動くなよ。幅はあんまり取ってないんだ。踏み外せば落ちるぞ」

びくりと足踏みを止める苑司を尻目に、ユーリはその場にしゃがみこんだ。苑司が縛られていた縄を解く。

「文字通り、高みの見物といこうぜ。あいつらの戦いぶりを、さ」

「ユーリは、戦わないの？」

こうして宙に浮くことが出来るのならば、おそらく哭土のような何かしらの力を持っているに違いない。だが、ユーリは苑司の問いに小さく笑って息を吐き出し、顎で工場の出入り口を差した。

「まあ、見てなって。俺がここで見ていても大丈夫な理由が分かるさ」

苑司が視線を下に降ろし、出入り口に目をやると、そこには長身の男とスーツの男が二人。

やはりそれは、哭土と菊塵だった。



苑司が二人を見とめたのとほぼ同時だった。二人は弾けるように左右に分かれ、影鬼を挟み込んだ。

初めに動いたのは哭士。身を屈め、真っ直ぐに影鬼に向かってゆく。影鬼は相手が狗鬼と察したのだろう。地面に爪を立て、真っ黒な牙をむき出した。

影鬼が前足を振り上げると同時に高く飛び上がる。普段と変わらぬ無表情のまま、振りかざされる前足の爪をすり抜け、哭士の足は影鬼の背中を掠る。だが影鬼は哭士が飛び上がったと同時に身を翻し、大きな損傷は与えられなかった。

哭士が地面に着地をした直後、影鬼の体が突如揺らぐ。菊塵が影鬼の側面から突進したのだ。だが、大きな体は、菊塵の突進にわずかにふらついただけだった。

影鬼は二人の狗鬼の登場に明らかに苛立ち、体中の靄が激しくざわめき立っている。二人の狗鬼のどちらかに狙いをつけようと、二つの光の玉は、何度も左右に振れていた。

影鬼の視線が菊塵に向かった直後、影鬼に向かって氷の槍が放たれる。鋭い攻撃にも関わらず、影鬼はその巨体からは考えられぬほど身軽に哭士の攻撃を避けた。身をかわずのと同時に哭士に向かって飛び掛る影鬼の口から、数本の棘のようなものが発射される。咄嗟に哭士は体の前に氷の壁を作り防ぐが、防ぎきれなかった棘は、哭士の左肩を掠める。

わずかに掠めただけの影鬼の棘は、肩口に触れると大きく弾け、無数の針となり哭士の左半身を襲う。

「……」

顔を背け、左目への傷は防げたものの、肌に触れた影鬼の針は、哭士の肌を酸のように焼け爛れさせる。

苦痛に、低くうめき声を上げた哭士は、乱暴に顔の左側を拭いた。

なおも哭士に襲い掛かろうと向かってくる影鬼。

哭士の目に力がこもり、影鬼に向かって次々と氷の槍が突き立てられる。

その勢いは尋常ではなく、槍が一本地面に突き立てられるたび、氷の粒が建物内に散り、そして衝撃で建物は軋みを上げた。

だが、その攻撃すら影鬼にあたることは無く、際どいところかわされてしまうのだ。

そして、影鬼は避けるだけではなく、隙あらば哭士に向かって飛び掛らんと、虎視眈々と狙っている。不気味に光る二つの光は、哭士を常に捉えていた。哭士の心臓めがけ飛び込んだのは、鋭い爪を伸ばす影鬼。それを哭士は半身を捻り、次々に避けていく。

「哭士」

菊塵が右手を僅かに上へ掲げた。哭士は、影鬼の爪を避けながら、菊塵に向かってわずかに頷いた。菊塵の右手が開かれ、指が数本立てられたかと思うと、今度は別の指が、水平に向けられる。忙しく動く右手は、まるで手話のようだ。

菊塵と哭士の間では、時たまハンドサインが用いられる。昔から使われてきたこの手法は、戦闘時、哭士に対して言葉で伝えるよりも迅速に、確実に次に行くべき行動を伝えることが出来る。

菊塵は、影鬼の後方に回り込みながら、哭士に見えるように合図を送り続ける。哭士は影鬼の攻撃を避け、身を低くして走りながら、菊塵の右手を目で追った。

最後に、菊塵の右腕が大きく横に振り出されると同時に、哭士は後方に大きく飛びさった。

それと同時に、菊塵は指笛を鳴らす。甲高い音に反応し、影鬼は菊塵に頭を向ける。度重なる攻撃の数々に、影鬼も興奮が頂点に達しているらしい。

標的を見つけると、すぐさま攻撃に切り替えるようになっていた。

影鬼が菊塵を襲う。菊塵はくるりと空中で一回転しながら、後方に飛ぶと、影鬼はそれにつられて高く飛び上がった。

空中で放たれる、影鬼の棘。菊塵は造作も無く、自身の能力でそれを跳ね返す。黒い棘は、影鬼の体に吸い込まれ、それきり見えなくなった。菊塵は着地と同時に影鬼を見上げた。その牙で標的を抉るうと、影鬼は大きく口を開いた。

菊塵は真横に飛び、影鬼を避けた。その瞬間、菊塵が着地していたその場所から、氷の柱が突き出す。

影鬼はそのまま氷の柱に向かって飛び込む形となった。開いた口から突き刺さる氷の柱。恐ろしい断末魔の叫びが、建物内に響き渡る。

その声に、狗鬼らは眉を顰め、一般人である苑司は恐怖のあまり耳をふさいでその場にしゃがみこんだ。

巨大な影鬼からは、血の代わりに黒い靄が立ち上がる。

ずるり、と影鬼は体を柱から抜き出す。やはり狗鬼からの攻撃を受けると、体を構成する黒い靄が消え、少しずつ体が小さくなるようだ。

影鬼の様子にも疲弊が見える。踏み出す足が先ほどよりも明らかに弱い。

だが菊塵が一步、静かに後ずさると、影鬼はそれに反応する。更に菊塵が後ろに飛ぶと、影鬼は菊塵を追い、飛び掛った。

影鬼と菊塵を後方から追う哭士の氷が、影鬼を襲う。だが、影鬼は右に飛び氷を避けた。

続けざまに、一本、二本。氷の槍は、間髪居れずに突き立てられてゆく。そのたびに影鬼は身を翻し、攻撃を避けていく。

一瞬攻撃が止む。影鬼の瞳は正面に立っている菊塵を捉えた。

度重なる攻撃に、激昂している影鬼は、一直線に菊塵に突っ込む。

「さあ、来い」

影鬼には、菊塵が『笑った』という表情は認知出来なかった。ただろう。

掲げていた右手の人差し指が、ぴん、と立てられた。

菊塵の背後から、真上から、そして影鬼の真横から、予め用意されていた無数の氷の槍が一齐に降り注ぐ。

危機が迫っていることに気がついた影鬼だったが、時はすでに遅い。

四方八方から向かってくる氷の刃物が、容赦なく影鬼の体を貫いた。

## 2 4 2 ・籠女の血

目の前で無数の氷の槍が降りそそぎ、苑司の目は見開かれたままだった。

菊塵が、影鬼の攻撃を避けて時間を稼ぎ、影鬼を誘い込んでいる最中、ユーリは面白げに天井を指した。

つられて苑司が見上げると、天井には、無数の氷柱が垂れ下がっていた。哭士は、影鬼に攻撃を仕掛けながらも、止めを刺すための氷の槍を天井に用意していたのだった。

そして、菊塵の合図と同時に、氷柱は天井を離れ、影鬼に向かって一気に向かって行ったのだ。

降り注ぐ氷の槍を、菊塵は自身の能力で跳ね返し、それもまた、影鬼に突き刺さる。

息の合った二人で無ければ、このような芸当は出来はしない。言葉を交わさず、それを行っている事に、苑司は言葉を失っていた。

「な？ 俺が戦わなくてもいい理由、分かったろ？」

つまらないよなあ、と小さく息を吐き出してユーリは無数の氷柱が突き刺さっている影鬼を見た。

逃げ場も無く、一身に攻撃を受けた影鬼はひとたまりも無い。

最後の叫びを上げ、氷の塊に埋もれたまま、影鬼の体はぴくりとも動かなくなつた。

影鬼の体からは、黒い煙が立ち上がり、少しずつ消失している。

「もういいだろ」

「わっ」

いきなり体を持ち上げられた苑司は、思わず声を上げる。

ユーリは透明な床から飛び、音も無く着地した。

「体は大丈夫ですか？」

地面に降ろされた苑司に、菊塵が問う。

「う……うん」

まだ、目の前で起きたことが信じられない苑司は、曖昧に頷いた。所々、体は痛みを訴えていたはずだが、その痛みはどこかに吹き飛んでしまった。

「取那とかいう女は何処だ」

哭士が苑司に問う。その問いに、苑司もまた、ハッと自分を取り戻す。

「そうだ！ 取那さんは！？ 工場の外に居るはずなんだ」

苑司が哭士を見上げ、訴える。

「おかしいですね。僕たちが駆けつけたとき、外には誰も居なかったはずですが」

菊塵が首をかしげる。

「見て来る」

哭士は小さく呟くように言い、工場の入り口へと足を向けた。

「では、僕も行きましょう。ユーリ、苑司君を頼みます」

「はいよ」

ユーリは、ぶっきらぼうに手を上げ、返事をする。小さく跳ねるようにして先ほど哭士が仕留めた影鬼に近づくと、興味深げに覗き込んだ。

「まだ体が消えずに残ってら。相当大きかったもんなあ」

やや猫背になり影鬼を見つめているユーリ。苑司は、ユーリの後ろに回る。

「あ、あまり近づかない方がいいよ……」

襲われた恐怖心から、苑司はユーリの居る場所まで近づくことは出来ない。

「大丈夫だって。もう死んでる」

ユーリはくると苑司に向き直った。親指で、背後の影鬼を指す。「黒い煙が立ち上がってちよつとずつ小さくなってるだろ？ もうすぐ消えてなくなる」

「でも……」

ちらりと影鬼に視線をよこす苑司。

「！！」

黒い塊が、僅かに揺らぐ。次の言葉を発しようと、苑司が息を吸い込んだ瞬間だった。

不気味な二つの光の玉が明滅した。

一瞬の出来事だった。

影鬼に突き刺さっていた無数の氷柱が蠢き、ユーリに向かって鋭い腕を伸ばしてきた。

目を離していたユーリはそれに反応が出来ない。

「危ない！」

苑司が叫ぶ。ユーリの体に衝撃が走る。彼の長い足が纏れ、彼はその場に倒れこんだ。

短い苑司の叫び声に哭士達が振り返ったその瞬間だった。

「影鬼が！」

菊塵が瞬間的に状況を把握する。

「……野郎、力を最後に残していやがった」

哭士の目に力が宿り、一際大きな氷の塊が影鬼を直撃した。

氷塊が影鬼に叩きつけられた瞬間に、黒い影は霧散し、跡形も無く消え去った。

大きな影鬼を仕留め、動かなくなった事で油断をしていた。哭士は自身の過失に舌打ちをする。

哭士、菊塵が駆け寄る。

倒れこんでいたユーリが起き上がる。だが、体に外傷は無い。次の瞬間、声を張り上げて苑司の名を呼ぶ。

「苑司！ 苑司！」

影鬼の最後の攻撃に貫かれたのは、ユーリではなく苑司だった。

右脇腹を影鬼の爪に挟まれ、苑司の青いシャツは見る間に赤黒く染まる。体は衝撃で小刻みに震えていた。

「馬鹿野郎！ 普段ビビリの癖に何でこんな時に出しゃばりやがるんだ！」

影鬼が腕を伸ばした瞬間、ユーリを守ろうと、苑司は咄嗟に彼を突き飛ばしたのだ。

苑司が居なければ、背中から体を貫かっていたのはユーリだっただろう。

ユーリの声は、大きく建物内に響き渡る。

「……………」



苑司は何かを伝えようと口を開くが、吐息となり言葉にならない。ただ、ごめんなさい、と弱弱しく口が動くだけだった。ユーリ、哭士を交互に見つめていた目は、重力に負け、ゆっくりと瞼を閉じてしまった。

「……取那の搜索は今後回しにし、彼の救命を最優先に」  
一刻も早く山を下り、救命措置を行わなくては、苑司の命が危うい。

だが、苑司の呼吸は既に浅く、体を持ち上げようと掴んだ腕は力無い。  
すぐに医者に見せたとしても、助かるかどうか難しい状況だった。誰もが、最悪の事態を脳裏に浮かべた、その時だった。

「……！」  
背後で砂利を踏む小さな気配を感じ、哭士が振り返る。

「……色把」  
肩で息をし、入り口に色把が立っていた。傍らには蓼原も居る。菊塵も信じられない様子で、色把と蓼原を見やる。

色把は、工場内の状況を察し、駆け寄ってくる。  
「何故来た。来るなど言っただろう」  
厳しく諫める哭士に、色把は強い意志を持った目で首を振る。今はそれ所ではない、と言いたげだ。

意識を失っている苑司に視線を落とす。床に散らばっているガラス片を拾い上げた。  
『私の血を、使います』  
強く唇をかみ締め、手の平にガラス片を走らせると、見る間に血があふれ出す。

血をこぼさぬ様、苑司の傍らに膝をつき傷口に自らの手を当てがった。

傷口を重ねた手を下に、もう片方の手を沿え、色把は少し苑司に体重を預けた。

「……」  
通常では考えられない勢いで、色把の手の平から血が吹き出し、それが苑司の傷口に吸い込まれていく。

少し離れた場所で見守っている哭士の目にも、それがはっきりと分かった。無言のまま哭士の隣に立った蓼原も、驚いた表情を浮かべてはいるものの、静かに見守っている。

苑司の苦痛にゆがんだ顔が、僅かに緩まった。だが、顔色は死人のように青ざめたままだ。

「……籠女の血は、人間にも使えんのか」  
驚愕の様子で、ユーリは色把と苑司の様子を見守る。

「籠女の血は、何者をも癒します。狗鬼の体が一番籠女の血に対応している為に、少量の血で全快します。……ですが」

苑司は一般人だ。先ほどから色把は苑司に血を与え続けている。通常の狗鬼であれば、十分すぎるほど回復をしている時間だ。

血を分け与えている色把の顔も、徐々に青ざめ、体重をかけている体が、僅かに傾ぐ。

「色把さん、それ以上は危険です」  
菊塵が強く色把の肩を引き、苑司から腕を引き剥がした。

「まだ……まだ平気です！」  
しかし、必死に菊塵を見上げた色把の顔色は悪い。貧血状態に陥っている。

なおも苑司の体に手を当てようと伸ばす手首を、哭士の手が、がしりと掴む。

「お前の体がもたない」

哭士の言葉に、首をゆるゆると振る色把。苑司の呼吸は未だに浅く、哭士の耳に届く彼の心音も弱いままだ。だが、色把がこれ以上苑司に血を与えれば、色把の体にも大きな負担がかかる。

「どうにかなんないのか！」

自分のせいで苑司を瀕死の状態に陥らせてしまったユーリは、うろたえ、菊塵に詰め寄る。

「籠女の血は、彼の体内に入りました。あとは、彼の生命力に賭けるしか」

「まだ、傷口だつて塞がっちゃいないってのにか」

ユーリはがばりと顔を上げ、色把と同じようにガラス片を掴みあげた。

「何をするつもりだ」

「狗鬼の血はダメなのか？ 少しは籠女みたいな力があるんじゃない？」

……

ユーリはガラス片を握り締める。見る間に手の平は赤く染まった。

「ユーリ、止せ」

狗鬼の血を一般人に与えては、何が起きるか分からない。

「だけどこいつ、このまんまじゃ助からねえよ！」

哭士の制止も聞かず、ユーリは苑司の傷口に自身の手をかぶせた。

突如、ユーリの顔が苦痛にゆがむ。

見ると、ユーリの血もまた、色把程の勢いは無いが、同じように苑司の傷口に馴染み、痛々しい傷口が塞がっていく。

「……………」

まさか、狗鬼の血ですら他者を癒すことが出来る等と考えたことも無かった菊塵と哭士は、目の前の状況に驚愕の色を隠せない。

苦しげな表情を浮かべるユーリ。血を与える事が本能的に染み付いている籠女とは違い、体から異常な速さで血が抜けていく事に、体がついていけないのだろう。

食いしばった歯の間から、うめき声と共に息が漏れる。

やがて、苑司のわき腹の傷が完全に塞がった。同時に、ドサリと

ユーリも傍らに倒れる。だが、その表情は安心しきったものに変わっていた。

「……何とか、なるもんだな」

息も絶え絶え、ユーリは寝転んだ状態で全員を見上げる。

「……狗鬼の血も、人を癒すのですね……」

その場にいた全員が、整った呼吸を取り戻した苑司を見つめていた。

## 2 4 3 ・再会の約束

静まり返った工場跡。焚き火はすでに火が消えようとしている。

蓼原は、端にまとめられていた廃材を幾つか抱えあげ、一斗缶にくべる。湿気ていた廃材は、やがてじわじわと炎に飲み込まれ、周囲は再びオレンジ色の光に照らされた。

「とりあえず、彼を下まで運ぼう。顔色は良くなったようだが、一刻も早く体を休められる場所に連れて行ったほうが良い」

今まで事の成り行きを見守っていた蓼原が、苑司を背負おうと、身を屈めた、その時だった。

「待て！」

何かの気配に気づいた哭土が短く叫び、素早く上を見上げた。全員に緊張が走る。

それとほぼ同時に、大きな穴が開いた工場の屋根から、大きな塊が落下してきた。

全員が身構える。

ドサリ、という重い響きと、そして僅かに聞こえたうめき声。

哭土の目は、それを捉えた瞬間に、大きく見開かれた。

「……………友禅……………！」

二度と見紛うことの無い、血を分けた自身の兄。

全身は痛々しいほどに切り傷が走り、着衣は元の色が分からぬほどに血と泥で赤黒く染まっている。

地面に両腕をつき、体を持ち上げようとするが、既に体は自由に

動かないらしい。力なく崩れ落ち、色の違う両目が弱弱しく哭土を映す。

「……取那が……」

息も絶え絶え、放った言葉に、哭土は眉をひそめた。

「何だと」

哭土が友禅の傍らにしゃがみこんだ。

「只者では無い……気をつけて、下さい……」

蚊の鳴くような細かい声で、友禅は哭土に訴える。

負った傷が体に響くらしい、息を大きく吸うたびに走る痛みを、必死に堪えているようだ。

「……一体、何が起きたというのだ」

「おそろいようですね」

聞きなれない声が、建物内に響き、哭土は声の方向に視線を投げた。

工場跡は、二階部分が吹き抜けのようになっている。二階部分に姿を現したのは、若い男女が一人ずつと、そして色把と同じ顔の少女、取那だった。

「友禅！」

傷ついた友禅を見つけ、後ろ手に縛られた取那が叫ぶ。その様子に、若い女が振り返り取那の口に布を当てる。必死に抵抗する取那であったが、両手が自由に利かない状態では、その目論見は無駄なものに終わる。

「お久しぶりですね、早池峰様」

栗色の髪、整った顔をした青年が、哭土に向かって静かに微笑む。青年は、胸に手のひらを当てると、一度、哭土に向かって頭を下げた。

「誰だ、貴様」

哭土には見覚えの無い男だった。男は、哭土の言葉を待っていたとはばかりに楽しいげな表情を浮かべる。

「……忘れてしまったのですか？ 本家であるの夜、またお会いしましょうと約束をしたばかりではないですか」

青年の浮かべた笑みが、本家で見たある一人の人物と重なる。栗色の髪、そして自信に溢れた双眸。

また、会いましょう。早池峰様

月明かりに照らされた堂の中で、その人物は同じように静かに笑んでいた。

「……レキ……？」

思わず哭土は一人の人物の名を口にした。

哭土が出会ったレキという人物はどう見ても十二歳程の子供だった。今、自身の目の前に立っているのは、二十歳を超えた青年である。

だが、本家で見たレキの姿が、何故かぴったりと、目の前の青年と重なった。

青年の笑みは崩れない。そして、ゆっくりと哭土の問いに首を縦に振った。

「以前の姿の方が、お気に召しましたでしょうか？」

青年が目を瞑り、ゆっくりと息を吐き出す。すると、ほっそりと背の高い青年の姿は見る見る縮んでゆく。身を包んでいた衣服の布が余り、顔立ちが丸く、幼くなっていく。やがて青年は、本家出会った、『子供のレキ』の姿に変貌を遂げた。

『子供のレキ』は、身体に合わなくなってしまった大人の衣服に包まれたまま、眉を下げて言い放った。

「早池峰様、……僕のこと、忘れてしまわれたんですか？」

声も子供特有の甲高い声になり、びくびくした佇まいで哭土を見つめる。

「本家での演技、なかなかのものでしたでしょうか？」

怯えの表情を浮かべていたのもつかの間、レキは瞬く間に子供の姿から成長し、青年の姿に戻った。乱れた襟を正し、息を小さく吐き出した。

哭土の驚愕の表情を、楽しんでいるようだ。

「……それが、お前の能力なのか？」

姿を変えられる能力であれば、先に自宅で見たシイナのものさほど変わりはない。哭土はレキを睨み付ける。

「いいえ、これは私のみに与えられた『力』。狗鬼の能力とは全く異なります」

小さく首を振るレキ。哭土ら全員を一瞥すると、レキは静かに語りだした。

「さて、本題に入りましょう。この取那という少女は、私達にとっ



ての重要な存在。……そちらにおわす、色把様よりも……。そんな重要なお方を、そこに転がっている御方が、大事に大事に隠しているらっしゃった」

レキは順に取那、色把、友禅に視線を投げかける。体の自由が利かない友禅は、観念したように目を閉じた。

「私たち保守派は、この少女を探し続けていました。大人しくこの少女を私共に引き渡して頂けるのであれば、貴方達は怪我をすることなく無事に帰ることが出来ます」

レキは、哭士らを見渡す。レキの目に見つめられた狗鬼達は、彼を睨み返し、その場で構えた。その様子にレキはにやりと笑みを浮かべる。

「やはり、タダでは帰しては頂けないようだ。……絡音わづね」

「はい」

レキは背後の女に声をかける。すらりとした女が、一步前に歩み出た。

「この方たちのお相手を」

「かしこまりました」

長い睫毛の目が、ちらりとレキを見つめると、絡音と呼ばれた女は、哭士らの前に飛び降りた。胸元が大きく開いた衣服を纏い、赤い口紅が目を引いた。哭士達よりも歳は上であろう。

「……女を殴る趣味なんてねえぞ」

ユーリが絡音を見、呟くように言い放つ。

「ご心配なく。貴方達は私に触れることすら出来ず、敗北を味わうことになるでしょう」

哭士は女を睨み付けた。哭士が目を留めたのは女の両手。両手の赤い爪が不規則に動いている。

「哭士、気をつける」

菊塵が耳元でつぶやく。

「そちらのお一方は気付いたようね。でも、もう遅いわ」

「貴方たちは、蜘蛛の巣に掛かった獲物同然なのだから」

そう言っ て絡音は妖艶な笑みを浮かべ、哭士らを見つめるのだっ  
た。

## 2 4 4 ・フラッシュバック

哭士は、絡音に飛び掛ろうと腕を引く。

「……！」

哭士の腕の動きに呼応するようにユーリと菊塵が同時に叫び声を上げた。

菊塵の腕、そしてユーリの首筋に、一閃の切り傷が走ったのだ。

そして哭士の腕は何か強く引っ張られたようになり、腕を振りぬくことは出来なかった。自身の体を包む不自由な感覚に、哭士は逃れようとゆっくりと肩を後ろに引く。

「哭士……！ 動くな……！」

やはり哭士が体を動かすと、二人の体に負荷がかかるらしい、苦しげな表情で菊塵は哭士に訴える。

菊塵の首や腕には、細い何かが食い込んでいる様子が見える。

自分の腕を見つめると、無数の細いものが絡み付いている。気づけばそれは腕だけではなく、哭士の体全身に纏わりついていた。

「なんなんだよ、これ……！」

ユーリは自身に纏わりついている物を振り払おうと身じろぐ。すると哭士の左足が強く締め付けられる。ユーリの体も自由に動かなくなっているらしい。苛立たしげな表情を浮かべ、絡音を見やる。

「……糸か」

哭士、菊塵、ユーリの三人の間で複雑に糸が絡み合い、誰か一人が動くことで互いに傷つけあうようになっていているらしい。

「そう、私の糸から逃れられた狗鬼は居ない」

絡音はゆっくりと両腕を開いた。同時に哭士たちの身体に纏わりついた糸が締め付けられる。

ちらりと視線を脇に投げると、蓼原と色把も身体が動かなくなっているらしい。傍らの蓼原が必死に身じろいでいるが、色把が苦し

んでいる様子は無い。糸が互いに絡んでいるのは、狗鬼の三人だけのようだ。

哭士は、氷を鋭い刃物のように生成し、上空から落下させようと天井を仰いだ。

「無駄よ。私の糸は、刃物でも切ることは出来ない」

哭士の思惑は絡音に見透かされているようだ。舌打ちをして、菊塵、ユーリを見やるも、菊塵の能力では、既に身体へ巻きついていくものは跳ね返すことは出来ない。ユーリの能力でも、全ての糸を断つ事は出来ないだろう。

なす術も無く、糸に縛り付けられている哭士たちを見、ゆらりと絡音が歩み寄る。

「随分、いい男が揃ったものね」

絡音が哭士の前で立ち止まる。

「貴方、契約が結べない狗鬼なんですってね。あの娘でも、駄目だったのかしら」

ちらりと色紙に視線を寄越し、哭士の頬に触れる絡音。

「!!!」

だが、その手ははじめかれた様に、哭士の頬から離れる。

哭士に差し出していた右手を開くと、絡音の親指から鮮血があふれ出していた。

鋭い目で哭士を見返す絡音。その哭士の唇の端にも、ほんの少し赤い斑点が付いている。

「……触るな」

不愉快な表情を崩しもせず、哭士は絡音に言い放った。

先ほどまで、余裕とも取れる表情を浮かべていた絡音だったが、その哭士の言葉に浮かべていた顔が一変する。

パシン、という小気味よい音。頬を叩かれた哭士はゆっくりと顔を持ち上げた。

「……置かれている立場が分かっていないようね」

絡音が大きく腕を広げると、哭士たちに絡んでいた糸が更に締まり、三人は身動き一つ取れなくなる。頸部に強く糸が絡んでいる菊塵は苦痛に顔をゆがめた。

長い睫の目が、色把を捉える。絡音が色把に手招くような動作を向けると、色把の身体はいとも簡単に引っ張られ、哭士の目の前の地面に叩きつけられた。

「色把！」

地面に着く瞬間に手をつき、大きな怪我は負っていないようだ。

だが、突然の事に色把は起き上がれずにいる。

「その、冷徹な顔が、どう歪むのか、楽しみだわ」

絡音の両手の指が、複雑に動く。

「貴方達は、私の傀儡なのよ」

「……！」

狗石に操られているように内在的な力とは異なり、外部からかけられる力により、哭士の身体が、意思に反して、前かがみになる。

糸を引きちぎろうと、力を込めるも、体中に巻きついていて糸が哭士の力を分散させ、その力は全て、菊塵とユーリを締め上げるものになってしまう。

「ガ……ッ」

菊塵の喉の奥から苦痛の声が漏れ出す。

操られた哭士は、倒れた色把にのしかかる形となり、両腕が、色把の肩に伸びる。

『……………』

色把は、哭士の腕を掴み逃れようとするが、哭士の強い力には到底敵わない。おびえた表情で、哭士を見上げる。

「早池峰ッ！」

ユーリが堪らず声を張り上げた。

「レキ様、この者達は全て始末ても良いのかしら？」

絡音は、二階の吹き抜け部分に立っているレキを見上げる。

「本物の【神】の器が手に入れば問題は無い。お前の好きなようにレキはその場にいる全員を一瞥すると、ゆっくりと頷いた。

その答えに、絡音は満足げな表情を浮かべ、哭士らに振り返った。

「さあ、始めましょう」

絡音が両腕を伸ばす。

「……！」

同時に哭士の腕が色把の白い首へと伸び、少しずつ力が込められた。

『哭……士……！』

色把は必死に哭士の下から逃れようともがいている。しかし、哭士の指は意思とは無関係に、じわじわと狭まっていく。哭士は必死に糸の力に抗う。

哭士の手の中の細い首は、激しく脈打っている。ほんの少しでも糸の力に負けてしまえば、狗鬼の力ですぐに色把の命がへし折られてしまう。

「……クッ」

哭士の手の中は、糸が皮膚に食い込み、痛々しく血が溢れる。その血は、糸を伝い、地面にパタパタと音を立て、染みを作る。

徐々に締まる色把の首、苦しきから、色把の足が何度か跳ね上がり、哭士の足に当たる。必死に息を吸おうと、色把の口が苦しげに開く。

「指が千切れるわよ」

絡音の指が、内側に少しずつ折られると、それにつれて哭士の指の糸も強く締まる。その度に糸が食い込み、小さく血しづきが上がる。

色把の表情も、苦しげな物となり、哭士の二の腕を掴んでいる色把の爪が、小さく刺さる。頭を小さく揺すり、少しでも逃れようとするが、色把の首は確実に締め付けられていく。

薄く開いた色把の目が、哭士の視線に重なった。

「や……めろ」

自身の身体が全くいうことを利かない。締めている首から伝わる鼓動が早くなる。

「止める！……止めるっ！」

自らの手で、かけがえの無い人物を失いそうになり、哭士は初めて、心の底から叫び声を上げた。

色把の頬に、哭士の鮮血が掛かる。

哭士は自分を守るために、必死に見えない力に戦っているのが分かる。

だが、それでも、力は弱まることなく、万力のようにギリギリと締められている。

ひゅう、と、喉の奥から息が漏れだす。

目の前は赤黒くなり、苦しみから逃れようと、哭士の腕に伸ばしていた手は無意識に力がこもる。

（哭士が、叫んでいる？）

強い耳鳴り、哭士の声すら、もう聞こえない。

目もはつきりと物をとらえることが出来ず、自身にのしかかる大きな男の影と、自身の首に伸びる太く、力強い腕だけが、何とか認識が出来る程度だった。

だが。

意識が手放される瞬間に、色把の脳裏に、一瞬にして映像浮かび上がる。

真つ暗な和室。破られた障子。赤い着物。小さな自分の手。荒れ散らかった畳の上。月光。のしかかる男。首にかけられる強い指。笑う男。

見えている今の状況が、色把の眠っていた記憶と結合し、一瞬にして、膨大な量の映像が色把の脳内をめぐる。

浮かび上がってきた映像は、野蛮な笑みを浮かべる男が、自身の首を絞めようとしているものだった。

蘇った記憶の中の男は、狂ったように同じ言葉を繰り返している。

お前さえ死ねば、お前さえ死ねば、お前さえ死ねば、お前さえ死ねば



『！』  
色把に張り上げられる声は無い。だが、色把はそのとき確かに、  
叫んでいた。

色把の目が大きく見開かれ、一度だけ大きく身を反らせると、そのままぐったりと色把は気を失ってしまった。

哭士の腕を掴んでいた手も、一瞬にして緩まり、ずるりと地面に落ちる。

「色把！」

色把の名を呼ぶ哭士の声が、工場内に響き渡った。

## 2 4 5 ・狂気の鬼

「色把！」

哭土の声が工場内に響き渡り、辺りは一瞬、静寂に包まれた。両の手は色把の首から外れることは無く、気を失った色把は、青白い顔でピクリとも動かない。

「……………！」

突如、哭土の背中に、ぞくりと悪寒が走る。それを感じ取ったのは、哭土だけではないらしい。菊塵、ユーリ、そして絡音すらも、正体の分からもぬ気配に、周囲に視線を泳がせた。

哭土の目の端で、何かが小さく動いた。

「……………苑司……………！」

負傷し、倒れていた苑司が立ち上がったのだ。

顔は下を向いており、表情を見ることは出来ない。両腕はだらりと下がり、身体に力が入っていないのか、左右に小さく肩が揺れている。

「苑司！ お前だけでも逃げろっ！」

立ち上がった苑司に、ユーリが叫ぶ。一般人の苑司には、この状況を打破することなど、万に一つでも不可能だ。

だが、苑司にはユーリの声が届いていないのか、その場を動く気配が全く無い。

「てつきり死んでいると思ったら、生きていたのね」

絡音が苑司へ、つつかかと歩み寄る。だが、苑司は一步もその場を動かない。なにやら、様子がおかしい。

突如、がばりと顔を上げる苑司。

目は血走り、絡音を鋭い眼光で睨み付けている。食いしばってい

た歯が勢い良く開き、普段の苑司からは考えられないような雄叫びを上げる。

耳を劈く苑司の咆哮と同時に、工場内には強風が吹き荒れ、張り巡らされた糸が全て切断された。

「!?!」

身体を拘束していた糸が突然無くなった為に、狗鬼の三人はバランスを崩し、その場に倒れ伏した。菊塵は締め上げられていた頸部が開放され、激しく噎せ込んでいる。

「な……んだ?」

信じられない表情で、ユーリが周囲を見渡す。

哭士の指の力も一瞬にして抜け、哭士の手と色把の首の間に隙間が生じる。色把の細く白い首には、はつきりと指の痕が残り、糸が食い込んだ哭士の血でべっとり汚れていたが、色把の胸は、小さく上下を繰り返していた。命に別状は無いようだ。

だが、今しがた起きた出来事が、哭士には信じられなかった。苑司が咆哮を上げた瞬間に、絡音の糸は全て断ち切られたのだ。哭士は苑司に視線を投げる。

苑司の目は、誰も捉えることなく、虚ろになっている。肩で息をしている苑司は、吐き出す度に獣のような唸り声を上げている。

「刃物でも切れない私の糸が……!」

状況を飲み込めないのは絡音も同じらしい。目を見開き、苑司を見つめている。

立ち尽くしていた苑司の頭が、ガクリと下を向く。

「……皆さん! 伏せて下さい!」

苦しげな表情を浮かべ、何かを察した友禅が叫ぶ。その場にいる全員に緊張が走った。

苑司の再度の咆哮と共に、右腕が大きく振り上げられる。

「！！！」

絡音の傍らを、何か巨大な物がすり抜ける。咄嗟に避けた絡音の長い髪の数本が宙に舞い上がった。建物内にいる人物の間を、またもや強風が吹き荒れる。

その直後、工場の壁に大きな衝撃が走り、半月状の巨大な穴が生じた。壁を突き抜けた巨大な力は、建物の外にある木までもなぎ倒し、激しい音が皆の耳に届いた。

「かましたち鎌鼬か……驚いた。人間からこれほど強力な狗鬼が出来上がるとは……。比良野の血は、やはり違う」

レキが冷ややかな目で、壁の穴を見つめている。トタンが張られた壁は、元からさび付いているという事もあったが、衝撃に耐えられずに、ボロボロと崩れ落ちていく。

瞠目している哭士らを見やり、レキはふと笑みを浮かべた。

「ヒトの体内に、籠女と狗鬼の血が混ざれば、一時的にヒトは狗鬼となる。自我を失い、目に映るもの全てを敵とみなす」

レキの言葉が終わらないうち、苑司は身を屈め、素早く絡音へと飛び掛る。

「！！！」

絡音は自身の前に糸を繰り出し、苑司を絡め取るうとするが、狗鬼と化した苑司は、本能的に鎌鼬を繰り出し、その糸を断つ。瞬間的に絡音の頬には、赤い切り傷が走る。

身を翻し、苑司の攻撃を避けるも、両手を地面についた苑司は、その反動で高く飛び上がり、絡音の背後へと回る。

今までの苑司からは考えられない攻撃的な様子に、それを見てい

る狗鬼達はあっけに取られていた。

突如、絡音の悲鳴が上がる。

糸を断たれ、その身を守るものを失った絡音に背中から躍りかかり、苑司はその細い肩に歯を突き立てたのだ。

顎の力も人の範疇を超え、狗鬼となつていている苑司は、目の前の獲物を捕らえようと絶え間なく唸り声を上げている。

「レキ様！ レキ様ッ！」

背後から襲い掛かれて、うつぶせの状態になった絡音は、必死に苑司から逃れようとするが、苑司の力は絡音のものを上回ったらしい。悲痛な叫び声を上げ、絡音はレキに助けを求めて腕を伸ばす。その様子に、レキは冷ややかな目線を浴びせていたが、一度小さく息を吐き出した。

「！！！」

突如、絡音の傍らに姿を現すレキ。哭土の目には、レキが移動したその動きを捉えることが出来なかった。

絡音に喰らい付いている苑司の首根を掴み上げ、いとも簡単に苑司を引き剥がす。身を翻し、屈んだ状態で苑司はレキに向き直る。

苑司の口は、真っ赤に染まっていた。袖口で、赤い液体をふき取ると、『狩り』の邪魔をしたレキに襲い掛かろうと牙をむいている。

レキはそんな様子を気に留めることもなく、音も立てずに苑司の目の前へと現れ、腹部に拳を突き入れた。

「ガッ……！！」

色把とユーリの血で塞がれていた傷の部分に、負傷を受けた苑司は、そのまま意識を失った。

その様子を確認し、レキはゆっくりと絡音に視線を戻す。

「レキ……様」

自身を救ったレキを、畏敬の念を込めた上目遣いで見つめる絡音。だが、その視線に対し、レキは冷徹な視線を浴びせ返す。

「……！」

レキの指が、絡音の喉へ突き立てられる。突如起きた出来事が信じられない絡音は、大きく両目を見開いた。

開かれた口からは、小さく声が漏れ出す。喉に指を引つ掛けたまま、絡音の身体を、いとも簡単に持ち上げた。

「何の為に前を連れ出したと思っている。比良野の籠女で出来た鬼といえど、所詮は唯のヒト。そんなものに梃子摺るとは……」

レキの言葉は、最後まで絡音に届かない。喉を貫かれた絡音は、その場にガクリと首を落とした。

「使えぬ狗など不要だ」

そして、二度と絡音の心臓が脈打つことは無かった。

レキは仲間である絡音の命を絶った事に、何の感情も抱いていないらしい。

用済みの物とでも言いたげに絡音の身体を放り投げる。赤くなつた指先を何度か振り、付着した血を払い落とした。

「お遊びはここまでに致しましょう。絡音程度の狗鬼に手間取るような者達では、たかが知れているとは思いますが、ね」

端麗な顔からは、何一つ感情を読み取ることは出来ない。

だが、表情無く語るレキの、目の奥に渦巻く狂気を哭土は僅かに感じ取っていた。

## 2 4 6 ・弊履の名前

「仲間を、あっさり殺しやがった……」

ユーリが生唾を飲み込む。

「仲間？」

ユーリの呟きが耳に届き、レキは鼻で小さく笑う。

「アレは、只の道具です。生き残った弊履へいりの族から、一番マシなものを持ってきて、名を与えてやっただけの事」

もう動かない絡音の身体を、憎々しげな様子で見やるレキ。

弊履の族。本家でその言葉を哭土は聞いていた。

本家にこき使われる狗鬼は、弊履へいりの族って言われてんだ

恒河沙こうさって名は俺のもんじゃねえ。ただの『區別』の『記号』

なんだよ！

本家で争った恒河沙の叫びが、哭土の耳に蘇る。

数を表す記号で呼ばれ、本家に奴隷のような扱いを受けている狗鬼たちの事だ。

人間とも狗鬼とも認められない、本家に死ぬまで飼われる哀れな狗だ！

『記号』ではない名前を与えられ、奴隷のような生活から抜け出せるようにしたレキに、絡音は心からの忠誠を誓っただろう。

レキはそれを全て分かりきった上で、使い捨てとして絡音を利用

したのだ。

「何て野郎だ……」

ユーリの齒軋りが聞こえる。レキの言葉に相当苛立っているようだ。

「一筋縄では、いかないようですね」

菊塵が息を吐き出した。と、同時に、レキが口を開く。

「お遊びはここまでに致しましょう。貴方達の実力は、もう十分に分かりました」

レキは音も無く菊塵の目の前に現れる。

「……」

菊塵が戦闘の態勢を取ること出来なまま、レキの右手が菊塵の頭部を捕らえる。

上に引き上げられるレキの腕。それと同時に菊塵の身体も持ち上げられる。

菊塵はレキの腕を掴み、掴んだ腕を外そうとするが、レキの細い腕は、微動だにしない。

「が……あっ……」

ギリギリと、少しづつ締め上げられる指の力、菊塵の頭蓋が軋みを上げ、思わず声を漏らす。レキの指の隙間から見えた彼の口元はうつすらと笑っていた。

「貴方は非常に興味深い能力をお持ちのようだ。だが、所詮は名も無い狗鬼筋の家の出。取るに足らない」

更に強まるレキの指に、菊塵の苦悶の表情が更に濃くなる。

「……誰が、取るに足らない……と？」

菊塵の小さな呟きが、その場にいる全員に届いた。



突如菊塵は、身体を大きく振り、レキの身体を強く押し倒す。

身体を持ち上げられている状態では、地面を蹴り上げ、反動をつける事は不可能なはずだ。だが、菊塵の力は、通常よりもかなり強い力で、レキに飛び掛っている。

「自身の身体を、その能力ではね返した訳ですか。なかなか機転が利くようですね」

背中から地面に叩きつけられたレキは、それでも余裕の笑みを崩さない。

菊塵は、物質を反射させる領域を自身の背後に展開させた。その領域を強く蹴り上げ、反射をする。蹴り上げた自身の力と反射されたその反動でレキの腕から逃れたのだ。

開放された菊塵は、レキから距離を取り、様子を伺っている。どのような事態にも対応できるよう、体中に緊張をみなぎらせていた。その菊塵の様子を悟ったのか、レキもその場で腕を組み、微動だにしない。

二人は、一定の距離を保ち、睨み合っている。

「哭土……」

何とか立ち上がっていた友禅が、哭土に視線をよこす。

「取那を……！」

友禅は、吹き抜けになっっている二階を指す。取那が、目を見開き、自身らの様子を見守っている。

レキが言っていた【神】の器、それが取那なのだという。レキの言葉の真意を掴めずにいたが、このまま易々とレキに取那を引き渡す事は、すなわち敗北であると哭土は本能的に感じ取っていた。

レキの注意は今、菊塵に向いている。哭士は取那を確保しようと、友禪の指した先にいる取那に向かい、地面を強く蹴った。

「こそこそと、一体何をしようとしているのでしょうかね」  
飛び上がった哭士の目の前に、レキが現れる。

「!!!」  
レキが動く気配は全く無かったはずである。

振り上げたレキの腕に反応するが、だが、レキの動きが僅かに早い。哭士の胸の中心に拳が滑り込み、強い衝撃が哭士の身体を突き抜ける。

気が付いたときには、哭士は菊塵に向かって叩きつけられていた。  
「!!!」

菊塵は哭士の身体を受け止めようとするが、それすらも間に合わない。

哭士は菊塵の上に背中から落下するような形になった。

叩きつけられた二人の衝撃で、冷たいコンクリート製の床は凄まじい音と同時に、大きな輝<sup>ヒビ</sup>が走る。

同時に菊塵の胸元から、一丁の拳銃が転がり出て、無機質な音を立てた。

周囲はコンクリートの砂埃に包まれる。

事態は思わぬ展開を見せている。圧倒的な強さを持つレキに、哭士達は弄ばれているようだった。

## 2 4 7 ・圧倒的な力

哭士は、ゆっくりと息を吐き出そうとするが、思うように身体が動かない。すさまじい衝撃から来る身体の痺れが、レキの力の強さを物語っている。

(こんな筈は……)

力を過信していた訳ではない。だが、これほどの大きな力は、今まで受けたことが無かった。本家で戦った恒河沙の拳ですら、本気を出していない様子のレキにまったく及ばない。

その時、哭士の耳にうめき声が届く。事態を把握した哭士は身体を僅かに移動させた。

「かはっ……！」

哭士の身体の下から這い出した菊塵は、小さく咳き込む。何度か苦しげに身体を震わせ、咳き込むと同時にコンクリートの地面へ小さな赤い斑点が染みを作った。

両肘を地面についた状態だった菊塵の身体が大きく傾ぎ、その場へと倒れこんだ。一度、再び起き上がろうと試みる様子があったものの、菊塵の体力は限界を迎え、戦闘不能となってしまった。

「この……野郎！」

その様子に、いても立ってもいられなくなったユーリが、先ほどの哭士の動きよりも素早くレキの真上へと躍りかかる。

飛び上がった身体は弧を描き、真紅に染まった強い双眸は、レキの首一点を狙っている。その動きには無駄が無く、見つめている哭士にも、レキを仕留めるのに必要な間合いが十分に取れていることが分かった。

レキは、ユーリに対し、何の反応も示さない。ユーリの鋭い拳が、

まさにレキの頸部を突こうと、まっすぐに伸びた。  
だが。

驚愕の声が洩れると同時に、ユーリの動きもぴたりと止まった。  
そして、その様子を捉えていた哭士も、自身の目を疑った。

ユーリの拳は、手の平のみで受け止められ、レキの身体は微動だにしていない。ユーリは、レキの真上から飛び掛かり、避けるのがほぼ不可能な間合いまで詰めていたはずである。だが、一瞬のうちにレキの姿が移動し、こうして僅かな損傷すら与えてはいない。

無表情に、レキはユーリに対し口を開く。

「貴方は、まだ自身の力を十分に使いこなせていないようですね」  
ユーリの拳を受け止めていた手の平を、一気に握り締めるレキ。

同時に、何かが砕ける鈍い音と、鋭いユーリの悲鳴が辺りに響き渡る。右手を抱え込むようにして、その場に崩れ落ちる。右手の骨が砕けたらしい。痛みを顔をゆがめている。

レキが屈んだユーリに止めを刺そうと腕を振り上げる。哭士は強く地面を蹴った。

哭士が伸ばした腕が、レキの頬を掠める。レキは、上半身を捻り、哭士の攻撃を避けていた。

「流石に、早い」

身体を捻った不安定な状態のまま、一度地面に手をつくとその反動で素早く哭士の間合いに飛び込んでくる。

先のレキの鋭い拳に対応するべく、両腕を自身の身体の前で構える。

「早池峰！」

ユーリの叫び声と同時に、哭士の足に硬い何かが触れる。ユーリが哭士の目の前に、空気の壁を生成したのだ。ユーリの意図を汲み

取った哭士は、見えない壁を強く蹴り上げた。

空気の壁には弾力があり、哭士の身体は予想以上に高く飛び上がる。レキの頭上を軽々と越え、飛び上がった先にまたもや硬い壁が生成されていた。

以前ユーリが哭士と戦った時と同じように、哭士も空中の壁を強く蹴り、着地したばかりのレキの背に向かって鋭く飛び掛った。

「！」

レキの背中に哭士の膝が直撃する。衝撃で短い息を吐き出したレキは、うつぶせの状態で地面に叩きつけられた。

哭士は後方に飛びずさり、次の動きを見逃さんと、じっとレキの姿を睨み付けている。

右手を地面につくレキ。ゆっくりと体重を腕にかけ、そのまま立ち上がる。

着衣に付いた砂埃を手で払い落とし、静かに哭士へと向き直った。その表情は、先ほどから変わらない笑みが浮かんでいる。

突如、何の前触れも無く哭士の目の前からレキの姿が消えた。

「！」

視線を素早く巡らせ、レキの姿を探す。工場内の何処にもレキの姿が見当たらない。

辺りを見渡しながら、哭士は全身に緊張を漲らせる。

一瞬、背後で何か素早く動く気配。哭士は身を翻した。

吼え声が上がったのはまさに一瞬の出来事だった。

哭士が振り返ったその時には、うつ伏せに倒れこんだユーリ、そして脇にレキがしゃがみこんでいた。

背後から襲い掛かり、後頭部を蹴り上げたらしい。ユーリはその

まま昏倒していた。

もはやレキは何も語らない。その狂気に満ちた目だけが、哭土と友禅の二人を捉えていた。

菊塵、ユーリが倒れ、残された狗鬼は哭土と友禅の二人。気を失って倒れた色扱は先のレキとの交戦中に、蓼原が抱え上げ、工場の隅に移動していた。

蓼原本人は、人の力を遥かに凌ぐ鬼達の戦いに、半ばあっけに取られているような状態だった。無論、戦うことなど不可能だ。

「友禅」

レキに視線を投げたまま、哭土は兄に呼びかける。

今も辛そうに呼吸を繰り返している友禅は、哭土に顔を向けた。

「動けるか」

哭土の問いに、友禅は首を縦に振る。

「取那と男を連れて、山を下れ」

圧倒的なレキの強さに、哭土も半ば圧倒されている。一般人である蓼原を巻き込むわけにはいかない。今動ける人間だけでも、この争いから遠ざけておきたかった。

友禅は目を見開く。

「何を言うのです」

「奴が仕掛けてくる。時間が無い」

友禅の言葉を遮り、急げ、と哭土は顎で階上にいる取那を指す。

「……………」

哭土の気迫に、友禅は一つ頷いた。

「行け」

短い言葉と同時に、二人の狗鬼は散った。友禅は二階部分に飛び上がる。

「勝てぬと分かって、今度は逃げよう？ 猪口才な」

レキが友禅に向かって飛ぼうと、身を屈める。だが、その背中に哭士が回りこむ。

だが、レキはその気配をも察知し、振り返りざまに哭士の横面に肘を叩き込む。大きく頭を振られた哭士は、ほんの一瞬平衡感覚を失う。その隙をレキが逃すはずも無い。

体重が掛かっている哭士の右足を払い、強かに地面へ身体を叩きつける。起き上がるうとした瞬間、哭士の左足から鈍い音が響き、脳に向かつて壮絶な痛みが駆け巡った。

「思わず声を張り上げる哭士。」

「哭士！」

友禅が振り返り、哭士の名を叫ぶ。唸り声を上げながら、苦痛の表情で左足を抱え、レキを睨み上げた。

先ほどから変わらない笑みを浮かべているレキが、哭士の大腿骨を躊躇無くへし折ったのだ。今まで何度か狗鬼相手に戦ってきた哭士だが、動けなくなるほどの痛手を負う事は殆ど無かった。絶え間なく遅い来る怪我の痛みに、哭士の額から脂汗が流れ落ちる。

「脆い」

レキの呟く声が、哭士の耳に届いた。

「貴方たちが、私を斃すことは不可能です。もう、全てを終わりにしましょう」

レキの拳がゆっくりと掲げられた。哭士は身をかかわそうと身体に力をこめるが、折られた足に感覚は無く、持ち上げた体に付いて引きずられているような形となった。

目ではレキの動きが追えているのにも拘らず、哭士の体は動かな

い。レキの攻撃に備え、強く奥歯をかみ締めた、その瞬間だった。

バシリ、と何かを受け止める音。

友禅が、哭土の前に立ちはだかり、レキの拳を受け止めていた。

「先も存分に痛めつけて差し上げたというのに。まだ足りないのですか？」

レキが哭土達の前に姿を現すそれ以前に、友禅とレキが争っていた事は明らかだ。レキの言葉には答えない。荒い呼吸だけが、その空間に響き渡っていた。

「……」

友禅の身体は近くで見ると、激しく損傷していた。今のレキの攻撃が防げたことが不思議なくらいである。

「哭土……。私には、誰かを見捨てて逃げるようなことは出来ません」

レキと向き合いながら、友禅は言い放つ。その言葉に、顔をゆがめる一人の男。

「……良いでしょう、ならばまとめて始末をするまで」

レキはその場に高く飛び上がった。



その瞬間の出来事を、哭士は捉えられずにいた。目の前に立っていた友禅の姿が一瞬にして消えた。

同時に、響き渡る轟音に振り返ると、コンクリートが放射線状にひび割れ、その中心に友禅が沈んでいた。

「が……っ！」

苦しげな表情に、起き上がる力は残っていない。レキを逃さんと伸ばした腕は、そのまま静かに地面へと落ちる。

「……！」

認めざるを得ない、圧倒的な力の差。本気を出したレキにとつてみれば、ここに居る狗鬼らを仕留めるのは、赤子の手をひねるよりも容易いことなのだろう。

「……お前は、一体」

狗鬼の力は血筋で決まる。それは哭士も理解していた。力の強い狗鬼が生まれる家、早池峰家。それも、幼い頃から聞かされてきた。そんな早池峰の名を持つ狗鬼すら凌駕する、目の前の男。

「先に、申し上げたはずです。私は本家の使用人、と」

折れた足に手を置き、哭士は無言でレキを見つめた。

「……このお答えでは、満足できないようでは？」

レキは、動かなくなつた友禅をそのままに、哭士の目の前につかつかと歩み寄つた。

「私は【神】の力を与えられたもの。そして、あなた方狗鬼の『原点』です」

言葉と同時にレキが消える。

「……！」

次にレキが現れたときには、長身の哭士の体がいとも簡単に吹き飛んでいた。

折れた足で体の自由が利かない。だが、哭士の視線の先に捉えた、一人の人物の姿が在った。

色把！

このままでは、倒れこんでいる色把と衝突する。

咄嗟に哭士は体を捻り、色把に手を伸ばした。着地の瞬間、哭士は強かに体を地に打ちつける。強い衝撃は、哭士の体を一度跳ね上げさせた。

地面を転がり、ようやく身体が止まる。ズキズキと痛む体。首を擡もたげ、腕の中の色把を見やる。気を失っていた色把であったが、哭士が叩きつけられる直前に抱きとめたことで、怪我を負わずに済んだようだ。

「他人を庇っている場合ではないと思います」

瞬間、レキが現れる。もはや息もつかせずに一気に仕留めるつもりのようなのだ。

自身の胸に収まる体温。哭士は向かってくるレキの拳から色把をかばうように背中を向ける。

同時に襲い来る重い一撃。

瓦礫が溜まっている場所へと、哭士の身体は叩きつけられた。

「！！」

瞬間、背中から胸へ、重い一撃が貫き、息が詰まる。

突如起きた出来事に、哭士の思考と呼吸が停止した。

哭士の視界で捉えているのは、抱きとめている色把の頭。

そして、自らの胸から突き出している赤黒い、鉄屑。

痛みなど、感じる余裕など無かった。体がひくひくと痙攣する。生ぬるい感触が、胸から腕、足を伝ってくる。胸元はすでに真紅に染まっている。

言葉を発しようとした口からは、大量の赤い液体が溢れ出た。ぱた、ぱた、と血の落ちる音。色把の衣服が赤く染まっていく。「……心臓を貫かれても、まだ生きているとは……。流石に、早池峰の血を持つ狗鬼は違う」

感心したようなレキの声が聞こえる。目は霞み、もはやレキの姿は捉えられない。

何とか支えていた頭が、重い。目は虚ろに、呼吸は浅くなっている。

スベテヲ オワリニシマシヨウ

もはや、声も音としか捉えなくなった哭土の意識。だが、僅かな抵抗か、色把を抱きとめている腕に僅かに力が入る。色把が纏っている衣服が、小さく音を上げた。

空気を切り裂く銃声が響き渡ったのは、ほぼ同時のことであった。

疲労しているわけではない。極度の緊張で、呼吸は荒く、乱れていた。

この瞬間、蓼原の鼓膜を震わせているのは自身の吸い込む息、吐き出す息だけだった。

恐怖と緊張の入り混じった感情を抱く事は、刑事になっても殆ど無いことであった。

菊塵の胸元から転がり出た拳銃。蓼原はそれを拾い上げ、安全装置を解除していた。

身を挺してまで色把を守るうとする哭土の姿に、蓼原の拳銃を握る手がレキに向けられたのは無意識だった。

ただの人間が介入したところで、この最悪な状況が一変するとは到底思えない。引き金を絞ったのは、勢いといしか言いようが無かった。

蓼原の放った銃弾は、レキの左肩を貫いていた。

「さつさと逃げ出していれば良いものを」

肩口から溢れ出す血を、一切気に止めること無く、レキは蓼原に向き直った。

「そのような玩具で、私を止められるとでも？ 額でも打ち抜いてみますか？ もしかしたら、この化け物を殺すことが出来るかもしれませんよ」

レキの目からは、哭土のような凶暴さも、荒々しさも感じない。だが、優しげに見えるその眼差しの奥には、得体の知れない狂気が渦巻いている。

殺さなければ、ここに居る全ての人間が殺される、本能的に蓼原はそれを感じ取った。

何度も何度も行っていた、狙撃訓練を思い出す。

レキの眉間に照準が合わさる。

生身の人間の眉間に向けて発砲するなど、当然ながら今までに無いことだった。

蓼原の動揺を察しているのか、銃口が向けられているレキは、黙って蓼原の様子を見つめている。その目は、撃てるはずが無い、と高をくくっているようだった。

意を決し、蓼原は人差し指に力をこめた。

「……！」

引き金を絞りきることが出来ず、僅かに視線を逸らす。動揺が、レキに伝わってしまう。

フン、とレキが鼻で笑う。

「撃てませんか？ こうするのですよ」

次の瞬間には、レキは銃口の目の前に顔を寄せていた。蓼原が反応できるわけが無い。

がばりと、レキは蓼原の手ごと拳銃を掴み取り、迷いも無く、銃口が自らに向けられた引き金を引いた。

驚愕のあまり、大きく息を吸い込む蓼原。

次の瞬間、発砲の反動が身体に返ってくる。

銃弾は、レキの眉間から僅かにずれて、左頬に当たっている。左頬に開いた黒い穴からは、絶え間なく赤い血が流れ出る。だが、レキはその場に崩れることも無く、淡々と蓼原を見下ろしていた。

「……」

「声も出ませんか」

レキが言葉を発すると、頬の傷口から更に液体が流れ出す。まるで痛みなどを感じていないかのようだった。通常の間人であれば即死しているはずだ。

目を見開いている蓼原を見、レキは緩やかな笑みを浮かべた。

「まあ、良いでしょう、貴方は部外者だ。もう二度とこちらの世界に足を踏み入れませぬように。さもなければ、『彼』と同じ道を歩む羽目になりますよ」

数メートル離れた場所で倒れこんでいる苑司を指し、レキは不適に笑む。

蓼原の身体は、目の前の男の眼力で、指一つ動かさなくなっていた。

そんな蓼原の様子を尻目に、レキはくるりと踵を返した。

「では、取那と、予備の籠女は、頂いていきます」

まっすぐに足を向けた先は、色把を抱きとめたまま、意識を失っている哭土だった。哭土の腕に向かってレキの腕が伸びる。

「！！」

その瞬間、鋭い音と同時に、レキに向かって、氷の槍が地面を伝って襲い掛かった。

身を翻して、その氷の槍をやり過ぎたものの、白い氷の粒と共に、赤い液体も宙に爆ぜた。表情には僅かに驚いた様子が伺える。

「……意識は、とうの昔に失っているというのに」

哭土は鉄屑で背中を貫かれ、大きく首を落としたままだ。意識を

失つてもなお、レキの手から色把を守ろうと、無意識か、はたまた執念か、自身の力をレキに向かって発動させたらしい。

暫く哭土を見つめていたが、面白げに肩を震わせ静かに笑うと、レキは呟くように言い放つ。

「……それほど欲しいのであれば、片割れは差し上げましょう」  
レキは身を翻す。一度ぐるりと建物内を見渡したかと思えば、軽く二階部分に飛び上がる。そのまま気絶している取那を抱え上げ、夜の闇へと一瞬にして消えた。

蓼原はその様子を、ただ啞然と見つめていることしか出来なかった。

その場に立ち尽くしているのは、蓼原一人。皆、地に倒れ付し、動くことが出来るものは居なかった。

完璧なる、敗北だった。



## 第二部のあらすじ 登場人物（前書き）

第二部のあらすじと、登場した人物の簡単な紹介です。

第二部を読んでいない方にはネタバレになりますのでご注意ください。  
い。

不要の方は、次話にお進み下さい。

## 第二部のあらすじ 登場人物

【第二部のあらすじ】

平凡な高校生、佐々乃 苑司は父親の転勤を機会に、一人暮らしを始める事になる。一人向かう先は父の知り合いが代表を務める企業のビル。苑司は父の知り合いから手配をもらったアパートで生活する事になっていた。だが、向かった先のビルで苑司に告げられたのは、父の知り合いが行方不明になっており、生活する為の手配も出来ないと言うものだった。持っていた荷物は不注意で盗まれ、明日の生活すら危うい状態に追い詰められてしまう。

苑司は悩んだ末に唯一手元に残っていた、父の知り合いに預けられた荷物を開けることにする。だが、手荷物の中には薬瓶が一つ。苑司の最悪な状況を一掃するような物は入っていなかった。

だが突如、一般人に襲い掛かるはずの無い影鬼が、苑司に向かって飛び掛る。恐怖で身体が竦み動けない苑司を、色把が引き連れてきた哭士に救われる。手荷物を開けてしまったことで、特殊な薬品を浴び影鬼を寄せる体質になってしまった苑司は、哭士の家で居候をすることになったのだった。

一方、色把を救い出し、本家を抜け出した哭士の心中は迷走していた。色把を護りたいと強く思う反面、自身の寿命があと僅かしか残されていないという現実の間で、今までに無いほど哭士の心中は揺れ動いていた。そして哭士が出した答えは、命が尽きる自分が色把を護るのではなく、色把を家から出させ、他の狗鬼に護らせるというものだった。その答えに納得の出来ない色把と哭士の間に、目に見えぬ溝が広がっていく。

ある日、菊塵は色把を墓地へと連れ出す。色把の目の前に立つ墓標は、無くなつた色把の祖母のものだった。祖母の墓標の前に一人の人物が現れる。哭士、菊塵が属する革新派の頭取、桐生 彩子だっ

た。

彩子は色把を早池峰家ではなく、革新派にてその身を保護すると言う。対する保守派が守っている、狗鬼や籠女を生み出した【神】が間もなく寿命を迎え、その命を繋ぐ為に色把の身体が必要であるためだと言うのだ。言葉を失う色把に、彩子は使いを寄越すと語り、その場を去った。

入れ替わりにやってきたのは、彩子の夫である町医者 桐生だった。桐生は菊塵に、かつての菊塵の所属していた組織ガバメンタル ドツグ（通称GD）が妙な動きを見せ始めたことを告げる。

菊塵の前に一人の男が現れる。菊塵の育ての親であり、かつての所属先の上司でもある曾根越 久弥だった。GDを率いる久弥は、本家に布告すると菊塵に言い放ち、GDに戻るように命じるのだった。拒む菊塵を、力ずくでも連れ戻そうとする久弥。戦いの中、久弥が一人の女の名を口にする。かつて菊塵の心に唯一安息を与えられる事のできた人物だった。

柳瀬 フユ。交際関係にあった二人であったが、ある日の夜、一瞬にしてささやかな幸せが崩れ去る。自身が狗鬼であることを隠していたフユは狗石で何者かに操られ、菊塵の命を奪おうとする。フユは咄嗟に菊塵の狗石を使い、全ての攻撃を自身の身体に受けたのだった。フユは昏睡状態に陥り、今も病院で眠っている。

「狗石を使ったのは俺だ」久弥は菊塵に事もなげに言い放つ。フユの未来を奪った久弥に、菊塵は激昂し久弥に無駄な攻撃を仕掛け続ける。だが、菊塵は油断した久弥の能力を逆手に取り、捻じ伏せるのだった。久弥は菊塵を連れ戻す事を諦めたわけではないらしい。不敵な笑みを浮かべながら、久弥はその場を立ち去った。

過去にもみ消しされた事件を一人追い続ける刑事、蓼原。その事件

とは、男女二人が部屋中に突き立てられた鉄パイプにより重傷を負ったというものだった。菊塵と狗石により操られたフユが争った事によるものなのだが、一介の刑事である蓼原には知る由も無い。菊塵の周囲を捜査し、蓼原は早池峰家にたどり着いた。

早池峰家の周囲を探っていると、屋敷から出てくる二人の男女。色把と思しき少女と、居候をしている苑司の姿だった。違和を感じた蓼原は、二人の追尾を開始する。

向かう先は人気の無い山奥。そこで蓼原は、苑司が色把ではない別の人物に連れ去られたのだということを知り、他人に姿を変えることの出来る狗鬼の能力を目撃してしまう。口封じに命を絶たれそうになった所を、命辛々逃げ出し早池峰家に舞い戻った。久弥との戦闘を追え、早池峰家へと戻ってきた菊塵と顔を合わせ、蓼原は、菊塵に狗鬼とは何かを問うのだった。

ほぼ同時刻、早池峰家に一人の狗鬼が侵入し、哭士の狗石を狙っていた。哭士は苑司が普段と様子が違うことに気付き追い詰める。苑司の姿は一瞬にして小さな少女の姿に変わる。他人の姿に成り代われる能力を持つ狗鬼だった。苑司を連れ去ったのは色把と同じ姿をした少女で、名を取那という。その取那と行動を共にしていた狗鬼シイナが、ぼつぼつと現状を語る。事の始終を理解した蓼原の説明も加わり、連れ去られた苑司を奪還すべく、哭士達は山奥の工場跡地へと向かう。哭士達が屋敷を発ったその後、色把が哭士の危険を感じ取る。色把は、蓼原と共に、哭士達が向かう工場跡を目指した。

目が覚めた苑司は、目の前に色把と同じ姿をした少女がいることに気づく。少女は取那と名乗り、色把を恨んでいることを語る。突如、二人の前に、巨大な影鬼が現れる。苑司の身体に付着した薬品におびき寄せられたのだ。身動きの取れない苑司に影鬼が襲い掛かる。すんでの所で、哭士、菊塵、ユーリの三人が追いつき、影鬼を仕留める。だが、油断をした際にユーリへと牙をむく影鬼。苑司は身を

挺してユーリを守り瀕死の状態へ。追いついた色把が血を与え治癒を試みるも、怪我が大きすぎる為に治癒が間に合わない。焦ったユーリが自分の血を苑司に与えると、苑司の傷が塞がっていくのだった。

突如、屋根から落下してきた大きな物体。ボロボロになった哭士の兄、友禅だった。その姿をあざ笑うかのように、見知らぬ男女が姿を現す。取那はその男女に捕らえられていた。男は哭士に対し、自分は本家で出会った使用人、レキであることを明かす。レキは、傍らに立っていた女を哭士達にけしか嚇ける。

糸を操る狗鬼、絡音の術中に嵌り、身体を自由を奪われてしまった哭士達は、籠女と狗鬼の血が体内に混入したことで狗鬼として目覚めた苑司の暴走によって、窮地を脱する。

不要物として、絡音を迷いも無く始末し、次々と菊塵、ユーリ、友禅を手にかけてゆくレキ。次元の違う強さに、手も足も出せないまま、追い詰められてゆく哭士。哭士は色把を守り、吹き飛ばされた先で、瓦礫に胸を貫かれる。

意識が遠ざかりゆき、取那が連れ去られていく。

残された蓼原に、これ以上関わらないようにとだけ告げ、その場を去るレキ。

完全なる敗北だった。

### 【登場人物紹介】

ささの  
佐々乃  
えんじ  
苑司

父親の海外への単身赴任をきっかけに一人暮らしを始めるはずだったが、とある事から早池峰家へ居候することに。十七歳で高校二年生であるが、小柄で幼い顔立ちをしている為か、実年齢に見られることはまず無い。臆病で強くものを言えない性格。

結城 啓二

苑司の父親の知り合い。苑司が一人暮らしを始める際、様々な手配をしてもらえるはずだったが、哭土が色把をビルから奪還する際に、保守派に捕らえられ、実質上行方不明となっている。(「1 1・真夜中の侵入者」にて部屋の真ん中で立ち尽くしていた男)

桐生 彩子

哭土・菊塵らが属する派閥「革新派」の最高幹部。凜とした冷たい表情の女性であり、町医者 of 桐生の妻。

ここで町医者の桐生の名前が祥吾であることが明かされる。

蓼原 圭輔

一人、四年前に起きた事件を追う刑事。事件の被害者である、曾根越 菊塵と、柳瀬 フユを調べている。柳瀬 フユとは従兄弟の關係。かなりのヘビースモーカーで、考え事をする際には常に煙草を燻らせている。

柳瀬 フユ

鉄が含まれているものを自在に操ることの出来る狗鬼。曾根越 菊塵に好意を寄せ、自身が狗鬼であることを隠して交際していた。ある日、自分の狗石を何者かに奪われ、菊塵を殺すように命令される

が、菊塵を守る為に自身を犠牲にした。その結果、現在は病院で眠り続けている。

柳瀬 やなせ アキ

柳瀬 フユの妹であり、ユーリの籠女。幼い頃から母親の言いなりで芸能活動を行い、現在は歌手として活動している。あまり表情を外に出すことは無い。菊塵を、姉を奪った存在として恨んでいる。

曾根越 そねこえ 久弥 ひさや

政府が飼う隠密部隊、ガバメンタルドッグ（Government a i D o g）の幹部の一人。幼い頃に孤児となった菊塵を引き取り、自身の右腕として育てた。部隊を抜けた菊塵の能力を欲し、今も部隊に戻そうと菊塵を追っている。

取那 とりな

色把と同じ姿を持つ少女。色把に対する憎しみが非常に大きい。

絡音 らくおね

糸を操る狗鬼。彼女もまた、本家に奴隷として使われる弊履の族。レキにより名を与えられ、忠誠を誓っていたが、そのレキによりあつげなく命を絶たれる。

## 第二部のあらすじ 登場人物（後書き）

あらすじ、人物紹介は試験的に投稿しています。  
修正が入ったり、削除する場合がありますので、ご了承ください。  
ます。



## 幕間 神への変異

薄暗い部屋に、一人の人物がうずくまっていた。

類まで掛かる短い黒髪。本家の幼い当主、黒古志くこし 鼎かなえだった。

目は伏せられ、自身の体を抱きしめるようにして、当主の座に座り込んでいた。中庭に面する障子に、一人の人影が映りこむ。

「……鼎様」

当主を守る狗鬼、莉子の声だった。声は弱り、普段の覇気が無い事に気が付いたが、鼎自身、誰とも話をしたくない心境だった。

「下がれ。僕は今一人になりたいんだ」

膝の間に頭を埋める。さらりと、上質な着衣が衣擦れの音を立てる。

屋敷から、早池峰哭士が籠女を連れ去り、逃亡したのが凡そ二週間前。それからというもの、鼎は躰係である大婆より、謹慎するように言いつけられ、許可無く屋敷の外の空気を吸うことも許されていなかった。

幼少の頃から傍に居た躰係の老女に、鼎は逆らえない。名ばかりの当主である事は、自分でも分かっていた。

鼎、自分の事は「私」とおっしゃい！ 何度も言わせるでない！

激しい叱咤が蘇る。その言葉に、身を竦め、何も言えなかった自分が居る。

(当主は……僕なのに)

薄暗い部屋の中で、考えを巡らせれば巡らせるほど、自分の非力さに腹が立ってくる。

鼎がそのような心境であることを思っても居ない莉子は、更に障

子の外から言葉を続ける。

「でも、鼎様……。恒河沙じやうがしゃが居ないの。二週間も連絡が取れないなんで、今まで無かった事よ」

自分がこんなにも、失意に陥っているというのに、莉子の口から出たのは、自分ではなく、自分が弊履の族から引き抜いた相棒パートナーの名

その時、鼎の中で、今まで押さえ込んでいた抑制の箍たがが外れるのが分かった。

声がる障子を睨みつけ、その場に立ち上がった。

「お前は僕なんかより、あいつの方がいいんだろ！ だからそんな事言っただろう！」

甘やかされて育てられた鼎に、数日間の謹慎は余りにも長すぎた。当主という立場、躰係の手前、思いのままに振舞えない鬱積が、心を許せる立場である莉子に対し、幼い理屈と衝動と共にぶちまけられる。

「鼎……様？」

もちろん、突然の事に、莉子は何故鼎が怒っているのかが理解できない。障子の外からは、うるたえる莉子の声が聞こえてくる。

一直線に障子へ向かい、開け放つ。見開いた莉子の目と目が合う。「何処へでも言ってしまえ！ 二度と僕の前に姿を現すんじゃない！ お前の顔なんか見たくない！」

鼎の言葉が莉子に届いた瞬間。莉子の肩が落ち、一瞬にして目に涙が溢れ出す。

『不要』、莉子が一番恐れている言葉であることを、鼎は良く知っていた。

以前所属していた部署から捨てられ、彷徨っていた所を鼎が拾ったのだ。莉子にとって、一度自分を必要としたものから捨てられる

ことが、何よりの業苦しゅくなのだ。

「止めて！……お願い。わたしにそんなこと言わないで……」

「五月蠅い！」

もう自分でも止められなかった。

「……お前なんか、要らない」

相手が一番傷つく言葉を知っていながら、その言葉を非情に投げつける。

壊れてしまいそうな莉子の表情。鼎は勢いに任せ、障子を閉めた。

「……」

今しがた、自分が言い放った言葉に、我に返る。

だが、もう時はすでに遅い。口に出した言葉は、相手に届いてしまった。障子を挟んだ気配は、どんどん遠ざかっていく。

追いかける事など、出来はしなかった。

その場に鼎は座り込み、声を押し殺して泣いた。

「……まるで、子供の喧嘩だね」

目の前で繰り広げられた諍いに、レキは苦笑をもらした。

「大婆様は何処に」

本家へと舞い戻ったレキは、取那を抱えたまま、近くに立っていた使用人に冷たい口調で問う。

「はっ！ 御世様みよでしたら、地下の牢に」

レキの冷たい視線に捉えられた使用人は、身を強張らせながらレキに返答する。

答えた使用人には見向きもせず、レキは示された地下牢へと足を踏み入れた。

「よう戻ったな、レキ」

レキに掛けられる声。しわがれた老婆の声だった。

「少々時間が掛かりました。申し訳ありません」

レキは老婆に頭を下げる。老婆は、牢の中に視線を向けたまま答える。

「構わぬ。取那さえ手に入れば、後はこちらのもの。『あれ』の仕上がりも十分のようだから。ほぼ予定通りに進んでおる」

老婆は、牢の中で蠢く一つの影を指した。天井から吊るされた鎖に両手首が括られているようだ。意識が無いのか、微動だにしない。

レキは老婆に並ぶと目を眇め、中の者を確認した。

「……随分と、おぞましい姿だ」

「薬が一つ、あちらに渡ってしまった事で、十分な投与が出来なかった。まだ人の姿を留めてはおるが、問題は無かるう。人の意識を保っておられるのも、あと僅かじゃろうて」

口元には笑みが浮かんでいる。

老婆の視線の先の影が、僅かに蠢いた。

手首の痛みで、目が覚めた。およそ二週間前、早池峰 哭土との戦闘を終えた後、気が付いたらこの牢に入れられていた。

拘束され、身動きが取れないのを良いことに、数日に一度、見知らぬ男共が牢屋に入ってくると、自身の腕に、得体の知れない薬品を注入してきた。始めは抵抗を見せ、数人は蹴り飛ばしてやった。だが、男共は、薬品を注入するまでしつこく纏わりつき、結局は腕に注射針が刺される。

その度に、自身の意識は朦朧となり、また目覚める、という事を、ここ十数日間に何度も何度も繰り返しているのだ。

この目覚めは、一体何度目のものだったか、常に朦朧とした状態では、数を把握することも出来なかった。不思議と腹は減らず、目覚めるたびに、異常なほどの喉の渇きが、耐え難い衝動となって自分に襲い掛かってくる。

今回は、目が覚めた時の状況が僅かに異なっていた。

視線の先に、二人の立っている人物が目に入った。一人はやけに小柄で、背中也曲がっている。もう一人はというと、線の細い男。男の方には見覚えがあった。

見るたびに外見の年齢が変わる不気味な男、レキだ。早池峰 哭土と戦ったときも、戦闘に割り込み邪魔をした男である。

今のレキは青年の姿で腕に大きな何かを抱えているが、それが何か、自身の目の前に何か遮るものがあり判別が出来なかった。

「てめえら！ 俺に何しやがったんだ！」

叫んだ後に、ハツとする。覚えのある自分の声とは全く違い、太くくぐもったものになっていた。

「口も裂け、声も獣じみてきているようですね」

牢の外で聞こえる話し声。自分が叫んだ言葉が届いていないかのようにならぬ二人は会話を続ける。

「奴の名は何と言ったかな」

「恒河沙。自分の力量も分からずにあの早池峰 哭士に噛み付いて離れを一つ破壊した愚物ですよ」

自身の名が拳がり顔を上げる。怒りの意識を二人に向けると、意識せずとも喉の奥から唸り声が発せられる。だが、二人の会話は続く。

「ふん、だから嫌なのだ。弊履の族のような卑しい者らを、本家に上がらせるのは」

「それこそ、こうして利用できるのではないですか。万一失敗しても、弊履ならば使い捨てが出来る」

「まあ、それもそうだの。【狗神】が出来上がれば、我らに恐れるものは何もなくなるというものよ」

楽しげに、声を上げて笑う老婆。レキの双眸が、恒河沙に向いた。そのレキの口元もまた、上に持ち上げられた。

「……しかし、神の名を持つ為には、ヒトは獣の姿に成るしかないとは。何とも皮肉なことだ」

(奴は何を言っている?)

レキの言葉に恒河沙は少しずつ自身の置かれている状況を理解し始める。敢えて避けていた認めたくない現実を、容赦なく恒河沙に立ちはだかっている。

先程から自身の視界を遮っているのは、長い長い髪の毛であるということ。

目の前の邪魔な髪の毛を振り払おうと頭を振れば、背中に当たる固まりも、ざわざわと同時に動く。

「……！」

自分の髪の毛が異様な早さで伸びているという事に気が付くのに、さほど時間を要さなかった。牢に入れられる前は短く刈りあげていた髪がものの数週間でここまでになってしまふのは、やはりこの数日間で何度も投与された薬品の為であろう。

足元に視線を落とせば、牢に入れられる前に見につけていたの革のジャケットが目飛び込む。余程の力が加えられたのか、ちぎれて無惨な形になっている。

「クソが……！」

恒河沙は、腕に食い込む鎖の痛みから逃れようと、身をよじる。

目覚める度に増大していく違和感。手首に嵌められた鎖は、回を増すごとにきつく締め上げられている。

顔をあげ、自身の腕を捉えたとき、恒河沙の心臓が大きく波打った。

（何だ、これは！）

見慣れた自分の腕ではなかった。太く筋張り、今までの腕の数倍の太さがある。そして太く短くなった指先には鋭い鉤爪が光っていた。

千切れていた自分の衣服は、強い力が掛けられたからではなく、自身の身体の変化によって、破られたものであったのだ。

手を握り締めれば、その醜い手も同じように動き、そして、早池峰哭士からの攻撃で負傷した部分が、引き攣れている。自分の腕である事は、目を逸らしようのない現実なのだ。

口も裂け、声も獣じみているようですね。  
神の名を持つ為には、ヒトは獣の姿に成るしかないとは。

先に聞いたレキの言葉が蘇る。

(まさか まさかまさか！)

心音が高鳴る。今までに何度か見たことがある奇形の狗鬼。口が裂け、目は爛爛と光り、この世のものとは思えぬおぞましい姿……。自分もその姿に近づいているというのだろうか。

「う………おおおおお！」

恐怖の余り叫んだ声は獣の咆哮に。大きく開いた口から覗く犬歯は、すでにヒトのものではなく、獣の牙となっていた。



### 3 1 敗北の後で

「!」

突如、意識が蘇ってきた。瞬間的に、自分が意識を失う前の出来事を思い出す。

一人の男の手により次々に倒れる狗鬼達、笑みを滾らす男。がばりと起き上がり、瞬時に体中に警戒をみなぎらせる。

そこは、静寂に包まれた、白い空間だった。薄い水色の病院着を着せられ、哭士は白い部屋の一室のベッドの上に寝ていたようだ。

咄嗟に胸に手を当てる。確かにあの時、自分は色把をかばい、弾き飛ばされた先で、鉄屑が胸を貫いたはずだ。

何度も胸を弄るが、痛みは無くなっていた。

身を包んでいた薄水色の病院着の襟に指を差し入れ、傷を確認するも、うつすらとした傷跡が残っているのみで、もう直りかけているようだった。

「……」

一つ大きな息を吐き出して、辺りを見渡す。部屋の中央に自分がいま居るベッドが一つ。右の傍らには小さなテーブル。その上にはミネラルウォーターの入ったペットボトルと、見慣れた自身の服が畳んで置いてある。

水に手を伸ばそうとして、ふと自分の左腕に、何かが引っかかるような妙な感覚を感じる。

左の腕からは管が伸び、左わきに立てかけてある点滴の袋へとつながっていた。

哭士は乱暴に左腕の管をむしり取り、立ち上がる。

「くっ……」

一瞬、ぐらりと地面が揺れるような錯覚を感じた。折られた足が、まだ完治していないようだ。

病院着を無造作に脱ぎ捨て、用意されていた自分の服に着替える。誰も部屋に入ってくる気配が無い。

まだ傷む左足を引きずりながら、哭士は病室の扉を開いた。

「よお、やっと目え覚ましたみたいだな」

哭士の病室の前には、金髪の細身の人物が一人。ユーリだった。

「ここは、どこだ」

病室の外に広がる廊下も、なお白かった。消毒液の匂いがつんと鼻を刺す。病院のようだが、桐生の診療所とは規模が違う。廊下に立つユーリと哭士以外に人はおらず、しんと静まり返っている。

「ココは、桐生の奥さんが管理している国立病院。ほんで、この病棟は狗鬼専用のフロアで、今は俺達しか居ない。お前、一時は呼吸器までつけて五日も眠っていたんだぞ。もう、いいのか？」

「ああ」

短く答える哭士に、ユーリは頷く。ユーリも病院着ではなく、通常の衣服を身に纏っていたが、襟元から見える包帯、そして僅かな動作にも体をかばう姿が痛々しい。

建物の内装からして、かなり大きな病院と思われた。ユーリが口にした病院の名前も、哭士には聞き覚えがあった。菊塵の交際相手が今も眠っている病院だと気づく。

「俺達は、何故ここに」

工場跡地からは、相当の距離がある。哭士の記憶では、自由に動

ける状態だったのは、蓼原しか居ない。

蓼原一人で、あの場に居た人間を病院に搬送できたとは到底思えない。

「キクの野郎だよ」

ユーリは、苦笑を浮かべて、口を開いた。

「俺らがあの廃工場に突入するって事が決まった時点で、桐生と連絡取ってやがったんだ」

攫われた苑司を追う為に、早池峰家を出発した直後の事を言っているのだろう。哭土は、色把が廃工場へ来ないようと釘を刺しに行き、菊塵と僅かに離れた時間があった。

「その後は常に桐生と通話状態。あの日の出来事は全部桐生に伝わってたんだってよ。ま、途中でキクの携帯は、あの戦いでぶっ壊れちまったらしいけどな」

恐らく、桐生は菊塵からの要請で廃工場に集まった全員を搬送できる用意をしていたのだろう。そして、通話が切れた時点で菊塵から予め伝えられていた場所と、携帯電話の位置情報を元に、現場に駆けつけた、という寸法だ。

数年来の付き合いである哭土は、さほど菊塵の取っていた準備に驚く様子も無く、そうか、と一言ユーリに言い放ったのみだった。

「それから、色把に礼言っつけ。お前が目覚めますまで、ずっと付きつきりだったんだ」

病室に畳んでいた服も、水の入ったペットボトルも、恐らく色把が置いたのだろう。ユーリの言葉で、最後に色把を抱きしめた感覚が、腕に蘇ってきた。ぐったりと自分に寄りかかっていた色把。操られていたとはいえ、この手である細い首を締め上げ、命を奪いかけた。哭土の視線は、ユーリの足元付近をさまよう。

一瞬の沈黙。

「……俺ら、負けたんだな」

「ああ」

相槌と同時に、あの日の出来事がじわじわと哭士の記憶に浸入してくる。巨大な影鬼との戦闘、絡音とレキの登場、そして、敗北。哭士の心中には苦いものが広がる。

「苑司……、アイツが居なきゃ、どうなってたことか……今は、本当に狗鬼になっちまったのか、検査を受けてる」

ユーリは哭士から視線を逸らし、一瞬憂いの表情を浮かべる。

「桐生にも言われたよ。籠女と狗鬼の血が混ざって人に入ると、やっぱ、その人間は狗鬼になるんだってよ……。俺、知らなかった。アイツを人じゃなくしてしまっただかもいけない……」

ユーリは下唇をかみ締める。知らなかったとはいえ、一般人である苑司を狗鬼にしてしまったかもしれない事、争いに巻き込んでしまったことに、少なからず責任を感じているらしい。

「……どのみち、苑司がああならなければ俺達は助からなかった」

絡音の糸に絡め取られ、哭士たちにはなす術が無かった。そこへ、狗鬼として目覚めた苑司の力が暴走し、絡音の糸から哭士らは解放されたのだ。あの出来事が無ければ、色把の命をこの手で奪い、その後はまさに蜘蛛の糸に掛かった獲物同然に、仕留められていたに違いなかった。

「そう……か」

「そうだ」

ユーリの目に力は無い。正直、圧倒的な力で、完膚なきまでに打ちのめされた事で、哭士も今は如何すればよいのか見当がつかない。ユーリの表情も、抱いている感情も、哭士には手に取るように分かった。

哭士の言葉に、ユーリは数回力なく頷いた。

「そつだ、午後になつたら、お前の兄貴の病室に集まれつて。話が  
あるらしい」

その場を離れようとする哭士の背に、ユーリの言葉が降りかかる。  
「分かつた」

哭士は了承の意思を伝え、廊下を曲がつた。

窓から見える景色から、かなり高い位置に居ることがわかる。ふ  
と、廊下の先に二人の人物が立っていることに気づいた。

### 3 2 ・右手が語る真実

哭士の目が捉えた人物は、菊塵と蓼原だった。

「哭士、もう起きても良いのか」

哭士の姿に気づいた菊塵が、声をかける。哭士は菊塵の言葉に一度頷いた。

ふと、二人が一つの病室のプレートを見つめていたことに気づいた。

病室のプレートには『柳瀬 フユ』の文字。

「俺から、フユの家族に話をしたんだ。フユは菊塵こくじんの所為でこうなつたわけじゃないってな」

にわかには信じてもらえなかったらしい。だが、蓼原が既に狗鬼と籠女のことについて知っているということ。そして、蓼原がある事実を述べたことにより、菊塵の容疑は晴らされたという。

「ある事実？」

哭士が問う。その言葉に、蓼原は静かに頷いた。

「彼女の右手だ」

そう言って、蓼原は病室の扉をゆっくりと開く。

菊塵から唾を飲み込む音が僅かに届く。平静を装ってはいるが、数年ぶりの交際相手との面会には、流石の菊塵も緊張を覚えるらしい。

「……………」

扉が開ききると、菊塵は静かに病室へ足を踏み入れた。

等間隔で心音を告げる電子音が鳴っている。そして、小さな呼吸の音。

「フユ……………」

室内はさほど広くは無い。部屋の中心にベッドが一つ。ベッドに

寝かされている人物が、ドアに足を向ける状態で配置されている。部屋の中に窓は一つ。カーテンは締め切られ、部屋の中は薄暗い。哭士が部屋の中を見渡している間に、菊塵はフユの傍らにたどり着いた。

「あの日から、こうしてずっと眠り続けている」

蓼原が、菊塵に言い放つ。フユの肌は透き通るほど青白い。だが、呼吸器などは無くとも、自力で呼吸をし、小さく胸が上下している。暫くすれば、ゆっくりと瞼を開き、起き上がりそんな錯覚を覚える。

「曾根越……」

静かにフユを見つめている菊塵に、蓼原は神妙な面持ちで声をかける。

蓼原の様子に、菊塵はふい、と顔を上げる。

「……よく眠る方でしたから……。いずれ、何事も無かったように目を覚ましますよ」

菊塵の浮かべている表情は、普段よりも僅かに和らいでいるようだった。

視線をフユに戻す菊塵。菊塵の視線の先には、しっかりと握られているフユの右手があった。

「約束も、守ってくれているようですし……」

一つ頷くと、菊塵は病室の入り口へと足を向けた。

「おい、もう、いいのか」

「ええ。顔を見ただけで、十分です」

引きとめようとする蓼原の声を軽くいなし、菊塵は颯爽と病室を後にした。

「数年越しの対面だったのに……」

首をかしげながら、蓼原は頭を掻いた。

「あの右手」

哭士が蓼原を見、呟く様に口を開く。

「ん？」

「あの右手……。何かを握っているな」

哭士が、フユの握り締められた右手に視線をよこしている。

「菊塵の狗石か」

その言葉に、蓼原は一つ頷いた。

「そーなんだよー」

入り口から、安穩とした声が響き渡る。振り返ると、白衣を羽織った桐生が入り口に立っていた。

「……」

背後に立たれていた筈なのに、気配を感じることが無かった事に、哭士は僅かに驚いた表情を見せる。

「彼女の右手ね、こじ開けようとしても、頑なに閉ざされたままでねえ。弛緩剤を打つても、右手だけはがちり握って離さないの」

ニコニコとしながら、桐生はゆっくりとフユの病室に入り込んできた。

「それで、どうしても気になったからレントゲンを取ってみたんだよねえ」

ふい、と哭士の顔を見、桐生は普段の笑みを絶やさない。

「そしたらビックリ、握っているのは誰かの狗石。今まで誰の狗石か、分からなかったんだよねえ」

「そして先日、俺が、その狗石が誰のものを桐生医師に伝えた。曾根越が自ら話した、あの事件の真相と共に……」

蓼原が、桐生の言葉に続いて口を開く。

「これで、菊塵君が彼女を殺そうとしたという疑いが晴れた。彼女が菊塵君の狗石を持っていた事、そして菊塵君とフユさんの能力を考えると、現場で何が起きたのか容易に想像がつくもの」

どこか楽しげに、桐生は何度か頷く。その様子とは対照的に蓼原



の表情は冴えない。

「……フユの母親は、まだその事実を認められないようだね」

「自分の子が、交際相手の狗石を使って自ら命を絶とうとしたなんて、そんなこと考えたくないだろうからねえ」

桐生は腕を組んで、フユの傍らの機材に手を置く。表示されている数値を確認し、問題なし、と一人呟いた。その後、桐生はゆっくりと顔を持ち上げ、哭士に向き直った。

「ああ、哭士君。君は暫く、無理な行動は起こさないでくれよ。君の心臓、鉄屑が掠めていたんだからね」

病室を出ようとした哭士の背中に掛けられた桐生の言葉。胸の傷跡が疼く。

「君が生きていたのは、奇跡としか言いようが無いんだよ。君が色把さんを抱きとめていたから、色把さんの頬から流れる血が、ちょうど君の胸の傷に入り込んでいたの。そうじゃなかったら、君はここには立っていなかったんだからね」

「……」

哭士は、桐生の言葉に、小さく一度だけ頷く事しか出来なかった。

### 3 3・独り言

自動販売機が並んでいる窓際。スチール製の椅子に菊塵は腰掛けていた。両手に包むようにして持っているのは、先ほど購入したブラックの缶コーヒー。

哭士の気配に気付き、菊塵はゆっくりと振り返る。

「良かったな、傷が塞がって」

「ああ」

菊塵が掛けている椅子から少し離れた場所に、哭士も椅子を引き、腰掛ける。自動販売機の振動音が、二人の間に響き渡る。

窓の外を、数羽の鳥が羽ばたいていく。

暫く無言の時間が過ぎ、やがて、菊塵が小さく息を吸った。

「これは僕の独り言だ。流してくれて構わない」

明るい窓の外を見やり、菊塵は口を開いた。

「……フユが瀕死になったあの夜……。フユは僕に言ったんだ。『私が、守る』ってね」

口調は普段と変わらない。

「始めは、何の事を言っているのか分からなかった。負傷せず残った右目をも、フユは自身の意思で攻撃した」

菊塵の冷静な口調の裏側に、自身を押さえ込もうとしている様子がうかがい知れた。

「僕がその言葉の本当の意味を理解したのは、両目が漸く光を取り戻した頃だったよ。両目が見えなかった事で、僕は殺人未遂の容疑から外された。そして、僕の狗石を彼女は……」

フユは久弥の手から菊塵の狗石を守ろうと、ずっとそれを握り締めていたのだ。そして今も、眠っているフユは、菊塵の狗石を決して手放そうとはしない。

「あの事件の後……僕とフユは、それぞれ別の病院へと搬送された。僕は運よく、桐生彩子様が管轄している病院へ。……フユは、『人間用』の病院へ搬送された」

菊塵の中で、当時の記憶が巡っているのだろう。視線は遠くに向けられている。

「狗鬼というのは、籠女の血を与えられれば、殆ど一瞬に損傷部分を治癒させる。そうでなくとも、並外れて回復力が高い。だが、フユのように大怪我を負い、長時間、籠女の血を摂取できない時間が経った場合」

言葉を切り、菊塵は両の手に包まれている缶を握った。

「通常の人間のように、後遺症が残る。……そして、その生命を維持するためには、莫大な費用も掛かる」

当時の菊塵は、所属していた組織から抜け出そうとしていた身。

驚異的な身体能力を持つ狗鬼の、生命維持費など払っていけない立場ではない。

「……フユの家、柳瀬家でも、フユの医療費を支払っていくことは困難だった」

自身のことを話すことが、菊塵には殆ど無かった。哭土は広げた足に肘を置き、手を組んだ状態で菊塵の言葉に耳を傾けていた。

「身寄りも無い、組織を抜け出そうとおきながら、その組織に頼れるはずもない。僕は、相当窮していたよ」

小さく息を吐き出すと、両手で包み込んでいた缶コーヒートをゆっくりと飲み干した。

「そこに現れたのが、祖父様」

哭土は顔を上げた。自身の祖父が、何故菊塵の目の前に現れたのだろう。

「祖父様は、フユの医療費を全額負担する代わりに、僕に条件を出した。組織に除隊届けを出し、正式に組織から抜け、自分の下で働くこと」

顔を上げた哭土に、菊塵は顔を向けた。普段よりも随分と穏やか

な顔をしているように思えた。

「僕に、それを断る理由なんて無かった」

「……祖父様はフユの命を救った。だから、僕は命に代えても祖父様を守る」

菊塵の声は、真っ直ぐに、哭土の耳へと届いた。

足音が二つ、近づいてくる。

菊塵はそのうちの一つの足音に反応を見せた。

「祖父様だ。色把さんも居る」

菊塵はスチールの椅子から立ち上がり、足音の方向に体を向けた。

「ここに居ったか」

哭土と菊塵の姿を見とめ、修造は僅かに安心した様子を見せた。

その後ろから、色把が現れる。頬には大きなガーゼが当てられていた。

色把の姿を見とめ、哭土は視線を逸らす。自身の手で一度命を落とすようになった色把を、哭土は直視できなかった。

「皆は、どうしておる」

そんな哭土の様子を知ってか知らずか、修造は菊塵に問う。

「友禅様から、皆にお伝えすることがあるようです。それまでは、それぞれ院内で休息を取っています」

菊塵が修造に伝えると、修造は一つ大きく頷いた。だが、その菊塵の言葉に意外な反応を見せたのは色把だった。

「友禅様が？」

色把の耳には届いていなかったらしい。

「聞いていないのか」

『……はい』

困ったような表情を浮かべ、色把は頷いた。

『本日、病院に来たのも偶然なんです。祖父様が病院に向かわれるというので、私も一緒に……』

妙だ。目が覚めた哭士にすら、すぐに伝えられた出来事である。

あれほど周知されている事であれば、数日前から病院を出入りしていた色把の耳には、確実に届いているはずである。

『一体、どんなお話なのでしょう……』

色把の困惑の様子は続いている。

「とにかく、午後だ。今ここで考えても仕方が無いだろう」

哭士の言葉に、色把が小さく頷いた。

### 3 4・友禅の過去

「友禅……」

病室のベッドに体を横たえている友禅の姿に、修造は静かに歩み寄った。

「祖父様……」

二人にしてみれば、十数年ぶりの再会であろう。修造の表情は悲哀に満ちていた。

体を起こそうとして、友禅は顔を苦痛にゆがませた。

「……申し訳ありません……。まだ、自由に動ける状態ではないもので」

言葉のみならず、心から申し訳なさそうな表情を浮かべ、友禅は、修造を始め病室内に集まった者達の顔を見つめた。

あの日から五日経った今も、友禅の体中には痛々しい傷が残っている。

「……」

哭土は、友禅の手の甲に残る傷跡を見て、違和感を覚える。

本家に召し上げられるほどの強い力を持った狗鬼であるはずの友禅。ならば狗鬼が持つ治癒能力も準じて高いはずである。哭土の体に残る傷も、殆ど消えているのにも関わらず、友禅の体に残っている傷は、五日前の満身創痍の状態から殆ど変わっていないように思えた。

哭土の視線には気付かなかっただらしい。友禅は、ゆっくりと口を開いた。

「皆様が集まっていたいたのは他でもありません。お話ししなければならぬことがあるからです」

友禅の目の奥に、憂いとも思える影が僅かによぎる。

菊塵が、友禅の言葉に頷いた。

「貴方が本家から姿を消してから五年……。一体、何が起こったのかを、教えていただけられるのですね」

ゆっくりと両目を瞑り、肯定の意思を表す友禅。本家から姿を消して五年、肉親である祖父にも連絡を取らず、姿を隠していた理由は何だったのだろうか。

そして、取那、シイナと行動を共にしていた理由も、友禅の口から明かされるのであろう。

視線が僅かに揺らぎ、友禅は小さく息を吸い込んだ。

「私は、大罪を犯しました」

友禅が静かに口にしたその言葉に、全員が息を呑んだ。

「本来ならば、祖父様……。貴方の前にも姿を見せられる立場ではなかったのです。本当は、このまま誰にも姿を見せずに消えるつもりで居ました。ですが、こうなってしまう以上、皆様には私が見た全てをお伝えしなければなりません。今からお伝えする話はやがて、重要な役割をもって来るはずですよ」

次に開かれたその目は、哭土の前に立っていた色把を映した。

「……色把さん」

色把を見る友禅の目は、何処か悲しげであった。そして逡巡する様子を見せ、色把に言い放つ。

「出来れば貴女には、席を外して頂きたいのです」

友禅の言葉に、色把は弾かれたように顔を見返した。思いも寄らない言葉だったのだろう。両目は大きく見開かれている。

色把に、友禅の呼び出しが掛かっているのには、やはり理由が在ったらしい。

反射的に色把は首を振る。

「彼女……取那の、事でしよう？」

色把の目はしっかりと友禅を捉えている。その様子に、友禅の表情が強張った。

「きつと、私が思い出せない過去に、取那が私を憎む事になった出来事がある……。違いますか？」

色把の言葉が綴られていくうち、友禅のこわばった表情は、悲しげな表情へと移り変わる。

「お察しの通りです。貴女にとっては、本当に辛いお話になります。友禅の言葉に、色把は目を細めた。友禅の口から、どのような出来事が語られるのか、その場にいる者達には、予想が付かなかった。『どんなことがあったのか、私には想像が付きません。でも、知らなければ……。私は、失われた記憶を取り戻す手がかりになるかもしれないんです……』」

色把の言葉に、友禅は一瞬目を伏せた。

「わかりました」

暫時の間。一つ頷いた友禅は、顔を上げた。

その様子に、色把は小さく息を呑んだ。周囲の者たちは、掛けている椅子に座りなおし、友禅の顔を見つめた。

「……では、五年前の出来事から話さなくてはなりませんね……。私が本家から消えた、五年前……。私が十八の頃の出来事からです。長い、長い、話になります」

そうして、友禅は、ゆっくりと身体をベッドの背もたれに預けると、遠くを見つめ、静かに語り始めた。



### 3 5・暗闇の檻

壮絶な苦しみを味わい、深い暗闇がその身を包んでいた。冷たい部屋に横たわる体。

目覚めた時には全てを失っていた。戻るべき家も、立場も、子孫を残す術さえも。

早池峰 友禅、十八歳の春のこと。

意識が半濁としている。じめじめとした、だが冷たい空気を肌が感じ取り、鼻には腐ったような据えた臭いが常に突き刺さる。身体の上を、細長い何かが這って行く。自分の身を包んでいる着衣も、じつとりと湿り、不快以外の何ものでもない。下腹部を鈍くも重い痛みが蝕み、体中が熱を孕んでいる。

じわりと戻ってくる五感で感じる苦痛は徐々に身体にしみ込んでくる。

指を一本、動かす事すら辛い。重い身体を持ち上げる事ができずに、うつ伏せのまま友禅はゆっくりと瞼を持ち上げた。

瞳が、鉄格子を捉えた。自分はその格子の中に横たえられている、という事を理解するのに、暫しの時間を要した。友禅が認識をする限り、ここは座敷牢、だった。

瞳をぐるりと動かし、周囲を探るが、今までに知覚したことの無い暗闇が辺りを包んでいた。闇のせいで鉄格子の外側に通路があるということが判別できたのみだった。自分の周りに何があるのかは

分からない。

重くなってくる臉に従い、そのまま友禪の意識に暗闇が訪れた。

その時だった。

「ようやくお目覚めですか？ 友禪様？」

重い臉を持ち上げると、鉄格子の外から数人の男達が、横たわっている自分をのぞき見ていた。自分に声をかけたのは、顔にまで掛かる長い黒髪と、異様なまでに白い肌を持つ、蛇のような印象を持たせる男だった。

男達は、格子を開けると土足で座敷牢に上がりこんでくる。畳と  
いうのは名ばかりで酷く汚れが詰まり、元の色が分からないほどになつていた。自分の手の平には、ささくれて腐りきっている畳の感  
触が伝わってくる。男達が歩く振動で、床を這っていた数匹の百足  
が部屋の隅に向かい逃げていった。

男の周囲にいる者達は皆、下品な笑いをこちらに向けていた。

「こ……こは？」

やっとの思いで出した声はしわがれていた。

「ここは忌家<sup>いみけ</sup>。貴方がた、正規の狗鬼達は、ここにいる者達の犠牲  
の上に成り立っているのですよ」

「いみ……け？」

初めて聞く言葉であった。

「表向きには『無いもの』とされている場所ですからね。知らない  
のも当然でしょう。ここは本家の地下にある『忌家』。本家にとつ  
て好ましくないものを管理下に置き、隠しておく場所なのですよ」

蛇のような男は、長い髪を右手で掻き上げた。

「なんで、自分がこんな場所に？ ってか？」

蛇の男の傍らに立っていた男は、ヤニに黄ばんだ歯をむき出し、  
自分に向かって生暖かい息を吐き出す。蛇の男は静かに語る。

「貴方はもう、本家から不要物の烙印を押されてしまったのですよ。  
弟の哭士が、貴方の立場を担う事になるでしょう。彼は、今は十二

歳でしたかな。本家に召し上げても、まだ充分適応できる歳ですかなね」

懐かしい弟の名が出、友禅の心中に動揺が生まれる。

「一体……何故」

「まさか、覚えてないわけ無いだろう？ 三日前の事だぜ」

男の言葉に、口を開きかけたが、次の言葉を出す事が出来なかった。

掠れた音が喉の奥から出てくるばかり。瞼が、重くなってきた。

「……」

友禅はそのまま、目を閉じた。

「傷口が膿み、熱病になっているようですね。まあ、男の『象徴』<sup>モ</sup>を失い、粗末な治療しかされていないのですから、弱るのは当然でしょうが。ここで死なれては困ります。籠女の血を与えておきなさい」

蛇の男は、取り巻きに命令を下すと、早々に座敷牢を後にした。

ああ、やはり夢ではなかったのだ

あの出来事から、もう三日も経っていたのか。そう思い出し始めたと同時に、意識がまた深淵に沈んでいった。



### 3 6・友禅の秘事

その出来事は明朝に起きた。

静かな朝だった。朝露に空気がほんのりと湿っていた。

友禅は、寝間着である白小袖から普段の和装に着替えを終えた所であつた。

ふと、友禅は自分に向かって殺伐とした空気がにじり寄ってくる気配を感じ取った。友禅は顔を上げる。

その感覚は気のせいではなかつた。大勢の足音が近づいてくると、突如襖が開き、自分の寝室に数人の狗鬼が押し寄せてきた。

「何事ですか」

友禅は狗鬼達に向かって声を放つ。

見覚えのある狗鬼達ばかりだ。みな、自分に良くしてくれていた者達が、今は憎悪の目、そしてあるいは戸惑いの目で自分を見つめている。友禅の問いに誰も答えない。

と、狗鬼達の後ろから、一人の老婆が出てくる。

「御代様……？ これは一体どうしたことなのです？」

御代と呼ばれた老婆は険しい顔を友禅に向けている。

「黙れい」

冷たい老婆の声が、部屋内に響き渡る。

「こやつをおさえておけ」

周囲の狗鬼に命令を下す御代。老婆の周囲に居た狗鬼達は、放たれた言葉に従い、機敏に友禅の周りを囲んだ。

「何をするのです！」

強く腕を掴んできた狗鬼に、思わず語気が強まる。掴まれている腕を振り払おうと力を込める。狗鬼達は、数人がかりで友禅の強い力を必死に止める。

狗鬼達に腕を掴まれたまま、友禅は御代の顔を黙って見つめ、次の言葉を待った。

「おお、おぞましい。狗同士の掛け合わせで生まれた卑しき仔よ。その目の色。おかしいと思っておったのだ

「……！」

友禅は息をのむ。友禅の両目は、それぞれ違う色をしている。幼い頃の熱病が原因だと伝えられているはずだった。

「何故それを！？」

身を乗り出す友禅、狗鬼達は身体を前に傾けた友禅を更に押さえつける。

「聞いたぞよ。お主が正しき狗鬼の仔で無いという事」

「……一体、誰から……」

はっと目を見開く友禅。思い出した。思い当たるのは昨日の事。

鼎と話をした、あの時だ

幼子が軒先で一人、泣いているのを友禅は見つけた。

「鼎、どうしたのです」

友禅の声に、ゆっくりと顔を上げる。目からは大粒の涙が零れ落ち、右の頬は真っ赤になっていた。

「友禅、様」

友禅は鼎の隣に腰かけ、桜紙で鼎の涙を拭いてやった。しゃくり

上げている鼎が落ち着くまで、友禅は目の前に広がる庭を見つめて黙っていた。ようやく涙が止まった鼎は、震える声で友禅に話し始めた。

「御代様に、また叱られてしまいました……」

御代は、古くから本家当主の補佐を勤めている老婆である。次期の当主である鼎に対し、厳しくあたっているらしい。赤くなった頬は、御代に叩かれたのだろう。

「お勉強の途中でした……。わたしは思うところがあり、御代様に意見を申し上げたのです。ですが、余計な事は言うなど、打たれてしまいました」

友禅は、鼎の赤くなった頬を優しく手で覆う。

「痛かったでしょう。御代様はいささか、皆に対し厳しすぎますね」友禅の優しい言葉に、またもや鼎の目に涙が溢れ出す。友禅は鼎の頭を撫でる。と、同時に鼎が友禅の懐に飛び込んでくる。顔を擦りつけ、必死に声を張り上げる。

「わたしに、本家の当主なんて無理です。父様が当主というだけでわたしにはそんな立派な役目、果たす事はできません」

御代に叱られた事で、弱気になってしまっているようだ。

「鼎」

友禅は静かに、幼子の名を呼んだ。鼎は友禅にしがみつく力を緩め、次の言葉を待っていた。

「あなたのお父様……現在の当主様も、当主になったばかりの頃は右も左も分からない状態だったそうですよ。ですが、周囲の者達が助けてくれたそうです。誰も、最初から立派に仕事ができる者などおりませんよ」

鼎は顔を持ち上げ、友禅の瞳を見つめていたかと思うと、ゆっくりと頭を縦に振った。十歳の子供に対し、重い責任が迫っている。この子供は、必死に運命を受け入れようとしている事を、友禅は感じ取っていた。

「友禅様のお父様は、どのような方だったのですか？」

鼻をすすりながら、鼎は友禅に問う。その問いに、友禅は目を細めた。

「友禅様？」

鼎は友禅の顔を覗きこむ。

「私は……父様の顔を知りません」

丸い二つの目玉が、友禅を捉える。

「母様は、さくらという名で、とても美しい方でした。ですが、母様も写真でしか拝見したことが無いのです。生まれて十八年間、私は父様とも、母様とも会った記憶が無いのです。母様は十二年前……私の弟、哭士を生んでからすぐに、亡くなったそうです」

「お父様の写真は無かったのですか？ 今はご存命なのですか？」

「父様が生きているか、私には分かりません。実は、母様も、私の父様の顔を知らなかったのだそうです。私の母は狗鬼、そして父様も狗鬼……。通常では、狗鬼同士では子供は生まれません。特別な方法で、私は生まれました。そう、聞いています」

ここまで言い、友禅は心中で『しまった』と、呟く。狗鬼同士は結ばれてはならない。これは本家が定めている禁忌、誰にも話してはならなかった。

「では、友禅様は特別なのですね！」

友禅の気持ちには気づかず、鼎の表情は明るくなる。

「……鼎、このことは誰にも話してはなりませんよ」

鼎の目を見つめ、友禅は鼎に釘を刺す。

「はい、分かりました」

一つ大きく頷くと、鼎は立ち上がり、屋敷の奥に消えていった。



鼎が御代に話してしまったのだろう。幼い子供であるからと、口が滑ってしまった。それが、まさかこのような事態を招いてしまうとは。

「御代様！ 耳をお貸し下さい。確かに、私の両親は狗鬼！ ……」

友禅の言葉は御代に届かない。友禅を指差し、何かを命令するようなくさを向ける。突如、友禅の首に冷たいものが触れる。

「！！！」

カチリ、という金属的な音と同時に、今まで押さえつけられていた狗鬼達の腕力が突然増した。

痛みにも、思わず声を張り上げる。狗鬼達の力に負け、床に押さえ込まれてしまった。

「一体、何が」

今まで良く聞こえていた耳も、布があてがわれた様に聞こえづらくなり、体に力が入らない。数人の狗鬼に押さえつけられていたとはいえ、友禅が本気を出せば、跳ね飛ばす事などわけは無かった。

だが、今は、押さえつけられている腕が、男達の握力で悲鳴を上げている。

自身の能力、水を操ろうと、近くの花瓶に意識を向けるも、花瓶の水は何の反応も示さない。

首が苦しい。首にはめられた何かは、友禅の体の力を吸い取っているように思えた。

「狗を封じる首輪よ。これで主は、只の人と変わらぬ」

御代の目は、自分を蔑あはんでいる。

自分の身体は今、能力を封じられ、通常の間人程度にまでなってしまうらしい。首輪を外そうにも、押さえつけられている狗鬼達の腕は微動だにしない。

「我らを騙しておつたのだな。友禅よ」

「違う！……そんな、私は！」

御代の言葉に、何度も大きく首を振る。必死の訴えも、御代には届かない。

「狗同士の仔を作り上げるような下卑た事をするのは、革新派以外に考えられぬ。裏切り者は排除さねばならぬ。革新派に布告せよ」

「御世様！」

人間程度まで低下してしまった自分の力では、狗鬼の腕を振り払う事など不可能だ。

「つれて行け」

狗鬼達によつて、押さえつけられていた友禅の体は引き上げられる。

どの狗鬼も、昨日までは自分と楽しく語り、寝食を共にした者たちであつた。

だが、今自身の両脇に居る狗鬼は、友禅の顔を見ぬよう顔を背けている。

「おお、そつだ」

御代は、部屋を出る直前に振り返り、友禅を取り押さえた狗鬼共に向かつて言い放つ。

「万が一にも、その汚らわしい狗の血が混ざつては堪らぬ。子種の元は、潰してしまえ」

「……………」

自身を取り押さえている男共も、御代の言い放つたこの言葉には

動揺を隠しきれない。

「まさか……そんな」

自分の声が震えているのが分かる。狗鬼達は、御代の非情な命令に、誰も動けなかった。

「どうした。早くせぬか」

両脇の狗鬼達の腕に、嫌な汗がにじんでくるのを友禅は感じ取る。誰も、その場に居る狗鬼達は動こうとしなかった。

「では」

と、老婆の傍らから、一人、見覚えのない男がすり抜けてくる。

随分と顔の整った、白い肌と栗色の髪を持つ男だった。口元は笑みで攣りあがり、一步、また一步と友禅に向かってくる。老婆の命令を遂行する、ために。

「やめ……ろ。止めてくれ……！」

抗う足を、押さえつけられ、そして下半身に向かって伸びてくる手。暴れば暴れるほど、おさえている狗達の指が、腕に食い込んでくる。だが、そんな事を構ってはいらなかった。

伸びた手が、友禅に触れる。

手が、その先に侵入してくる。

喉が裂けるのではないかという程の声を上げた事は記憶にある。

走り抜けたのは痛みではなく、脳天を突き破るほどの衝撃、であった。あまりの衝撃に、開いた口からは、息が吸えず、涎だけが流れ落ち、体が激しく痙攣する。

その後の事は……覚えて、いない。

### 3 7・ふれる手

一度、目をうつすらと覚ましたものの、友禅の意識は現実と暗闇の狭間を彷徨っていた。

下腹部の重い痛みと、全身を包む熱を孕んだ倦怠感は、脳から思考という働きを奪い、身体を動かす指令を発しない。

床に根を張ったように動かないまま、時間が過ぎていた。牢の入り口に食事は運ばれてくるが、僅か数歩で辿り着けるその場所は、今の友禅にとっては、隔絶した世界のように思えた。身体は痩せ衰えてゆき、下腹部の膿んだ傷口から広がった熱病は、友禅の命を蝕み始めていた。

「畜生！ あの本家の糞婆ア！ 俺たちを汚物でも見るような目で見下しやがって！」

荒々しい声が近づいてくる。足音は二人、だろうか。友禅の牢屋の前で音は止まる。

「おい……そういや、アレに籠女の血、与えてないんだろ？ 死んでんじゃねえのかよ？」

友禅を指し、男がもう一人の男に話しかける。

「んなこと言ったってよお、こんなトコで、そうそう簡単に籠女の血なんか手に入れられるかよ。いくら洛叉やしゃ様の命令だからって、出来ねえもんは出来ねえよ。隣の牢の籠女だって、下っ端は手え出しちゃいけねえ事になってるしよ」

もう一人の男がうるたえる。二つの気配が近づいてくる。

「しらねえぞ、俺は」

「んな事言つなよ。大体、なんで俺達が、こいつの事でこんなに気をつかわなきゃいけねえんだよ」

男のつま先が、友禅のわき腹を蹴り付ける。友禅は短く息を吐き

出す。

「あ、まだ生きてたぜ。良かったな」

友禅はゆるりと瞳を開いた。二人とも友禅を見下ろしている。

「……何、見てやがんだ」

偶々視界に男が入ってきただけ、である。だが、友禅の視線を感じ取った男は、苛立った様子でしゃがみこむ。

「知らなかっただろう？ お前が悠々と過ごしていた立派なお屋敷の下に、こんな酷いモンがあるなんて。ここにや、狂つちまつた使用人やら、奇形の狗までとにかく何でも揃つてる。本家にとつて『外』に見せたくは無いものばかりだ。そんなモンを俺たちが『管理』させられてんだよ。ただ、そういう血筋 弊履の族 に生まれただけ、でな。……お前は恵まれた生活を送ってきたんだろう？ 早池峰家のご長男、だもんなあ？ 上等の着物に美味しい飯、女もあてがわれてたんじゃないのか？ そんな大層なお方が、こんなトコでしみたれた生活を強いられている俺たちを見りゃ、さぞかし哀れに思うだろう！？ なあ！？」

腹部に衝撃が伝わる。その衝撃に、空になっていた腹からは胃液がこみ上げてくる。が、男の撃蹴は止まらない。

「おい、止め。ヤバイって」

強張っていた友禅の体から徐々に力が抜けていく様子に、もう一人の狗鬼は男を制止する。

牢の中央から隅のほうに追いやられた所で、男の攻撃はおさまった。肩で息をしながら、凶暴な紅い瞳は友禅を睨んでいる。

「もう、行こうや。こんなトコ誰かに見られちゃ、マズイ」

もう一人の狗鬼が急かし、二人は牢屋を出て行った。

今しがた蹴られた腹部が、ずきずきと脳を侵す。下腹部に至っては、もう麻痺をして感覚が無い。

友禅の背に、隣の牢屋を隔てる木杵が当たっている。が、今の友禅は、それを認識する機能すら危うい状態であった。呼吸をする、という力自体が弱まってきている。

右肩を下にしている状態で臥している友禅。左肩に、弱弱い何かが乗せられた。

温か……い！

身体は怪我と熱に侵され、意識が朦朧としている状態にも関わらず、その温かい感触は友禅を現実によく引き戻し、人間らしい思考を僅かに呼び起こさせるものであった。

その柔らかい感触の元を突き止めようと、視線をその方向に向ける。

打ち捨てられた日本人形を髣髴とさせる十歳程の少女だった。襤褸の着物を身に纏い、肩まで長い黒髪もぼさぼさになっていて。肌の色は垢で黒ずみ、うつろな目で牢屋の木杵越しに友禅を見下ろしていた。背に乗せられたものは、少女の手だったようだ。そして、友禅はその少女に見覚えがあった。

「色把……さん？」

写真でしか見たことがない、少女の姿が其処にあった。

『色把』の名を友禅が発した瞬間、少女の目に人間らしい動揺が広がる。

「……その名は……」

意識が深淵に落ちかけている友禅は、半濁した意識の中で答える。「私の、許婚……。私が二十歳に……。あの方が十四になったときにお迎えに……。上がるの……。です」

その言葉を最後に、友禅の意識はまた、深く深く沈んで行った。

少女は暫くの間、がっくりと頭を落とした男を見下ろしていた。男の着衣も、少女のそれと同じくらいに汚れ、所々が裂けていた。むき出しになっている腕には痛々しい傷が広がっている。腕に触れると、燃えるように熱い。

このままでは、男の命が燃え尽きてしまう事を、少女は感じ取った。

暫く逡巡した後、少女は左手を強く握り締める。手入れのされていない長い爪は、手の平の皮膚を裂き、みるみるうちに血が流れ出す。

木枠の隙間から細い腕を伸ばし、男の傷口に自らの傷をあてがう。血が触れた箇所から、傷口は綺麗に消えて行った。

微動だにせず、少女はそのまま男の様子を見守っていた。籠女の血が全身に巡りはじめ、体のあちこちに広がっていた内出血の痕も、薄くなった。

絶え絶えとしていた呼吸が、微弱ながら整い出したことを見届けると、少女の目はまた人形のように光を失い、ふらつきながら、自

身の牢屋の奥に姿を消した。

籠女の血を受けた友禅の身体は、僅かな時間で回復を見せた。



### 3 8 ・ 忌まわしき家

「オラ、起きろ」

腹部に走る衝撃。怯んではいられない。早く立ち上がらなくては、次が待っている。

重く、鉛のような身体を、必死に両腕で持ち上げる。

「さっさと起きねえか！」

友禅の肩に男の足が飛んでくる。壁に叩きつけられた身体を奮い立たせ、ようやくその場に立ち上がる。

「奥で、一人死んだ。いつも通り死体を片付ける。いいな」

「……はい」

乱雑な男の声に、友禅は一つ返事をする。

「分かっているな？ くれぐれも、最下層には行くんじゃないぞ！」

「……はい」

狗鬼の力を奪われた友禅は、弊履の族の狗鬼らに抗う術を持たず、唯唯、彼らの言いなりになるしかなかった。

忌家に囚われて、三年が経とうとしていた。

友禅は、男に言われたとおり、暗い石造りの廊下を進む。地下にある忌家は、換気もされずにジメジメと湿り、常に黴の臭いが鼻を衝く。両端はかつて友禅が入られていたものと同じような座敷牢の鉄格子が並んでいる。中に誰もいないものが殆どであるが、前を通り過ぎると、うめき声が聞こえている牢や、突如鉄格子から筋張った手が伸び、通りがかる者を捕らえようとしてくる者の檻まである。

奥の部屋。詳細に言われずとも友禅には分かっていた。三年もの間、弊履の族に代わり、この牢の管理をさせられてきたのだ。数日前から弱りきっている狗鬼が居たことも、承知している。

錠を開け、牢の中に足を踏み入れる。

「うつ……」

思わず手で、口を塞いだ。

咽るような血の臭いだ。黒く荒みきった畳には、赤黒い液体が染み込んでいた。

その赤黒い染みの中心に、女が一人、うつ伏せで倒れている。

手を触れれば、既に生命の温かみは残っておらず、鳥肌が立つほど女の肌は冷たい。

女の右手にはガラスの破片が握られ、赤黒い染みは女の首から地面に広がっていた。

「……」

友禅は、女の死体に向かって手を合わせる。

乱れた着物から覗く白い足。毎晩のように弊履の族の男共に陵辱されていたのを、友禅は知っている。

もう嫌だ……。アタシはもう、生きていたくない……。

食事を運んでいた友禅の耳に、生前の女の声が蘇る。

力を奪われ、あの粗暴な男共に抗う事など出来はしないのは分かっている。だが、こうして目の前で苦しみから逃れるために命を絶つ者を何度も何度も目にし、その度に友禅の胸は張り裂けそうになる。

そのまま自身の額を合わせた手にあてがった。

「……どうか、安らかに……」

今の友禅には、それを願い、体を清めてやる以外に、冷たくなっ

た女に出来る事は何も無かった。

この世に地獄と名の付くものがあるとすれば、それは此処であるに違いない。

太陽の光を見ることもできず、昼か夜か、それすらも分からなくなっていた。

三年の歳月を過ごすうちに、この忌家の規律は友禅にも染み付いていた。

友禅が捉えられている忌家は、本家の地下に作られている。地下一階。つまり一番上の層が、男共の寢床であり、そこに本家に遣われる弊履の族が寢食する。

弊履の族は凡そ十人ほど。出入りを繰り返している為、全員が揃うことは無い。勿論、その下で遣われている友禅は外に出ることは出来ない。瀕死の状態から復活してからというもの、友禅は一番奥の小汚い部屋を与えられ、男共から下される命令に従いながら日々を過ごしていた。

寢食する階から一つ下れば、そこは座敷牢が並んでいる。殆どの牢が空の状態だが、時折何処からか連れ去られてくる狗鬼が牢に入られる。

一度あの牢に入れられれば、生きて出ることは出来ない。牢に入られた者らは、始めは強く抵抗するが、やがてその事に気付き、目からは光が失われてゆく様を、友禅は何度も目にしてきた。友禅が運ぶ食事も口にしなくなり、弱って死にゆく者は少なくなかった。

弊履の族を纏め上げているのは、友禅がこの忌家に運び込まれて最初に目にした男のようだ。

名を洛又らくごという、異様に肌の白い、蛇へびのような男は、滅多にこの忌家に姿を現さない。

洛又が忌家に訪れると、弊履の男達の間には、異様な緊張感が溢れる。友禅がこうして奴隷のように扱われていることは、洛又には知らされていないらしい。蛇の男がやってくる時になると、友禅は奥の部屋に身を隠すように言われ、物音一つ立てることは許されない。この三年の間に、友禅が洛又を目にしたのは数回しか無かった。

「何で知らされてなかったんだ！」

浅い眠りから現実に引き戻されると、弊履の狗鬼らが何やら慌てている。

身を起こし、狗鬼らがよく集まっている広間へと向かう。

「洛又が来る！ 早く奴を隠せ！」

どうやら、弊履の頭である洛又が突然忌家へとやってくるらしく、それで狗鬼らが慌てているのだ。

ばたばたとしている狗鬼らの一人が、広間を覗き込んでいる友禅を見つけ、襟首を乱暴に掴み上げる。

「いたぞ。こいつはどうするんだ」

「奥の部屋に隠す時間がねえ！ 下に行かせろ！」

その返答を聞くと同時に、乱雑に友禅は座敷牢の階に、引きずるように連れて来られた。

いきなり離される襟首。突如体が自由になり、地面に倒れこむ友禅。

「いいか、ここより更に下の階に行つて、良いというまで隠れている。下に居るものには、絶対に接触するんじゃないやねえ。いいな？」

鋭い眼光。凄むその目には、今までとは違った『本気』が溢れて

いた。ここより下というのは、最下層。かつて、瀕死の状態だった友禅が閉じ込められていた場所だ。それ以降、足を踏み入れることは許されていない場所だった。

「……分かりました」

「行け」

狗鬼は一言だけ吐き捨てる、踵を返し、上層へと向かっていった。

友禅はゆっくりと起き上がり、体に付いた埃を払い、最下層へと足を踏み入れた。

### 3 9 ・闇の先

能力が人間並みに低下している友禅は、明かり無しでは暗闇を歩くことが出来ない。

普段の座敷牢の見回りも、手に蠟燭を持った状態で行っている。だが、突如引き連れられてきた現在は、当然の事ながら蠟燭など持っていない。

下層へ向かう階段には明かり一つ無く、一向に目が慣れない。一段一段、足で探りながら降りていく。

一段一段、降りていくと、友禅の目に一つの小さな明かりが映る。そして、僅かに耳に届くのは……。

歌……？

この場所に全く似遣わない状況に、友禅は大きくうろたえる。

だが、この場所で立ち止まっているわけには行かない。友禅は、また一段、一段と足を進めた。僅かに聞こえていた歌も、少しずつ大きくなり、旋律を捉えられるようになってくる。

次の段差を確かめるために足を踏み出す。足で探っても次の段差が見つからない場所まで到達した。遠くに見えていた小さな明かりも、もう少し進めば届きそうである。

洩れている明かりから察するに、最下層も同じ座敷牢になっているようだ。

明かりが灯っている座敷牢は一つだけ。そして、歌もその牢屋から聞こえてくる。

(知っている……。これは、てまりうた手鞠歌だ……)

本家に居る狗鬼の子供らが、庭で遊ぶときによく歌っていた。友禅本人も、幼少の頃に歌ったことがあるものだ。

旋律が耳に届くたび、縁側で子供らを見守っていた情景が浮かび上がってくる。子供らの嬌声。柔らかな日差し。通り抜ける風。

二度と戻ることは無い、酷く懐かしい記憶。

「う……」

思い出してしまふ。かつて過ごした、あの柔らかな日々を。

囚われて三年。必死に遠ざけ、押し込め、直視出来ぬ現実に堪えていた友禅の感情は、耳に届くか弱い手鞠歌で、脆く崩れそうになる。

もっと、聞きたい。あの懐かしい日々を思い出せる、あの優しい手鞠歌を……。

僅かに洩れる明かりに、足を踏み出す。

下に居るものには、絶対に接触するんじゃないねえ。いいな

逆らえば、どんな仕打ちが待っているのか、友禅には手に取るように分かる。先日も、狗鬼の腹いせ交じりの暴力から、何とか命を繋ぎとめ、動けるようになったばかりである。

だが、弊履の族の声は、とうに吹き飛んでいた。

一步、一步と、歩みを進め、牢屋の前にたどり着いた。

消えてしまいそうな悲しい声。中を覗き込むが、牢の中には蝋燭が数本点けられているだけで、中の人物の姿をはっきりと捉えることは出来ない。

目を凝らせば、長い黒髪を持つ和装の少女であることが分かる。

パチリ、と足元の砂利を踏む音が一瞬、だが辺りに響き渡った。

「！」

牢の中の少女は、肩をびくつかせ、次の瞬間、警戒を顕にして振り返った。怯えている様子は強張った全身から見て取れる。

「申し訳ありません、驚かせるつもりは無かったです」

友禅の姿を捉え、身構えている少女に、友禅はゆっくりと謝罪の言葉を掛けた。

弊履の族らとは違うと判断したらしい。ふらつく足で、友禅が立っている鉄格子の近くまでやってくる。

歳は、十四、五歳だろうか。

少女の顔にかかった髪で、はっきりと顔立ちを捉えることが出来なかった。

「……」

少女は、じつと友禅の顔を見つめている。

「懐かしい歌が聞こえたので……思わず近づいてしまったんです」

少女の無表情な顔に、僅かに陰りが広がる。

「貴方、ずっと、ここに居るの？」

少女が歌以外で、初めて言葉を発した。少女は大人びた静かな声で友禅に語りかける。

「……はい」

命令でもない、罵声でもない。他人との『対話』も、ここに来てからは皆無に等しかった。言葉を紡ぎ、会話を進めることが、自分



が思っていた以上に出来なくなっていた。

二人の間に、長い沈黙が流れる。

少女は、自身の顔に掛かった長い黒髪を耳にかけた。長い睫毛、大きな瞳。今は汚れてしまっているが、黒い煤が付いている白い頬。隠れていた顔が顕わになる。

そして、友禅は息を飲んだ。

「……………色把、さん……………！」

自分の許婚、比良野 色把。まだ出会ったことは無い。幼い頃から見せられていた写真。写真の少女が成長をすれば、目の前の人物のようになる。

実際に、友禅が言い放った名に、少女はあからさまな狼狽を見せている。

「色把さんでは……………ないのですか……………？」

更に問う友禅の言葉。少女はじつと唇をかみ締めていたが、見開いていた瞳から、ぽろりと涙が零れ落ちる。

「……………貴方は、一体」

悲しげな瞳が友禅を映し出す。少女は自分が色把であるという事を肯定も、否定もしない。友禅の目から見ても、どちらなのか読み取れることは出来なかった。

「私は……………」

友禅が口を開きかけた、その時だった。

「友禅！」

荒々しい声が、壁に反射して辺りに響き渡る。その声に、少女は身を強張らせる。

「友禅！ 聞こえねえのか！」

声は苛立っている。早く行かなければ危険であることを友禅は察

する。

「はい、ただ今」

友禅は声のする方に声を投げかける。

「友……禅」

少女は、今しがた呼ばれた名を反芻する。目を見開く少女の顔に、友禅は小さく視線を寄越し、その場を離れた。

背中に視線が注がれているのを、友禅は感じ取っていた。

足で探りながら階段を上りきると、目の前に弊履の族の男が一人立っていた。

「下では何も見なかっただろうな」

獰猛な表情。友禅は静かに頷いた。

「はい、真つ暗で何も見えませんでした」

「ならいい。今後も、無断でこの下に行くんじゃねえぞ」

「はい」

友禅は、男と目をあわせぬように、もう一度頷いた。友禅の脳裏には、今しがた対面した少女の表情がぐるぐると巡っていた。

3 10・失った殻

友禅様

遠くで声が聞こえる。

友禅様、友禅様。

瞼の向こう側には光が溢れている。

友禅はゆっくりと目を開いた。

障子から朝日が差し込む眩しい一室。

凜とするような畳の香り、暖かな木の天井。

「友禅様」

障子のすぐ外から声が掛かる。女中だ。

「はい」

咄嗟に障子に向かって返事をする。

「珍しく遅いお目覚めで御座いますね。朝餉の用意が整っておりますよ」

慌てて返事をした様子が伝わったのだろう。障子の外からはくすり、と柔らかく笑う気配がする。

「ただ今、参ります」

友禅の声を確認し、障子の前の女中の気配が、ゆっくりと遠ざかってゆく。

「友禅様、お早う御座います」

すれ違つ女中は、友禅の姿を見かけると立ち止まると、深々と頭を下げる。幾度と繰り返した朝の様子。その様子に友禅も頭を下げ、廊下を進む。

朝の七時をまわつた所だろうか、庭はまだほんのりと朝露で湿り、日の光で徐々に空気が温まってきたているようだ。

大広間の襖を開く。

中にいる者らの視線が、一斉に友禅へと向けられる。

「友禅様、お早う御座います」

「お早う御座います」

「友禅様」

皆、顔には笑みが浮かび、友禅の名を口にする。

友禅様

友禅様

友禅様……

見慣れた顔が、目の前に現れては消えていく。皆、顔には笑みを浮かべ、友禅に対し、好意の表情を向けている。

やがて、その顔たちは少しずつ薄れ、呼びかける声が遠ざかっていく。

ハツと、目を覚ました。

身を包む襪褌の着物、薄汚れた布団、素足では歩けぬほど荒んだ畳。辺りは暗闇に包まれている。

(夢、か)

囚われて数年、見ることも無かった本家に居た頃の夢。

おそらく、あの少女に出会ったからだ。

二度と戻れぬ、明るかった日々。

かつては懐かしく思ったあの空間。

だが、今となっては、先ほどの夢は、友禅に別の意味を与える。

失ってから気づいたのだ。

周圀の者が尊敬の念を表していたのは、自分自身ではなく、早池峰家の長男、強い狗鬼、そしてその血という、友禅を取り巻く外側の殻であったということだ。

それにも気付かず、悠々と時を過ごしていた自分が全てを失った今、こうして眩しかった日々々に苦しみを覚えている。

(なんて笑える、滑稽な、話だ)

暴力に耐え、残飯のような飯を食み、みるみる身体は痩せ衰えていった。自分を固めていた殻を全て失い、このような場所に囚われても、腹は減り、喉も渇く。まだ身体は生き延びる事を欲しているのだ。

だが、これから先、何も求められる事もなく、与える事もなく、このまま薄暗い地下でひっそりと朽ちていくのだろう。

黴の臭いにも、暗闇にも慣れてしまった。だが、その暗闇は友禅の心をも蝕もうとしている。無意識に喉の奥から洩れる嗚咽にも似た唸り声は、自身を哀れむ別の自分か、自分でも分からなかった。

(私は、一体どうなってしまうのか)

脱走を企てるわけでもない、男共に抗うことも無く、ただ服従し続け、三年もの時が過ぎている。

(あの方も、同じなのだろうか)

入ることを禁じられていた最下層で出会った、かつての許婚とそっくりの少女。顔に表情は殆ど無く、放つ声も弱い。

自分の名を知り、目を見開いていた少女を思い出す。

(彼女は、何かを知っているのだろうか)

唯々「生きている」というだけだった友禅の生活に、一つの変化が現れた。

(彼女に、会おう。そして、話を)

脳裏に、少女の顔がちらつく。あの少女に会わなくてはならないという使命感にも似た焦燥が、友禅の心をざわつかせ、居ても立ってもいられなくなった。このような感情を持つことが無かった自分に、僅かながら驚愕を覚える。

今まで「従う」という事しか行ってこなかった自分が、あの少女を切欠に、少しずつ自身の意思で動こうとしているのだ。

部屋を出ると、廊下は静まり返っていた。男共は、床に就いているらしい。そうなれば、数時間は部屋から出てこない事を友禅は知っていた。

友禅は、出来るだけ音を立てないように、静かに階下へと向かった。

牢が立ち並ぶ廊下はしんと静まり返り、相変わらず腐臭が立ち込めている。

廊下の一番奥までたどりつく。重厚な鉄の扉は、見ただけでも相応な重さがあるように思える。狗鬼の力であれば、難なく開くこと

が出来るものである。現に、友禅が扉の先に押し込まれた時も、友禅を片手に捻り上げた状態で、軽々と扉を空いた手で開けてみせた。錠は掛かっていない。しかし、今の友禅の力では、容易に扉の向こうへ進むことは難しそうである。

鉄の扉は、押して開くものだ。取っ手を下に引き下げ、扉に肩を押し付けては、渾身の力をこめて前へ押し出す。踏ん張った足が、砂利で滑り、中々思うように力が入らない。漸く、僅かに隙間が開いたが、通り抜けるにはまだまだ幅が足りない。碌な食事も与えられず、酷使されてやせ細った身体では、十分な力は出すことが出来ない。息を吐き出し、呼吸を整えた。開いた隙間に足を差し入れ、肩を扉に当て、腕をつっぱっては身体全体で押し開く。かなりの重量に、地面と扉の擦れる音が僅かに響く。

一度、手を止め、辺りに神経を研ぎ澄ませるが、階上にいる狗鬼らの耳には届かなかつたらしい。

音が鳴らぬよう、最新の注意を払いながら、ゆっくりと扉を押し広げる。焦らぬよう、少しずつ、少しずつ、隙間は広がっていく。

やがて、友禅が通り抜けられるほどの幅が開いた。細くなった身体は、難なくその隙間を通り抜けた。

扉さえ抜けてしまえば、あっさりと、少女の居る最下層までやってくることが出来た。

手鞠歌は聞こえず、しんと静まり返っている廊下は、前と変わらず火が灯っているだけだ。

そつと友禅は牢の近くまでたどり着く。

「……………」

いざ、目の前にしてどう声を掛けるべきか。友禅は小さく口を開きかけ、一度嚙む。

突如、牢の中からカタリ、と音が成る。少女が牢の目の前までやってきたのだ。

「来たのね」

友禅の訪問に驚いた様子もなく、表情のない瞳で友禅の姿を映し出す。

「まるで、私が来ることを分かっていたような言い方だ」

取那の位置からは、牢に向かつてきた友禅の姿を見ることは出来ないはずだ。偶然とも思えぬ少女の言動を、友禅は不思議に思った。

「貴方が友禅という名で、私を色把と呼んだから」

言葉に抑揚が無く、淡々と語る言い方に、友禅は僅かに違和感を覚える。

「きつと、また、私に会いにくると思っていたの。私は、貴方の許婚だったから」

少女の言葉に、友禅は息を飲む。

「では、貴女はやはり、色把さんなのですな！ 何故、こんな所に

……」

友禅の言葉に、少女は静かに首を横に振るだけだった。

「私はもう、色把ではないの。今の私の名前は『取那』よ」

事態を把握できない友禅は、暫くの間、取那の顔を見つめていた。「どういふことなのでしょう？」

だが、どれほど無言の時間が流れようと、取那は自分が囚われている理由を語るうとはしなかった。瞳には光は無く、人形を目の前にしているような印象を覚えた。

二人の間に流れる静寂を破ったのは、取那のほうだった。

「貴方、その目はどうしたの」

友禅の目を見つめていた取那が、友禅に問う。両の目が通常とは違う色になっている事に取那は気付いたらしい。友禅はかつて、許婚である『色把』の写真を見たことがあったが、許婚の『色把』は、友禅の顔を知らないのだ。



「ああ……これは、生まれつきなのです。気味が悪い、ですよね。こんな色では」

目を伏せ語る友禅の言葉に、取那はゆるゆると首を振る。

「そんなこと、ない」

取那は、二人を隔てる鉄柵に一步近づいた。

「綺麗だと思う」

「!!!」

始めて聞く言葉に、弾かれたように友禅は顔を上げた。取那の表情は変わらない。

「話を聞かせて。貴方が何故ここに居るのかを。……そうしたら、

私も、いずれ話してあげる。なんで、私がここに居るのか」

「しかし……」

いつ、狗鬼が地下に降りてくるか分からない。反射的に、友禅は階上への出口に視線をよこした。

「あの蠟燭が半分になるまでは大丈夫。誰も降りてこない」

友禅の思惑を察したらしい、取那は部屋の中の蠟燭を指した。狗鬼らの行動も全て把握しているらしい。友禅は取那の言葉に頷くと、ぼつり、ぼつりと、自身の境遇を語り始め、取那はその言葉に、静かに耳を傾けていた。

### 3 11・一つの望み

それからというものの、狗鬼らの目を盗み、友禅は足繁く取那の牢の前へ通い続けた。

ただただ、自分の言葉に、更に言葉が返ってくるのが嬉しかったのだ。本家に居た頃の話、自分の好きな物の話、飼っていた犬の話、時間が許される限り、思いつくままに言葉を綴った。

取那も、話し相手というものが居なかったのだろう、初めは全くの無表情だった取那の顔に、やがて少しずつ人間らしい顔が戻ってきていく様が、友禅にも手に取るようにわかった。徐々に取那の心の壁が取り払われ、友禅にも随分と打ち解けた。

取那の牢に置かれていた蠟燭が半分になると、友禅は鉄の扉を元の状態に戻し、自分の部屋に戻る。

牢の管理を任されている友禅が、男たちが寝静まった後に出歩いていても、不自然なことは何も無い。細心の注意を払いながら行われた友禅と取那の密会は、誰にも見つかること無く、繰り返されていた。

「全てが懐かしい……。戻れなくなってから、あんなに嫌だった、あの屋敷が懐かしい。これって、我儂なのかな」

友禅の話聞き終えて、取那がぼつりと漏らした。牢に寄りかかると、座っている取那が背中越しに口を開いた。

「そろそろ、話そうか。……私が、どうしてここに居るのか」

先ほどまで浮かんでいた笑みは、一瞬のうちに消えてしまった。伏せられた目は、過去を見つめているのだろうか。じっと動くことなく、一点を見つめていた。

「これが、私に起こった全て。今でも、何が何だか分からないのよ」  
全てを語り終えた取那の顔は、この世の何よりも悲しく、そして  
すぐにでも消え去ってしまいそうだった。

そんな取那の表情を見ていられなくなった友禅は、勤めて明るく  
言葉を発した。

「そうだ、取那。何か、欲しいものはありますか。私なら、この地  
下にある程度動き回ることが出来ますから」

「……え？」

一瞬、何を言われたのかを理解できなかったようだ。友禅の目を  
見つめてから、言葉を飲み込むようにして取那は俯いた。

「……言っただって、絶対に無理だわ」

取那の湿った睫毛が何度か瞬く。

「言ってみてください」

友禅が微笑みながら取那の顔を見つめる。暫くの間、取那の視線  
は友禅の足元をさまよっていた。

「花」

やがて、取那が咳くように言い放った。

「……花が……見たい」

小さくつぶやいた声は、不思議と友禅にはつきりと聞こえた。

太陽も数年見えていない。暗闇が支配するこの忌家では、花という  
ものは、遠くかけ離れた存在だった。

「……花、ですね」

友禅は一度小さく頷いた。

勿論、この薄暗い地下の世界に、地上を飾る花などが簡単に手に入るはずは無い。

地上と地下を出入りする弊履の族に頼むなど以ての外だ。

(何か、方法は無いものか)

男共が食い散らかし、そのままになっていた後片付けをしながら、友禪は思考をめぐらせていた。

ふと地上に繋がる階段に繋がる扉から、人が降りてくる気配がし、友禪は掃除をしている手を止めた。

部屋に入ってくる者の妨げとなれば、すかさず拳や足が飛んでくる。部屋の隅へと移動し、その人物が入ってくるのを待った。

「友禪、居るだろう。開ける」

中にいる友禪の気配を察したのだろう。出入り口の扉の奥から声が掛かる。手早く取っ手に手を掛け、戸を開いた。

入ってきたのは、両手に大きな荷物を担いだ弊履の族の一人だった。

部屋の中央にある卓にその荷物を下ろすと、それらはガチャガチャと音を立て、中にガラスの瓶が詰まっていることが分かった。奥から別の男が顔を出し、声を掛ける。

「おい。何を持ってきたんだ」

声を掛けられた男は、にやりと笑みを漏らす。

「酒だ」

男の一言を聞きつけた男共が、蛮声を上げながら部屋へと集まる。本来、本家にこき使われている存在の彼らは、酒を口にするこ

ども殆ど無いのだろう。

「本家で何か慶事があつたらしい。大量にあつたから、少しばかり頂いてきた」

荷物から瓶を取り出せば、上等な酒ばかりが机上に並ぶ。男らのどよめきが大きくなる。

「なんだ、食い物まであるじゃないか。摘みに丁度いい」

酒に紛れて、幾つかの菓子も荷物からこぼれ落ちる。

「酒盛りだ！ 早く開ける」

酒を目の前に、興奮しきっている狗鬼達。忽ちのうちに、酒瓶の封が切られ、酒宴が始まった。

このような時、男共を刺激せぬよう、目に触れないようにするのが得策であることを友禅は知っている。友禅は、部屋から静かに遠ざかった。

「友禅！」

部屋を離れて半刻程だろうか、自身を呼ぶ声が聞こえる。相変わらず廊下には、男たちの壘声が響き渡っている。

友禅が、酒宴の部屋に顔を覗かせると、男の一人が床を指す。

「杯が割れた、片付けろ」

地面には、陶器の破片が無数に散らばっていた。友禅は言われるがままに地面にしゃがみこみ、破片を拾い集める。

その間も男らは、他愛の無い話をしては、大声を上げて笑っている。

友禅が破片の全てを片付け、部屋を去ろうとした時だった。酒を持ち込んで来た男が、友禅を呼び止める。

「今日は、気分が良い。お前にも少しばかり、分けてやろうじゃないか」

そう言って、男は散らかりきった卓の上を指す。

「酒でも、食い物でも、好きなものを一つだけ持っていき」  
酔いが回り、かなり上機嫌になっているらしい。他の男らからも、不満の聲が上がらなかつた。あるものは杯を呷り、あるものは友禅の動向をニヤニヤとしながら見守っている。

友禅は卓の上を見渡した。

酒の封は殆ど開けられ、底の部分に僅かに残っているものばかり。酒と共に紛れ込んできた食べ物も、殆ど食い散らかされ、僅かにしか残っていない。

ふと、卓の中央に残っている砂糖菓子が目に入った。男共は甘いものを好まないのか、それだけは手がつけられていない状態だった。

友禅は、菓子を指し、口を開く。

「私は酒が飲めませんので、菓子を一つ頂きますでしょうか」

男は友禅の言葉を鼻で笑うと、卓上の菓子を乱暴に掴み、友禅に向かって放り投げた。受け取った友禅は、一つ頭を下げ、踵を返した。

「なんだ、女みたいな奴だな」

動向を見守っていた男達の一人から声が上がる。

「タマが無いんだ、仕方がなかつた」

同時に男共の下品な笑い声が響き渡る。このような言葉には既に慣れている。友禅は、何の反応も見せぬように、静かに自室へと戻った。

その様子を、一人の狗鬼の鋭い目つきが追っていた。

自身の部屋に戻った友禅は、手の平に感じる、僅かな重みに、高揚を覚えていた。

本家の慶事で出される砂糖菓子には、美しい細工が施されている。友禅の手の中にあるのは、本物とは程遠いものの、美麗と言いつくには十分な花の細工が施された砂糖菓子が納まっていた。

本物の花ではないが、きつと取那も喜ぶはずである。桜紙で優しく包み、最下層へ向かえる次の機会を待った。

### 3 12・崩れゆく音

いつものように、男たちが寝静まる時間が訪れた。桜紙に包んだ菓子を手に、最下層に向かう為の鉄の扉に手を掛ける。音を出さぬように扉を開く要領も既に掴んでおり、難なく開いた隙間から身体を潜り抜けさせる。手に持つ桜紙が、かざりと音を立て、友禅は優しくそれを手で包み込んだ。

早く、取那に見せてやりたい、その気持ちにばかり立ってしまふ。

だが、この時は、通常と雰囲気は違っていた。

明かりが無くとも降りられるようになった慣れた階段に足をかけた、その時だった。

地下から凶暴な気配が上ってくることに気が付いた。足を掛けていた階段から離れ、扉の隙間から抜け出ると、身を隠せる場所を探した。

だが、牢だけが並ぶ廊下に、そうそう姿を隠せる場所など、ありはしなかった。

突如、がしりと襟首を掴まれた。全ての男共が寝静まっては居なかったのだ。夜目の利く狗鬼の目には、友禅の姿は丸見えだったに違いない。

「ここで何をしている」

力強い腕、静かな声。体を擦っても、男の腕はびくともしない。

「やはり、知っていたのだな。地下の娘を」

突如襲い来る浮遊感、そして衝撃。壁に当たった体は強かに地面へと叩きつけられた。

喉が鳴り、友禅は激しく咳き込んだ。地面に手をついた友禅の背中、更に衝撃が襲う。

「妙なことをふきこんでいないだろうな？ ……まあ、いい。お前



「いや何もできんだろう」

地面に崩れ落ちる友禅を嘲るようにして、男は友禅の脇をすり抜けていった。

何だか嫌な予感が胸中に宿る。身体を起こした友禅は、開かれたままの扉から階段を下った。

友禅は、取那の元へたどり着く。いつもと変わらぬ地下の風景であるにも拘らず、漂う空気は鉛のように重かった。

近づいてくる足音に、取那の体は強張っていた。部屋の隅に居る為に、姿をしつかりと捉えることは出来ない。

「取那」

声の主を察したのだろう。背中越しに友禅へと視線を寄越すが、取那は何の反応も示さない。

「取那……?」

再度、取那を呼ぶと、取那は自身を抱きしめるように更に身を縮めた。

「見ないで! こつちに来ないで……!」

金切り声のような悲痛な叫びが友禅の耳に刺さる。どうしてよいのか分からず、友禅はその場に立ち尽くしていた。

闇に目が慣れてくると、友禅は取那の置かれている状況を理解することになる。

乱れた髪。むき出しになった白い腕や足には、痛々しい傷が走っている。帯は床に伸び、解かれた着物が体にかかっているのみ……。

友禅に、自らの姿を見せまいと、床にうずくまっていた。

「……！」

先ほどの男が、取那に何をしたのかを悟る。先ほどすれ違った男の嘲笑が脳裏にちらつく。

取那もまた、男共の餌食にされていたのだ。

震える白い肩、牢屋越しにすすり泣く声。友禅の両足は、地に根を張ったように動かなくなっていた。

やがて、取那は蚊の鳴くような声で、静かに語り始めた。

「……この牢に入れられて暫く経ってからよ。男たちがやってきて、何度も何度も私に同じことを繰り返したわ。苦しくて、苦しくて、それでも身体を引つかいて、嫌がって悲鳴を上げる私を喜んでさえた。だから私は考えるのをやめたの。こうしていつか死んでいくんだって、楽になれる日を待ちわびていたわ……」

言葉を切る取那。取那は、自身の体を纏っている着物の前を揃え、襟を正した。牢屋の前に立ち尽くしている友禅に向かい合うように立ち、友禅を見つめた。

「取那……」

暗闇でも取那の両頬に涙が通った線が良く見えた。だが、その瞳からは光が失われていた。

「貴方にはだけは見せなくなかった。貴方が現れなければ……私は唯の人形で居られたのに……」

「……！」

取那の言葉に、友禅の心臓は一度大きく震える。

忌家に来てからの数年間、何度も味わっていた絶望という言葉。生きる意志を失い、ただその時間を過ごしていただけの自分と、出会った直後の取那はとてもよく似ていた。そこに、互いを支えと

する希望が差し込んだのは事実だ。

取那からしてみれば、色把という名前を持っていた自分を知っている友禪。友禪からすれば、自身の言葉に耳を傾け、笑みを向けてくれる存在の取那。

安心を、安らぎを与え、現実を耐え抜く希望を互いに求め合っていた。

だが、それが今、取那に更なる苦しみを与えようとしている。

取那にとってかけがえの無い存在である友禪に、自分が一番見られたくない状況を目の当たりにさせてしまったのだ。

それが、友禪には痛いほど良く分かった。

取那の両目からこぼれる粒は、パタ、パタと衣服に落ちる。

袖を小さく握る手。荒みきった爪、ボロボロの身体。

「もう、来ないで……」

取那の小さな言葉は、友禪の耳にまっすぐに届いた。

「取那……」

「これ以上、見せたくない……辛いの」

それまでまっすぐ見つめていた取那の目線が落ちる。友禪の視線を断ち切るかのように、そのまま取那は友禪に背を向けた。

「……分かりました」

取那に振り返ることなく、友禪は階段へと向かう。

砂糖の花は、既に潰れていた。



3 13 ・破壊夜の夢（前書き）

残酷描写が含まれます。苦手な方はご注意ください。

### 3 13 ・破壊夜の夢

かみ締めた唇は鉄の味がした。自分に力があればこんなところを抜すには造作の無いことだった。

かつての友禅は、自身の狗鬼の力を忌み嫌っていた。

両の目の色が違う、ただ、それだけの事なのに、慣例やしきたりを重んじる本家の者らの一部には、この異常な目の色を持つ友禅の陰口を叩くものも少なくは無かった。

あの目の色は何だ。気味の悪い。

早池峰家の嫡男でなければ、こんなところに居てよいものではない。力が強すぎるのかねあの瞳の色は……。

自分の力を恨んだ。瞳の色の所為で公にもあまり出してもらえず、幼少の頃は庭で犬とばかり遊んでいた。

こんな瞳の色でなければ、もっと普通に生まれていれば寂しくは無いのにと、いつも思っていた。許婚に自身の写真を見せられていなかったのも、そういった理由からである事を、友禅は察していた。

そんな、不要とした力が今になって必要になるなどは、思っても居なかった。

かみ締めた奥歯が、ぎしりと鳴った。

全ては、この首に付けられている首輪の所為なのだ。この首輪さえ外れれば、友禅は狗鬼の力を取り戻すことが出来る。

首輪を引きちぎろうと、手をかける。無論、弱い人間の力では、

金属の首輪はびくともしない。

絶え間なく友禅の思考を支配し続けるのは、取那の悲痛な顔だった。

（何故！何故！何故！このような不条理がまかり通らねば成らない！）

目の前で死んでいった、捕えられたものたちの顔が巡る。

落ちている鉄屑で、首輪を切りつける。だが、傷が付く程度で、外れるなどとは程遠い。胸に、首に、痛々しい傷が走り、着衣に赤い斑点が付着する。

もどかしい。力が欲しい。友禅の叫び声は、周囲に響き渡った。

どれほど、その場にうずくまっていただろうか。遠くで、男共の笑い声が聞こえる。友禅はふらりとその声にひきつけられるように近づいていった。

男たちが集まり、何かを話しているようだった。

「友禅が地下の娘に気付いた」

神妙な男の声。だが、その言葉を鼻で笑い飛ばす者がいる。

「だが、問題は無いだろう。もうヤツは外に出ることは無いのだ」

「しかし、許婚だった女だ。何かが起きる可能性もある」

友禅は、男らの言葉に耳を傾けた。

「ハッ、あの玉無し野郎に何が出来るってんだ。何かあったところで、大事にはならんよ。仮に逃げたしたとしても、だ。こいつと、こいつ、そして俺はあの娘と契約を結んでいる。印を通じて何処にいるかがすぐわかる。四年前の過ちなんか繰り返すかよ」

苛立った様子で、更に男が返す。

「しつつかし、あの娘、友禅と引き合ってから良く鳴くようになったじゃねえか。前はどんな事をしようが声一つ上げねえ、能面みたいな無表情を決め込みやがってよ。だが今はどうだ？あの助けを求

めるように泣き叫ぶ姿は、最高にそそる。昨日だって、何度も鳴かせてやった」

耳障りな高笑いが周囲に響き渡る。取那の悲痛な表情がちらつく。

友禅は思わず、一步踏み出した。足元に転がっていた木の棒が足に当たると、いつせいに男共が振り返る。

友禅の姿をみとめ、緊張が一気にゆるまる。そして、一人の男が友禅に向かって言い放つ。

「感謝してるぜ。お前のお陰で、最高にいい思いが出来るようになった」

貴方が現れなければ……私は唯の人形で居られたのに……

友禅の中で何かのはじけた。胸の奥底に眠っていた言い表せぬほど激しい衝動が、突発的にこみ上げる。

一度として激昂したことのない友禅が、男達に向かって吼える。そのとき、友禅の首輪から、パチリ、小さな音が発せられたが、誰の耳にも届くことはなかった。



友禅の感覚に変化が起きたのは、それとほぼ同時だった。

一瞬にして、体が軽くなる。耳が、目が研ぎ澄まされる。目に映る全ての動きが、手に取るように把握できるようになった。

押さえ込まれていた自分の力が、みるみるうちに戻ってくることを感じる。

そしてその目が、壁に立てかけられてある鉈をとらえる。

友禅を黙らせようと殴りかかった男の腕を難なくかわし、そのまま鉈を手にとった。友禅が飛び掛った男を避けたことで、僅かに動揺が広がったが、人間程度の力で振り回す刃物は、たいした脅威ではないと高をくくっているようだった。

「身の程知らずってことを分からせてやるよ！」

先ほどの男が更に踊りかかる。同時に、友禅の目が赤く光る。

次の瞬間にあがったのは男の悲鳴だった。

右腕、肘から下が、柔らかな音を立てて落下した。赤く染まる衣。顔に血しびきが掛かるも、友禅は微動だにしない。

友禅の左手が、自身の首に伸びる。友禅の力を抑えきれなくなり、力を失った首輪は、まるで針金のように握りつぶされ、カラリと床に転がった。

数年ぶりの感覚。自分に狗鬼の力が戻ってきたことを感じる。だが、それ以上に、友禅は心の奥底で戸惑いを感じ取っていた。

別の自分が、友禅に語りかけるのだ。

（弊履の男たちは、取那と契約を結んでいる。何処まで逃げてても、取那の体に刻まれた契約の印で、追跡される。この者らを生かしておけば、彼女は自由になれない）

頭を振り、先ほど浮かんだ思考を振り払おうとする。だが。

(殺さなければならぬ！)

自分の内側からの声は止むことが無い。身体が勝手に動いているような錯覚を覚える。

押さえつけられていた狗鬼の力が、一気に解放された反動で、友禅はまさに鬼と化していた。穏やかな性格の友禅の姿は、今や跡形も無い。赤い瞳は獲物を狙う獣のものだった。

今しがた右腕を切り落とされた狗鬼は、友禅の動きについていけず、その場に立ち尽くしている。迷わずその頭に鉈を振り下ろした。鈍い音と共に、中身がぶちまけられる。びくびくと痙攣しているその体を踏み台に、次の獲物へと飛び掛る。

手に持っているものは、錆びきって鋭利さがなくなっている鉈だ。それを力ずくで突き出し、相手の胸を貫く。生ぬるく、粘りのある赤黒い液体が、腕を引き抜くと同時に体に降り注ぐ。顔にかかる液体は鉄の味がした。

腕を振るえば大きな男の体は中を舞い、壁に叩きつけられて赤い汚れが飛び散る。振りぬいた腕でそのまま次に鉈を叩きつける。

逃げようと背を向けるものにも容赦は無い。飛び掛って後頭部を掴み上げ、勢いに任せ床に叩きつける。そのまま背中に馬乗りになり、手に持った獲物で止めを刺す。

断末魔の叫び、そして液体の飛び散る生々しい音が部屋に響き渡り続けた。

その狂気の宴に終止符を打ったのは、ぱたり、と手に持った鉈が落下する音だった。

その場に立っているのは、友禅ただ一人。

それは酷い有様だった。着衣は水ではない赤い液体が滴り、鉄と  
臓物の臭いがあたりに広がっていた。

天井からも滴り落ちる血の音と、肩で息をする友禅の息だけが響  
いていた。

既に涙は枯れ果てた。暴かれた自分の身体を友禅に晒すのは、耐  
えられなかった。

(これで、よかったのよ)

これで、また人形に戻る。いつもの変わらない日々に戻り、男共  
の玩具にされながら死んでいくのだ。自身の一番見られたくなかつ  
た姿を知られた以上、友禅と顔を合わせても辛いだけだ。そう自分  
に言い聞かせる。

ひたひたと音が近づいてくる。

また、あの男たちの誰かがやってきたのだろう。頭まで布団を被  
り、牢の前で止まった気配に気付く素振りを見えないようにした。

「取那」

牢の外から聞こえる声。取那は、その声に跳ね上がるようにして起き上がった。友禅がやってきたのだ。

(一体、何故)

二度と現れないと思っていた。だが、紛れもない友禅の、自身の名を呼ぶ声に居てもたっても居られず、布団を捲り上げ、牢に駆け寄ろうと飛び起きた。

だが、声を掛けようとした取那だったが、友禅の異様な姿に、言葉を失った。

目に飛び込んできたのは、元の色さえ分からぬほどに衣を真っ赤に染め上げた友禅の姿だった。

鉄の臭いが鼻をつく。髪の毛までも赤黒い液体がこびりつき、固まっていた。

「逃げましょう」

取那の言葉を待たずに、友禅は言い放つ。

「友禅……貴方」

必死に絞り出した声は震え、掠れていた。

自身の脳裏に浮かぶ可能性を、必死に打ち消す。

「……ごめんなさい、取那。どうしても貴方を助けたかった……」

その言葉で、友禅が何をしたのかを悟った。噎せ返るほどの血の臭いと、友禅の悲痛な感情を湛えた瞳。

あの男たちの命を、その手で奪ったのだ。自身を、助ける為に。

取那はその場にうずくまった。

喉の奥から洩れる嗚咽は、止める事は出来なかった。友禅の浮かべる悲しげな表情は更に深いものになった。

### 3 14 明かされる過去

「これが、本家に隠されていた忌家の、お話です」

余りに壮絶な出来事の数々に、友禅の話が終わっても、誰も口を開くものは居なかった。

「私は、弊履の族らの命をこの手で奪いました」

ベッドの上で横たわっている友禅の両手が、強く握られた。

「その後、弊履の族らが居なくなった忌家から、まだ生きているもの、動けるものを開放しました。そこに残っていたのが……」

「シイナか」

哭土の言葉に友禅が頷く。

「彼女はその能力の為に忌家に囚われていました。本家の者らは、有事の時には彼女を当主の影武者に仕立て上げようとしていたようです」

姿を自在に変えられる、という能力だけで、シイナは薄暗い地下に囚われていたのだ。

シイナの歳は十三だと友禅は語る。十三歳にしては小さい身体も、幼い話し方も、全ては十分な環境下に居られなかったためだろう、と静かに友禅は付け加えた。

ゆっくりと友禅は顔を上げ、周囲の者らの顔を見渡した。

そして、その視線は、色把に移り、そして止まった。

「色把さん……」

友禅が痛ましげな目で色把を見つめる。

「色把、どうした」

哭土も色把の異変に気付く。色把は顔面蒼白になり、体が縮こまっていた。

「ちよつと、刺激が強かったかもしれねえな」

「色把さん、少し休んできては如何ですか」

菊塵の言葉に、色把は首を振る。

『違う……違うんです』

色把の顔が上がり、友禅を見つめる。

『忌家……。その言葉を聞きたびに、何かを思い出しそうな気がして……』

両手の指先を額にあてがう色把。頭を振ると、まっすぐな黒髪がさらさらと音を立てた。うっすらとこめかみには汗が滲んでいる。

「無理は、なさらないで下さい」

色把は、友禅の言葉に頷き返し、小さく息を吐き出した。

そのまま友禅は続ける。

「色把さんは、幼少の頃の記憶が無い、と伺っています。……それは、具体的には、いつから？」

『……一番古い記憶は、十歳の誕生日の宴の席のもの、でした』

自分は赤い着物を着ており、宴には沢山の大人たちが集まっていたという。そのとき自分は祖母の後ろに隠れていた。と色把は語った。

「でした、というのは？」

色把の言葉ぶりに違和感を覚えた菊塵が問いかける。

『先日の……廃工場での事です。私が気を失う直前に、一つの記憶が蘇ってきたんです』

密かに、哭士の拳が強く握り締められる。自らの手で色把の首を絞め、命を奪いかけた、あの時の事だろう。気を失う直前に、叫ぶような仕草を見せたのも、その記憶を見た所為でもあるようだ。

「それは、どういった……？」

『男の人が、私に覆いかぶさっているんです。笑いながら、私の首を絞めて……「お前さえ死ねば」と……』

色把の告白に、部屋にいる全員の表情が凍りつく。

「……それは、貴女が九歳半の頃の出来事でしょうか」  
今まで口を閉ざしていた修造が、しわがれた声を発した。

『誕生日以前の記憶は、それだけなのです。今まで、他の誰かに聞いても、誰も答えてはくれませんでした。一体、私の身に、何が起こったのでしょうか？』

過去に自身に何が起きたのか知らされず、記憶を失ったまま、今まで不安な気持ちを押さえ込んで居たのだろう。色把の訴える表情は、悲痛としか言い表せなかった。

「本家に、賊が侵入したのです」

色把はじつと、修造の口元を見つめている。

「貴女は、友禅の許婚として、本家である黒古志家で大事に大事に育てられておった。だが、それを良く思わぬものも居たのだ」

皆、修造の言葉を、固唾を呑むように待った。

「貴女が生まれる前にも、友禅との縁談を持ちかけられたことがあったの。友禅と同じ年の籠女を是非嫁に、とな」

力の強い早池峰家の長男である。他に何度も縁談は上がっていたが、本家は家柄を理由に縁談を全て断っていたらしい。

その縁談を持ちかけられたのは、友禅が六つの時の話だという。それなりに名のある家柄の籠女だったらしい。その籠女の父親が、当時の本家の当主に、直々に挨拶に行ったのだという。友禅との縁談が纏まりかけ、修造の耳にもその話が届いてきたらしい。

「だが、その直後、比良野家で女児が生まれての。それも籠女であるとな。本家の判断は、その籠女と友禅を引き合わせるのではなく、比良野家の女児と友禅を結ばせるというものであったよ。比良野家の女児というのは、勿論……」

色把の事、である。色把の祖母の強い後押しもあり、友禅の縁談はまとまった。

「……全く、知りませんでした」

友禅が驚いたように一言つぶやいた。

「そうであろう。本家に召し上げられた狗鬼や籠女は、自分の意思には関係なく伴侶を決められるからの。主には、比良野家との縁談しか、耳に入らなかつたはずだ」

修造は言葉を飲み込むように頷くと、顔を色把に向けた。

「貴女の命を奪おうと侵入した賊は、あの時縁談を断られた籠女の父親であつたよ。」

「!!!」

自分が居なくなれば、二番目の自分の娘が友禅と結ばれる。そう思った末の行動だつたのだらう。

「本家の使用人が有事に気付いたときには、色把さんは気を失つておつた。男は正気ではなかつたそうだよ」

色把の耳には「お前さえ死ねば」と言葉が、生々しく繰り返される。

「それから、貴女は今までの記憶と、そして声を失つた……という事だ」

色把の首のあたりが、さわさわとざわつく。

『そう……だつたのですか』

俯く色把。だが、その色把の表情にも増して、友禅の表情は優れない。

「友禅」

哭士の言葉に、友禅が顔を上げる。気のせいではなく、やはり表情は強張っている。

「まだ話は終わっていないだらう」

哭士の目が、友禅を映し出す。友禅の目は伏せられたままだ。

「何故取那は、自分を色把と名乗っていたのか。何故、忌家に囚われていたのか。勿論、知っているんだらう」

腕を組んだまま語る哭士の言葉に、更に友禅の表情は曇る。

「ええ、知っています。取那は、全て私に教えてくれました」



「では、お話します。取那の身に、何が起こったのかを……」  
友禅の語る言葉は、その場にいたかのように思えるほど生々しく、  
そして、痛ましいもの達だった。

### 3 15・いろは

足袋たびの小鉤こはせを外し、床に投げ捨てた。小さな足袋に足を詰められ、つま先は悲鳴を上げていた。

「もう、お稽古事なんて沢山よ」

既に薄暗くなった部屋で、少女は一人呟いた。

朝から晩まで、琴や茶や揮毫きこうや舞の手習い。既にうんざりしていた。

色把さん、貴女は早池峰家に嫁ぐお方なのですよ。しっかりとした所作を身に付けなければなりません。

手習いで失敗をするたびに、身に降りかかる言葉。今日も、琴を客人の前で失敗し、こつてりと絞られた後だった。

(本当は、外で遊びたいのに)

他の籠女や狗鬼の子供らは、自由に外で遊びまわっている。いつも、手鞠歌や数え歌を口ずさみ、楽しそうに嬌声を上げている。

だが、当の自分は、大事な身であるからと、自由に外に出ることは許されていない。

誕生日の半年前という事だけで、客人を呼び寄せ、出たくも無い、つまらない宴に座っていなければならなかった。

おまけに琴まで披露させられ、失敗をして怒られたのでは嫌になるのも当然である。

窓の障子を開け、庭を見つめる。金木犀の香りが鼻腔をくすぐる。山吹色の金木犀が、自由に外に出られぬ自分をあざ笑っているかのように咲いていた。

外は既に夕日が指し、遠くで烏が鳴いている。金色色と橙色が入り混じった世界は、薄暗い自分の部屋をより一層、無聊なものに思

わせるのだ。

いつもと変わらぬ、窓で切り取られた世界。

(何か、面白いことでも起きないかしら)

ため息混じりに外を見つめた。だが、そうそう思い通りにことが運ぶわけが無い。

床に散らかったままの折り紙も、転がっている鞆も、全てに飽いていた。

「色把さん、こちらへいらっしやい」

遠くから、自分を呼ぶ声がある。また、名前も分からぬ客人に愛想を振りまかなくてはならないようだ。

「はい」

窓を閉め、自分が呼ばれた声の方向に足を向けた。

辺りも全て暗くなり、自室に戻ってくる。部屋には当たり前のように布団が敷かれ、眠りにつけと言われているようだった。

(ほんの少しでも、自由になる時間が欲しいのに)

全て、決められた生活。自分の思うとおりに外に出ることも出来なければ、その不満を解消する手立ても無い。

ため息をついて、部屋の隅の灯籠を消した。周囲は暗闇と静寂に包まれる。

布団に入り、どれほどの時間が経っただろうか。

中々寝付くことが出来ずに、何度も寝返りを打っていた。

突如外から、サク、サク、といった砂利を踏みしめる音が色把の耳に届く。

大人程重くは無い。動物の音とも違う。注意深く外に意識を向け、近づいてくる物音に聞き耳を立てた。

踏みしめる音は、ぴたりと止み、部屋の近くで止まったようだ。うつすら目を明けると、外が見える障子は月明かりで照らされ、部屋の中は薄ぼんやりとした明かりが差している。音を立てぬように部屋の中を這いながら、障子までたどり着く。人差し指で穴を開け、外を覗き見る。

一瞬、見間違いかと我が目を疑った。庭の真ん中に、自分と同じ年頃の少女が立っていたのだ。きよろきよろとあたりを見回し、なにやら迷っている様子だった。その少女から危険なものは何も感じない。

色把は、障子を静かに開いた。  
「ねえ」

声を掛けると、庭に居る少女は体をびくつかせ、こちらの方に振り返る。長く、黒い髪はボサボサで、履物はなにも身に付けておらず裸足であった。

「貴女、どこから入ってきたの？」  
本家の建物は、厚い壁でぐるりと囲われているはずだ。正門と裏門以外から入ることは不可能だ。勿論どちらの門にも見張りが置かれ、容易に通りぬけることは出来ない。黒髪の少女は、色把の言葉にすい、と右腕を横に広げると、庭の遥か先にある雑木林を指差した。

少女の回答の理解は出来なかったものの、さほど少女が自分の部屋の前に現れたことに不思議を覚えることは無かった。

それよりも、同じ年頃の少女と顔を合わせる機会が殆ど無かった為に、一緒に遊びたいという気持ちの方が先に立っていたのだった。「まあ、いいわ。こっちに来て、遊びましょうよ」

色把が手招くと、小さく少女は微笑みながら頷き、色把の部屋へと足を踏み入れた。

近くで見ると、少女の着物はボロボロで、肌も所々黒く汚れてい

る。

「何だか、すごく汚れているわね。そんなのじゃ、畳が汚れちゃうわ。こっちに来て」

色把が手招くとおりに、少女は後を付いてくる。寝静まった本家の廊下を進み、自分専用に使えられた浴室へと足を踏み入れた。

「まだ、お湯は温かはずよ。好きに使っていいわ」

未だ、おどおどしている様子の少女を無理やり浴室に押し込めた。暫くしてから、湯を浴びる音が聞こえ出したのを確認し、色把は浴室を離れた。

髪から水を滴らせながら、少女が浴室から出てくる。黒ずんでいた肌は、見違えるほど白くなり、薄暗がりの中でも十分に映えた。ぼさぼさだった髪にも、艶が出てるのが分かった。

「背丈も殆ど私と変わらないわね、私の着物を貸してあげる」

少女が湯を浴びている間に、自身の箆笥から着物を持ち出してきた。少女に着物を手渡すが、中々袖を通そうとしない。

「どうしたの？」

「綺麗な着物……。本当に、いいの？」

困ったような表情を浮かべ、少女は色把を見つめる。

「構わないわ。着物も、髪飾りも、全部私のものだもの」

誇らしげに答える色把の言葉に、少女は目を見開く。

「そうなんだ……！　すごいね……！」

美しい着物に袖を通せることが余程嬉しいのか、勿体付けるように着物を着付ける。袂に描かれた着物の柄を、嬉しそうに見つめている。

「あなた、名前は何て言うの？」

「……トリナ」

小さく、一言だけトリナは答え、色把はふうん、と鼻を鳴らした。「じゃあ、トリナ、私の着物、見せてあげるわ。こっちに来て」

色把の部屋から繋がっている衣裳部屋へとトリナを引きつれてやってきた。入り口を除いた全ての壁に箆笥が並び、ぎっしりと着物が詰まっている。それは全て色把の為に集められたものだ。

「これなんかどう？ お婆様がわざわざ私の為に誂えさせたのよ」  
箆笥から引つ張り出した、鮮やかな色をした紅型の着物に、トリナは目を見張った。

「ここに鏡があるから当ててみなさいよ」

逡巡しているトリナの手を引き、鏡の前に立たせると、胸の前に着物を宛がう。と、そこで色把の手が止まる。

「貴女……私と顔がそっくりね」

ボロボロの状態では分からなかったが、湯を浴び、髪を梳いたことで、トリナの顔が露になり、二人が鏡に並ぶと、瓜二つの顔が並んでいた。

これには、トリナも驚いているようだった。見開いた瞳の形も、口角が僅かに上がっている小さな口も、全く同じなのだった。

暫くの間、二人は無言で鏡を見つめ続けた。

暫く、自分と同じ姿の少女を鏡越しに見つめていたが、ふと、頭に一つの考えが浮かぶ。

「ねえ、ちよつとお願いがあるんだけど」

鏡に映る着物に見とれていたトリナは、振り返って色把の顔を見つめる。

「私の代わりに、布団に横になっていて欲しいの」

「布団に？ どうして？」

トリナは小鳥のように首をかしげる。その所作一つ取っても、鏡が勝手に動いているような気がし、妙な感覚を覚えるのだった。

真夜中に、従者が自室の様子を監視に来ることは知っている。布団の中でおとなしく眠っているのかを確認しに来るのだ。

そこに、自分と瓜二つの少女が眠っていれば、誰も自分が屋敷を抜け出した事は分らないはずなのである。

「いいから、お願い。そうしたら、この部屋の髪飾りを一つあげるわ」

そう言いながら、一つの引き出しを引っ張り出す。金、銀をあしらった絢爛な髪飾りがずらりと並んでいる。

トリナは、その様子に目を見開き、息を呑みこんだ。ここまで煌びやかな装飾品を見たことが無いようだ。だが、それでもトリナは返事に逡巡しているようだった。

「ねえ、良いでしょう？」

にっこりとトリナに笑いかけると、トリナはおずおずとした様子で頷いた。

トリナは、色把の寝巻きを着て身代わりに布団に入った。しきりに布団の柔らかさに感動を覚え、トリナ自身が満足をしているよう

だった。ニコニコと大人しく布団に包まっている。

「いい？ 誰かが来たら、眠ったフリをするのよ」

トリナに釘を刺すと、真面目な顔で頷き返す。その返事に満足し、色把は先ほどトリナを招き入れた廊下に出る。

渡り廊下から、手すりを乗り越え、庭園へと足を踏み入れた。

何時も琴の習い事を行っている窓から見ただけの庭園だ。美しい松も、裸足で歩くと痛そうだと思っていた白い砂利も、明るい昼に見えていたものとは全く違う様子を見せる。松は黒い影となり、不気味な生き物に見える。足を踏み出した砂利も、感触がただただ心地が良かった。

普段なら許されるはずのない外出。それも真夜中に一人きりで、不気味な庭園を歩いている事に、色把は今までに無いほど高ぶっていた。

（前に覗こうとして怒られた池に行ってみよう。その後は、雑木林の近くの庵を見に行こう）

草木の間を走りぬけ、池の傍らに座り込み、着物は随分と汚れてしまった。手の平も土で真っ黒になってしまったが、それが色把にとっては新鮮で仕方が無かった。

家に縛り付けられていた稽古の合間に、やりたいと思っていた事が無数に湧き上がってくる。

しかし、その時間も長くは続かなかった。

それは突然の事だった。

「こんな所に居やがったのか」

背後から降りかかる、低い声。只ならぬ雰囲気、足を止め、ゆ



つくりと振り返る。

一人の男が、自身の背後に立っていた。知った顔ではない。本家の者の服装とも違う。目は爛爛と輝き、浅黒い肌に顔に走っている古傷。爛々と不気味に光る目は色把の身を包む着物を睨めつける。

「その着物……本家の物に手を出しやがったな」

大きな手の平が自分に向かってくる。一瞬にして恐怖を感じ取り、叫び声を上げようと口が開く。

だが、開いた口は声を上げる前に塞がれ、体を軽々と担ぎ上げられる。男の足は風のように早く、あっという間に庭の奥の雑木林に連れ込まれた。

雑木林の中には、何の変哲も無い薄汚れた岩が立っており、そのすぐ脇には、目を凝らさなくては分からないほど地面に同化している石の蓋がはまっていた。

男がそれを持ち上げると、地下へと続く階段が現れる。

地下へとあっという間に連れ去られ、一番奥の牢屋に放り込まれてから暫くの間時間がたった。おそらく、もう外は明るみ始めている時間だろう。

だが、ここは地下で、勿論窓は無く、時間の感覚も殆ど無かった。今まで嗅いだことの無いような酷い臭いに顔をしかめる。何処も彼処も泥か何かで黒く汚れている。

「一体、何なの……ここは」

つぶやいた言葉は、不気味に壁を反射しては掻き消えていった。空気自体が澱んでいる気がして、色把は出来るだけ息を深く吸い込まぬように意識した。

一人つきりになつてから暫くの間を置いて、目の前に現れた男に向かつて、堪らずに色把は叫んだ。

「私をこんな所に閉じ込めて、ただで済むと思っているの！ お婆様に言いつけてやる！」

牢の鉄柵にすがりつくようにして、声を張り上げる。

「少し牢を出ただけで、知恵を付けたらしいな。自分が色把だと言ひ張つていやがる」

顔に傷を持つ男は、自分の顔を見ると、にやりと笑う。

「私は色把よ！ 他に何があるつて言うの！」

男は恐ろしい。だが、恐怖心を押し隠して声を張り上げる。だが、そんな様子も男は見抜いているようだった。

「おかしいなあ。色把お嬢様は、現在も確かに本家にいらつしやるはずだ。お可哀相に、今は怪我を負つて、丁重に看病されているそうだけ。色把と名を呼ばれて、確かに反応したそうだ」

首を捻り、勿体ぶつたわざとらしい言い回し。色把は男に食いかかるように更に叫ぶ。

「嘘よ！ あの子はトリナ！ 私と同じ顔をした偽者よ！ 私に成り代わっているんだわ！ お婆様が私を見たら、すぐに本物だと分かるはず！ 早く私をここから出さない！」

突如、牢の隙間から力強い手が伸び、自身の細い首を鷲？みにした。息が吸えずに、目を見開いた。

「ギヤーギヤー喚くんじゃねえ。お前が本物だろうが、偽者だろうが、ここを知つちまつた以上もう戻れやしねえ。間違えて本物を捕らえたなんて上に知れたら、それこそ俺たちの首が飛ぶ。本家には今も色把と名乗るガキがいる。周りもそれを色把と認めている。それで十分だ。……今からお前の名は「取那」だ。二度と色把と名乗るんじゃねえ」

ギリギリと絞まる首。空気を求めて口が大きく開く。

「死にたいか？」

目の前が暗くなつてきて、思わず首を横に振った。開放される自

身の首。ゲホゲホと咳き込み、ようやく息を吸い込めた。

「……確認だ。お前の名は」

「……」

認めたくは無かった。男の顔を見上げ、睨みつけるも、微動だにしない。男の腕に力がこめられる。間違った答えを言えば、間違はなく首をへし折られるのだろう。

「……取那」

「そつだ。それでいい」

見下す男の視線が痛い。両の手を握ると、手の平に爪が突き刺さった。

（許せない）

男が立ち去った後に心中に広がる真つ黒な感情。

今しがた起きた出来事を全て理解したわけではない。だが、あの少女に、自分が持ちえていたもの全てを奪われたことを、徐々に理解し始めていた。

窓から見える金木犀も、床に散らばったお手玉も、部屋一杯に用意された絢爛な着物も、全てがあの子の少女の物。

（許せない 許せない！ 許せない！）

こんな変化を望んでいたのではない。判で押したような不変な日々々に、僅かな楽しみが欲しかっただけなのだ。

（本物は私！ 本物は私なのに！）

叫びたくなる衝動を抑えると、代わりに熱い涙が溢れ出した。

（絶対に、抜け出してやる）

あの少女が、自分の全てを奪ったことを後悔させてやる。薄暗い牢の中、沸々と湧き上がる感情は、自身の心を焼いていくのを感じていた。

3 17 悲劇の始まり(前書き)

性的描写が含まれます。苦手な方はご注意ください。

### 3 17 悲劇の始まり

自分の名前を奪われ、暗い牢に囚われて、かなりの時間が経過した。何年経ったのか、既に自分では把握が出来無いほど、長い間閉じ込められていた気がする。

「飯だ」

牢の前に、ボロボロに剥げた塗り盆が置かれる。その上には、欠けた茶碗に粗末な食事が置いてある。

「食え」

はき捨てられる言葉。未だ、この牢を脱出する意志を失ったわけではない。盆の上の食事を一瞥し、男を睨み付けた。

「いらぬわ」

自身の態度に舌打ちをし苛立った様子を見せる男。度々、こうしてやってくる男たちの命令に背くことも少なくなかった。

そして今も、男とにらみ合う状況が続いたが、突如、状況が一変した。

食器の割れる音、散らばる食物。足を振り上げ、牢屋の扉を蹴り倒す。耳を劈くような激しい音が辺りに響き渡る。取那の体は萎縮する。

その間に、男は乱暴に牢の中に足を踏み入れ、取那の襟を掴み上げる。

「囚われた身の分際で、生意気な口を利くんじゃねえ！」

男の右手が頬を打つ。突然の衝撃に、体は反応できず、畳に倒れこんだ。

思わず、小さく悲鳴が洩れる。

ハツと体を上げた。倒れこんだ事で、裾が大きくめくりあがつてしまったのだ。あわてて裾を正すが、男の目線は自身の足元を漂っている。

「……ほう、随分と女らしい体になってきたじゃないか」

凶暴な瞳。無精髭が生えた口の唇を、ねっとり舌が這い回った。「少々仕置きしてやるうか」

初めは、何をされるのか全く分からなかった。

胸元に伸びる太い腕。着物の襟元を掴まれ、そのまま肩よりも下に引き下ろされた。そのまま乱暴に着物を剥ぎ取ると、覆いかぶさってくる男。

呼吸も止まるかと思うほど、あまりの恐怖に声も出ない。

「喚くんじゃねえぞ」

露になった肌を隠そうとした両腕を乱暴に引っ張られる。痛みに思わず顔をしかめた。

体の曲線を、ガサガサとした手がなぞり、背中を虫が這い回るような嫌悪を感じる。だが、声を上げれば、身の保障は無い。

男が何をしようとしているのか、全く見当が付かなかった。だが、目の前の男は自分に、何か『嫌なこと』を行おうとしていることは本能的にわかった。

身を振り、必死に抵抗をするも、男の力にかなうはずも無い。先ほどよりも体を弄ってくる力が強まった。

男は無言だ。目だけは妙にぎらぎらとしており、それが更に自身の恐怖心を掻き立てる。

(一体……何)

呼吸は乱れ、心音は激しく波打っている。両腕を頭の上で固定され、引つかいて抵抗することも出来ない。足を振り上げ逃れようとするが、男が太腿に乗り上げ、最早床に縛り付けられたような状態だ。

「……………」

男の手が、舌が、体の上を這いまわり、獣のような熱い息が肌に吹きかかる。その度に叫びだしたいのを必死に堪えた。

取那はぼろ布のような着物を纏っていたが、それは既に男の手によつて引き裂かれてしまった。男は動きやすいように洋服に身を包んでいたが、器用に片手で釦を外し、上半身を露にさせる。

目はあちらこちらに泳ぎ、何をされるのか分からない恐怖に、息は不規則に乱れていた。

何度も腕に力を込めるが、その度に押さえつけている男の力が増す。

突如、男の手が自身の太腿の奥へ移動し、思わず声を張り上げた。これ以上男の行為を許せば、何かを失ってしまう。何故かそう思った。

「い、嫌だ……！ 嫌だ！ 嫌だ！」

男の手が細い腕に食い込もうと、金切り声を上げ、なりふり構わず抵抗を見せる。だが、自身の反応とは裏腹に、男の開いた口からは鋭い歯が覗く。

「そうだ。いいぞ、楽しませてくれ」

どんなに苦しみの声を上げようと、絶望の表情を浮かべようと、男の手は止むことはない。今まで触れられたことの無い領域に、汚い男の手が侵入していると思うと、不快感だけでは言い表せない感情が、体の中を駆けずり回るのだった。自身に男を退ける力が無いのは痛いほど承知している。ならば、唯々この苦しい時間が早く過ぎ去ることだけを祈るだけだった。

だが、苦しみは、まだ終わらない。

男の手がぴたりと止む。男の下品な笑みが、自身の顔を舐め取るように見つめている。屹立した男性自身を目にするのは初めてのことだ。しかし、自身はそれを捉える余裕も無い。

次の瞬間、膝を無理やりに押し広げられ、男が、侵入してくる。頭を大きく振り、声を限りに張り上げた。

痛い 痛い 痛い 痛い 痛い！

何度、同じ言葉を吐いただろう。成熟していない体で受け入れる事など出来はしなかった。

それでも男の行為は止まない。内側を抉られるような痛みと、胃液が込みあがるような不快感に身を裂かれ、取那の悲痛な声は、いつまでも響き渡り続けた。



友禅の顔色は真っ青だ。長い長い話に、負傷した身体が悲鳴を上げ始めているのだらう。だが顔色が優れないのは、怪我の所為だけでも無いようだ。

「以上です。彼女の身に起きた出来事は、あまりにも、辛すぎる……」

頭をゆるゆると振る友禅。閉じ込められていた少女と入れ替わった取那は、それからと言うもの、毎晩のように弊履の男達の餌食となっていたのだ。

友禅の瞳は、色把の俯いた顔を捉えていた。

「色把さん……貴女にこれをお話して、本当に良かったのか、私には分かりません……。過去の出来事にも触れず、このままを過ごしていた方が幸せだったのかもしれない」

皆の視線は色把に注がれている。色把は膝に重ねて置いてある自分の手を見つめていた。

『私と、取那は双子……なのでしょうが  
顔を上げた色把と友禅の目が合う。』

「おそらく、そうなのでしょう。ですが、何故双子を引き離し、一人を牢に閉じ込めていたのか……」

その時、哭士の脳裏に、ある人物の言葉が浮かび上がる。

本物の【神】の器が手に入れば問題は無い。

何故か、その言葉が哭士に蘇ってきた。

「【神】の、器……？」

一番部屋の置くで呟いた哭士の言葉に、全員が振り返った。

「廃工場での……レキの言葉ですね」

菊塵も思い出したようだ。レキは取那を捕らえ、『本物の【神】の器』と言ったのだ。菊塵の表情がみるみる強張っていく。菊塵が色把を見つめる。

「色把さん、貴女も聞いたはずです。……貴女のお婆様の墓前で彩子様の言葉を」

【神】は、百年の間に朽ちた体を再生させるために、若い娘の身体……『器』を欲するのです。身体を挿げ替えながら、何年も……何百年も……

「何だ……それは」

哭士は耳を疑った。そのようなモノが存在して良いはずなど無い。それは最早、【神】ではなく化け物だ。

「色把さんのお婆様、今日子様は貴女が【神】の器にされることを懸念し、友禅さんとの婚約を取り付けた」

菊塵が静かに語る。

「だが、それだけではおかしい。双子だと知っていたのなら、二人とも【神】の器にされる危険性がある。なのに、今日子様は、色把さんの縁談だけを取り付けた……」

眉間に人差し指を当てる菊塵。修造が静かに口を開く。

「僕も、比良野家に生まれたのは女兒一人だと聞いておった。双子など、始めて聞く」

「比良野 今日様さんは、色把さんが双子だと言うことを知らなかった……？」

友禅が、全員の顔を見ながら語る。

「そういう事になります。ならば、誰なのでしょう。肉親に双子だと知られる前に、一人を牢に幽閉することが出来る人物とは……」

「ミヨ……様」

友禅の額からは脂汗が滴り落ちる。友禅の言葉は、深く、全員の耳に届いた。友禅を、忌家に捕らえた張本人。

「黒古志 御世。本家当主の補佐を務めている者じゃな……。そうじゃ、あの方は、比良野家の籠女の出産に立ち会っておる！」

全員が修造の言葉に顔を上げた。

「ってことは、その御世って奴が生まれた双子の一人を、隠したって事か……？ 母親はそれを黙って見ていたのか？」

ユーリの言葉に、色把が口を開く。

『私のお母様は、出産の直後に気を失ってしまったそうです。生まれた直後の子供を、抱くことは出来なかった……。そう、聞いています。そのお母様も、私が幼い時に、病気で亡くなったと……。』

母親に関する記憶が無い色把は、人から聞いたことが全てである。自身の記憶では無いせいかどこか口調が不安げである。

「ならば、その御世が双子を隠すことが出来た可能性が高いという事か……」

菊塵が眼鏡を中指で持ち上げる。

「だが、何の為だ。わざわざ双子を引き離す理由があるというのか」

「それについては、私からお話しましょう」

病室の扉が開き、一人の女性が現れた。

桐生の妻、桐生 彩子だった。彩子が病室に足を踏み入れると同時に、空気が引き締まるのを哭士は感じた。

この人物の纏う雰囲気は、只者ではない。病室内の数人がそれを感じ取っているようだった。

哭士の思いに気付いているのかいないのか、友禅のベッドの傍らに立ち、彩子は語り始める。

「保守派の思想を持っている本家は、【神】の望むとおりに行動します。【神】が欲する器というのは、若い女の籠女でなくてはなりません。そして、その器が生まれるとき、【神】がその時期を言い放つのです」

色把と取那の出生が、丁度その時期に重なったのだろう。

「ですが、その生まれた子供が双子だった場合、先に生まれた子供を【神】の器とし、もう一人の子供を、忌家に置くのです」

『本物の【神】の器』……レキは初めから取那を狙っていたのだ。「同じ力を持つ双子が同じ場所に存在すれば、【神】がその双子に宿り、力が二つに分かれてしまうと、そう考えられてきました。だから、双子の片割れは不要なもの、『忌み者』として、忌家に捨てられるのです」

彩子の言葉に、色把の体が大きく強張る。その様子に、ハツとした表情をする彩子。

「まさか、貴女が忌家に囚われていた方の双子だったなんて……」

彩子は口に手を当て、俯いた。その表情から、僅かに失望の念が現れた事を哭士は感じ取った。

「貴女は、知っていたのですか……？ 彼女が双子だったということ……」

菊塵の口調は、何時も通り静かなものではあったが、纏う雰囲気は全く違う。沸々とわきあがる感情を押さえ込んでいるようだった。「ええ」

俯いたまま、彩子は答える。

「勿論、双子の一人が忌家に囚われていたという事も……」  
「存じ上げていました」

「何故！」

菊塵の目が大きく見開かれる。立ち上がった勢いで、菊塵の掛けていた椅子が音を立てて倒れた。静かな部屋には、その音が割れるように響き渡る。

「何故、それを今まで……！」

革新派の狗鬼らに伝えられていなかったのか。菊塵が全てを叫ばずとも、言わんとしていることを全員が理解した。菊塵の拳は強く握り締められ、こめられた力でぶるぶると震えていた。

「【神】を手に入れるためには、仕方が無いことなのです」

「……！」

全員、彩子の言葉に、声を失った。

「そんな……そんな事の為に、見て見ぬふりをしていたというのか！  
生まれながらに囚われた少女を！」

珍しく菊塵の声が荒く。だが、そんな菊塵の様子にも、彩子は動じる気配は無い。

「狗鬼や籠女を生み出した【神】さえ手に入れば、今まで分からなかった狗鬼の特性を解明できるかもしれない。これは、人類にとつて大きな歩み。その為には、多少の犠牲は……」

彩子の言葉がピタリと止む。部屋の奥から湧き上がる、目に見えないような殺気を感じ取ったのだろう。

「哭士……」

殺気の主、哭士の双眸は、彩子を捉えて離さない。ふと、哭士の

胸にやんわりと何かが当てがわれる。

胸に当たったのは修造の手だ。皺が刻まれた瞼の奥の瞳は、何も語らずとも哭士を制していた。哭士は強張った肩から力を僅かに抜いた。

「私は、この考えを曲げるつもりはございません」

毅然とした態度は、崩れることは無い。

「修造様」

まっすぐな背筋、まっすぐな視線が修造に向けられた。年老いても尚鋭い瞳は、やはり早池峰の血を思わせる。

「革新派の指導者として、命じます。ここに居る狗鬼達を、寄ヶ濱村へ向かわせなさい」

哭士、色把、友禅が僅かに反応を見せる。

「……儂が命じたとして、素直に従う者らとお思いかね」

この者らを見よ、とばかりに周囲に立っている若い狗鬼らを見渡した。

皆、じつと彩子の顔を見つめている。だが、その表情は不信感に満ちていた。

彩子の口元が歪む。

「あなた方は、もう一人の双子を救いに行くのでしょうか。【神】の器にさせない為、【神】から本物の『色把様』を奪い取る為に」

色把の肩が大きくびくつく。自分を抱きしめるように、小さくうずくまった。それを見つめる彩子の、胸の前で組まれた腕は頑なだった。

彩子の泰然とした様子からは、心中を察することは出来なかった。同じく心中を察することの出来ない桐生と、この妻。状況は同じであれ、与える印象は間逆のものだった。

「よく、お考えになることです。貴方たちが行き着くところは、私たち革新派と同じであるという事を」

くるりと踵を返すと、去り際に色把に言い放つ。

「それでは、失礼いたしますわ。……『色把』様」  
扉の音が冷たく響き渡った。

### 3 19 ・ 真実の痛み

沈黙が、耳に刺さるほど痛い。

「色把さん、大丈夫ですか」

無論、大丈夫なはずは無い。だが、うずくまっていた色把は、ゆっくりと頭を持ち上げ、椅子から立ち上がった。

「少し、外の風に当たってきます」

立ち上がった色把の足は、覚束ない。青白い顔で、友禅に向き直る。

「ありがとうございます。全てをお話していただいて……」

ぺこりと頭を下げ、少し早足で、俯いたまま友禅の病室を出て行った。誰の目から見ても、相当な衝撃を受けているのは確かだった。だがそれを押し隠そうとしている事も良く分かった。

色把の気配は、部屋を出た瞬間から遠ざかる速さが増した。

「哭土！」

次の瞬間には、哭土も病室を飛び出していた。

扉を開いた瞬間、冷たい風が吹きつけ、色把の前髪を揺らした。バタバタと激しい音が絶え間なく続いている。一面、竿に掛けられたベッドシートが風に煽られ靡いていた。

シートが掛けられている竿の高さは僅かに色把の頭の上辺り。規



則的に並べられたシーツの壁の間を色把は進む。

先ほどの友禪が語った言葉たちが色把の脳裏を巡り、怒気孕んだ表情で見つめる取那が自分を見つめている。

本当の『取那』は、私。

暗闇の中一人、何年も過ごすというのは、どのようなものなのだろう。

自分もかつてその場所に居たらしい。その時、自分はどんな表情で過ごしていたのだろう。思い出そうとしても、頭が痛むだけだった。ただ、暗く陰鬱な空気は、何故か手に取るように分かる。記憶は失われていても、肌で感じ取った感覚は、必死に色把の脳から記憶を引き出そうとしている。

毎夜のように、違う男達に陵辱され、いたぶり続けられる苦しみは、色把には計り知れなかった。本当であれば、自分がそのような目に遭っていたはずなのである。

私のすべてを奪って、それでも邪魔をしようつていうのか…

…！

かつて、色把に刃物を向けて襲い掛かった取那。取那が歩むはずだった人生を、自分がこうして成り代わっているのだ。記憶が無かったという理由があっても、取那の傷が癒えるわけではない。どうすることも出来なかったとはいえ、語られた現実には、重く色把にのしかかる。

胸がひくついて、息を吐き出せない。開いた口が息を吸い込むたびに、目からは熱いものがこぼれる。

絶え間なく、無数のシーツがはためいている。吹き付ける冷たい風も、深い思いに支配され今の色把が感じることは無かった。どう

しよつもない悲しみを何処にもぶつけられずに、色把の心中は激しく揺れ動いている。

「おい」

ふと、自分に呼びかける声が聞こえ、色把は振り返った。

そこには、自分を幾度も救ってくれた、狗鬼が一人。哭士が、後を追いかけてきたのだ。

どんな事実でも受け入れる、と友禅に語った手前である。それなのにこうして病室を無理やりに逃げ出すように抜けてきた自分を情けないとさえ思う。

顔を合わせられない。咄嗟に色把はそう思った。

ポロポロとこぼれる涙は、まだ止まらない。袖で顔を隠すようにして、シーツの壁の間をすり抜けようとした。

だが。

相当に距離が離れていたはずだったが、がしり、と左腕を掴まれ

た。力強く、だが色把の腕を痛めぬ為か掴む手の感触は柔らかいものだった。左腕を引いても、色把の腕は抜けない。

それでも、色把は哭士の方に振り向けずに居た。

「色把」

哭士が名を呼ぶ。声からは何の感情も読み取ることは出来なかった。腕を後ろに引かれた状態のまま、色把は横にゆるゆると首を振った。

「……………」

二人の間に、沈黙が流れる。

突如、強く腕を引かれ、くるりと体が反転する。ぱっちり哭士と目が合ってしまった。色把の両目から零れるものに、一度困ったように視線を泳がせたが、その後はじつと色把の両目を見つめる。不機嫌そうな表情は、困惑している事を押し隠すためのものであるというのを、色把は最近知った。

猛禽を思わせるような鋭い目は、初めて会った時不思議と恐怖を感じなかった。そして今も、哭士の瞳は、色把自身の堆積していた感情を一気に押し流させる切欠にもなった。押さえようとしていた涙腺が、一気に開放される。

『私は……………要らない片割れだったんだ……………!!』

視界が歪んでいくのが分かる。

『あの子が……………! あんな……………あんな仕打ちを受けていたなんて……………!』

……! 本当は私がそうなっていたはずなのに……………!』  
言葉を発しようとする唇も戦慄いて、うまく伝えられたかどうかすら危うい。

押し殺していた感情が一気に決壊し、膝から崩れ落ちそうになる色把の体を、咄嗟に哭士が抱きとめる。色把は哭士の胸元の服を掴んだ。額に当たる胸板は硬く、がっしりとしていた。

普段の哭士ならば、すぐに自分の体から色把を引き離すであろう。だが、なぜか哭士は色把の体に手を回したまま動こうとしない。

情けない事に、今の色把は幼子のようにしゃくりあげ、一人で立っていることも、言葉を伝えることも難しい。おそらく、哭士当人もどう言葉を掛けていいのか分からないのだろう。

だが、優しい言葉や、頭を撫でる手は無くとも、力のこめられる二本の腕から、哭士が自分を想っている事が十分伝わってくる。哭士は色把が落ち着くまで、このままの状態で居てくれるようだった。早池峰家にやってきた当初は、弱い自分を見せまいと自分を押し隠していたが、今は随分弱くなってしまったと感じる。だが今は素直に、哭士のそれに甘えることにした。

震える体を押さえつけるように、哭士の胸に顔を押し付けた。抵抗する様子も無く、色把を受け入れる哭士。

二人以外に誰も居ない冷たい屋上で、哭士の腕だけが色把に体温を伝え、少しずつ、落ち着きを取り戻していった。

体の震えも治まり、色把は大きく息を吐き出した。

色把の背中に回っていた哭士の手が一度離れ、ぐい、と色把の手を引く。状況をつかめぬまま、哭士にされるがままにしていると、色把の左手に何かを握らせた。

ゆつくりと哭士から体を離し、握られた手を開く。

手の平に転がる、一つの石。ひんやりとした感覚が手の平に広がるが、握り締めると命を持っているようにほんのりと暖かい。ただの石とは違う、不思議な感触だった。

『これは……』

見上げる色把、哭士はわざとそっぽを向くようにして言い放つ。

「……俺の狗石だ」

目を見開き、手の平の石を見つめる。自身を操られる危険を負う為に、狗鬼らは必死にこの石を隠す。その石が、今時分の手の中にある。

「お前が守れ。それがお前の役目だ」

相変わらず哭士の発する言葉は少ない。

だが、渡された哭士の狗石に、自分は不要の者ではない、自分の全てを託すと、そう言われている気がした。

色把の頬に、先ほどとは違う涙が伝う。だが色把は袖口で乱暴にそれを拭うと、左手に光る小さな石を握り締め、哭士の目を見つめると、一度大きく頷いた。

### 3 20 ・混ざり合った血

桐生から聞かされた事実は、苑司にとっては信じられないことばかりだった。

「僕が、狗鬼に……ですか？」

桐生から粗方の狗鬼、籠女の説明を受け、最終的に自分も狗鬼になっている、との話をされて、苑司は思わず頓狂な声を上げた。

狗鬼といえば、哭士や菊塵、そしてユーリのように、人間の身体能力を超越した者達の事であると苑司は認識していた。そうは言われても、自分が哭士らのように体を動かすことなど出来ないような気がした。

「まあ、一時的な物だけだね」

そう言いながら、桐生は回転椅子の背もたれに身を埋めたまま、苑司にくるりと向き直った。診療所に居るときよりも、貫禄があるように見えてしまうのは、ここが立派な施設のある病院だからだろうか。

「君は、あの夜、影鬼の爪を受けて死に掛けたの。覚えてる？」

瀕死になっている影鬼を覗き込んだユーリ。油断をしていたその隙に、影鬼はユーリに襲い掛かった。咄嗟に苑司はユーリに体当たりをし、自分が身代わりになったのだ。

「はい。覚えています」

「その後、色把さんの血を与えられるも、あまりの重傷に血が足りずに、一旦籠女の血による治療は断念。その後、ある狗鬼の血が君の体に投与された」

桐生は、啞然としている苑司を他所に、いつも通りの優しい笑みを浮かべると、肩越しに振り返る。

「ねえ、ユーリ君。立ち聞きしていないで出てきたらどう？」

ばつの悪そうな表情を浮かべ、カーテンの後ろからユーリが姿を現した。

「ユーリ……」

苑司に視線を合わせようとせず、小さく「よう」と声を掛ける。

「君の体には、色把さんの血と、ユーリ君の血が入り込んだわけだね。通常、籠女の血のみ、もしくは狗鬼の血のみが人間の体内に侵入しても、なんら問題は無いんだよ。ま、籠女の血が混ざりこめば、体の傷が治癒するのは知つてのとおりだけれどね」

桐生が話し込んでいる間に、ユーリは傍らの簡易ベッドに腰掛け。普段の飄々とした態度は何処へやら、神妙な面持ちで座り込んでいる。

「で、話は戻るけど、籠女と狗鬼の血が人間の体内で混ざり合うと、その人間は狗鬼になる。ただ、契約も必要ない、狗石も持たない、本物の狗鬼よりも力の弱い、いわば、仮の狗鬼になるわけ。もつと大量の血が混ざり合って体内に入れば別だけれどね。そのまま狗鬼として一生を過ごした人間も過去には居たみたいだね」

「仮の狗鬼……。それが、今の僕の状態って事ですか？」

「そ、そ」

話が早くて助かるよ、と桐生は呟く。苑司は、右手を握り、開く動作を何度か繰り返してみたが、やはり実感が湧かない。

「やっぱり、まだ感覚は無いでしょう？ ほらっ」

「わっ！」

笑顔を絶やさぬまま桐生が何かを放り投げ、咄嗟に上半身を振り避ける。

床に落ちたのは、先の尖った万年筆だ。

「ま、万年筆なんて……！」

「ああ、大丈夫大丈夫。それね、先が曲がっちゃって書けなくなつたやつだから」

そうじゃなくて……と、という言葉で苑司は口に出せなかった。

「ま、冗談はさておいてだね。今までの君だったら、この距離で放たれた物を知覚した時点で顔に刺さっていたはずだよ。右目かほつぺた辺りかなあ」

「……」

一つ間違えば 大怪我に繋がる危険な事やってのけ、軽く笑い声を上げる桐生に、苑司は軽い恐怖心にも似た感情を覚える。

「今、君は子供の狗鬼ととても良く似ているんだ。力の加減が分からずに人間の生活をしていても、ふっと狗鬼の力が出てしまう。哭士君も子供の頃は良く床を踏み抜いたり、ドアノブをねじ切ったりしてしまつてたしね。君もたぶん、加減を覚えるまではそうなつてしまつから、その事を念頭に置いて、注意して生活して欲しいんだ」

「注意つていつたつて……」

めまぐるしい説明の数々に、正直、付いていけないのが現状だ。

「ああ、そうそう。君に付着していた影鬼を寄せる薬の事だけれど」

ぼん、と膝を打つ桐生。まだ何かあるのかと、思わず身構える苑司。

「君が狗鬼になつた事で、薬の効果は無くなつたと言つていいよ。狗鬼が影鬼を遠ざける力と相殺したみたいだね」

「ほ、本当ですか！」

ようやく自分にとっての朗報が聞け、苑司の声が上ずる。桐生は大きく頷く。

「後は、代謝を繰り返すことで、体の中の狗鬼の血は薄まっていくな。また人に戻っていくから、安心して頂戴」

そう言つて、手に持っていたカルテを机の上にやんわりと置いた。傍らで座っていたユーリは、先の桐生の言葉に少しだけ強張つた表情が和らいでいた。



と、机の上の白い内線用の電話が鳴る。のんびりとした動作で電話を取った桐生は、何度か相槌を打ち、『今行くよ』と締めた。「じゃ、説明はここまで。暫くは体を休めて、狗鬼の力に慣れること。それだけだね」

につこりと最後に一番の笑顔を見せ、桐生は診察室を後にした。

「ユーリ」

「ん」

未だ、ぼんやりとしているユーリに、苑司は声をかける。よく見ると、体の至る所に包帯やガーゼが当てられている。あの日、全身に相当の怪我を負ったらしい。

「あの、どうもありがとう」

ユーリが自分に血を分けなければ、今、苑司はこの場に立っていないのだ。

「んな、礼なんて言うなよ」

「え、でも……」

「結果的には良かったかもしれない。だけどよ、もしかしたらお前はこれからの一生を狗鬼として生きていく事になってたかもしれない。恨まねはしても、礼を言われる筋合いなんてねえよ」

長い指をぶっさらばつに振るユーリ。顔には渋い表情が浮かんでいる。

「だって、僕のことを助けようとしてくれたんでしょ？ それだけでも、僕は嬉しいよ」

ユーリの顔が上げられ、蒼い目がようやく苑司を捉えた。鼻から大きく息を吐き出す。

「なんつーか、さ。お前とか色扱みたいな奴の事を、お人よしって言うんだろうな」

毒気を抜かれたような表情になり、ユーリの顔が緩まった。「なんだよ、それ」と苑司が笑う。

「でも、本当に良かったって思ってる。また、父さんや母さんに会えるんだから」

父、母、という言葉に、ユーリの片眉がぴくりと反応する。

「……親、ねえ」

表情が曇っているのが良く分かる。

「親って、そんなにいいモンか？」

首をかしげるユーリ。その表情には、特に嫌悪や憎悪といったものは見られないが、苑司はその反応に違和感を覚えた。

「ユーリは、そう思わないの？」

不思議そうな表情を浮かべているユーリに、苑司も思わずユーリに問いかける。

「あんま、実感したことねえなあ」

簡易ベッドに深く腰掛けなおし、ユーリは大きく息を吐き出した。

「ユーリの家族は？ 前、哭土君の家でアキさんとの出会いは聞いたけど、そういえば、家族のことは聞いていないね」

ふと苑司は、早池峰家でのユーリとの会話を思い出したのだった。かつて、ユーリはアキとの出会いを普段の調子で苑司に語ったのだった。



### 3 21・アキとの出会い

苑司が早池峰家に世話になってから数日。アキに無理矢理連れ戻されたにも関わらず、懲りずにユーリは早池峰家に足を運んだ。

まるで我が家のように振舞うユーリに、最初は困惑したものの、徐々にその騒がしさにも慣れていった。

哭士は修造の警護について、日中、家に居ない事がたまにある。そういった時、広い屋敷に、ユーリ、苑司、色把と、家政婦のマキ。家人が全く居ない不自然な空間が出来上がるのだ。

色把は、マキの手伝いでこまごまと家の中を走り回り、広い居間には、居候の身である苑司と、ちよくちよく転がり込んでくるユーリの二人が陣取る形になる。

「ねえ、ユーリ、さん？」

卓に大人しくついている苑司は、長い体を縁側に横たえながら頬杖を突いているユーリに声を掛ける。縁側で丸まっている三毛猫にちよっかいを出しているようだ。

「呼び捨てでいいって。どうせ同じ歳くらいだろ？」

苑司には見向きもしないまま、猫の尻尾をつついてる。

「んと、じゃあ、ユーリ」

「んー？」

尻尾を触られるのを嫌がる猫がユーリの手を叩こうとする。すんでの所で手を引いてはまた尻尾を触る、という事を繰り返しているユーリの返事には身が入っていない。

「毎日のように来ているけど、学校は？ まあ、僕も人のことは言えないんだけど……」

影鬼を寄せる体質になつてしまったことで、あまり外にも出られない苑司は、おずおずとユーリに問いかけてみた。

「ああ、俺、学生じゃないんだよね。一応仕事はしてるんだぜ、これでも」

そう言つて、ようやく苑司の方に視線を寄越すと、にやりと笑みを浮かべた。

苑司に対し、ユーリは「黒服つて知ってるか？」と問う。

水商売のスタッフのようなものを想像したと答えると、ユーリは何度か頷いた。

「つつても、給仕はしねえんだ。盛り場の入り口に立つて身体検査とかする警備の方ね。大抵の揉め事は俺一人で収められるし」

そのまま猫を抱き上げて仰向けに転がるユーリ。驚いた猫が短く鳴いた。

警備と聞いても、あまりピンと来ない。細身の体に筋肉が付いている哭士とは異なり、猫を抱き上げているユーリの腕は白く、血管が浮き出している。太さも平均的で、細い体でそんな事が出来ていたのかと不思議に思う。ユーリはその仕事を十五歳からやっていると話した。

「昔から身長もあつたし、この見た目だと、誰も年齢なんて当てられないのな」

ユーリはケラケラと笑つた。十五の歳から、年齢を偽つて仕事をしていたらしい。

「アキさんとは、どうして知り合つたの？」

苑司の言葉に、ユーリが咽<sup>むせ</sup>る。床に放られた猫は、逃げるように去つていくと同時に鈴の音も遠くなる。咳がようやく落ち着いたユーリは笑いながら、むくりと起き上がる。

「……あれは交通事故みたいなもんだ」

苦笑を浮かべながらのユーリの妙な例えに、苑司は首を捻る。

「帰り道にさ、知り合いにそっくりだと思って、声掛けながら、後ろから抱きついたんだよね。……そしたら、それが アキだった。そっからの付き合いだ」

その後、ユーリは物思いにふけるように、一瞬静かになった。

「二年半くらい前かなあ……」

一人言のようにユーリが呟いた。

仕事を終え、ユーリは何時ものようにふらりと待ちを歩いていた。道の至る所に客待ちのタクシーが何台も連なってはじわじわと動いている。そのタクシーの間を縫うように、深いスリットのドレスを着た化粧の濃い女や、程よく酔いが回っているサラリーマン、我が物顔で騒ぎ立てている若者たちが歩き、更に夜は更けていく。

店の前に立つ客引きに、何人が顔見知りを見つけ、軽く手を振る。いつもと変わらぬ風景に、ユーリは退屈と安心の中間の感情を覚える。

だが、今日ばかりは、その見慣れた風景に、一瞬だけ違うものが映りこむ。

スナックが何件も入っているビルの影に、この場に似つかわしくない少女がちらりと姿を現したのだ。

その少女は、ユーリにとって、非常に見覚えのある顔のように思えた。思わず足が速まり、少女が姿を消したビルの間を足を踏み入れる。

ビルの合間を抜ければ、風景はがらりと変わり、切れかけた街頭がぼつぼつと立ち並ぶ裏路地となる。

路地に出て、周囲を見渡せば、また少女の後姿だけがユーリの視界に一瞬だけ写り、また消える。

「ちーひろっ！ 何やってんだ？ こんな夜遅くに出歩いたら危ないだろうが〜！」

半ばおどけた様子で、背後から抱きつく。

朱崎 千尋。ユーリの腹違いの妹の名だ。まだ明るいうちに、何度か妹を引き連れてこの近辺を歩き、働いている店を教えたことがあった。もしかしたら、妹は自分を探しにこの場に来てしまったのかも知れない、と思ったのだが。

小さく上げられた悲鳴に、大きな違和感を覚え、ユーリは首をかしげた。思っていた声よりも大分、低い。

「何！」

低い少女の声と振り払われる腕に、ハッとユーリが体を離す。抱きついた人物は、全くの他人だった。

「わっ、悪い悪い！ 妹だと思っついで、さ」

手の平を振って、弁解するユーリ。だが、慌てているのはユーリだけで、抱きつかれた当の少女は不審者を見る目でユーリを見つめている。

「本当ゴメン！ 怪しいもんじゃないんだって！」

両の手を顔の前で合わせ、少女に頭を下げた。だが、そんなユーリを尻目に、少女はその場を立ち去ろうとする。身長がユーリの胸元位までしかない。

「それにしても、似てるなあ……って、あんたさ、こんな時間に一人で何ほっつき歩いてんだ？ あんまり安全なトコじゃねえぞ。ここ」

静まり返った裏路地ではあるが、僅か十数メートル先からは、おそらく酔っ払いが放っているであろう怒声や、ガヤガヤとした声が風に運ばれてくる。

見た目からして十代の少女が深夜に一人で歩いているのは危険だ。ユーリの質問に少女は答えようとしない。

「名前は？ 何ていうんだ？」

「……アキ」

ようやく質問に答えが返ってきた。ユーリは笑顔でアキに顔を向ける。

「アキ、家は何処だ？ 驚かせたお詫びもかねてさ、送ってやるよ」

「いい。いらない」

頑なにユーリを拒むアキ。ユーリは乱暴に後頭部を搔いた。

「まあ、そりゃそうだよなあ。こんな見るからに怪しいのに声かけられちゃ、警戒はするよなあ」

苦笑しながら、財布から一万円札を取り出し、アキに差し出す。

「タクシー呼んでやるから、これで帰れよ。足りんだろ、それで」

だがアキは、差し出された金を受け取ろうとしない。ゆるゆると横に首を振る。

「いいから、放っておいて。それよりも、早く離れた方が良く。危険なのは、貴方のほう」

アキが言い終わるか、終わらないかのその瞬間だった。

ユーリの目の前を、黒い何かが掠める。

「……」

咄嗟に後ろに飛びずさる。猫ほどの大きさの影鬼が一体、二体。

周囲に視線を泳がせると、十一体の小型の影鬼がかなり興奮した様子で、アキとユーリを挟み込んでいた。



「……影鬼じゃねえか」

そのユーリの言葉に、驚いた表情を浮かべたのはアキの方だった。  
「まさか貴方、狗鬼なの」

大きく見開かれた目がユーリを映し出す。

「つてえ事は、アンタ、籠女ってワケね」

ぐい、とアキの手を引くと、手の平に小さな切り傷が走っていた。自身の爪で傷をつけたのだらう。その傷からあふれ出る血に呼応して、影鬼が現れたということだらう。

ユーリは軽くアキの横をすり抜け、アキの背後で唸っていた影鬼を蹴りつける。爆ぜるように、影鬼の体は闇に溶けていった。

アキに向かって、同時に三体が飛び掛る。爪が届く寸前に、ユーリはアキを抱きとめ、上空へと飛び上がる。空気のブロックを精製して足場にし、三メートルもの高さに到達した。

「ここに居るな」

ぼん、とアキの頭に一度手を置く。アキは、驚いた表情でただただユーリの顔を見つめた。

ユーリは影鬼達が溜まっている地面に降り立った。同時に数体の影鬼を踏み付ける。

それからのユーリの動きは、まるで流れるように滑らかだった。飛び掛る影鬼の隙間を縫うように跳躍し、遠心力で振り払う手で確実に影鬼を仕留める。

くるりと一回宙をまわれば、霧散した影鬼の残骸が消えていく。

「これで最後！」

ユーリの声と同時に、十一体目の影鬼が消えた。秒数にして凡そ二十秒。無駄のない動きだった。

その瞬間、アキの足元にあった足場が一瞬にして無くなる。一瞬の無重力感と、落下。声を出す暇も無かった。

「ほい、お待たせ」

悪戯っぽい笑みを浮かべて、ユーリはアキの体を抱きとめた。ゆつくりとアキの体を地面に立たせる。

「影鬼に襲われる為に、わざとこんな暗いところに来たのか？」

ユーリの顔を見ようとせず、アキは小さく、一度だけ頷いた。

「なんで、そんな馬鹿な事を……」

影鬼に襲われるように仕向けるなど、自殺行為だ。

アキは、目を伏せ、暫く無言のままだった。ユーリはアキの言葉が紡がれるまで、微動だにせず待ち続けた。

「私は、居なくなった方がいいの」

小さい言葉。ユーリは神妙な面持ちで、アキの顔を見つめる。

「……何処に行っても、私は私そのままではいられない。他人に愛想振りまいて、馬鹿みたいに上に媚びて……。それでも、やらなきゃいけない。期待にこたえなきゃいけない」

奥歯がかみ締められる。その瞳の奥には、苦しみ、悲しみが渦巻いている。

「……それが、重い。そのままの私を見てくれる人は、もう居ないんだもの」

十代の少女とは思えぬ言葉だ。

「あんた、その歳でもう仕事してんだ……」

ユーリの返答に、アキが一瞬きよとした表情になる。それに気付かず、ユーリは続ける。

「でもさ、どんな仕事であれ、たまに自分を出していてもいいんじゃないねえの？ 上の表情ばかり伺ってたら、周りが見えなくなるぜ？ まあ、あんたが何の仕事してるのか知らないけどよ」

「……私の事……知らないで話していたの？」

「はあ？」

アキの言葉に、ユーリは意図がつかめず、ぽかんと口を開けた。

「アキ！」

突如ヒステリックな声が、裏路地に響き渡る。アキの肩が小さく反応した。ブランド物に身を包んだ、四十代の女が現れる。

アキの耳元に、ユーリは「誰？」と囁く。

「お母さん……」

アキの言葉に、ユーリは顔を上げた。目の前の女は、どこことなく少女に似ている気がしなくもない。

「一体どこに行っていたの！？ もう次の仕事が押しているのよ！早く着替えて移動しなきゃ！ さあ、早く！」

アキの腕を乱暴に掴むと、アキの返答も聞かずに引っ張っていこうとする。

当のアキは、突然現れた女に、何も言えないのか、身を縮こまらせたまま腕を引かれている。ふと目が合ったアキの表情が、ユーリには助けを求めているように思えた。

通常であれば、そのままアキは母親に連れられて行き、二度と出会ったことも無く終わるはずであった。

だが、アキの視線とユーリの視線が交わった瞬間、ユーリの口は勝手に動いていた。

「ちったあ、その子の言葉も聞いてやったらどうなんだ？」

腰に手を当て、真っ直ぐに言い放つ。アキの母親が、くるりとユーリに向き、睨みつける。

「貴方、一体何なの？」

「今しがた、知り合いになつた者<sup>モン</sup>だけど」

「何ですって？」

大きく見開かれる目。

「貴方、この子が誰なのかわかつてそういうことを言っているの？」

この子、柳瀬アキはねえ、いまやテレビには映らない日は無い有名人なのよ！」

母親に誇らしげに示された当の本人は、俯いて下唇をかみ締めている。

「柳瀬アキ？ 聞いたことねえなあ」

「なっ」

女が叫びだす前に、ユーリはアキの腕を引つ張つて自身に寄せた。

「アンタ、自分の都合で子供を動かしてるんじゃないやねえの？ 俺には、

この子、望んでその仕事をしていない様に見えんだけど」

傍らのアキの体が縮こまった。ピリピリとした女の雰囲気<sup>モウキ</sup>が伝わってくる。

「ホレ、言つてやれよ。こんな仕事嫌だつて、辛いつて。言つてやれよ」

アキの見開かれた目が、ユーリを映し出す。母親がなにやら喚いていたが、アキの耳にはそれが不思議と入っていないようだった。

「……決めた。気持ち<sup>モウキ</sup>が、変わった」

ユーリの耳に、辛うじて届くような小さな声。

「膝をついて」

その瞬間、ユーリの体に異変<sup>イヘン</sup>が起きた。

「……」

ユーリの体が石のように硬くなる。自ら抗えない強大な力に、ユーリは地面に肩膝をついた。

「お前……！ まさか……！」

胸元に隠し持っていた自分の狗石。いつの間にかその石は、目の前の少女の手の内に収まっていた。

「動かないで」

その言葉に絡め取られ、ユーリの体は指一つ動かせなくなる。

「て……てめえ……！」

アキの顔が近づいてくる。抵抗することも出来ず、アキとユーリの額が重なる。首の後ろに、一瞬だけチリリと焼け付くような感触。アキとの契約が完了したのだ。

「これで貴方は私の狗鬼。私は貴方が欲しくなった」

やんわりと笑むアキの瞳。ユーリはアキの考えが分からず、呆然とアキの顔を見つめていた。

「アキ！ 貴女……！ 一体何を……！」

感情的な声に、振り返れば、髪の毛を逆立てアキに向かって叫ぶ母親。

「仕事は続ける」

アキの態度は、先ほどとは大きく変わっていた。母親に怯える様子が一瞬にして消えた。

「お母さんが、狗鬼や籠女のしきたりを嫌っているのは知ってる。でも、私には狗鬼が必要。彼を狗鬼として連れて行く。そうしたら、仕事を続ける」

アキの手が、自身の腕を引く。

「はあ！？」

常識はずれのアキの言葉に、ふらりと立ちくらみを起こす母親。流石にユーリも声を上げた。

その時は、ユーリには何が起きたのか理解は出来なかった。だが、後から聞いた話によると、ユーリとアキが出会うその少し前、アキの姉、柳瀬フユが重傷を負い、意識不明の重体になっていたのだという。

そのままの私を見てくれる人は、もう居ないんだもの

アキの言葉を思い出す。

(たぶん、何かに縋りたかつたんだろうなあ)

狗鬼、籠女のしきたりを嫌うアキの母親は、そのしきたりから少しでも逃れる為に、アキを華やかな芸能界へと進ませたのだろう。アキに対する執着から、ユーリはそれを読み取った。

アキもその母の期待に必死になって応えていたに違いない。だが、アキに降りかかるストレスは、並大抵のものではなかったのだろう。その悩みや、苦しみを理解してくれたのは、アキの姉だったのだ。唯一の心の支えであった存在の姉を失い、失意に陥っていたのだろう。

姉が不在になってしまったという話を聞いて、ユーリ自身、説明こそ出来はしないものの、アキの行動に妙な合点がいったのだった。芸能人の柳瀬アキとしてではなく、ありのままの「アキ」本人として扱ってくれる人物が欲しかったのだろうと、ユーリは一人解釈していた。

それからというものの、ユーリは不満を垂れるわけでもなく、アキの仕事先に姿を見せるようになり、アキの相棒として傍らに居るようになった。

出会い方こそ特異なものであったが、アキと行動を共にするうち、彼女の人となりを知り、ユーリ自身も「こんな出会いも悪くない」と思うようになっていった。あまり深く物事を考えない、日中に自

由に動けるユーリだからこそ出来る業だっただろう。

柳瀬アキ、最近いい表情するようになったよね。

街頭テレビに映るアキを見て、誰かが呟いた言葉を、ユーリの耳が捉え、静かに笑みを浮かべた。

「今、アキさんは？」

苑司の言葉に、ハッと意識が戻るユーリ。アキとの出会いを思い出し、上の空になってしまっていた。

「ああ、仕事だよ。スタジオで収録」

「……どうして一緒に居ないの？」

「ん？」

ユーリは口を尖らせ、苑司に向かって首を傾げる。

「恋人……なんじゃないの？」

遠慮がちに苑司が問う。

「ばっか、全然そんなんじゃないよ」

否定をするその言葉が、不自然ではなかったかと、ユーリは少々懸念する。

「え、それじゃ……」

だが、苑司の困惑した表情に、その心配は杞憂におわつたと確信した。

「ペットみたいなモンなんじゃねえの？」

おどけたようにユーリは続けた。

苑司は、狗鬼という存在を知らない。狗石をアキが持っている以上、ユーリはアキの従順な飼い犬と言い表すのが一番妥当であった。

「……そんなの、あり？」

「俺たちの間には、そんなのもアリなんだよ」

啞然としている苑司に対し、ユーリはクスリと笑った。



「そついや、そんな話をしたこともあつたつけ」

顎を人差し指で搔きながら、ユーリは他人事のように答える。

「そつだよ！ あの時、よく意味が分からなかったけど、アキさんに狗石を奪われてたつて事なんだね」

苑司も今では、狗鬼と籠女の関係性も頭に入れ、しっかりとユーリの言葉についてくる。

余計なことを言わぬように気を揉む必要が無くなり、ユーリは半ば安心していた。

「で、何だつけ？ 俺の家族の話？」

アキとの出会いの話に反れ、すっかり忘れていた。

「あ、別に、嫌だつたらいいんだ」

苑司がゆるゆると首を振る。その様子に、ユーリはにやりと笑みを浮かべた。

「いいさ、俺も誰かに話したくなつたとこだ。ちよつくら耳、貸してくれよ」

簡易ベットに掛けているユーリは体を後ろに倒し、壁に背もたれた。目は遠くをさまよい、昔の出来事を引き出しているようだった。

「俺にはもう一個名前があつてさ、『朱崎 龍』つていうんだ。知つてた？」

ユーリの答えに苑司は首をゆるゆると振る。

「朱崎家つてのは、代々狗鬼や籠女が生まれる家系で、俺の父親も狗鬼だった。ただ、そんなに力のある家柄でもなかったし、親父自体が型にはまるのが嫌いだな。本家からの柵しがらみから抜け出すために、さつさと海外に行つちまつたんだ。しきたりとは無縁の生活を送るんだつてな」

ま、気持ちも分からなくは無いけどな。と、ため息のように言葉を吐き出し、肩を小さく落とした。

「それで、現地の女とデキたのが俺なわけよ」

頭の上で手を組み、ユーリは苑司を見た。その目からは、何も感情は読み取れない。

「親父はそれなりに幸せだったみたいだな。でも、人生はそんなに甘くはないってことなんだろうなあ。生まれた子供が狗鬼だったんだから」

そのままユーリは目を瞑り、上を向いては一度大きく息を吐き出した。

あまり、良くない思い出なのだろう、と苑司は心中で身構えた。

「初めは、母親も驚いてはいたが、それなりに可愛がってくれたさ。でも、やっぱり普通の子供とは違うわけ。それこそ、今のお前と同じ状態さ。力の加減が判らないから、普通に遊んでいても人間の子に大怪我さしちまう。人間の子供とは絶対的な差があるわけ。初めは偶然で済んでも、二回、三回って繰り返すたび、周りの目はどんどん冷やかな目になっていく」

頭の後ろで組んだ手を解き、ユーリは自分の両手を見つめた。

「普通と違う子供に、母親は自分はバケモノを産んだってんで、だいが参ってみたいだな。親父との喧嘩も絶えなくてさ。毎晩、罵倒と皿の割れる音がしてた。それだけは覚えてるよ」

軽い口調で語るユーリからは、悲愴さは全く感じられない。

「ま、その後は誰でも予想が出来るだろ？ 父と母は離婚したわけ。そのまま俺は親父に連れられてこの国に来た。親父から教えられて、日本語も理解できてたし」

日本にやってきたのは四歳の頃だったという。

「親父は、その後すぐに日本人とまた結婚。こりねえよな」

肩を竦めて、苑司を見るユーリ。聞いている苑司はどっぴ顔ですればいいのか分からず、眉は下がったままだ。

「んで、また子供作ったわけよ。それが、朱崎千尋。俺の腹違いの妹だ。千尋は、狗鬼でも、籠女でもなくなってたな。朱崎の血はどんどん薄れていって、狗鬼や籠女が生まれにくくなってんだ。でも、俺はそれでかまわなかったよ。ただただ、千尋が可愛くて仕方なかった」

妹、千尋を語るユーリの表情は、今まで見たユーリの表情の中で一番柔らかい。本人はそれに気付いていないようだ。

「その、千尋さんは？」

一度も姿を見たことの無い千尋という人物。苑司はユーリに聞いてみた。

「もついなえよ。千尋の母親と一緒に死んじゃった」

「う……ごめん」

「良いんだよ。俺が話したかったんだからさ。悪かったな、長話につき合わせてよ」

ユーリは軽く笑う。父親とも連絡を取っていないという。苑司は、ユーリの言葉に、首を振ることしか出来なかった。

ユーリは簡易ベットから立ち上がり、大きく背伸びをした。

持ち上げられた裾の下に、白い腹部がちらつく。

「さ、昔話はお終い。ちょっと電話してくるわ」

胸元から、電源の切れた携帯を取り出し指で弄ぶ。そのままユーリは診察室から消えた。

### 3 23 ・エレベーター

病院の入り口は往来が激しい。

哭士は祖父が自宅に帰る為にタクシー乗り場まで祖父の荷物を運んでいた。狗鬼専用のフロアを抜け、一階に降りると、なんら変哲の無い大きな総合病院である。車椅子を押されている老人や、松葉杖をついた男性とすれ違う。衣服の裾から包帯が見え隠れする哭士も、何の違和感も無くその風景に溶け込んでいる。

と、ロビーに差し掛かったところで祖父のもとに、小さな人影が走り寄ってきた。

「おじい」

祖父の袂にすがり付いたのは、先日早池峰家に侵入したシイナだった。病院のロビーでマキと共に祖父の用事を終えるのを待っていたらしい。

祖父とシイナが何やら言葉をやり取りしている様を、何とはなしに眺めていると、傍らに小柄なもう一人の人物が目に入る。哭士の姿を見とめ、マキが哭士に走り寄ってきた。

「哭士さん！」

その小さな体からどうやって出しているのかと思うほど、がやがやとしたロビーでも、マキの声は大きく響く。

「お体はもう良いんですか？ びっくりしましたよう。旦那様の会社の階段から、菊塵さんと足を踏み外して、全身打撲に頭も打たれる大怪我されたって聞いて、もう心配で心配で！ 運動神経は良いって伺ってたんですけど、お疲れだったんですか？ 若いからって無理はいけませんよ無理は！ お家に戻ってきたらうんと体力付くもの作りますからね……」

まさか、一般人のマキに対して、自分は心臓付近を貫かれて五日の間昏睡し、今日になって目を覚ました等と説明できるわけが無い。

凡そ、桐生あたりが半笑いを浮かべながらマキに説明をしている姿が容易に想像出来る。未だに忙しくなく口が動き続けているマキを他所に、怪我の理由にしても、もう少しマシな説明は無かったのかと哭士の眉間の皺が深くなる。

「それにしても、シイナちゃんはいいい子ですねえ。哭士さんにこんな可愛い親戚の子が居たなんて初めて聞きましたよ」

目を細めて祖父にすがり付いているシイナに目をやるマキ。どうやら、シイナについても、哭士の親戚にされているらしい。変に口を挟んでマキに不信感をもたれることも避けたい。元から口を出す気はさらさら無かったが 哭士はそのままマキのよく動く口を半ば感心しながら眺めていた。

「シイナ、待たせたな」

目を細め、修造はシイナの頭を撫でる。哭士が病院で眠っている間、随分と祖父に懐いたらしい。

「おじい、友禅は元気だった？」

心配な表情を浮かべ、シイナは祖父の顔を見上げる。

「それほど心配ならば、恥ずかしくておらずにおぬしも会ってくれば良いだろう。哭士、シイナを案内してやってくれるか。僕はマキと共に自邸に戻る。後で色把さんと戻ってくればよい」

「え、え」

シイナが哭士を恐れているとは露知らず、修造は哭士から荷物を受け取ると、そのままロビーから出て行ってしまふ。まごまごとしている間にぽつんと残されたシイナは、恐々と哭士に振り返る。哭士を見つめる目が、明らかに怯えの色を浮かべている。

「……」

この歳の少女相手に、哭士もどう反応してよいのか分からない。

「前のような事はしないから安心しろ。来い」

哭士の言葉に、シイナはおずおずと哭士の後に続いた。

エレベーターに乗り込むと、一瞬の独特の浮遊感が体を襲う。狭い空間には機械的な上昇音だけが響いている。

「哭士は友禅の弟なんですよ」

シイナが哭士の斜め後ろから口を開く。

「そうだ」

肩越しに振り返りながら、哭士が答える。

「あの時、狗石を盗もうとして、ごめんね。手も怪我させちゃったし……」

早池峰家の風呂場でシイナともみ合いになった時のことだろう。

哭士を前に、恐ろしさのあまり取り乱したシイナは、哭士の手の甲に切り傷を負わせたのを思い出した。今になっては、シイナが残した傷も、哭士の手には残っていない。

「過ぎたことだ。もう気にしていない」

哭士が答えると、シイナは小さく相槌を打つ。哭士もシイナに対し、かなり酷い仕打ちをしてしまったはずだったが、それを言うタイミングも言葉も見つからず、哭士は黙って階数の表示を見上げた。静かにエレベーターは上昇を続ける。

「今まで、屋敷に居たのか」

マキと一緒に居たところをみると、シイナは早池峰家で数日を過ごしていたらしい。

「うん。おじいも、マキも優しくしてくれる。部屋も大きくて暖かいし、ご飯もおいしいよ。色把も遊んでくれた」

「そうか」

ぶっきらぼうに答える印象を受ける哭士の返答にも、シイナは臆する様子は無い。

「やっぱり、似てるね。友禅はそんなに怖い表情かおしないけど」  
シイナが友禅を語るとき、その表情は柔らかいものになる。シイナの言葉に、一瞬あっけに取られ、目を見開くと、シイナは何故か、哭土の顔を覗き込み、へへ、と笑うと、哭土の裾を掴んだ。  
シイナの反応を不思議に思いながらも、掴んだ袖を振り払う理由も無く、哭土はそのまま正面を向いた。

「へえ、珍しいでやんの」

哭土の服の裾を掴んで歩いているシイナを見つけ、ユーリが半ば茶化すように声を掛ける。こんちは、と、にこやかな表情でシイナに笑いかけるユーリ。シイナは慌てて哭土の袖から手を離し、俯いて小さく返事をした。

「お前は何をしている。自分の籠女の所に行かなくていいのか」

ユーリの籠女、アキは、今も忙しく仕事をしていることなのだろう。哭土の問いに、ほんの少しユーリの表情が曇る。

「それなんだけどさ、何かアキから、そっちの家とかに連絡入ってねえかな？」

「聞いていない」

修造からも特にそういった話は無かった。哭土の答えに、ユーリは一瞬視線を泳がせ、頷いた。

「そっか、ありがとな」

くるりと踵を返し、ユーリは何処かに消えてしまった。なにやら何時もの覇気が無いように感じたが、哭土はそのままシイナと共に友禅の病室へと足を踏み入れた。

がらんと人の居なくなつた病室を見渡す。

傷を癒すために眠っていたが、眠る前とさほど痛みは変わっていなかった。ずきずきと疼く体をゆっくりと起こし、深く息を吐き出した。

君、狗鬼としての治癒力が殆ど無くなってしまっているよ。

病院に担ぎ込まれ、目を覚ました友禅に放たれた一番の言葉がそれだった。

狗鬼としての本能が働き、ひたすらに眠りを欲する。だが、十何時間と眠っても、籠女の血を与えられようとも、友禅の体に走る無数の傷は、瞬時に塞がることは無かった。

狗鬼同士の子供として生まれた友禅は、他の狗鬼に比べ、ほんの少量の籠女の血で全快になることが出来ていたはずであった。

桐生から受けた説明によると、長い期間狗鬼の力を封じる首輪をはめられていた事で、体が人間のものに近くなつてしまつたという事らしい。

だが、狗鬼としての身体能力や、特異な能力は、今の所はそのままであるという。

無理はしないでおくれよ。また今回みたいな大怪我を負つたら、次はアウトだよ。

何時も朗らかな笑顔を絶やさない桐生が、僅かに強張つた表情を向けた。



その時、友禅はその言葉に頷くことしか出来なかった。

(きつと、これは彼らを殺めてしまった戒めなのだ)

何度も、何度も、悪夢になって現れる、亡者となってしまった者たち。この手で命を狩った者たちの顔が浮かぶ。

力を取り戻した目で見た男たちの顔は、いまでもまざまざと思い出せる。そして、彼らの命の源でもあった生ぬるいドロドロとした液体の感覚も消えることが無かった。

次に命を懸けるような争いがあれば、自分は間違いなく命を落とすだろう。

その争いは、遠い未来ではなく、もうすぐ自分に迫ってきているのを感じる。それから逃げ出すつもりは毛頭無かった。

(甘んじて受けよう。それが、私に課せられた業なのだから)  
体を絶え間なく蝕み続ける痛みを、深く息と共に飲み込む。

(取那は、無事なのでしようか)

心中で一人呟き、苦いものが広がる。

【神】の器として攫われたのだ。恐らく、すぐには身体に危害が加えられることは無いだろう。

だが、取那があちらに渡ってしまった以上、彼女の存在がこの世から消えるのは時間の問題だ。

拳を強く握り締めても、どれほど悔やんでも、攫われてしまったのは事実だ。

取那

友禅の脳裏に浮かぶのは、取那と分かれた一番最後の情景だった。哭士が、色把を連れ、比良野家にやってきたあの時。取那は色把に切りかかった。

友禅はそれをすんでのところで制止し、その場を離れた。

友禅が取那と離別したのは、その直後だった。

「何故、止めたの!」

比良野家の裏山。取那が友禅に詰め寄る。その様子を、シイナが不安げに見つめている。

早池峰哭士との契約を結び、自分の狗鬼にすると取那が言い出したのは数ヶ月前の事だった。

ただ、契約が結べないというだけで不要物として扱われている哭士と、契約を結ぶことさえ出来れば、哭士も寿命の制約を外すことが出来、取那も早池峰の狗鬼に護られる籠女として、本家に手厚く迎えられるというのだ。

確かに、狗鬼同士の間に来た子供という事が判明し、更には子を遺す術を失った友禅では、哭士の役柄を果たすことはどう考えても不可能だった。

取那は幼くして牢に閉じ込められていた為か、彼女の言動には子

供の我侷わがままのような部分が見て取れる。今回の件についても、あまりにも短絡的な発想だった。

取那の余りにも強引な言いように、渋々哭士の足止め hands を貸した友禅だったが、それだけでも、良心の呵責に耐えられなかった。

「もう、止めましょう。取那」

友禅は、ゆるゆると首を振った。その友禅の様子に、取那の目つきが鋭く変わる。

「何故!? 言ったでしょう? 本家を見返してやるの! 偽物と本物を見抜けなかった間抜けな本家を見返して、あの偽物を引き摺り下ろしてやるんだ!」

頭を大きく振りながら、噛み付くように友禅に食って掛かる取那。その様子を、友禅は目を眇めて見つめる。

「……………それから?」

友禅の纏う雰囲気が一変する。その様子に取那は思わず怯んだ。

「それから、どうするんです? 哭士を手中に入れ、本家に貴女が本物と認めさせて、どうなるというのです? 今までの貴女の苦しみが無くなるわけではないでしょう? もう、復讐など止めましょう」

「……………今更」

そういう取那の声は、僅かに震えだしている。

「気づいてください。復讐からはなにも生まれません。不幸な人間が増えるだけです。狗鬼や籠女である事を隠していけば、充分人間社会で生きていけます。貴方は私を救ってくれました。だから、私は貴女が望むことは可能な限り叶えようとおもっていました。でも、もうこれ以上、貴女の行いに手を貸す事は、できません。だから、取那……………。全てを捨てて、一緒に、ヒトとして生きましょう」

友禅の言葉に、取那の言葉が詰まる。大きく気持ちが揺れ動いて

いるのが分かる。

「取那」

友禅が一步取那に歩み寄る。

だが、僅かな時間に逡巡した後、取那は友禅の言葉を振り切るように首を大きく振った。

「だったら！ アンタは何なの！？ 過去に囚われているのはアンタだって同じでしょう！ 偉そうな口きかないで！」

「……」

取那の言葉に、押し黙る友禅。

「私は、諦めない」

取那の言葉に、友禅は悲しげに首を横に振った。友禅の必死の訴えは、僅かに取那に届かない。

「もう、話すことは何も無いわ」

取那の強い目が、友禅を射抜く。揺らぐことの無い意思。それを動かしているのは、恨みと怒りだ。

「友禅……、取那……」

事の始終を怯えた様子で見つめていたシイナが、ようやく声を発する。

「行くわよ、シイナ」

取那は乱暴にシイナの腕を掴み、振り返りもせず、闇に消えていく。

「私は、貴女が目覚ましてくれる事を、願っています。また、会いましょう、取那！」

取那の耳にも聞こえるよう、友禅は暗闇に向かって大声で呼びかけた。

遠くで、取那が少しだけ立ち止まる気配を感じたが、間もなく二人の人物は遠ざかっていった。



「友禅！」

ベッドの上の友禅の姿を見るや、一目散に友禅のベッドへと駆け出すシイナ。

少し体を休めて落ち着いたらしい。だいぶ顔色も良くなったようだ。愛おしいな表情を浮かべ、友禅はシイナの頭を撫でた。

「久しぶりですね。シイナ」

低く、静かな声で友禅はシイナに優しく語り掛ける。

「友禅、怪我は？ 大丈夫？」

自身を撫でる手に、無数の傷が走っているのを見つけたのだろう。シイナは半ば泣きそうな表情を浮かべ、友禅に問いかけた。

「大丈夫。大丈夫です。それよりもシイナ、ちゃんとご飯は食べられていますか？ ゆっくり眠れていますか？」

友禅の言葉に、シイナは一度大きく頷き、自身が早池峰家に世話になっていることを事細かに友禅に説明した。その間も、友禅は一つ一つシイナの言葉に耳を傾け、相槌を打っていた。

「そうですね。それを聞いて、安心しました」

一生懸命語るシイナの頭を撫でる。シイナは心地良さそうに友禅の手に擦り寄っている。

「哭士、色把さんは大丈夫なのでしょうか」

自身が語った言葉により部屋を飛び出した色把。友禅はかなり後ろめたい気持ちになっていたらしい。

「今は休憩室で休んでいる。もう、平気だ」

哭士の短い言葉に、友禅は安心した表情を見せた。

「傷、塞がらないのか」

棒立ちのまま、友禅の体中の傷を見やる。歩みを進める際、左足を軽く引きずるようになってしまふ哭士自身も、もう二、三日もすれば普通に歩くことが出来るようになるだろう。

友禅は、暫く躊躇<sup>ためら</sup>ったが、自身の体に起きている変異について、ぼつり、ぼつりと語りだす。

実弟は友禅の語る言葉を、頷きもせずに聞いていた。

「籠女の血も、駄目なのか」

「ええ。自然に治癒するのを待つしかありません」

膝の上に開いていた手の平を握ると、塞がりかけた切り傷が悲鳴を上げた。

「……良くその体で取那とシイナを守っていたな」

治癒能力が低下している状態で籠女と幼い狗鬼の身を護っていたことに、哭士は驚きの色を隠せないようだ。

「恥ずかしい話ですが、あの夜まで自分の体の変化に気付いていなかったのです。水を操る力は変わらずに使えていましたから。……このように」

そう言うと、友禅は傍らのテーブルに置かれた花瓶と水の入ったコップを見つめた。

「……！」

見る見るうちに、部屋は白い霧に包まれる。体に吸い付く水分。自身の力で部屋の中にある水を霧に変えたのだ。一瞬身構えた哭士は、友禅の能力によるものと分かれると、体から力を抜いた。

「貴方が比良野家に色把さんとやってきた夜、取那は……彼女は、私から離れていきました」

そうして、友禅は取那と離別した後も、取那を放っておけずに、遠巻きに取那とシイナを護っていたことを語った。取那に遅い来る

影鬼を始末していたこと。取那を追ってくる人物、レキがいることに気づき、今のようにな水を霧へと変え、目くらましをして居たこと。「変だと思っただよ。あの刑事じつとを追いかけてよとしたら、急に霧が出て来るんだもん」

シイナが顔を上げ、友禅を見つめた。廃工場で蓼原を追おうとしたシイナは、突如発生した濃い霧で蓼原を見失ったのだという。仕方なしに、すぐに早池峰家へと潜入し、苑司に成りすましたのだという。

「一般の方を巻き込むわけにはいきませんでしたから」  
結果的には関係者になってしまいましたね、友禅は静かに笑いながら言い放った。

まだ居たいと洩るシイナを、哭士が二、三言で諭し、部屋を後にした。

今は体を休め、一人で動けるようにするのが一番である。

起き上がっていた体を横たえようとした際、ふとベッドのすぐ傍らに薄いオレンジ色の小銭入れのようなものが落ちていることに気付く。色からして、シイナが落としたものようだ。

そのままにしておいて、後から誰かに拾って貰っても良かったが、どうも落ち着かない。

うつ伏せになり、ベッドの端に体を寄せて手を伸ばす。僅かに手に触れたものの指で弾いてしまい、小銭入れは更に遠くへ転がってしまふ。

友禅は息を吐き出しながら更に腕をベッドの下に伸ばす。

「!!!」

突如バランスが崩れる。落下防止の柵は外されていた。



受身も取れずに友禅はベッドから床に落下してしまった。高さはないものの、床に打ち付けた衝撃は、一瞬にして全身の傷に走り、呼吸が乱れる。

起き上がるうと床に手を突くも、自身の体を起き上がらせるほどの力が入らない。

誰かを呼ぼうにも、ベッドに備え付けの呼出のボタンは枕元に引っ掛けてある。手を伸ばしても届かない距離だ。

どうすることも出来ずに、友禅は頭を床に着けた。

「お、オイオイ！ 大丈夫か！」

突如、背後であわてたような声。すぐに肩に手を回され、上半身と床が離れていく。

力強い腕、肩越しにその人物を見れば、目に飛び込んでくる明るい髪色。哭士の仲間、ユーリ・ヴァルナーだった。

「前を通ったら、物音がしたんで覗いてみたら……。ビックリしたぜ。あ、ここらへんに手置いてくれる？」

その人物は、何も無い空中を指差す。言われたとおりに手を伸ばせば、硬い感触。そのまま持ち上げるユーリの力と、掴んだ空気の塊を軸に、友禅はベッドを背にして立ち上がる。

そのまま、ユーリの補助でベッドに腰掛ける。その後も、ユーリが固定した空気を掴みながら、ベッドに横になることが出来た。

「すみません。助かりました」

横になった状態で、ユーリを見上げる。友禅の言葉にユーリの口角が上がる。

「いえいえ、当然の事。こんな力で良かったらいつでもどうぞ」  
そう言って、何も無い空中に胡坐をかき、座り込むユーリ。

「先日の戦闘でも拝見しましたが、面白い能力ですね」

何も無い空中に生み出す、透明な箱。それは身を守る壁にもなり、時に蹴り上げて敵に向かう足場ともなる。

「そう言って貰えるのは嬉しいけどさ。俺の能力は弱くてね。ブロツク一個作るのが精一杯なんだよね。これが」

ユーリが太腿の下を指で弾くと、コンコン、と硬い音が返ってくる。

「それでも、自身に与えられた力を、存分に発揮できるのは、素晴らしい事です」

廃工場でのレキとの戦いでも、身の細いユーリがしなやかに宙を舞う姿を、友禅は覚えていた。哭土もユーリの力を使い、レキに一撃を食らわせたのだ。

だが、ユーリは友禅の言葉に納得は出来ないようだ。

「奴が言っていた。俺は十分に力を発揮していないんだってさ。でも、どうやったって、二つは出せない。所詮、力の弱い家の狗鬼だからね」

あきらめたように、ユーリは笑う。だが、そのユーリに対し、友禅はゆっくりと首を振った。

「私たちの力の源は、結局の所、ここだと思っています」

友禅は、自身の胸に手を当てた。

「自分でもいい、身の回りの誰かでもいい。何かを守りたいと思う力こそが、狗鬼の力を揺り動かし、外に向かう力となる。そう、思っています」

友禅の言葉にユーリの諦観めいた苦笑いが鳴りを潜めた。かつて、忌家で力を封じ込められた友禅も、取那を救いたいという一身で、忌家を抜け出した。

その出来事が、彼の心中を巡っているようだった。

「その対象にじっくり向き合ってみるのも良いかも知れません。もしかしたら何か、変わるかもしれませんよ」

神妙な面持ちで、友禅の口元を見つめていたユーリだったが、首

をかしげ、頭を掻く。

「あんま、難しいことは良くわかんねえ。けど、もう少し自分を見つめてみることにするよ」

小さく礼を言い、ユーリもまた、病室を後にしていった。

小銭入れは、ユーリによって傍らの小さな棚に置かれていた。これなら、ベッドに横たわる友禅でも手に取ることが出来る。

友禅は、それを確認すると、瞼を下ろし深い眠りへと落ちていった。

友禅の言葉を聞き、一番に頭に思い浮かんだのは、自身の籠女、アキだった。

妹と似た外見を持つアキ。最初は渋々彼女の言いなりになっていたようなものだったが、彼女の持つ影の部分に惹かれ今に至っている。

男女の狗鬼と籠女は、殆どが恋人や夫婦の関係をもっているが、ユーリとアキはそうでは無かった。勿論、体を交わらせる事も無い。

(アイツ、何処行きやがったんだ)

携帯を開いても、着信があるのはアキのマネージャーからのもの。マネージャーですら、アキの所在が分からなくなっており、ユーリに連絡が入ったのだ。

ユーリと初めて出会ったあの夜以降、アキは誰にも断らずに出かけることは無かったはずである。

(あの時から、様子がおかしかったんだよな)

数日前の出来事がユーリの頭を巡った。

「じゃあな、また明日な」

アキのマンションの部屋の前まで送り届けたユーリはそのまま立ち去ろうとする。

「ユーリ」

呼び止められ、振り返るユーリ。

「部屋まで、来て」

部屋に手招くアキの様子。断つても、狗石を使われるのだろう。視線と首をくるりと回しながら、ユーリはアキの部屋へと足を踏み入れた。

大方、朝まで部屋に居るように狗石で命令されるのがオチだろう。夜型のユーリにとってはそれは特段苦ではなかった。他愛の無い話をしながら朝を迎えるという事も過去に何度かあったのを思い出す。

だが、今夜ばかりはアキの様子が違った。

ベッドに座り込んでいるアキは、ユーリの顔を見上げる。結ばれている右手には、ユーリの狗石が収まっているのだろう。

「来て」

体は、アキの言葉に素直に従う。座っているアキの前に、膝をつき、アキの目線に合わせた。

「はい、何でしょうか」

首をかしげながら、アキに語りかける。それと同時に、アキは仰向けでベッドに倒れこんだ。

「もつと、こっちへ」

「……」

アキが下す次々の命令の言葉に、ユーリはアキが何をさせようとしているのかが分かった。

「脱がせて」

狗石を握っているアキの言葉に、ユーリの身体は素直に反応する。両腕を軽く上げ、仰向けになっている状態のアキに覆いかぶさるようにして、ユーリはアキのシャツのボタンを一つ一つ外していく。アキの目は、ユーリの顔を見つめている。それを分かっているながら、ユーリはアキと目を合わせようとしない。

やがて全てのボタンは外され、合わさっていた襟を両手で開くと、膨らみかけている胸が、下着と共に露になった。

視線をアキに寄越すユーリ。

「それで？」

アキの太腿の部分にまたがった状態のまま、ユーリはアキに問う。首を小さくかき上げると、垂れ下がったサイドの髪が頬に触れ、端正な顔立ちに色香が漂う。

アキの握り締めている狗石に、更に力がこもる。だが、アキの口はまっすぐに閉じられ、言葉をつむごうとしない。

「狗石を持つてくるくせに、何で命令しねえの？」

「……」

アキは、ユーリを睨み付ける。だが、当の本人はそれに動じる様子も無い。

「抱いてよ」

アキの発した言葉は、『命令』ではなかった。ユーリの身体は、アキに跨ったまま、動かない。

狗石の命令ではなく、ユーリ自身の意思で自分を抱いて欲しいとアキは言っているのだ。

「俺は確かにアキの狗鬼だけど、情夫になつたつもりは無いぜ」

自然と、目が柔らかく細められる。囁くようにつむぐ声は、自分で意識をせずとも、しつとりとしていた。アキは、その蒼い目を見つめながら、静かに言い放つ。

「私が、妹を失った隙間を埋めてあげる」

「……」

その言葉に、今まで大様に構えていたユーリの雰囲気が一変する。

ささくれ立った雰囲気を纏い、今まで押し隠していたユーリの感情が、瞳の奥にちらつき出す。

「……狗石を持つてるからって、俺の心までどうにか出来るなんて考えるなよな」

アキの顔のすぐ横にユーリの手がある。近くで、強くシーツを握り締める音がアキの耳に届いた。細められた目は鋭く、まっすぐにアキを捉えて離さない。

初めてアキは、目の前の狗鬼に、僅かな恐怖心を抱いた。細い肩が僅かに強張り、手をついたユーリの腕に当たると、ユーリの視線がアキの肩の部分に逸れた。

「……なんつってね」

突如、アキの体の上に居るユーリは顔を歪め、大きく鼻から息を吐き出した。

「他の女ひとなら抱くのにな」

自身の言葉にユーリの頬が軽く痙攣する。知っていたのだ。自分の身を守る狗鬼は、自身の傍に居ない時、毎回違う一夜限りの相手と共に過すごしている事を。

それなのに、今までに一度も自身をそのような目で見たことが無い。アキにとってそれが不安で、不満であった。

最初は、傍らに置いておくだけの飾りで良かった。自身を理解し、守ってくれる、見た目の良い装飾品だった。

だが、同じ時間を共に過ごすうち、愛着とはまた違つ、愛おしい  
思いが自身に広がっていく事に気付いた。  
彼を、自分だけのものにした。人として、女として、そう欲す  
るようになっていったのだ。

だからこそ、最後の一線は、ユーリから越えてもらつて望ん  
だ。狗石は握り締めたまま、目の前の男が自身と一つになってくれ  
ることを望んだ。

だが。

「俺、ガキにや興味ないんだよね」

ユーリはそう言うと、目の前の少女の顔を見ぬまま、ベッドから  
離れた。

「んな馬鹿な事、言ってねえで、早く服着ろよ。暖房入れたばっか  
りで、まだ寒いだろがよ」

アキに背中を向けたまま、ユーリは言い放つ。

「……何も知らないくせに」  
自身の脇をすり抜ける気配。

バタン、という大きな音と共に、アキは部屋から飛び出していっ  
た。

アキの気配が遠ざかっていく。

「……知ってるよ。痛いくらいにな」

アキが自分の事を好いていることは十分に知っている。幼い思慕  
の情を、押し隠すことなどせず、まっすぐにユーリにぶつけてく



る。一人になった部屋の中で、ユーリはポツリとつぶやいた。

抱いてよ。

確かに自身に言い放ったのは、自分の籠女、アキだ。

「アイツは千尋じゃねえ。分かってる。分かってるはずだ」  
頭を振り、今しがた自身に襲い掛かった映像をかき消す。

自分の腕の下にいる少女、アキの顔が、一瞬にして千尋の顔にすり替わった。

おにいちゃん

自身を求めた少女の顔が、自身の妹に代わる、悪夢だ。

（俺は、千尋を抱きたいと思っていたのか……？ だから、千尋にそっくりなアキを……？）

「違う！」

思わず声が荒らぐ。自分の大きな声に、驚きさえ感じる。

（違う、俺はそんなこと、願ってなんか居ない）

自然と早まる呼吸を無理矢理に押さえつけ、部屋を後にした。

ぼんやりと、数日前の出来事を頭に浮かべながら携帯電話の画面を見つめる。

発信履歴は、アキの名前ばかりが並んでいる。何度もアキの携帯に連絡するも、むなしくコール音が返ってくるのみだった。

「本当に、何処に行きやがったんだ……」

苛立ちにも似た焦燥を押し隠し、ユーリは尻ポケットに携帯電話をねじ込んだ。

### 3 27 ・動き出した争乱

翌日。

桐生から、自宅に戻っても良いという許可が下り、病院入り口で菊塵が運転する車を哭土は待っていた。

踏み出すたびに痛んでいた足も、ようやく落ち着き、通常通りに歩けるようになっていた。

病院の周囲は芝生と広い駐車場になっている為に、何も遮るものが無く冷たい風が吹き付ける。

「うー！ 寒い！」

傍らに立っているユーリは、首をすくめてボア付きのコートに顔を埋める。

寒さには強い哭土だが、特段寒いところが好きというわけではない。

病院入り口に車を乗りつけるのを、ぼんやりと待っていた。

見覚えのある車が病院の脇に止められる。以前、哭土と色把を潜伏する為のホテルまで搬送したワゴン車だ。降りてきたのは菊塵だった。

「待たせたな、さあ行こうか」

車に積み込もうと荷物を持ち上げた哭土が、ふと、こちらにむいている視線に気付いた。

振り返ると、車から少し離れた所に見慣れた少女の顔。

肩で息をし、哭土らを見つめていた。

「菊兄様！」

菊塵はその声に弾かれたように反応をみせる。哭士たちの背後に立っていたのは本家当主を守る狗鬼、黒古志莉子だった。

早池峰家を襲撃したときには身奇麗だった服も、何故か今は煤のようなもので所々が黒くなり、白い肌にも無数の傷が走っている。

「何故、ここに」

菊塵の言葉が終わるか終わらぬかのうち、莉子が必死の形相で言葉を発する。

「久弥が！ 曾根越久弥がGDを引き連れて本家に……！ 柳瀬ア

キも奴に……！」

菊塵とユーリがほぼ同時にその言葉に反応する。

「何だつて……！」

ユーリの髪の毛がざわつく。

「ユーリ、待て」

同時に、本家に駆け出そうとするユーリを哭士の短い言葉が制する。

一瞬、自身の向かう先を見据えたユーリだったが、哭士の言葉に足を止める。

「GDは一人で行つてどうにかなる相手ではありません。莉子の話を聞いて状況を把握するべきです」

続く菊塵の言葉に、焦る気持ちをユーリは押さえ込んだようだった。

ワゴン車の中には、運転席に菊塵、助手席に莉子、後部座席にユーリと哭士が陣取る形になった。

「一体、何があつたんです」

冷静に問う菊塵。だが、口調は普段よりも強い。

「私にも、一体何が起きたのか分からない。突然、久弥がGDを引

き連れて本家を襲い始めたの……狗鬼も、籠女も、使用人も……見境なく殺されて……」

莉子は両手で顔を覆った。

「GDの侵入の連絡を受けてから、僅か数分の出来事だった。私が鼎様の部屋に駆けつけると同時に、GDの奴らは押しかけてきた」

「それで、当主はどうしたんだ」

哭士の問いに、莉子は顔を覆っていた手をゆっくりと下ろした。

「私が食い止めている間に、避難されたわ」

本家の内部は、山の斜面を利用した部分もあり複雑に作られている。また、建物の中にも隠された通路が網の目のように張り巡らされているそうだ。相当な古い建物の為、老朽化して封鎖された通路や、本家の者すら把握しきれしていない箇所もあるらしい。

鼎は、諍いの騒音を聞きつけ、いち早く通路を利用し、屋敷のどこかに避難をしたそうだ。

「他の狗鬼達は当主を守らないのかよ？」

ユーリが莉子に問う。狗鬼と籠女を統べる本家の頭だ。もっと嚴重な警備をしかれていても良いはずである。

「古いしきたりで、当主を守るのは当主本人が指名した狗鬼だけ。

鼎様は、私と恒河沙を傍らに置いていたの」

恒河沙の名が出、哭士の右眉がぴくりと反応する。

「その恒河沙も、居ないの……。こんなときに、こんなことが起こるなんて……！」

やがて莉子は切々と語りだす。

比良野色把をアービュータスビルから攫ったのは、鼎自身の独断であったこと。それが、当主を補佐する御世の耳に入り、鼎は数日の謹慎を受けていたこと。

恒河沙の失跡を巡り、鼎との間に亀裂が入ったこと。

「本家は、鼎様の言葉では動かない……。私たちが、守らないと……」  
鼎は当主という名を掲げるだけの、形だけの存在なのだという。鼎の命令で、本家そのものは動かない。

莉子も、避難した鼎を保護しようと、必死に本家の狗鬼らに救いを求めたに違いない。

だが、鼎を見失い、莉子は今、ここに居る。相棒の恒河沙も不在で、周りに手を差し伸べるものは居ない。

かつての仲間、菊塵に頼るしかなかったのだろう。

哭土は、本家に赴いたときの鼎を思い浮かべる。

誰にも心を許さないような、冷たい微笑み。哭土を自身を守る狗鬼として本家に留まらせようとしたことを思い出す。

先の莉子の言葉から、当主になったばかりの鼎に、忠誠を見せる者たちは殆ど居ないに等しかったのだろう。

僕は本家の当主だ。

今思えば、哭土に言い放ったその言葉は、自分に必死に言い聞かせていたのかもしれない。

「……………」  
何ともいえぬ感情が、哭土の心中をざわめかせた。

「何で、アキが……、んな所に攫われなきゃいけないんだよ」

右手で即頭部を掻き毟るユーリ。突然の出来事に相当混乱し、ただひたすら自身の籠女を救わなくてはならないという焦燥が急かし立てているようだった。

「恐らく、彼女を攫ったのは僕をおびき出す為の罠でしょう」

エンジン音の鳴り響く車内で、菊塵の声はよく響いた。

「何で！　なんでキクをおびき出すためにアキが攫われなきゃならねえんだ！」

運転席のシートにすがり付くように、ユーリが立ち上がった。

「彼女の姉、柳瀬フユは、僕の交際相手でしたから。大方、僕の狗石の在り処を彼女から聞きだそうとしているのだと思います。そして、彼女の狗鬼であるユーリと僕もここ最近行動を共にしている。あわよくば、アキさんを救いに来た僕をそのまま手込めにしようとも考えているのでしょうね」

彼の昔からのやり方です。菊塵はそう付け加えた。

そして、菊塵は、久弥が本家に宣戦すると言っていたこと。自身を再びGDに引き戻そうとしていたことを語った。

「その久弥という男は、何が目的なんだ」

「分かりません。ただ、一つだけ言えるのは、彼を動かすのは「力」に対する異常なまでの執着。恐らく、それが今回の非常事態を生み出している事は間違いがありません」

哭士の問いにも淡々と答える菊塵。だが、言葉の端々が僅かに上ずっている。

これから久弥との争いを避けられぬ事を察しているのだろう。ハンドルを握る手が僅かに強まったのを、哭士は見逃さなかった。

本家に通じる道に差し掛かったところで、一気に物々しい雰囲気  
が漂い出す。硝煙、血、古い木の燃える臭い。

山へ向かう階段の前に、急ブレーキで車が付けられる。

車を転げるように降りたユーリは、先頭を切って長い石造りの階  
段を一気に駆け上る。哭士らも、ユーリの後に続く。莉子も黙って  
哭士らの後に続いてくる。

長い長い石段を駆け上るのも、狗鬼の足では数秒で事足りた。

そして、最上段に足を掛けた瞬間に、飛び込んできた映像に、皆  
息を呑んだ。

「これは……！」

立ちふさがる大きな門が破られ、広がる石畳には数人の者らが血  
の海に倒れ臥し、息を引き取っていた。遠くに見える本家の建物の  
所々から、煙が上がっている。

一番手前に倒れている男は軍服のような衣服を纏っていた。

「この着衣、GDの物です。間違いありません」

男の傍らに屈み込んだ菊塵が頷く。

「……妙だ」

哭士が、倒れている死体を見て呟くと、全員が倒れているそれに、  
注意深く視線を向けた。

そして、間もなく哭士の放った言葉の意図を理解する事となる。

死体に刻まれている傷は、刃物でつけられたものとは違う。銃弾  
の痕でもない。

腹部を動物に食いちぎられたような傷跡が、所々に広がっている。



他の死体を見てみても足や腕が千切られているもの、頭が潰れているもの、腕が関節と逆方向に向いているものもある。

「狗鬼同士争つても、このような有様にはならない筈ですが」

とてつもない力で千切られた死体。通常ではありえない事態に、菊塵の眉が寄る。

「血の他に妙な臭いがする」

哭士の鼻が、死体の傷口から漂う僅かな異臭を感じ取る。

「獣の臭いだ」

血の臭いを嗅ぎつけて、野犬が出た可能性もある。

だが、死体には噛み痕以外の外傷が見当たらない。そして、犬が噛み付いたにしては大きすぎる傷口。

全員が、周囲に向けて警戒する。

見張りらしき者は居ない。恐らく、GDが攻め込んだときに殺されたか、もしくは逃げたのだろう。哭士達以外に、生きているものは見当たらなかった。

遠くから小さな銃声のような音が風に乗って聞こえてくる。まだ、この中で本家とGDの争いが繰り広げられているようだ。

大きな屋根から立ち上がる煙。辺りに立ち込める物の焼ける臭いと血の臭い。

「当主…… 鼎は何処にいるか把握しているのか」

哭士は冷静に莉子に問う。尋常ではない本家の様子に、莉子の肩と息は震えている。

「莉子」

呼びかけた菊塵の声に、ハッと我に返ったらしい。莉子は震えるように、首を横に振った。

「鼎様は、隠し通路を使って、追っ手から逃れてる。移動を続けているから、場所なんて……」

本家は広い。山の斜面まで利用されている複雑な建物に、更に無

数の隠し通路。それを利用すればGDに見つかる可能性は少ないが、それ故に一人の人間を見つけ出すには、かなりの時間を要する。その間に、本家が焼け落ちてしまう可能性もある。アキの安否も気に掛かる。

誰ともなく、不利な状況に深い息が漏れだした。

と、遠くから二つの気配が一直線に向かってくるのを哭士は感じ取った。

顔を上げ、気配を探る。人間ではない、四足の獣の気配。

「何だ？」

菊塵も、近づいてくる小さな気配に気付く。やがて、その気配の元は哭士たちの前に姿を現した。

荒い息、石畳を打つ軽い音。

石畳の脇の藪の中から大型の犬が二頭飛び出してきた。哭士らの前に立ちふさがり、激しく吠え立てる。

「まさか、こいつらが死体を？」

ユーリが犬を追い払おうと手を振る。だが、ユーリの手を避けては哭士の前に回り込むと、顔を見上げて必死に吠える。

この犬には見覚えがあった。

「待て、これは友禅の犬だ」

以前、哭士が本家の客間に通された時の事だ。客間の人間が逃げ出さないように見張る役目を持っていた三頭の番犬。そのうちの二頭だ。

友禅がかつて本家で過ごしていたときに飼い、友禅にしか心を許さないものたちだ。

二頭の犬は、哭士が視線を寄越した事を確認すると、背を向けて振り返り、ついて来いと言わんばかりにまたもや吠え始めた。

必死に何かを伝えようとしている事を哭士は感じ取った。

「後を追う。いいな」

誰にもなく哭土が言い放つと、全員が首を縦に振った。

暴かれた正門を潜る。

以前感じた、不快感が体を包み込む。以前は分からなかったが、地面から突き上がってくるようなこの不快感は、友禅が幽閉されていた忌家の影響を知らず知らずのうちに感じ取っていた物だったらしい。

大きく息を吐き出し、目の前の二頭の犬に集中する。

友禅の犬らは、屋敷の外壁に沿うように走り続けた。

「GDの者らに見つかれば厄介です。見つからぬよう、慎重に」

菊塵の言葉を理解しているかのように、犬達は時に人の気配を感じ取ればピタリと止まり、その気配をやり過ごしてから進んでいく。時間は掛かるが、屋敷の中を全て把握している犬らについて行く方が闇雲に進むよりも遥かに効率がいい。

中庭に渡っているを廊下に沿って進み、やがて木が鬱蒼と生えている雑木林のような場所にたどり着く。

木々の間に隠れれば、気配を殺すことが出来る。周囲に危険な気配が無いことを確認し、哭土は、肩に入っていた力を抜いた。

雑木林から外の様子を伺うと、建物の外や廊下には、GDの狗鬼や、和装を纏った本家の者の遺体が転がっている。

「……酷い有様だぜ」

嫌でも目に入るそれらの様子を見て、ユーリが吐き捨てるように言い放つ。

皆、争った末に命を落とした事が分かる。他の狗鬼よりも基礎能

力が高い本家の狗鬼といえども、戦い慣れているGDによって突如襲撃されては、ひとたまりも無かったのだろう。

「籠女も倒れていました。恐らくGDの者らに、治癒の血を目的に殺されたのでしょうね」

菊塵が奥歯をかみ締め、目を伏せた。

がさり、と藪を掻き分ける音。

その音を聞くや哭士の体は素早く反応する。菊塵も音が発生した場所に銃口を向けた。

枝に飛び乗り、音の発生地点に飛び込む。

「……………」

藪に飛び込んだ哭士の目の前に現れたのは、和装を纏った三十代程の女性と、小さな子供。瞬時に敵ではないと見極め、警戒を解いた。

女性と子供は、目の前に突如現れた哭士に、驚きのあまり声を出せないようだった。

「貴方たち……………」

女性と、子供の姿を見、莉子が反応をみせる。本家に住まう者達だったらしい。

驚きのあまりに目を見開いていた女性も、莉子の声にはっと我に返った。

「い……………一体、何が起こったんですか？ 私たちは何とかここに逃げ込んだけれど、他の者たちは逃げ送れて殺されてしまった……………」

女性は、まだ今起きていることが実感できないらしい。話す言葉は真に迫ってはおらず、ただ、おろおろとしている。

現実を確かめるかのように、腰にすがりついている子供の腕を擦っていた。

「……」

女性の言葉に、莉子は唇をかみ締めた。自身がかつて所属していた部隊が本家を襲っているのだ。言葉がなかなか出てこないのだから。

「本当に怖いのは、あいつらじゃない。大きな犬だよ」

女性にしがみついていた子供が、莉子に向かって咳くように言い放った。

「……犬？」

狗鬼かと問う莉子に子供は首を振る。

「見間違いだと思うんです。ニメートルもあるような大きな犬が、屋根を飛び越えて行ったなんていうんです」

「本当だよ！ おれ、見たんだ」

子供の体は小刻みに震えている。

「真っ赤な犬……。襲い掛かってきた奴らを皆殺しにして、あっという間に消えたんだ」

（真っ赤な、犬？）

子供の言葉と、本家の入り口で倒れていた死体が重なる。

獣に食われたような傷口は、その赤い犬の可能性が高い。顔を見合わせる哭土と菊塵。

「貴方たちは、ここに隠れていて」

莉子の言葉に母子は頷いた。

「この犬達は、俺たちを何処に連れて行くつもりなんだ？」

肩の力を抜いた哭士達を見、察したのか、犬達も進めようとする足を止め、その場に座り込んでいる。

先に進む素振りを見せれば、恐らくまた道案内をしてくれるのだろう。

「恐らく、当主の所だろう」

屋敷の状況、構造をほぼ網羅している様子から見て、この犬らは当主の居場所を知っているに違いない。

ユーリに対する哭士の答えに、傍らに立っていた莉子の強張った顔が少しだけ緩まったようだった。

### 3 29 ・久弥の目的

煙の上がつている大きな建物が近くに見え始める。哭士には、その建物に見覚えがあった。

「あそこが、鼎様の部屋」

哭士が以前、鼎と話をした建物だった。今や、大きな屋根から黒煙が上がり、窓からは赤い炎がちらついている。中に生きている人間の気配は無い。

燃えている建物の横には、数人の死体が転がっているだけだった。

「久弥って奴は何処にいるんだ」

雑木林を出発してから数分。ユーリの声には焦りの色が見て取れる。久弥に攫われたアキの安否が気になるのだろう。

後を追っている狗鬼らの心情を他所に、友禅の犬達は迷うことなく先導を続ける。時折振り返っては、哭士たちがついてきているかを確認している。

「この犬らは当主の元へ案内しようとしている。久弥も当主を探しているんだろう。いずれ接触する」

落ち着け、と遠まわしに諭す哭士の言葉に、ユーリは奥歯をかみ締めた。

と、その時だった。

ユーリががばりと顔を上げた。

「……アキの声だ」

まっすぐに向けられた視線は遙か先。哭士の耳はアキの声らしきものは捉えられなかった。

自身を守る籠女に関しては、狗鬼は並外れた集中力を発揮できる。

アキの近くには恐らく、曾根越 久弥が居る。  
「行きましよう」

菊塵の言葉に、誰ともなく足が速まった。

ユーリが指し示した方向へ進むと、急に視界が開けた。藪に身を潜め先を見つめると、複数の人影。

その中心にいる二人の人物に、ユーリと菊塵は息を飲んだ。

アキと久弥だ。

「まだ当主と御世は見つからんのか。形だけの当主は見つけ次第殺して構わん。影で操っている婆アを探し出せ」

部下に向かつて吐き捨てるように命令を下す久弥。その傍らには、後ろ手に縛られたアキが座り込んでいる。

「そろそろ吐いたらどうだ？ お前の姉の相手、菊塵の狗石。お前は在り処を知っているんだろう？」

アキの短い髪を掴み上げ、無理矢理に自分へ顔を向ける。

顔を上げられたことで、顔の至る所に走る傷が露になる。左頬も心なしに腫れているようだ。

「……！」

その様子に、ユーリの髪が逆立ち、吸い込む息が震える。

「知っていたって、言うわけ、ない」

久弥の目じりが痙攣する。掴んだ髪ごと地面に放られるアキ。喉の奥から小さな悲鳴が洩れる。



「アキッ！」

ユーリの声は、周囲に響き渡る。

名を呼ばれた少女はハツとして声の主を探している。

その様子に傍らに立っていた久弥の口元に笑みが浮かんだ。

「来たか」

声を発したユーリではなく、菊塵と久弥の視線が交わる。

「一体、どういうことですか。本家を襲撃するなど……！」

「考えれば分かることだろう。幼い当主を頂点に置き、腑抜けた狗鬼ばかりを飼いならしている本家などに、【神】を預けられぬ。我々が【神】を手に入れ、狗鬼の力を最大限に發揮すれば、この世に恐ろしいものなど無くなる。この国、いや、この世界を思うがままに操れる。これは理想や幻想などではない。実現可能な、未来なのだよ。菊塵」

吊り上った口から覗く鋭い歯。戦いを心から楽しむときに見せるこの男の笑みを、菊塵は何度も見てきた。

「腑抜けたこの国をお前だって嫌と言うほど見ているはずだ。政治、経済、その影には何時も我々狗鬼が影ながら動き、邪魔なものはずべて排除してきた。我々が居なければ、碌に回りゃしない。なのに何故俺たちがこそこそと隠密に生きなければいけない？ 大手を振って歩けるのは我々の方だ。それを思い知らせてやるのさ」

「……」

黙りこんで久弥を見つめる菊塵。その瞳の奥には沢山の思考が渦巻いているようだった。

「もう一度言うぞ菊塵。俺の元に戻って来い。お前の力を俺の為に使え」

傍らに立っているアキの腕を掴み上げる。

「狗石をこちらへ寄越せ。この娘と交換だ」

アキは身じろぎ抵抗している。アキの目が菊塵の視線と交わる。

暫時の空白。

菊塵は胸元に手を差し入れる。久弥の周囲を固めている狗鬼らが、菊塵に向かって銃を向けた。

その様を、久弥が横に手を振り収める。

菊塵が胸元から取り出したのは、拳銃ではなかった。細い指に光る、小さな石。

「菊塵」

哭土の諫めるような声に、ちらりと視線を寄越すが、言葉を何も発しない。

自身と、久弥、その丁度真ん中程に、手に持っていた石を放った。地面に鈍く光る石が転がる。

「……」

久弥は動かない。

永遠とも思えるような、重い静寂が辺りを包んだ。

一步、久弥が放られた石に向かって歩みを進める。  
また一步、もう一步。石との距離を縮める。菊塵との視線は交わったままだ。

ゆっくりと身を屈め、久弥の手が狗石に伸びようとした、その時だ。

背中に手を回し、素早く拳銃を抜き取ると、全く違う方向に弾を放った。

瞬間、その弾は久弥のわき腹をすり抜け、傍らの地面に深く突き刺さった。

「二度も同じ手に引つかかると思うな」

銃弾を反射させ、久弥に放った銃弾は、彼の能力により透過されてしまった。久弥の口元が大きく上がる。

「それが、お前の答えというわけだな！ 愚かな！」

落ちていた模造の狗石を踏み潰し、久弥が菊塵に向かって飛び掛る。目の前に反射の領域を発動させるも、久弥はそれを透過の能力で潜り抜け、強かに菊塵を地面に叩き付けた。

受身も取れずに短い息が吐き出された。倒れた菊塵に馬乗りになり、首に手をかける久弥。ぎりぎり絞まる首。菊塵は久弥の腕を掴み、首から引き離そうとするも、久弥の腕はびくともしない。

その様子に、哭士が久弥に向かって飛び掛る。その様子をちらりと見ただけで、久弥は動かない。

「！！」

哭士の体は、標的の久弥の体をすり抜ける。バランスを崩した哭士は、反対側の地面につんのめるように着地する。

久弥の体が透過したと同時に、菊塵の首からも腕の感触が一瞬消

えた。その隙に菊塵は久弥の下から抜け出す。

「早池峰 哭士、か。なかなか良い狗を近くにおいているようじゃないか」

久弥が、哭士の姿を上から下まで見、菊塵に視線を戻す。その様子に、無意識に哭士の左まぶたが痙攣した。

「お手並み拝見と行こうか」

久弥の言葉と同時に、哭士達に向かってくるGDの者たち。中庭にいるのは全部で六人。うち三人はアキを逃がさんと両隣を動かない。

「行け」

三人の男たちが散る。

菊塵と男たちの間に飛び込んできた人影。 莉子だ。

「この三人は、僕と莉子が」

すれ違いざま、菊塵は哭士の耳元に言葉を放つ。

菊塵の視線は、ユーリをちらりと捉えた。籠女を捕らえられたユーリはかなり激昂している状態だ。冷静な判断は出来ない可能性が十二分にある。

哭士は身を翻した。

### 3 30・絡み付く砂

久弥の視線が菊塵と莉子に向かっていている隙を見て、ユーリがアキに向かって駆ける。だがアキは、久弥の部下により囲まれている。

息を小さく吸ったユーリの目が鋭く光り、直前で身を屈めた。地面に手をつき足を振り上げ、部下の一人に攻撃を仕掛ける。

だが、相手も戦い慣れている部隊員だ。ユーリの蹴りはあっさりと交わされてしまう。

そのユーリの影から、もう一人の人物。

哭士は身を深く屈め、ユーリの影に隠れて近づいていた。すぐ傍の男に横から足払いをかけた。男の体は中庭の砂地に倒れこむ。手を突きすぐに立ち上がるうとするその手を、更になぎ払い、背中を打ち付けられた部下の腹部に拳を撃ち込んだ。

部下は喉から小さく呻き、ガクリと体から力が抜けた。

もう一人の部下が動く。ユーリに対し拳を放つが、ユーリは目前でその拳を防ぐ。

哭士の背中に向かって別の隊員が銃を放つ。それをユーリの空気の壁が防ぐが、銃弾は空気の壁に埋まらず、激しく哭士の背後で弾け飛んだ。割れた空気の破片がパチリと哭士の背中に当たる。

「なんだ……!？」

ユーリが瞠目する。ユーリの生み出す空気の壁はかなりの強度を誇る。だが、それをも打ち砕く銃弾。

対狗鬼用に威力が強化された銃のようだ。防ぎ方を誤れば、負傷は免れない。

(……厄介な代物だ)

哭士は内心舌打ちする。

目の前に対峙しているのは、体の大きな男と、部隊員としては体の小さな男の二人。

同時にその二人の男が向かってくる。

相手の銃に注意しながら、ユーリと共に一人ずつ潰していくのが得策であると哭士は判断した。

だが、次の瞬間、大柄な男は哭士に、もう一人の男はユーリに向かって銃口を向ける。ユーリもそれに気付き、身を僅かに屈める。

同時に鳴り響く銃声。哭士は右へ、ユーリは左へと地面を蹴り避ける。

(……しまった)

相手を追うように銃弾を放ち、離れたところに追いやる。相手は初めから二人を分散させるつもりだったようだ。

相手の思惑に気付くが、時はすでに遅い。

哭士は壁に向かって跳ぶ。哭士の影の移動をなぞるように銃口が向く。中庭と外界を隔てる白い壁を一度、二度、蹴り上げると、哭士を追うかの如く弾痕が壁を抉<sup>えぐ</sup>った。ぐるりと頭から一回転し、両手足で地面を掴む。哭士の真横を銃弾が通り抜ける。蹴りだす勢いで真直ぐに跳び、男の鼻面に向かって拳を叩き込む。

だが、哭士の拳は、バシリという快い音と共に男の手の平に掴まれた。男はそのまま哭士の拳を握りつぶしに掛かる。

拳の骨が軋む。思わず哭士の顔が小さく歪んだ。哭士の奥歯が鈍く音を立てる。

腕を強く引く。そのまま肘を地面に向け下げた。前のめりになった相手の横面に、体を捻りながら思い切り膝を打ち込んだ。

脳を大きく揺さぶられた男は、鈍い音と共に、地面に大きな体が沈む。だが、男は意識を手放さない。がばりと顔を上げ、瞳が一瞬紅く光ると、突如哭士の左足が重くなる。

違和を感じた左足に目をやると、哭士の左足に纏わりつく大量の砂。

砂を操る狗鬼のようだ。砂を払おうと左足を振るが砂はこびりついたように離れない。みるみるうちに砂は凝縮し、哭士の左足を万力のように締め上げる。

「そうだ、左足を狙え」

遠くで久弥の音がする。完治したかに見えた左足、僅かに庇っている様を久弥は見逃していなかったようだ。

かつてレキに折られた腿まで砂が這い上がり、ギリギリと静かに迫ってくる。

哭士に焦りが見えたのを察したのだろう。砂の能力の男は、ゆっくりと地面から立ち上がり、余裕の表情を浮かべて見つめている。

能力者を仕留めれば効力はすべて消える。男に止めを刺そうと、右足で地面を蹴る。

「！！」

集合した砂は思いの外強い力で哭士を固定していた。バランスを崩し、地面に倒れそうになる。

「無様だな。早池峰の狗」

男の嘲笑が響き渡った。

手で掻き取るうとするが、哭士の手が掛かった瞬間に指へと移動してくる。指についた砂もまた、量すら少ないが指をギリギリと圧

迫してくる。

闇雲に触れるのは危険だ。

「……………」

一步踏み出すたびに、砂が足を引っ張り、大幅に移動する速さが落ちた。目の前の男を出し抜いて攻撃をする事は難しい。この砂をどうにかしなくてはならない。哭士の目が、周囲を探る。

視界に、中庭の大きな池が映る。

次の瞬間には、池に向かって駆け出し出していた。

砂の抵抗で高く飛ぶことは出来ない。一步踏み出すことに、地面を蹴る左足の重量が増していく。

「ぐっ……………」

左足の折れていた箇所が、ジクジクと痛み出す。治りかけていた足が、悲鳴を上げ始めた。

絶えず頭の芯にまで痛みが走り続け、苦痛に思わず顔が大きく歪む。

だが、このまま地面に伏すわけには行かない。左足をつくたびに地面の砂は哭士に移動し、左足の砂の塊はかなりの大きさになっている。砂は更に上にも移動を続け、腰の辺りまで塊が上がってきている。

「遅い！ 遅い！」

面白げに事を見つめていた男は、突如哭士の傍らに現れ、わき腹を強く蹴りつける。

避ける事など出来なかった。

つんのめる様に、地面に片手がついてしまう。獲物に群がる蟻のように、ざわざわと砂が瞬時に上昇を続ける。右腕が一瞬にして砂に覆われた。

何とか起き上がるも、右腕の砂は、哭士の首に向かって伸び、じ



わじわと圧力を上げ始めた。

殆ど足を引きずるようにして、池に飛び込んだ。

高い水しぶきが上がり、哭土の体はしぶ濡れになる。だが、砂は落ちるところか、水分によって更に凝縮し、岩のように硬度を増す。

「水で落ちるわけが無かるう！ 浅はかな！」

哭土の膝下までの深さの池。水を吸った砂は更に重量を増した。

歯を食いしばり、左足に力を込め圧力に抗うが、哭土は池の底に手をつけてしまう。

「そろそろ、楽にしてやろうか」

男が池に足を付けた。ざぶざぶと音を立てながら哭土に向かってくる。

苦痛にゆがめた哭土の表情。

だが、次の瞬間、双眸に鋭い光が宿る。

「別に、洗い流そうとしたわけじゃない」

哭土の周囲が、突如白で染められた。

右腕を覆う砂の塊も、白く変色し、ゴツゴツとした見た目に変わる。

哭土が右腕に力を込めると、激しい音を立てて右手の固まりは割れ落ちていった。右手を振ると、残っていた欠片もすべて吹き飛んだ。

「水を十分に吸わせた。氷にすれば、割るのは容易い」

凝固する際に膨張した氷は、周囲の砂をも巻き込む。氷で包んでしまえば、それは砂ではなく、砂の混じった『氷』となる。氷を自身の制御下に置くことの出来る哭士は、いとも簡単に池から足を引き抜く。

一瞬にして状況が一変、狼狽している男とは裏腹に、哭士の口元に冷酷な笑みが浮かんでいた。

### 3 31・見えざる力

ユーリはGDの部隊員に、軍人のようなイメージを抱いていたが、目の前の男は哭士と戦っている男よりも体が細く、ひ弱な印象を受けた。

（悪いけど、こりゃ運がよかったかもしれねえ）

力で押してくる狗鬼との戦闘は苦手だった。透明な壁を足場にして攻撃を仕掛けるユーリの戦い方では、自身よりも力の強い狗鬼や、ひときわ一際身体が頑丈な狗鬼に与えられる痛みは少なくなってしまう。

目の前の狗鬼は、自身よりも小柄で、さほど力が強いわけでもなさそうだ。

（能力さえ把握できりゃこっちのもんだ）

相手の能力を知り、その対処法さえ見抜けば、あとは自身の能力で戦うのみである。機動力に関しては、他の狗鬼に勝っているという自負があった。一対一で相手の能力さえ把握してしまえば、先に止めをさすのみ。

ユーリは相手の男に意識を集中した。

相手の小柄な男もまた、ユーリを警戒するように身構えていた。

だが、その男の口端が上に持ち上げられた。

「朱崎 龍」

自身の名を呼ばれ、ユーリは顔を上げた。

「お前の能力は知っている」

自身に満ちた男の顔に、ユーリ心中が苛めく。

「……だから何だつてんだよ」

「ただ透明な板切れしか生み出せない貧相な能力だ」

ユーリは胸の前で腕を組む。あからさまな挑発に乗るわけにはい

かない。

「貧相、大いに結構。んな台詞、聞き飽きてるんだよね！」

目の前にブロックを展開させる。大きく足を踏み出して、高く飛び上がった。五メートル程舞い上がり、足が天を向く。そのままブロックを蹴り上げ加速し、男へと拳を繰り出す。すんでの所で男は身体を右に屈め、ユーリの拳の出っ張りが男の頬を掠めたのみだった。やはり、早い。

男はユーリをやり過ぎすと、素早く腰に差していたナイフを抜き取り、ユーリの右肩に向かって突き出してきた。

空気の壁を、僅かに地面に向くように生み出した。ナイフは壁に沿って滑り、男の予想とは反した軌道を描く。僅かに見える焦りの色を、ユーリは見逃さない。

男に向き直ると同時に、空気の壁を消し、前のめりになった男の顎に向かって足を蹴り上げた。

だが、大きな手ごたえを感じない。男はユーリの足の軌道すらも見極め、身を擦って避けたのだ。

見る間に足が掠めた頬に赤い傷が走るが、男は怯まない。

勢い付いているユーリの方にじわりと焦りが生じる。予想以上に、素早いのだ。

「どうした、その程度か」

男の言葉に、ユーリの歯が軋む。自身の能力は相手に知られている。まだ、相手の能力は分からない。このままでは致命傷を与えることは出来ない。

強化された銃がユーリに向けられる。硬い空気のブロックをも砕く強力なものだ。

(流石に……アレに当たればマズイ)

照準がユーリの心臓に合わさる。引き金に力がこもる一瞬の隙に、ユーリは身を屈め、溜めた息を一気に吐き出しながら男の懐へと飛び込んだ。

「!!!」  
銃を恐れ、よもや飛び込んでくるとは思わなかったのだろう。

能力は一切使わず、男の両足に突進した。飛び上がるうとする男の足を、ユーリが一瞬早く捕らえた。そのまま男を地面に引き倒す。小さな砂の粒が周囲に飛び交う。

ユーリは男に馬乗りになり、みぞおちに向かってユーリの突きが入る。

瞬間、苦しげな男の声が喉の奥から洩れる。

（もう、一撃）  
止めを刺せる。ユーリは全身に力を込め、右手を振り上げた。

次の瞬間だった。

ユーリの右腕を、熱い衝撃が駆け抜けた。

「!!!」  
突然の事に声も出せない。

右肩を、強化された銃の弾が抉ったのだ。振り上げた腕は、男に向かうことは無く、重力に負けだらりと垂れ下がった。傷口が熱い。抉られた傷の一部が、焼け爛れている。

左手で傷口を驚づかみ、咄嗟に男の上から離れた。

誰かが自分に向かって至近距離から銃を放ったのだ。視線を泳がせるが、もう一人の部隊員は哭士と戦い、他の三人の久弥の部下達も、菊塵と莉子との戦闘に専心している。

静観している久弥も、手に銃を持っていない。何より男と自身の

近くには、誰も居らず、立ち上がった砂埃に紛れて、誰かが近づいてきた気配も無かった。

（おかしい……！）

背中を伝う嫌な汗。残る可能性として考えられるのは、目の前にいる男の能力。倒れた男に視線を寄越すと、男は歯をむき出した。「どうした。もう終いか」

抉れた肩を掴んでいる左手から、絶え間なく紅い熱が漏れ出している。

肩の肉が見えている。もう右腕は使えない。男の能力もまだ把握していない今の状態では、戦闘を長引かせれば長引かせるほど、状況は不利になっていく事を本能的に悟っていた。

ユーリは地面に足を突きたて、男の顔に向かって思い切り砂を叩きつける。男は咄嗟に顔の前に手を翳し、砂を防いだ。

「目潰しなど……！ 小賢しい！」

ユーリはひらりと男から数メートル離れ、透明なブロックの上に立ち上がった。

男は砂がついた手を払い、顔に付着した砂を拭った。

「そうやって馬鹿の一つ覚えのように、空中から向かってくるだけであろう？ 知恵の回らぬ、愚かな戦法だ」

ユーリは男の言葉に答えない。そのまますとん、と地面に降り立った。

「馬鹿は馬鹿なりに何とかやってやるさ。来いよ」

ユーリは目で男を誘った。

### 3 3 2 . たった一つの力

物心ついたときから、無意識に使っていたこの力。

幼い頃、力の使い方を教えるべき親族は傍に居なかった。身近にいた父親は、家にいたためしが無い。父親の能力を見たことも無かった。

周囲に狗鬼がおらず、他人にはこのような力が無いと分かり始めた頃から、独学で力の使い方を身に付けた。

幼い頃から、自分の力が唯一で、そして最強だった。狗鬼である以上、只の人間に力で負けることは無かったからである。

やがてユーリは日本に渡り、自分以外の狗鬼を知った。

それでも、自身の能力で他の狗鬼達をねじ伏せてきた。見えない硬い壁は自身を守る盾になり、何人たりとも自身に負傷を負わせることは無かった。相手は自分の壁を見破れぬまま、自身の足元に倒れ伏していった。

自信という自惚れの壁は、厚く、堅牢に、ユーリの周囲を囲っていたのだった。

早池峰 哭士に出会うまでは。

能力があっさりと見破られ、自身の力を遥かに凌駕する身体能力。そこから、ユーリを囲う壁は、崩壊を始めていた。

妹の死、影鬼の一撃を一般人に救われるという不覚。そして、哭士をも凌駕する圧倒的な力との遭遇。

貴方は、まだ自身の力を十分に使いこなせていないようですね。

廃工場で自身に放たれたレキの言葉に、ユーリは悩み、もがいていた。

（畜生……！！）

日本に来てから、自身の本当の名前を聞いた者の中から、嘲るようにユーリに言い放たれる言葉があつた。

ああ、あの落ちぶれた家の狗か。

朱崎 龍。自分のもう一つの名前だ。この名前には、朱崎という家の重荷が押し掛かる。

籠女が生まれなくなった家。力の弱い狗鬼の生まれる家。

どれだけ自分が力を示しても、朱崎という名を冠しているだけで蔑まれる事がユーリには許せなかつた。

狗鬼同士の争いに勝利しても、自身の能力でねじ伏せても、付いてくるのは朱崎という「弱い家」という烙印。

やがて、朱崎の名を名乗るのをやめた。

自身はユーリ・ヴァルナーとして、どの狗鬼の家柄とも関係の無い、一人の狗鬼として力を認めて貰う事を欲した。

（俺には力がある！ 誰にも負けない能力ちからを持つてる！）

自身の中のもう一人の自分が叫ぶ。そしてその背後にも、もう一



人の自分。

(でも、本当はそうじゃないってことは、分かってるんだ)  
哭土と出会ってからの度重なる敗北は、ユーリに大きな傷跡を残していた。

だからこそ、ユーリはこれ以上負けるわけには行かなかった。

ユーリの心の奥底に、一人の少女の姿がちらつく。

(千尋？ …… アキ？)

可愛がっていた妹か、はたまた自身の籠女か。

その姿は霞がかかっているように、ハッキリと捉えることはできない。

だが、ユーリの心中にちらつくその人物は、かけがえの無い者である事を、ユーリの本能は分かっていた。

一人の狗鬼として、その者を護る強さを持たなくてはならない。

これからの戦いで、負けるわけには行かない。

それが、今のユーリの心中を支配していた。

一か、八かだ

男と対峙をしたまま、何秒かが経過した。

挑戦的な目で男を睨め付け、その場を微動だにしないユーリ。

隙だらけのようだが、それが何かを狙っているようにも思えるの  
だろう。男は、ユーリから視線を外さぬようにして銃に弾を装填し  
た。

照準がユーリの額に合わさっても、ユーリの表情は揺るがない。

「その貧相な板で、何発防げると思っているんだ？」

男の問いにも、ユーリは答えない。

その様子に、男が顔を笑みでゆがめる。

「大層な口を叩いておきながら、打つ手が無くなったってわけか？

せいぜいあの世で嘆くと良い！」

男の銃が火を噴いた。

だが、ユーリの身体に銃は当たらない。

「残念、ハズレ」

男の右耳に、ユーリの声。

男はがばりと右を向き、すかさず銃を放つ。二発、三発と、耳を  
劈くような銃声がこだまする。

確かに、目の前の標的に向け、引き金を引いている。だが、ユー  
リが空気の壁で銃弾を防いだ時に響く独特の音もしない。

銃弾はあっけなくユーリの眉間、胸の中心をすり抜けていく。

まるで、曾根越 久弥の「透過」の能力のようだった。だが、狗  
鬼に与えられる能力は一人一能力の筈である。

瞠目している男の右半身に、衝撃が走り、庭に転がっている岩に

向かって弾き飛ばされた。周囲に砂塵が舞い上がり、岩は男がぶつかった衝撃で一部が砕け散った。

強かに打ちつけたのだろう。男の唇から、血が溢れている。男は袖口で血を拭うも、なかなか起き上がれずにいた。

ユーリは、地面を踏みしめ、男の前に立ちふさがる。

「蜃気楼って、知ってっか？ アレ、どうやって出来るか知ってる？」

ユーリの口の端が大きく上がる。

蜃気楼は空気の密度の違いによって発生する。密度の濃い方向に向かって光は屈折し、通常と違う風景を作り出す。

通常、蜃気楼は、気象の変化によって温められた空気や冷やされた空気の密度の違いで自然界にしか姿を現さない。だが。

「数日前に気付いたんだよね。生み出したブロックの中の空気の密度、圧力が自由に操れるって事にさ」

初めに、男に向かって砂を叩き付けたのは、目潰しのためではなかった。蜃気楼で生み出した虚像と自分が入れ替わる為に、一瞬だけでも男の視線を途切れさせる必要があったのだ。

「自分にこの力を使うまでは試してなかったからさ。うまくいって良かったぜ」

空気の壁に加え、自身の居場所も分からなくさせてしまえば、相手の攻撃はほぼ防ぐことが可能になる。

「だが、それは所詮まやかし、だろう？」

ユーリの耳元で囁く声。紛れも無くそれは、対峙していた男の声であった。

「……！」

信じられぬまま、がばりと振り返るが、遅かった。

横腹に叩き込まれる大きな衝撃。数メートルも飛ばされたであろう。もんどり打って地面に倒れこんだ。

鼻の奥が鉄臭さが広がる。血で汚れた口の周囲を、乱暴に袖口で拭う。

肩を庇いながら顔を上げた。岩の近くに座り込んでいる男と、そして、もう一人。唇が切れている箇所も全く同じ男が、ユーリの前に立ちはだかっていた。

(……男が、二人?)

ごくり、とユーリの喉が鳴る。

「……なんだよ、それ。俺と同じ虚像でも作り出したのか？」

狼狽は顔に出さないように、笑いながら問う。だが、ユーリの心中の動揺は男には手に取るように分かったであろう。

「貴様の子供だましの能力とは違う」

立ち上がっている男が答える。瞬間、岩の近くに座り込んでいる男の姿が消えた。

「ほら、こつちだ」

まただ。背後から降りかかる男の声。ユーリの身体が、再び宙を舞う。壁で防ぐ間もなかった。

ドサリと地面にうつ伏せで倒れる。

顔を上げると、やはり捉えるのは同じ姿をした二人の男。一瞬間を置き、空中に溶け込むように、一人の男の姿が消えた。

男は自分の分身を生み出し、自在に操れる力を持っているようだ。先程ユーリの肩を挟む銃弾を放ったのは、この男の能力によるものだったのだ。

「くっ……」

ユーリは、目の前に塵気楼を展開させる壁を生み出すも、ユーリの背中を、男の靴が叩き込まれる。一瞬大きく身体が反り、喉の奥から絞り出される苦しげな声。

「片方を誤魔化せても、一方からはお前の浅知恵が丸見えだ」

姿をくらませる虚像を生み出せたとしても、それは相手が一人で、かつ自分の正面に居なくてはならない。一つしかブロックを生み出せないユーリは、背後の視線を欺く術を持たない。

「一方が塞がれるなら、同時に二方向から攻撃すれば良いまでのこと」

ユーリの左右の耳に男の声が同時に届く。瞬時に右側に壁を展開させるが、左脇に重い衝撃が走る。強かに自分が生み出したブロックに叩きつけられる。

小さくユーリが咳き込み、何も無い空中に、赤い飛沫が浮かび上がった。空気の壁にユーリの吐き出した血が付着したのだ。

「……畜生……」

血の飛沫と同時に、ユーリの膝も地面へと落ちる。

能力の相性が悪すぎる。完全に受け手に回ってしまった。がくりと地面に右手をつく。小さな砂の粒が小さく音を立てた。

「まだ、終わりではないぞ」

更にも男の声。声のする方へ即座に反応をし、壁を展開させる。

「今度はこっちか」

まったく別の方向から蹴りを叩き込まれ、ユーリの身体は宙を舞った。

受身も取れぬまま、肩から落下し、纏っていた衣服は埃で白くなり、汗に付着した砂が全身を汚していた。

「龍！ 龍！」

アキがユーリに向かって何度も何度も叫ぶ。普段から表情を殆ど表に出さないアキ。だが今やアキの叫びは金切り声に近い。

その様子とは対照的に男はさも楽しげといった様子だ。

「五月蠅い餓鬼だ。少し黙っていて貰おうか」

アキの背後に、男の分身が現れる。籠女であるアキは、狗鬼の動きには即座に反応が出来ない。首筋に水平に平手を叩き込まれたアキは、ガクリとその場に崩れ落ちる。

「アキっ！」

全身を奮い立たせ、アキと男に向かって跳ぶ。瞬間、男の分身が消え、ユーリの拳は空を切った。

身を翻し、倒れこんだアキを抱え込んだ。

「アキ！」

アキの身体は微動だにしない。抱き上げると、身体中に付いた傷が露になる。攫われてから今まで、菊塵の狗石の在り処を問われ危害を加えられたに違いが無かった。

それでも、気丈に耐えていたのだ。

自分が助けに来ることを信じて。

ユーリの息が震える。自分にもとらえることの出来ない感情が体中を駆け抜ける。

「もう、そのガキは用済みだ。籠女と共に、死ね」

ユーリの目が、二人の男をとらえた。

一人は銃を、一人はナイフを構え、自身に向かって来ている。どちらかを防いでも、致命傷となるのは確実だった。

何故か今のユーリには、向かってくる男がスローモーションのように見える。だが、自身の身体も水飴に捕らわれてしまったかのようには動かすことも出来なかった。

このままでは、アキも……。

ユーリは、アキの身体を強く抱きとめた。

ナイフを弾く硬い音と、男の銃声が響いたのは、その次の瞬間だった。

静まり返ったのは一瞬だった。だがその静寂は永劫とも思えるほど長く感じられた。

ナイフは空中で止まっている。空気の壁で防がれたのは間違いが無かった。だが、銃を持つ男にも、驚愕の表情が広がっている。

銃弾は確かにユーリに向かって放たれたはずだった。だが、ユーリの身体が地面に崩れることはなく、胸の中の籠女を守るように、背中を丸めていた。

「……………分かった」  
アキを左腕で抱き寄せながら、ユーリは自身に言い聞かせるように呟いた。

「一つしか作った物質を操れないなら、その中に入っちまえばいい。……………なんで気付かなかったんだ」

今、ユーリの周囲には、半球状の空気の壁が取り囲んでいる。一度ユーリの上から腕をかぶせた様な状態だ。

ナイフは壁の表面で止まり、銃弾は曲線を描く壁に強く当たり、何処かへ弾き跳んだのだった。

籠女を守らんとする狗鬼の本能が、ユーリの集中力を限界にまで引き出していた。



壁を一層強固にし、ユーリと外界は完全に遮断された。外から干渉してくるものは何も無い。音も何も聞こえない。

壁の中の空間に広がるのは、胸に抱くアキの小さな呼吸音、心音だ。

自分の妹と重なるこの少女が自分を求めると、前触れも無く、何度も、何度も悪夢が襲い掛かってきた。

アキの顔が、妹とすり替わる悪夢。

自分は、妹を抱きたいと思っていたのか？ だから、妹に似たアキを……？

悪夢を見た後に纏わり付く苦悩。それに相反して突き上がっていく籠女に対する庇護の衝動。

板ばさみになっているユーリは、無意識に相姦の願望を抱いていたかもしれない事を恐れ、真直ぐアキそのものを見ようとしていなかったのだ。

だが、今のユーリの視界は霧の晴れたように鮮明だった。

「……なんだよ、全然違うじゃんか……」

戦闘の真っ只中だというのに、ユーリの顔には柔らかい笑みが浮かぶ。今までに悩んでいたことが一瞬にして莫迦莫迦しく感じられ、ユーリの目に、力強い光が宿った。

「アキは、アキだ。千尋じゃない」

言葉に表すと綿が水を吸い込むように素直に身体に染み渡っていく。

（今なら、分かる。どう身体を動かせばいいのか。どうすれば、アキを守ることが出来るのか）

ゆっくりと口から息を吐き出す。

驚いた表情を見せていた男だったが、その目が瞬時に攣りあがる。「フン、だが結局は力の弱い家の狗。そうやって、虚像を作っては欺き、壁の中に逃げ込むだけか」

男の嘲笑とも取れる笑みにも、ユーリは動じない。

「アキ、少しだけ血い、くれな」

気を失っているアキの耳元に囁くように言葉を紡ぐユーリ。アキの右手の付け根へ柔く噛み付く。

音も無く静かに流れる血を、ユーリは優しく舐め取った。体中に付いていた小さな傷が、まるで動画を早回しをしたように消えてゆく。銃によって打ち抜かれた肩は、流石に全快はしなかったが、一度だけなら動かすことが出来そうだった。

「……もう、逃げねえ」

アキの身体を横たえ、空気の壁で囲んだ。自身を守るものは何一つ無くなる。だが、ユーリの心中は揺らがない。

男が向かってくる。ユーリは足を半歩引き、身構えた。

突如、目の端で捉えるもう一人の男の腕。ユーリは身を屈め、地面に左手をつくと男に足払いを掛ける。男の身体が揺らぐが、ユーリは男の腹部に拳を突き入れるが、男は地面を転がり決定的な一発は与えられない。だがユーリはそれを追わずに一步引く。ユーリの鼻先を、投じられたナイフが掠める。

ナイフを投じた男に気を取られている隙に、ユーリの足元に倒れていた男は消えていた。

地面を蹴るユーリ。身を屈めながら男に真直ぐ向かっていく。同時に向かってくる男の手にはナイフが光っている。上から振り下ろされるナイフを、ユーリは肩の痛みを堪え右腕で受け止めた。小さなどの奥でユーリが呻く。右腕は完全に使えなくなった。一瞬男に動揺の色が浮かぶ。その隙にユーリは右足を男のわき腹に叩き込

む。

目の前の男が地面に伏した瞬間、ユーリの背後から男の分身が襲いかかる。

ユーリは自身の右腕に突き刺さったナイフを抜き取り、振り向きざまに左腕を振るった。男の胸に赤い一閃が走る。傷は浅いが、確実に損傷を残す。前のめりになり、地面に吸い寄せられる男とすれ違いざま、背中に踵を叩き込む。確かな手ごたえを感じた次の瞬間に分身の男は消えていた。

僅かに離れた所から、地面に両膝をつく音が聞こえる。

「流石に、二人分のダメージは堪えるんじゃないの？」

身体をよるめかせ、立ち上がれない男に対しユーリが言い放った言葉に、男の表情が強張る。分身を生み出し、また元の一人に戻る時、分身が追った傷は、本体に戻る。ユーリはそれに気が付いた。ならば、どちらに攻撃を加えても、損傷は本体に蓄積していく。守りから攻めに徹する姿勢に移ったユーリは、どちらが分身であるかという事を考えなくなった。それが突破口となったのだ。

何かを言おうと口を開いた男だったが、その口からは言葉が紡がれることは無く、ドサリと地面へと倒れ伏したのだった。

「畜生……痛てえ……」

目の前の男が倒れ伏したことにより、ユーリの全身を纏っていた緊張が解け、一気に痛覚が蘇ってくる。

顔をゆがめ、血液があふれ出る右腕の傷を押さえ込んだ。

アキの周囲を囲んでいた三人の狗鬼は、哭士と自身の手で倒されもう動かない。だが、まだGDの狗鬼と、そして久弥が残っている。

早く片をつけなくては、他のGDの者らも駆けつけてくる可能性がある。  
がある。

周囲に目を寄越すと、哭士は菊塵と莉子の戦闘に加わり、一人の  
狗鬼に止めを刺していた。

(あと、二人)

久弥の部下は後二人だ。ユーリも戦闘に加わろうと、大きく足を  
踏み出した次の瞬間だった。

「もう良い」

周囲の動きを停止させるのに十分な迫力を持つ一言だった。

それは、微動だにせず今までの戦闘を見ていた久弥が言い放った  
ものだった。

菊塵と莉子を相手にしていた部下二人の手が止まり、久弥の下へ  
と戻ってゆく。

その部下の姿を追い、ユーリの表情が凍りついた。

「……アキ……！」

久弥が脇に担ぎ上げていたのは、気を失っていたアキだった。

ユーリの空気の壁でアキは守られていたはずだった。

「奴の、能力です。物質を透過する力……」

久弥は、空気の壁を透過し、アキを壁から引きずり出したのだ。

身動きが取れなくなる菊塵とユーリ。アキの首筋には、光るナイフが当てられている。

「この野郎……！」

ユーリの奥歯がギリ、と鳴る。ユーリの怒りは紅い瞳に現れていた。

### 3 34 ・老兵は嗤う

ユーリの髪が、怒りでざわつく。

紅い瞳は、久弥を憎悪で包み映し出している。だが、今久弥に飛びかかるものなら、アキの細い首に、鋭いナイフが迷い無く走らされる事だろう。

「ユーリ、落ち着いてください」

肩を並べた菊塵がユーリに静かに語りかける。

「落ち着いているさ。十分に！」

その言葉とは裏腹に、ユーリの語気が強まる。籠女を守る本能で、意識が戦う方向に向いているユーリは軽い興奮状態に陥っていた。戦闘に対しての洞察力、行動力に関しては抜きん出て高くなるが、他の冷静な判断に欠けてしまう。ここでうまくユーリを制御しなければ、アキの身が危ない。

菊塵はユーリの腕をがしりと掴んだ。反射的にユーリの全身が強張り、菊塵の手を振りほどこうとする。

「仲間割れ、大いに結構」

久弥が茶化すように言う。久弥の言葉に更にユーリは身を屈め、今にも飛び掛らんとしている。

「ユーリ」

静かに名を呼ぶ菊塵の目とユーリの視線が重なり、強張った腕が僅かに緩まった。

それを見計らったかのように、哭士は久弥に向かって飛び出す。

久弥のナイフがアキの首筋に向けられる。

ナイフは久弥の思惑とは別に、久弥の腕は軋みを上げ、思うような動きが出来ない。

「……なるほど」

笑みを浮かべる久弥の視線の先には、久弥の腕ごと凍らされたナイフが光っていた。

手首が固定され、アキへ向けたナイフが一瞬遅れたのだ。その隙を哭士が狙わないはずが無い。真直ぐに飛び込み、腹部に拳を叩き込む。だが、手ごたえの一つも感じない。久弥は能力で自身の身体を透過させ、哭士の攻撃をすり抜ける。

同時に、久弥の脇に抱えられていたアキも透過された腕をすり抜け地面に崩れ落ちる。

「この所、随分身体が鈍っていた。久々に楽しい思いが出来そうだ」  
久弥の意識は完全に哭士へと向いた。久弥をすり抜け背後に回った哭士は右足を軸に左足を叩き込む。次も能力で透過されると思っ  
ての攻撃であったが、バシリと久弥の脇に抱え込まれる。思いの外、  
力が強い。哭士の左足は久弥の脇に固定された。

「……痛むのだろうか？ 先の戦いでも引きずっていたな」

じわじわと右肘で哭士の左足に圧力を与える久弥。痛む左足がギシギシと軋み、喉の奥から唸り声が洩れる。

左足の痛みが、哭士の脳を直撃する。思わず体中の力が弱まりそうになるのを必死に押さえ込んだ。

このままでは左足が使えなくなる。哭士は短く息を吐き出すと抱えられた左足を軸に地面を強く蹴り上げた。くるりと哭士の身体が回り、久弥の顔側面に蹴りを放つ。同時に左足にも激痛が走るが、瞬間、哭士の身体は支えを無くし、うつ伏せに地面に倒れそうになった。やはり、透過されたようだ。

両手で地面をついて久弥から離れようとした瞬間、哭士の背中に大きな衝撃が走る。久弥の足が哭士の背中を踏みつけたのだ。

ここで動きを止めるわけにはいかない。右足を大きく振り、地面についた上半身を軸にして久弥に蹴りを繰り返すが、やはり久弥の透過の力で攻撃を与えることは出来ない。久弥をすり抜けた哭士の足に、すかさず久弥の拳が突き入れられる。

久弥は哭士の左足が負傷している事を知り、そこを重点的に攻めてきている。

哭士の放つ攻撃は悉く透過され、その隙を縫うように久弥は攻撃を仕掛けてくる。一度に与えてくる攻撃は致命的ではないが、長引くほど不利になる。僅かに哭士の心中に焦りの色が見え始めた。

「若い兵隊は分かりやすい。身をもって知るがいい。最も恐れなければならぬのは、歴戦を生き抜いた老兵だとな」

久弥が哭士に向かってくる。

「!!!」

哭士の顔が歪む。思わず左足に体重をかけてしまい、哭士の反応が一瞬遅れたのだ。その隙をすかさず久弥が狙ってくる。

「そら、右脇が御留守になっているぞ」

左足に意識が向き、右側への意識が疎かになっていた。

咄嗟に身を捻り、久弥の攻撃の直撃は免れたが、右脇に与えられる肺から空気が押し出されるような力に、思わず哭士から声が洩れる。

足にうまく力が入らない。人間相手の戦いであれば、問題なく動ける。だが、相手は戦いに慣れた狗鬼だ。僅かな動きが命取りになる。

一度久弥から距離をとる。

地面に左膝をつき、久弥を睨みつける。押さえ込んではいるが、左足が更に痛みを増している。

ちらりと視線を菊塵とユーリが居た場所に寄越す。二人の姿はその場所から消えていた。地面に倒れていたアキの姿も無い。ユーリか菊塵が避難をさせたのであろう。



まずは、この足をどうにかしなければならぬ。

哭士は目を細める。左足に硬い感触が広がっていく。痛みで力が入らない左足を、氷で囲う。急激に冷却されたことで、痛覚が少し弱まった。

「ほお、自分の左足を氷で固定したのか。中々機転が利く。だが、勢いだけの若い狗だ。経験が足りぬ。欠陥さえなければ、手元に置きたかった。さぞや立派な兵になった事だろうよ」

倒れこんだ哭士を見下ろし、久弥が笑う。

「そんなもの、願い下げだ」

哭士が放った氷が地面を走る。久弥の膝までを氷が覆う。だがそれも一瞬。久弥はいとも簡単に氷から足を引き抜く。

右足で地面を強く蹴り、拳を突き出す。久弥がそれを軽く受け止め、強く引く。同時に哭士の腹部に向かって足を蹴りだす。

「！！」

咄嗟に空中で身を屈め、久弥の腿を足場に、回転しながら宙を舞う。

弧を描く哭士の軌道から、氷の槍が三本、四本と立て続けに久弥へと向かってゆく。だが、当然のようにそれをすり抜け、平然とした顔をしている。久弥の片眉が上がる。

「菊塵が組んでいる相手と、期待を持ちすぎたのかも知れないな。まさかこの程度の戦いで終わるわけではなからうな」

辺りに地面で砕けた氷の粒が降り注ぐ。その隙を縫うように、哭士は背後から飛び掛る。

「いつまでこんな茶番を続けるつもりだ」

構わず哭士は久弥に攻撃を仕掛け続ける。

哭士の放つ拳が久弥の顔側面を掠める。

突如、久弥が身を屈め、哭士の右太腿に向かって蹴りを放つ。避けきれないと判断した哭士は右足に力を込め、衝撃を最小限に抑えようと構えた。だが、久弥の足は、哭士の右太腿をすり抜ける。

「!!!」

久弥の狙いはあくまでも哭士の左足だったのだ。右足をすり抜け、久弥の足は内側から哭士の左太腿を蹴り上げる。

哭士の左足を固定していた氷が空中に大きく散らばる。思わず哭士は声を張り上げ、その場に崩れ落ちた。

### 3 34 ・老兵は唄う（後書き）

第一部と第二部の最終話の直後に、それぞれのあらすじ&登場人物紹介を挿入しています。

ストーリーが分からなくなってしまった方は是非ご覧になってみてください。

「哭士！」

菊塵が久弥と哭士の間に飛び込んでくる。菊塵の姿を見、久弥の犬歯が光る。

「待っていたぞ！ 菊塵！」

菊塵は一瞬哭士に視線を寄越し、久弥へと向かっていく。久弥は菊塵の放った左足を造作も無く避ける。

「お前は厄介だ。組織に戻らぬのならば、俺が直々に始末する」

久弥の目は、菊塵を貫く。自身を作り上げた冷酷な目に、かつての菊塵は僅かながらに恐怖心を抱いていた。

だが、命令された事だけを行っていた昔とは違う。この男の呪縛から逃れるには、自分でけりをつけるしかないのだ。

大きく息を吐き出した。

目の前の男は、自分の自由を奪った、フユの未来を奪った。

だが、その怒りに左右されてはいけない。心を研ぎ澄まし、久弥の動きを追った。

久弥の腕が伸びる。菊塵は身を屈めた。

風を切る音が菊塵の耳を掠める。

体格では明らかに久弥の方が勝っている。力で押して勝てる相手ではない。

ならば。

しゃがんだ状態から地面を蹴り、久弥の後ろへと跳ぶ。地面を滑り込みながら、久弥の部下が落としていた対狗鬼用の銃を拾う。僅かな時間で、菊塵は銃の状態を把握する。弾は残っている。壊れてはいない。

菊塵を追うように、久弥もぐるりと身体を反転させる。

一発、久弥に向かって銃弾を放つ。ずっしりと重い銃身から放たれる弾。思いの外反動が強い。

弾は久弥の右眉の上を通り抜ける。

眉間を狙ったはずだが、やはり銃によって癖が異なる。菊塵は先ほど目視した狙いと着弾の誤差を頭に叩き込む。

瞬間、大柄な身体の持ち主とは思えぬほどの速さで、菊塵の目の前に迫ってくる。

目の前に反射領域を生成する。鏡のように一瞬だけ光るそれを、久弥は見逃さない。領域を透過し、菊塵に腕を伸ばしてくる。

反射の領域を隠れ蓑にし、菊塵は更に久弥の背後へと回った。後頭部に向け、照準を調整する。

「甘い！」

ぐるりと久弥の太く長い腕が振られ、菊塵に向けられた。その先には、菊塵が持っているものと同じ拳銃が握られていた。

互いが互いの額に銃口を向ける形になった。

「菊塵の指に力が込められる。」

「貴方が能力を発動している間は、何も、何人たりとも干渉することが出来ない。……逆を言えば、能力を解除しなければ、こちらにも手を出せない、という事ですよ。僕が先に打てば、透過した貴方の手を、その拳銃がすり抜け落ちる」

ジャリ、と久弥の靴が鳴る。菊塵が構えた銃に臆することなく、一歩足を踏み出した。引き金に掛けている菊塵の指が僅かに動く。だが、久弥の表情はなんら変わることは無い。そして自ら菊塵の銃

に額をつけた。更に一步進むと、久弥の顔に菊塵の腕が通り抜けた。同時に、久弥の手からも銃弾が落ちる。菊塵は腕を下ろそうとしな  
い。

「お前の射撃の腕は確かだ。だがな、攻撃の癖、タイミングは、全  
て把握している。俺に一杯くわせようなどと、甘い考えは捨てるこ  
とだ」

菊塵の腕を突き通したまま、久弥は語る。菊塵は、今の状況にそ  
ぐわぬ笑みを浮かべる。

「そうでしょうね。僕、ならば」

菊塵は同時に銃を持つている手を久弥から引き抜いた。瞬間、久  
弥の背後に風を切る音が僅かに響き渡る。

その音に反応し、身を僅かに擦った久弥に、見えぬ何かかわき腹  
を貫いた。

「ガアッ!!」

鮮血が舞う。傷は浅くは無い。思わず久弥は苦痛に顔をゆがめた。  
だが、久弥は膝をつかない。次の攻撃に備えて身を翻し、菊塵か  
ら遠ざかった。

遠目で見ても、久弥の出血は激しい。纏っている軍服は、みるみ  
るうちに脇から赤黒く染まってゆく。

また、風を切る音が聞こえる。

音に気付き、跳ぼうとする久弥の足の甲を、また何か貫いた。

その正体はまだ分からない。久弥はその正体を察しようと耳を欵  
てながら顔を挙げ、久弥を睨みつける。

攻撃の正体は何か、久弥の目はそれを問い質していた。

「隙を、探していたんですよ」

菊塵は静かに語る。

「隙、だと」

久弥の声、そして肩が震えている。怪我によるものではない。自身の部下に二度も足元をすくわれるという失態。それが自分で救せないのだ。

「貴方の能力の弱点は、以前から分かっています。ですが、先日の争いで僕の手の内は全て明かしてしまった。ならば、貴方の能力の合間に見える隙をつくしかないと」

久弥が能力を使った後、一瞬だけその持続を切り、無防備な時間が存在する癖が見られることに気が付いたのは菊塵だった。それも、零コンマ数秒という僅かな時間だ。

「仰るとおり、貴方は僕の癖、戦い方も全て分かっている。だから、他の人間に攻撃をさせる必要があった。だから僕は教えていたんです。貴方の隙が見えるタイミングを、ね」

菊塵が見上げた屋敷の屋根の上に、アキを抱えたユーリが立っていた。その目は鋭く久弥を睨んでいる。

「その目に見えないモンは、透過できねえんだろ？」

それは既に以前の菊塵の戦闘で実証されている。死角からの不意を突く攻撃は、久弥に透過することはできない。

さらにその攻撃手段が透明なものであれば、久弥にとってそれは透過が出来ない唯一の武器となる。

「俺が……こんな……下等の狗鬼に……」

血があふれ出す脇腹を鷲づかみ、わなわたと震えている。

その久弥に向かい、菊塵が銃弾を放つ。久弥は能力で瞬間的に弾丸を透過させた。

「……！？」

久弥の胸を、透明なものが貫いている。勿論、ユーリが生成した

槍状の空気だ。銃弾を透過したその瞬間に、久弥の身体に槍を突き通したのだ。

まだ煙が立っている銃口を、久弥の眉間に向けた。

「貴方がこの空気の槍を抜け出した瞬間、一瞬だけ貴方の能力の持続が切れる。僕はその隙を間違ひなく狙います」

久弥を見下ろす菊塵の目には、溢れるほどの殺意が滾っていた。

久弥は、打ち震えている。だが、その震えた身体を振り払うように、顔を上げた。

「もう良い、お前の勝ちだ」

久弥が笑う。

「ユーリ！ 能力を解除しろ！」

ハッと久弥が行おうとしていることに気付き、菊塵がユーリに叫ぶ。

だが、遅かった。久弥が能力を解く。その瞬間、ユーリの槍が久弥の腹部を突き破った。

鮮血が舞う。同時に、久弥の口からも、少量とはいえぬ血が溢れる。遅れて、久弥を突き破る空気の槍が消えた。

支えが無くなった身体は、ドサリと地面へと倒れ伏した。

「……………」

銃を向けた菊塵は、銃口を向けることも忘れ目を丸くして久弥を見つめた。

手の平を両目に被せ、久弥は高らかに笑う。

だが、その笑い声は先に上げた自信に満ち溢れたものではなく、自尊心がボロボロに傷つけられた自分を嘲笑する、壊れた笑いだった。



### 3 36・紅い狗

哭士の背に、今まで感じたことの無い怖気が走る。ユーリもそれを感じたらしい。屋根の上から、哭士らの近くに着地した。

何か、巨大なものが接近していることを察する。今まで大人しくしていた友禅の犬が激しく吠え立てる。

人ではない。何か、大きな岩石のような威圧感。狗鬼としての本能が、警鐘を鳴らしていた。

哭士が顔を上げたのを皮切りに、その場に居る狗鬼らも、近づいてくる大きな気配に気付いたようだ。警戒する対象が、目の前の敵ではなく、その威圧感に切り替わる。

「来る」

哭士の声と同時だった。

ガシャンという何かが割れる音が頭上から響く。全員がその音に顔を上げ、目に映ったものに息を飲んだ。

「何だ、アレは……！」

屋根の上に佇んでいるのは一体の獣、だった。だが、その獣の名を、誰もが口にすることは出来なかった。

犬でもない、獅子に似ているがそれとも違う。ましてや人ではない。  
い。

長い鬚たてがみを風に揺らし、尖った耳まで裂けている紅い大きな口。その口からは、獣のものではない赤い液体が滴り落ちている。

屋根の瓦を踏み潰した四足は、太く逞しかった。

見たことも無い大きな獣だ。喉の奥から洩れる重低音は、周囲の者らに緊張の空気を孕ませる。

僅かに獣が動く、その獣の周囲のぴりりとした空気も敏感に伝わってくる。その雰囲気は、神々しさと言うよりは、禍々しいと言表すのが順当だった。

爛々と光る目は、ぐるりとその場を見渡す。その目に映り、動けるものは居なかった。

「見たことねえぞ、あんな生物。しかもかなり凶暴そうときてら」  
ユーリの額から、汗が滴り落ちる。無意識に、獣が恐ろしい力を持つていることを察したのだ。

そして次に動くときには、間違いなくこの場に居る誰かに牙をむいて襲い掛かってくるという事も何故か分かった。

突如、上がったのは野太い雄叫びだった。

その声に全員が振り返り、そしてその光景に目を疑った。

「!!!」

倒れている久弥の上に覆いかぶさるように、獣が現れていた。

あわてて屋根の上に視線を戻すも、既に獣の姿は無い。まるで瞬間移動をしたかのような神速。

獣はその場にいる一番弱りきっている者に飛び掛ったのだ。あまりの神速に、久弥も対処することが出来ない。

先の戦闘から負傷している状態では組み伏せられた状態から抜け出すことなど不可能であった。

「何だ！ 何だ！ こいつは！」

今や『狩る』側ではなく『狩られる』獲物と化した久弥の口からは恐怖の聲が洩れ、その言葉は意味を成さない。

獣の首が下がり、久弥の身体に牙が突き刺さる。周囲の者の耳を劈くような凄惨な悲鳴。

ゴキリ、と硬いものが折れる音、水分を孕んだ柔らかい音が獣の口から響き渡る。

何度目かの生々しい音と共に、久弥の叫び声が途切れる。獣の下に転がるものは、もう人の形をしてはいなかった。

顔を上げた獣の口からは、先ほどまで『久弥』だったものが零れ落ちた。

その場を動けるものなど、誰も居なかった。

菊塵の身体が震えている。

今までに対峙したことのない恐ろしい存在に、狗鬼としての本能が、警鐘を鳴らしている。

「な、何をしている！ 殺せ！」

二人残っていた久弥の部下が叫ぶ、もう一人は一瞬怯んだ様子を見せたものの、銃を獣に向ける。

激しい銃声と共に、獣に弾が打ち込まれるが、獣は全く怯む様子が無い。それどころか銃を放った部下らに標的を変え、一瞬のうちに踊りかかった。

自身の能力を発揮する間もなく、その太い前足で地面に叩きつけられた瞬間に頭部を噛み砕かれる。まるで握りつぶされた水風船のように脳漿と血液がはじけ飛ぶ。

数える間もなく次々と獣の牙にかけられ、悲鳴さえ上がる隙も無

かった。周囲は短時間の間に血の海と化した。  
獣の紅い身体は、本来の身体の色ではなく、他者の血で染められたものだということに気が付く。

唸り声を上げ、死体から顔を上げる獣。

獣の瞳に映りこむ者が、次の獲物である事をその場に立っている全員が察した。

鋭い瞳が、哭士を捉えた。

獣の目が見開かれ、前足に力がこもる。身構えた瞬間、十メートル程離れていた獣は哭士の目の前に迫っていた。

速い！

何とか獣の動きに対処し、後ろに飛ぶ。その動作一つで獣の爪を避けるのも間一髪の時だった。

飛びずさり、着地をせぬうちに次の爪が哭士の胸に向かってくる。

「！！！」

反応が出来ず目を見開く哭士の目の前で、鋭い刃物のような爪が止まった。

獣の目が見開かれる。

「下がってくれ、早池峰」

ユーリの壁が、獣の爪を止めたらしい。壁は、右前足そのものを固めているらしく、獣は苛立った様子で見えない壁に噛り付いている。

哭士は身を翻し、獣から離れた。哭士の傍らにユーリが立つ。

「暫くは動けないはずだ」

ガリ、ガリと噛み付く音と獣の唸り声が響き渡る。改めてみる獣の姿は、おぞましいという言葉が相応しかった。

光の差さない瞳は、常に獲物を探し、血の臭いを絶えず体から発している。

「……速すぎる」

獣のすべての動きについていける狗鬼など、居はしなかった。瞬きをした次の瞬間には、別の場所に移動している。余りの速さに、移動している軌跡すら見えないのだ。これでは、向かってこられても防ぎようが無い。

「ねえ」

莉子が、哭士の傍らに立つ。

「奴の動きを止めれば良いんでしょ？」

莉子の目はまっすぐ獣に向けられている。

「出来るのか」

哭士の問いに、莉子は一度頷いた。

「獣の質量やっを十倍に上げるわ。動きが鈍くなれば、動きを追えるでしょう？」

莉子の能力は物質の質量を操れる。獣も、体が重くなれば、今のような神速は発揮出来ないはずだ。

「僕が莉子を援護します」

莉子は能力を発動中は、全くの無防備になるのだという。そこを狙われてはひとたまりもない。

「……あまり長時間は発動出来ないの。頼んだわ」

莉子の目が、獣を映し出した。

同時に哭土らも身を屈め、獣の動向に注意を向けた。

### 3 37・狗の最期

「早池峰！ 来るぞ！」

ユーリが警戒する叫びに哭士は全神経を獣に集中させた。同時に、獣の腕を拘束している空気の塊が破られたようだ。獣は身を屈めて更に哭士に襲い掛かるうとする。

莉子の目が細められる。その刹那、獣の四足が地面に深く踏みしめられた。見えぬ力に抗い、必死に体を持ち上げようとする獣。明らかに動きが鈍くなっている。

足を負傷している哭士は、獣の動きに順応できない。

それを察したユーリが、獣の傍らを掠めるように跳ぶ。その動きに反応し振り上げられる前足。

肩越しに刃物のような爪を避け、獣の横面を蹴り上げる。

地面に沈む体も、莉子の能力でその勢いは数十倍になっている。

苦しげに吠え立てる獣。その隙に、哭士は獣の上空に大きな氷の塊を精製する。あと数秒で、一抱えもある氷柱が出来上がる。

一瞬、哭士の目が光る何かを捉えた。

獣の耳の根元に、チラリと光る物が見えたのだ。

金属？

起き上がるうとするその様子に、左の前足を庇うような仕草が見受けられる。

その姿に、哭士は妙な感覚を覚える。

どこかで

この獣を見るのは初めてだ。

だが、その左足の傷に何か違和感を覚える。以前、自分の目の前でこのような怪我を負ったものが居なかっただろうか。

「早く止めを！」

莉子が哭士に向かって叫ぶ。思考していた哭士を現実に戻した莉子の声に、獣の耳が僅かに向けられる。莉子に対して、僅かに獣の殺意が削がれているように思えた。

「待て！ こいつは……」

哭士が莉子に振り返る。その際に獣は体制を立て直し、また周囲



の者らに飛びかかろうとする。

莉子の能力で押さえつけられている筈の獣の動きは、それでもまだ俊敏といえる。油断をすれば、負傷は免れない。

「いい！ 私がやる！」

起き上がった獣の様子に焦りを覚えた莉子は、援護をしていた菊塵を越え、獣の上空に向かって飛び上がる。哭土が止める間もなかった。

まだ十分に出来上がっていない哭土の氷柱に、莉子が力を込める。氷柱は数十倍の重さとなり、獣に向かって真直ぐに落とされた。

氷柱に気付き、跳んで避けようとする獣だったが、痛んだ左前足によって飛躍が出来ない。

莉子が大きく腕を振る。同時に大きな氷の柱は、真直ぐに獣の背に思い切り突き立てられた。

背中から腹へ、鋭い氷の槍が獣を突き通した。

裂けるほどに開かれた口から、断末魔の叫びが上げられる。

周囲の空気がビリビリと揺れるのが目に見えるほど、獣の叫びはおぞましかった。

起き上がるうとする獣の突き立てられた前足は身体を持ち上げることは無く、ズルリと地面に落ちた。

そして、擡もたげていた首も地面へと倒れ伏す。喉から洩れるヒュー、ヒューという音が、少しずつ弱くなっていった。

「……仕留めた」

獣の様子に、莉子が肩で息をしながら緊張の面持ちで見つめていた。

獣の身体に異変が起きたのは、次の瞬間だった。

三抱えもあるような大きな身体が、少しずつ縮んでゆく。

「……何だ……!?!」

周囲の者らは、啞然としてその様子を見守った。

鋭い爪は丸くなり、細くなつた指の中に納まってゆく。太い前足を覆っていた体毛が薄れ、人の物と認識できるまでになった。長い鬣たてがみもバサリと落ち、尖った鼻先は短くなってゆく。倒れていた獣が、やがて全く違う姿に変わってしまったのだ。

「……!」

哭士にも、そこに倒れている『人物』が誰なのかが理解できた。

「恒……河沙……!」

莉子の声で、止まっていた空間が動き出した。莉子の身体が小刻みに震えている。「紅い獣」の正体に、皆言葉を失っていた。

よろめく足取りで、恒河沙の元へとたどり着く莉子。

「……莉子、か」

掠れた声。倒れた恒河沙にはまだ意識があった。

「どうして？ どうしてアンタがこんな……」

首を振りながら莉子は恒河沙に問う。正体を知らなかったとはいえ、獣に止めを刺してしまった莉子は、目の前で起きている出来事を飲み込めない。

半ば崩れるようにして恒河沙の傍らに座り込んだ。

「わかんねえ、あの婆アに閉じ込められて……妙な薬与えられて、気付いたら、喉の渴きを止める為に……走り回ってた……」

吐き出す息と共に紡がれる言葉は、徐々に弱くなっていっている。

「御世様が……そんな事」

莉子が首を振る。

「婆アと、レキ……だ。奴ら、GDの足止めに俺を放ちやがったんだ……」

恒河沙が咳き込む。同時に恒河沙の身体の下から大量の血液が流れ出す。

「莉子、行け。婆アらは、当主を殺す気だ……。鼎は、東の……先代の部屋に逃げた……屋根から見た……」

既に、息をするのもやっと、という状態だ。身体の下は赤い液体が広がり、籠女の血を与えても、助からない事は目に見えて明らかだった。

「畜生……喉が渴きやがる……」

恒河沙の瞼が、ゆっくりと下りていく。

「所詮、俺は使い捨てか……ああ、悔しいなア……」

閉じられる瞳。同時に恒河沙の目から一筋の液体が零れ落ちた。

「恒河沙！」

莉子が手を握り、叫ぶが、恒河沙の手に力は無い。

恒河沙の呼吸が、完全に停止した。

菊塵は、上着を脱ぎ、恒河沙の体の上に掛けた。

呆然としている莉子の腕を引き、立ち上がらせる。ハツとして菊塵の顔を見つめる莉子。

「彼の言葉を聞いたでしょう。東にある、先代の部屋です」

「でも！ 恒河沙が……」

恒河沙の亡骸と、菊塵の顔を交互に見やる莉子を、じっと見つめる菊塵。

「当主を守るのが、今の貴女の務めでしょう」

その視線に莉子も落ち着きを取り戻す。恒河沙が倒れた今、当主の狗鬼は莉子一人しか居ない。

泣きそうな表情を浮かべながら、莉子は頷いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9390g/>

---

嘯く羊～ウソブクヒツジ～

2010年11月18日00時06分発行